
悪戯の王が世界を渡る

伊利居州 幻冶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪戯の王が世界を渡る

【Nコード】

N1530M

【作者名】

伊利居州 幻冶

【あらすじ】

周りから嫌われながら、自由に生きていた俺が、いきなり雷に撃たれて見知らぬ世界へ行きます。そこで、こっちの新しい世界で、色々巻き込まれながら、魔王なんかも倒しちゃう、そんな話です。・・・たぶん。：5章の紹介。とうとう魔王戦。それ以外ないな。うん。魔王とその家来たち、VS、俺たちです。

1 (見知らぬ世界) - 1・世界をわたる前日に

「おまえはいつもこうだから……」

とりあえずこの眼鏡じじいの言うことは意味不明だ。
教師の9割9分9厘は俺の敵だ。

「この前も……」

どうして毎日呼び出されなきゃいけないんだ。学校のブレイカーを落としてやったときと、授業参観で先生のかつらを取ったときは仕方ないとして。

今日は寝てただけだぞ。セキツイ動物はみんな寝なきゃ生きてけないんだぞ。

「……屋上で反省しておけ」

いつもなら喜んだらう。

しかし今は冬だ。そして今日は今シーズンで一番冷えると朝のお天気姉さんが言っていた。

今隣を歩いている41歳独身は天気予報を見ないのか？

うーん、帰り道でぬれたら大変だらうに。あつ、それで頭が煌めいているのか。酸性雨は怖いな。俺は今日から雨にあたらず過ごそう。

ガチャリ、これは寒い屋上には風を遮る物はない。

「20分したら来る。反省してるようなら帰してやろう。」

20分か。

凍死するんじゃないだろうか。

風が強い。柵の間を風が通り抜け、薄い制服しか持たない俺に世界は冷たい。

ガチャリ。

「は〜〜〜・・・」

俺は悪戯の王（自称）ジョーカーだぞ。

靴の中にライターが。つかもうとする手がかじかんで震えと合わさり思うように動かない。

少しでもいい温まろうとライターを付ける。

このライターのせいで（1000%自分のせい）警察が来たことがあった。

あまり暖かくはなかったがそんなことを思い出した。

あの時は本気で走った。いくら警察といえど俺の足にはかなわなかったなあ。（いつも逃げ回っていて自然とついたものだ）顔を見られなかったのがラッキーだった。学校には来なかった。

何しろこの世界は厳しすぎると思う。教師、警察、親、それに妹まで俺のやることにけちを付ける。

「は〜〜〜・・・」

さつきからため息ばっかだ。

でもため息ぐらいつきたくなる。

西から黒い雲が流れてきた。

雨に当たらず過ぎそうと考えていた自分がもつかなり昔に思える。
屋根などどこにもない。

いったい誰のせいで俺がこんな目にあってるんだ？（これも120
%自分のせい）

あの教師が何も言わず返してくれば。

昨晚、親に何もいわれずに寝れていれば。

警察がうちに注意しに来なければ。

ん？なにを注意しに来たんだっけ？

ああ。交番の指名手配の板にむかつくクラスメイト＋妹＋はげ教師
の写真を張ったことか。

そんなことは許してほしい。

楽しいことをやっただけではないか。

どこかもつといい世界に行きたい。

とりあえず教師と親と警察がいなくてころへ。・・・あと駄菓子屋
のおばさんと3丁目の田中との犬、川原のじじい、1組の石島、
川本、佐野、その他いろいろ。

上を見上げると黒い雲は空を完全に覆ってしまっている。

ん？何か光った。

赤い。

長年鍛え抜かれた反射神経で横に飛ぶ。しかしそれを避けることは
できなかった。

「ゴロドガドガ~~~~~!!!」

おや降ってきたな。
ずれた眼鏡を直す。

この男は東誠二郎41歳独身。
小学校からなりたかった数学の教師になってもう15年になる。
趣味は読書だ。

しかし、こんな充実した誠二郎の日々は2年前入学してきた1人の
男子生徒によつてめちやくちやにされた。
かつらを付けていたことがばれ、職員室の空気は変わった。
今では新入生からも禿げと罵られるほどだ。

その男子生徒を今屋上に閉じ込めている。
あそこには屋根がない雨にぬれさせるのはあまりにかわいそうだ。
そう思つた誠二郎は屋上の鍵を取り階段を上つた。

ガチャリこの音は今日三回目だ。しかしそこにはその男子生徒はい
なかつた。

鞆が置かれているそしてその横の床は真っ黒にこげていた。

1 (見知らぬ世界) - 1・世界をわたる前日に (後書き)

初投稿です。初心者なのでおかしなところも多々あると思いますが
よろしく願います。

あと、感想、意見、アドバイス、苦情、何でも待っています。

1 - 2 ため息とガチャリ

「ドサツ！」

あいたたたたたたたた。

真面目に痛い。

赤い雷に打たれたと思ったら。石畳の上に落とされるとは。

と云うかなぜ生きてるんだ？天国？いや、天国で石畳に叩き付けられるはずがない。

と云う事はここは地獄か？

ああ・・・ドンマイ俺。おそらく今から閻魔様とご対面だけ。

しかし少しおかしい。なぜ制服のままご対面？

周りを囲んでる槍みたいなのをこっち向けてる人たちは？

う~~~~ん、と深刻に悩んでいると、

「ウモイルークレダツパゲニィ〜？」

「マチージイツケリスナウミーヴァゲレネ？」

「ボボツカケカイウアバアヴァアファイ〜！！！！」

・・・？

脳みそをフル回転させる。さらに回す。そして回す。

・・・？

状況を説明しよう。

2月7日、俺は7時38分起床。

8時42分 登校。(2分遅刻)

8時47分 睡眠開始。

16時ごろ 睡眠終了。ん？昼飯？何それ美味しいの？

16時13分 説教開始。

16時45分 説教終了および屋上連行。

16時51分「雷よ我の体に宿りたまえ！」

現在 . . . どこどこ？目の前の人 . . . 誰？

無理だ俺には理解できん。とりあえず話しかけてみよう

「ふゝあゝゆゝ？」

英語で聞くのが無難だよな。

国際語だもんな。

「ゲテユイ！ ビヨウマエキコドゥ！」

通じた気がしね〜！！

そんな心の叫びを気にもせず槍を持った人2人（以下、槍A、B）は、立ち上がれというように手を振る。

いったいここは何処なんだ？

石で作られた床、壁、天井。

壁にたいまつと木の扉。

部屋は暗いが、奥のほうで俺のように人に囲まれてるやつが居る。まったく分からない。

「はあ~~~~」

今日何回目か分からないため息を吐く。

促されるままに木の扉をくぐり石の廊下を進み階段を下りる。そして、

ガチャリ

今日はため息とガチャリの日だわ。うん。

なんか見覚えあるな、ここ。

あ。確かRPGの画面で。

地下牢とかだったと思う。

懐かしいわ。あのゲームはやけにはまった。

あのころはみんな優しくかったのに・・・グスン。

あれ？目から体液が・・・。

・・・変だな病気かも。でも、鉄の柵が病院への道で通せんぼして
るよ・・・

「はあ~~~~」

寒い。槍A、Bはどこかへ行ってしまった。

20分してもこないのだろう。

寒い。少しでも暖かくならないのか？

窓がないから時間さえも分からない。

周りの囚人も言葉が通じないから話もできない。

せめてライターでもあればなあ、と人差し指を立てる。

「ボワツ」

何だコリヤ~~~~！

人差し指にともる炎を眺めながらひらめいた。

鉄は熱で溶ける。幸いこの檻の鉄の柵は薄い。
これはいけるぞー！！

「やはりあの男は」

城の一室で兵士、王、大臣たちが話し合っていた。

「うむ、サフィの術が失敗したのだろう」

「さすが姫様。10m先のコインを呼び寄せるはずが、どこか遠くの少年を呼び寄せるとは」

「あいつはこの言葉が分からぬようでした」
槍Aが報告する。

「それは困った。何処のものか分からぬではないか」

「わが王やつの服装、今まで感じたことのない気配、そして黒髪と黒い瞳。やつは魔王の生まれ変わりかも知れぬ」

「またズーシー爺さんのおとぎ話が始まった」

「カルフ、魔王は必ず戻ってくる。このままなら必ず、前よりも力を・・・」

「落ち着けズーシー。今はあの男をどうするかだ」

「わが王早めに殺すのが安全かと」

「姫様が術を失敗したことが広まっては大変だしな。今まで王族が術を失敗したことはないんだろう?」

「おい姫様に失礼だろ。だが王、私もやつを殺して無かった事にするのが良いでしょう。」

王は大きくうなずいた。

「よし、明日朝一番で執行する。みなご苦労であった。もう遅い、早く休むことにしよう。このことは誰にも言っな」

扉の隙間から覗いていたサフィは急いで廊下を走っていった。

(助けなきや!)

1 - 2 ため息とガチャリ（後書き）

更新は不定期になると思います。テストとかで更新できない日が続くかもしれません。すいません。あと1話1話短くてすいません。謝ってばっかですいません。

1 - 3 城内大鬼ごっこ

「ふ〜」

作業を始めて・・・10分ぐらいか？

まあ時間なんて関係ない。

俺はやり遂げた。檻の鉄（だと思われる金属）でできた鍵を溶かし切った。

ハツハツハツハツハ！甘かったな槍A、B！この俺を閉じ込めるなんぞ100万年早いわ〜！（注意；光年は距離、長さの単位です。）格の違いを思い知ったか！

頬に鳥の刺青をした囚人がこちらを見て何か叫んでいる。

ん？石盤のような物を投げってきた。これをやるから出せってか？まあ出してやってもいいかな。

しかし、そんなことをしてられなくなってしまった。

この地下牢は1本の廊下の両側に並んでいる。

廊下の右側から階段を下りる音。

コツコツコツコツ・・・

眠気を振り切って廊下を左側へ駆け出す。

あちらはこちらの足音に気づいたらしい。あわてて走り始めたようだ。

フフフ、馬鹿だな声を上げて周りに知らせないとは。

今俺の脱走を知る者は、後ろのやつ、正面の牢にいた囚人の人、以上だ。

後ろのやつ一人に追いつかれない自信なら有る。

つまりこのまま誰にも見つからず出口を見つけければいい。

俺に今最も大切なこと、それは見つからない事

ドスッ

何だ？このやわらかい壁は？

早く助けに行かなくちゃ！

地下牢の位置を記憶を頼りに探す。

私のせいであの人が殺されるなんて絶対にダメ！

あつた。この階段だ。

蒼い髪を腰まで伸ばした少女と、その少女のウサギのような精霊は、真っ暗な階段を吸い込まれるように降りて行く。

しかし

「たつたつたつたつた………」

何で。何で牢に入っていないの!?

不思議に思う、というかこの城の安全性に不安を感じるが足を止めることはできない。

この先は兵士たちの休憩室だ。

絶対に行かしてはならない。

加速の術を自分にかける。

しかし遅かった。

彼はもう部屋の中へ行ってしまった。

だが少女にはまだ考えが在った。

仕方が無い明日の朝、強引にでも止めてしまおう。

加速の術がかかっていたがその足取りは重かった。

右、左、左の階段を上、うわっ、ここにも兵士が。どんだけ厳重に警備してるんだ。

俺みたいに脱走するやつが出まくってるのか？

はあはあはあ・・・

さすがに疲れてきた。

それでもなお走り続ける。

右、右、左、右、上、下、L、R、セレクト~~~~~

体力無限チート起動。

うお、これは、力がみなぎって来る。

なんてはずは無いか。

階段を降りて左に曲がった。

また分かれ道だ。

左右に一本ずつ、下に降る階段がある。しかしどちらも先が真っ暗だ。

これが最後のチャンスであろう。

壁のたいまつを取り、道の分かれ目へ。

そして炎がゆれた先の方向へ、

とりゃー！

たいまつを投げ込むそして

とりゃー！

鳥の刺青のおっちゃんありがとうよ。
石盤を放り込む。

「ゴンゴンゴンゴンゴンゴンゴン」
石盤が転がり落ちる

が、その音も聴かずに逆の方向へ走った。

どうやら上手く巻けたようだ。

ほんとに馬鹿ばかりだな。学校の上履きの音と、石が転がる音すら区別がつかんのか。

不思議に思う、というかこの城の安全性に不安を感じるが足を止めることはできない。

突き当たり、左右に異臭の漂う扉、正面に窓。

ん・・・怖い・・・縦横50cmぐらいで出れることは出れる。
しかし高さは5mはある。今は夜らしい。下には草があるが2階から飛ぶより高い。

ぐずぐずしてられない。

よし、深呼吸。スーハースーハー

俺は飛べる

そう、飛べるんだ

俺は固い

そう、こんな高さは、どろっとこと無い
傷ひとつ付かないさ

とうはっ！

風が全身をなでる、恐怖を逆なでする。ぎ~~~~ちゅ~~~~

すたっ！

ん？痛くない、というかなんとも無い。

さっきのコードは無敵チートだったか。

あ、よかった。

なんてぐずぐずしてられない

理由を考えている暇は無かった。

外壁に穴が開いている部分を見つけ、その穴から外に這い出す。

ここはどこだ？

そこは城の裏側、平民たちの家と家の隙間だった。

「ドムスーライキヨミンバセキテハ」

いきなり後ろから腕が、そしてこれは・・・香水？

「いや〜とてもラッキ〜だ」

「ああ、なんてったって野宿する場所を探しているところに、自ら来てくれるとは」

「城から出てきたって事は、貴族かなんかかな」

「いや、あつこから抜け出してきたところを見ると、罪人か使用人だろう」

「ちえっ、まあ貴族だろうがなんだろうが変わないけどな」

「・・・睡眠薬ですぐに寝たから12時間は起きないだろう」

「それだけあれば屋敷に運べるな、とつとと帰って寝ようぜ」

「ああ、そうしよう」

二人の男は小さい檻とともに馬車で町から出て行った。

1 - 4 吸血鬼城

「なんだ、男一人か、アカマメにノッポ」

「いや、最近どこもかしこも、俺たちを警戒してか家から出てこないすよ」

アカマメがもっともな説明（言い訳）をした。

「まあ、いい。もうすぐ夜が明ける。さっさと自分の部屋で寝ておくことだ」

「はいはい、言われなくても眠くて仕方がないですよ
あわわわ」とか言いながら檻を渡して部屋に向かう。
暗い廊下に血の臭いがこもっているがいつものことだ。

「もうこの生活も慣れちまったよな、昼夜逆転生活に、地下で寝ることかも」

「まあ、ここに来て1ヶ月経つもんな」

彼と話しているノッポは昔からのパートナーだ。
こここの血液輸送会社で1番背が高い。
対するアカマメは最も背が低い。

「あと血の臭いも」

「それで商売してるんじゃないか」

「そうだな、でもヴァンパイヤと話すのはいまだにやりにくいわ」

「俺もだ」

く~~~~

これはいびきの音ではない。

「う・う・う・腹が減った」

もう限界だ。こつちの世界に来てからどんだけ経ったんだ。

寝てたからまったく見当も付かない。

そもそも昼食抜きでこつちに來たんだぞ。

そのときから腹が減ってた。

ほんとにイラつく。

目を開けると、

はあ~~~~

また檻の中か。

どうやらこの世界では他の世界から來た人をやたらと檻に入れる習慣があるらしい。

元の世界に戻ったらみんなに教えてあげなくちゃ、うん。

とりあえずこれを開けるか。

ポウッ

だいぶ早く取れた。3分も経ってない。

少し先に窓がある。しかし今回は出れるほど大きくない。暗い部屋に明かりが入ってきている。もう昼になるようだ。

檻を出て、周りを見渡してみると、うつつ、これはひどい。

教室2個分ぐらいの部屋に、同じ檻が大量に並べられている。明かりも無く空気もこもっていて、不健康をそのまま部屋にしたような雰囲気だ。

檻の中にはすべて人が入っているが誰もはやせ細っていて、とても健康には見えない。(あと変な臭いが凄い)

その中にこちらを見つめる女性がいた。長い茶色い髪がぐちゃぐちゃだ。

早歩きで近づくと何か話し掛けてきた。

「スワルリイキージレッツセロウリニミン」

今ここに断言して見せよう。まったくわからない。

「申し訳ありません、何をおっしゃっているのかわたくしめには解かりかねます」

「・・・？ニー セツモイクウウドツテイテ」

くそつ丁寧しゃべっても通じないなんて。じゃあ次は言葉遣いを悪くしてみねば。

目の前の女性は手首を指差した。

その手首を見て、（言っても通じないが）言葉を失う。

女性の手首には何度も切られた跡があった。傷口から菌が入ったのが黒くなって来ている所もある。

これは酷い。いったい何のためにこんなことを。

そして女性は後ろに体を辛そうにねじって真っ直ぐ腕を伸ばして指差した。そこには扉が在った

ここにいたらこうなる、あの扉から逃げて下さい、という事だろう。

しかし、そこにはあった。

穀物だ。美味しそうではないが、紛れも無く食料だ。扉の近くの机の上だ。

すぐに駆け寄ってむしゃぶりつく。

「不味い！」

少し経って

やっと腹の減りが収まった。良かった良かった。うん、動物はみんなものを食べて生きていくんだよ。

早速だが出口を探そう。人の頼みにはNOと言えないんだよな

木の扉の鍵を溶かしてはずして部屋を出る。

目の前が出口のようだ。

うん。簡単だなまあいいや。

次の扉はすぐに開いた。

は～～～外の空気は良いわ。

そこは周りを山に囲まれた窪地であった。

右側と左側に一本ずつ道が伸びている。

まあぶらぶらするか。

大好きな探検が始まった。

「なに？一人逃げ出しただと！血が取れないのは別にいいが、ヴァンパイアの村が外の人間に知れたら、」

「すみません、ですがやつは魔法が使えたよう。鍵が溶かし切られてますわ」

「城から逃げ出して来たやつが、鉄を溶かすほどの魔法が使えただ

と？冗談はお前たちの身長差だけにしてくれ」

その言葉を待っていたかのように、アカマメはポケットを探り

「「これを見てください」「」

「これは・・・」

ポケットから出したのは、輪の一部が無くなった鍵だった。よく見ると溶かされたような跡がある。

「どうするか・・・まず主様に報告しなくては」

115 救助活動

「と、いうことなんです、ご主人様」

「どう言うことだそれはいつたい、この屋敷じゃ炎は使えんのじゃないのかね」

ヴァンパイヤ特有の赤い目が豪華な椅子の上から、ギロギロとひざまづいているその男をにらんだ。

「はい、そのはずです」

「じゃあこれはどう言うことだ」

「それは私には」

「お前じゃない!」

甲高い声が窓の無い部屋に響く。

「おい、精霊いるんだろう。姿を現せ!」

「なにかよつか、吸血鬼」

「おい、炎封じの結界の中でこんなことは出来ないはずだ」
どこからとも無く現れた猫型の精霊に吸血鬼は溶けた鍵を見せた。

「私が結界を張るのを止めたからじゃないか」

「おまえ、いつも魔力を与えてやってるだろう」

「お前から貰わなくてもそれを溶かしたやつに貰う」

「裏切るつもりか精霊」

「私は魔力のより大きいやつに従う。それより、やつが大軍率いてこっちに向かっている。10分もかからんだろうな。」

ヴァンパイアは少し考えたが、

「くっ信用ならん、が、よし炎力車で町に向かう。こいつの炎が入っているのが気に食わんが」

「分かりましたすぐに」

「後何人かは残しておけ。ペットの餌やり係を」

「残ったやつは全滅じゃな」

そついい残し精霊は姿を消した

右側の道を少し行ったところに村があった。

昼飯はあつこでお願いするか（つかさつきのが昼飯か？）と、と思ったがどうも様子がおかしい。

村の中に棒やくわ、拳げ句の果てに篝のようなものを振りかざして人までいる。

村もとても小さく昼飯が食えるか不安になってきた。

よそモンに食わせる物などない、なんて言われるんじゃないだろうか。

それ以前に、なんか殺気立っていて村に入る気になれない。そもそも言葉も通じないのにいきなり入って行って食べ物を恵んで貰えるんだらうか？いや、それは無いだらう。

言葉が通じないのは非常に不便だ。

言葉が分からないまま生きてけるんだらうか？いや、それは無いだらう。

ははは・・・どうしようもないな。しかしどうすることもできない。

まあ、ここはだめだ他をあたろう。(どこへ行っても無理な気がして来た。あ~~~~~おかあ~~~~ん家に帰りたいよう。)

と思っただ

ありゃ？

村人たちが俺のほうへ歩いてきた。

うおっ、これはまずい。村人の顔が怖い。

とっさに横の茂みに飛び込む。薄い葉が顔に襲い掛かる。

ズサッ！ゴロゴロ

失敗した。アクション映画風に飛び込んだが、痛い。膝、腕を硬い土にぶつけ、そして顔が薄い草で切れた。

村人たちは徐々に近づいてきて、目の前を通り、そして過ぎ去った。

あゝよかった目的は俺じゃなくて、さっきの建物か。

で、どうするよ、俺・・・

すること・・・無いな

村に行っても特に・・・

よし！面白そうだし付いてこ

ルルルルルル

しかしそんなに楽しくは無かった。

すぐに建物に着いた。そこまではいい。

しかしさっきの入り口は閉じられていた。

その扉を木の棒で叩く村人たち。建物に群がって30人ほどが騒いでる。何がしたいのかは、知らん。

おかしな光景だ。

こっそり建物の裏に回ると、あった、あった裏口。

木の板に鉄の棒をつけた造りの扉だ。

人差し指に炎をともし木の部分を焼いていく。つもりだった、

ボワァー！！！！

木の扉は一瞬で燃え尽き灰になった。

真ん中が無くなった元とびらを通ろうとしたが、さすがに気づかれ
たらしい。

奥から何人がこっちに向かって出てくる。

ひい、ふう、みい、やあ、いつ、むう。

6人か。とりあえず逃げる。表のほうに、

やっぱりまだいた、村人たち。ほうきで叩いて開くとも思っ
てんのか？

まあそれは関係ない。ほら、中から人が出てきたぞ。

その筈は戦うために持ってきたんだろベイビー。よし予想通りだ。
村人たちが突っ込んできた。

すかさず、驚いている建物の人たちの後ろに回り、そのままさつき
の扉へゴー！

我ながらナイスだぜ。

後ろから聞こえる村人たちの叫ぶ声、ほうきで叩く音、そしてうめ
き声。

建物は石でできていた。

くそっ！燃えないじゃないか。

突き当たりまで行き、正面の鍵は開けておく。
振り返ると右に檻の部屋、左に下がる階段。

まず檻の部屋だろ急いで開ける鍵はさっき溶かしてある。

ざっと30個ぐらいか。扉を閉めて静かにするように、人差し指を唇に当てる。そしてそのまま人差し指に炎をともす。

よし、決まったぜい！

急いで鍵を溶かしていく。

はー結構疲れる。根性いるなー

27。

28。

29。

30。

31。

32！

よっしゃーはずし終った。1時間は経った。

しかし酷い。立って歩けるものの方が少ない。服もボロボロだし、意識のない者も居る。

外はどうなってんだ。

扉を開く。あら、ちょうどよかった。

下の階から上がってきた村人たちと鉢合わせた。
はい。ここに捕らえられた人たちが

ん？なんか怖い顔してない。

思わず後ずさるが後には部屋しかない。

追い詰められた・・・

そのまま後ろに下がる。

ガツン！！！！

いった~~~~~！

くそ、あの机だ。何でこんな入り口のそばにあるんだ。

ぶつかって、さらに転んだ。最悪だ。

村人の中から50ぐらいのおっさんが出てきた。

がっしりとした体格にがっしりとした顔つき。茶色い髪がその上にちよこんと乗っかっていて、まあここまではいい、右手に鉄の棒。

はあ俺の人生も短かった。

その棒が俺を殺そうと振り上げられる。

ぐはっ！

・・・あれ？痛くない？痛みの感じないほど一瞬でポックリ？

目を開けると棒が二つ。増えてるぞ。

いや、違ったそれはさっき俺に逃げるように合図してくれた女性の足だった。

その人が両手を広げて俺を庇ってくれてる。

「レイシー!!」

おっちゃんがかんで目の前の女性と抱き合った。

顔に合わず泣いてるぞ。

始めてこの世界の言葉が分かった。

レイシーとはこの女性の名前だ。そしてこの2人は十中八九、親子だ。ははっ俺、探偵なれるぜ、絶対。

どうもレイシーさんは俺の説明をしてるようだ。

だが今のうちに・・・

レイシーは事情を話し終わるまで自分の恩人が消えていることに気づかなかった。

だいぶ暗いな火を出さなきゃな。

火を灯して階段を降りる。

階段を降りると左右に通路が広がりその通路には扉が並んでいる。

大きい火をイメージして火を大きくすると10mほど先でこの通路は終わっているのが分かり、そこに大きな扉が見えた。

その扉に向かって歩くと酷い臭いがする。

その部屋はたいまつが灯っていた。

部屋の中央より少し奥に机があり紙が大量にある。

何が書いてるのか知りたかったが、読めない。
数字っぽいのがあって何のことかさっぱりだ。

「それは血液の取引の証明書じゃ」

115 救助活動（後書き）

なんか、暗いですね。

1 - 6 わがままソウセキ

「それは血液の取引の証明書じゃ」

後ろを振り向くと猫のような生き物がいた。

ふゝ。ちびるかと思っただぜ。

「お前は誰だ？」

できるだけ声が震えないよう気をつけて言った。

「声が震えているぞ」

むかつく猫だ殺してやりたい、が、まだ聞くことが沢山ある。

「何で喋ってんだ？」

「次から次へとうるさいのう。」

猫は机の上に飛び乗った。薄いピンク色の尻尾が揺れ赤とピンクと白の目と目が合う。

「それよりお前は誰じゃ？」

「そつちが先に言え」

「仕方ないの。我は精霊である、名前はまだ無い」

何処で生まれたのかとんと見当が付かぬ、とでも続くのか、このソ

ウセキが。

お前の千円札はもう発行されてないぞ。

「俺は悪戯の王ジョーカー。青葉高校2年C組、出席番号16番。最近は駅前のアオゾラで売ってるシュークリームにはまっていて、毎日学校の帰りに買っている。が、昨日は買ってない。本当は買うはずだったんだが雷に打たれてこっちに来てしまったからだ。分かったかソウセキ」

「ソウセキかなかない名じゃ。これでお前が私の主人じゃ」

「遠慮する」

「無理じゃ。名前をつけた時点で、主人となる。そんなことも知らんとは、とんだ田舎者じゃな」

「お前より都会で育ってるわ！シュークリームが分からなかったくせに」

「そんなことはどうでもいい。それより上でお前のことを探してるやつが居るぞ。早く行け我が中に入って通訳してやるう」

それはありがたいようやく会話ができる。

階段を上る途中で。

「でわ、いくぞ」

又ルッ

うわ~~~~~

出てけ、出てけ俺の体に入ってくるな。

『落ち着け。ただの憑依だ』

止める気分が悪い。まだ美少女の精霊ならいいが。

『いやならお前の体の中で爆発してやってもいいが』

止めてくれ！頼む！さっきのは、えーと、冗談だ！そう冗談なんだ。信じてくれ。

『というか、中に入らないと通訳できないじゃろ』

中に入るの意味がちがー！

なんかなれない雰囲気だな。

俺を中心に扇形に人がひざまずいてる。

俺の理想を言うと、俺と関わりある人があがめられて、そこに飛び入りで入っていつて祝うようにしながらケーキを顔面にぶつけてやるぐらいのいいんだがなあ。

さっきのおっちゃんが前に出てきた。

手に持つてる袋がジャラジャラいつてる。

それを俺の前に差し出して身振り手振りで何か伝えようとしている。とても面白いがいつまでもさせてたら、かわいそうだ。

ソウセキ、このまま話せばいいんだよな？

『そうじゃ。もう止めさせるのかこの面白いダンス』

お前結構酷いな。

「ありがとうございます」

おっちゃんのダンスが止まった。

顔が真っ赤になっていく。

後ろの頭下げてるやつらにも見せてやりたいな。

「皆さん顔を上げてください」

後ろの村人は顔を上げ、目の前のおっちゃんは顔を伏せた。いや、いじめるのって楽しいな。

まず近くの町を紹介してもらわなきゃ。

「すいませんが、この近くに大きな町はありませんか」

「私たちの村から森をひとつ越えたところに1つ村があり、そこから山を越えればビシュームの町があります。ですが、今夜は私たちの村に泊まっていただけませんか。日暮れが近いですし、お礼がし

たいので」

あまり気が進まない。あの村をもつ見てるからなあ。
快適には見えなかったぞ。

しかし人の頼みにはNOと言えない。
できるだけましな食事ができますように。

「分かりましたありがとうございます」

「いえお礼なんていりませんよ。なんてったって娘を救ってくださったのですから。扉の鍵が開いていたのもあなたがやってくださったのですね。あっ申し遅れました……」

おっちゃんは気を取り直して一生懸命話し始めた。

ヴァンパイアの乗る火力車は、日が暮れるころ洞窟を進んでいた。

この洞窟は地下深くまで進んでいった。

洞窟が終わるとそこにはヴァンパイアの国が広がっていた。

光はほとんどなく、ヴァンパイアの目を持たないと何も見えない。

その中のひとつの建物の前で火力車は止まった。

そしてひとりのヴァンパイアが火力車を降りた。
建物からもヴァンパイアが出てきた。

「いや〜ヴァンパイアのくせに毎度火力車で来るとは、あんたも変わってるねー。あんた日の光とか火が怖くないのか」

「我輩の曾祖父が人間だから、少しぐらいなら平気だ。それでこの仕事やってるわけだが」

「それで今回はどんぐらい取れた」

「前回と変わらん」

「そうかでは見してもらおうぞ。ええ〜と小樽2本だな。ちょっと待ってくれ」

建物から出てきたヴァンパイアは紙に何か書いて、ポケットを探った。

「ホイッ！紫2枚と、証明書。今夜はどうすんだい」

「こつちで泊まる。・・・あと、次ぎ来るのが遅れるかもしれん。精霊を痛めつけてやらなきゃならなくなった」

「噂には聞いてますよ。力はあるが態度が悪いつてね。ではまた、上質の血を待っていますよ」

建物には血液取引所とかかかっていた。ヴァンパイアの好物である血。それは、いくつがあるヴァンパイアの国で高価格で取引されている。

ここは、ひどいな。

さっきの夕食も、麦みたいな物と野菜だけだったが、地べたで寝るといっのかここは。

『屋根があるだけましじゃろうが。どんだけ裕福なところで育ったのじゃ』

ふつーのマンションだ、ソウ。

『マンションてなんじゃ？（ソウセキじゃないのかの）』

いまさらどうでもいい。あっちの世界には戻れたとしても戻らん。

というつもりだったんだが・・・

ここは枡を逆様にして置いただけの様な部屋だった。床は土だ。少し帰りたい・・・

『ちゃんとした国ならまだしも、ただの村ならこんなによく在るぞ』

こんなんじゃ寝れそうに無い。

『じゃあ我が朝まで話してやるっ』

昼まで寝てたしな。

『無視すな』

これからどうしようかな。

『我のおかげで周りと話しが出来てるのじゃぞ』

……はあく、しゃーなーな。この世界の金はどついう仕組みだ。

『紫1枚 青10枚 赤100枚 緑1000枚 黄10000枚
黒100000枚じゃ。』

家一個、紫10枚で買える。1食緑5枚で普通のは食える』

てことは村長に貰った分は、赤5枚、緑8枚、黄14枚。ん？11食分無いぞ。

この村、大丈夫か？

『そうとう、貧しいな。それより主人の魔法が気になる』

これか？

人差し指に火を灯す。他の指は無理っぽい。

『とても面白いの。人差し指が火の魔力の結晶になっておる。それに意思の力をぶつけ発火させ、魔力を燃やしておるのか。魔力で火をおこさず、魔力に火をつけておるのじゃな。』

やっぱりだ。

俺は合体しちまった。

雷に打たれたときに持っていた物と。

そう、ライターだ。

1 - 7 不幸なナナルジアさん

サツサツサツサツサツ

もう太陽はかなり高いところにある。

村を朝早く出て、結構時間はたった。

そして森の中。

後ろに光る目と牙。

何で逃げ回ってるんだ~~~~~!!!

『おい！早く走らんか！食われるぞ』

んなこと〜1時間前から分かってる。いったいどんだけ体力あるんだ、あの黒いライオン。

『主人、しっかり話を聞け。よい策がある。魔法を使うんじゃ』

オーケーとつとと使え。

『我が使ったら主人が置いてきぼりになるじゃろ。別に良いのじゃが。主人が使え。憑依してるから我も逃げれるということじゃ』

どうやって使うんだ？早く教える。

日の光が入ってこず、木の根だらけでまともに走れない。

が、後ろのでつかいライオンはさらにてこずってるらしい。木にぶつかりながら追ってきてる。

『自己加速の術を教える。呪文はソラフだ。唱えながら魔力を自分に向けて放出しろ』

わかった！、いや、分からん！でもやってみるぞ。

「ソラフ！」

唱えながら、自分が早く動くことをイメージする。

ガンツ！！！！

100mほど先にあつた木が一瞬で目の前に現れ、かわせるはずもなく、激突した。

『事故加速じゃな……』

クラクラする視界には山、そして村。

「ここは、どこだ？」

でこが痛い、そういえば木にぶつかったような……

「気がつきましたか？」

「どうやらここは家のようだ。木の天井があり、おお！！わらのような物（以下、わら）の上にいる。前の村よりはよさそうだ。」

「ええ〜つと、あなたは？」

「私はナナルジアといいます。その窓からあなたが倒れているのが見えたので」

赤い髪が小さめの体によく似合っている。年は40ちょいぐらいだろうか、感じのよさそうなおばさんと、いった感じだ。

「あつ、ありがとうございます。運んだナナルジアさん。ぼくは、・・ジョーカーといいます。あなたに運んでもらわなきゃ、今頃ライオンの餌でしたよ」

「運び込んだのは猫の精霊です。いつの間にかいなくなってたんですけど。精霊が自分で魔法を使うなんてすごいですね。あと、ライオンとは何ですか」

「いや、別にいいです。それより何かお礼が出来ればいいんですが」
ナナルジアさんは、少し考えて、

「ジョーカーさんは、いろんなところに行かれるんですか」

「え〜、はい、そのつもりです」

「では、この指輪と、手紙を届けてもらいたいです。グラスクという人なんですけど」

「どこにいるか分かるんですか？」

感じの良い笑顔が、途切れた。

「その・・・それが、分からないんです、20年ほど前この指輪を置いていなくなってしまうって」

「・・・そうなんですか。はい！いいですよグラスクさんですね」
元気良く答えようと思ったが、わざとらし過ぎて、自分の演技力に自信をなくす。

「ありがとうございます。今から手紙を書きますので」
ナナルジアさんは炭で、紙に何か書き始めた。

『主人、ほんとに頼みを断らないな』

俺の主義だ、というか俺を持ち上げるようなことが出来るのか。

『そんなの朝飯前じゃ』

俺より余裕で強いんじゃないか、などと考えながら視を横にずらすと、1枚の写真が目についた。

白黒だがなかなか良く出来ているな。この世界にも写真があるのか。

『魔法を使っておる』

ああ、そっか。

若いころのナナルジアさんと、おそらくグラスクさんだろう、背の高い男の人が写っている。

そして、その手には一人ずつ赤ちゃんが抱かれている。

「この赤ちゃんは？」

「・・・この子達は双子なんですけど、・・・家を出て行ってしまっ

「そうですか」

ミスった、聞かなきゃ良かった。最初の沈黙あたりできずいてたぜ。

ナナルジアさん、だいぶ苦勞してるな・・・。

空気が大型トラック並みに重い。

「書けました。はい、お願いします。ゆっくりして行って下さって
良いですから」

「いや、もう行きます。町に用があるんで」

町の役所つばい所に血液取引の証明書をわたして、人が拉致されるのを止めさせてもらうために町を目指しているところだ、もたもたしてられない。

「ありがとうございました」

『主人もやるのお。ファ〜〜ア』

そっちは欠伸なんか出来ていいよな。こっちは必死で走ってんだぞ。

『自己加速の術でも慣れるのに3ヶ月はかかるぞ』

車でも体感したことのない速さで、山を登っているが、道が整備されていて走りやすい。

整備といっても木と草がないだけだが（山のこちら側はシヨボイ村しかないからこんなもんだろう）、だいぶ早くつきそうだな。

『・・・なあ主人、ほんとにヴァンパイアの国を潰してもらうのか？』

そりゃそうだろう。あんなことを続けられては大変だからな。レイシ―さんにも言っちゃったし。あの屋敷は焼くって言ってたが、元を潰さないことには、また人がさらわれるかもしれない。

第一、暇だし。

『そうか。主人もお人よしじゃのう』

冗談言っつな、お礼にお金がほしいだけだよ。

「あと一日ここに泊まる好きに行動してくれていいぞ」

今頃焼かれてるであろう、屋敷のヴァンパイアは人さらいたちに、うれしそうに言った。

実際地下にいてうれしい人さらいなど15人のうち一人もいないはずだった。

「明日やるぞ」

「ああ、分かった」

深長差の大きい新入り2人はとある作戦を考えていた。

「とつとつ明日か、どこにあいつはいるんだ？」

「この国の1番奥の、でっかい家に住んでるらしい」

「そうか、あの糞じじいを叩き潰してやる」

ふう〜。で、これからどうする。

結局もらえたお礼は赤3枚だけだった。

『そうじゃのう・・・まずその服装をどうかしたらどうじゃ』

どうかってねえ〜。

汚れたカッターシャツと、破れまくっている紺のズボン。

対する町人は、上は、布の袋に穴三つ空けただけ。下は、布1枚で作った短パンだ。

同じよう違う・・・服買いに行くか。

ここ、ビシュームの町は、道路は土だが家が木から石になってる。

その家が隙間も無く並んでいるので、結構大きな町なのだろう（これまで町をいくつも見てるわけではないが、ここまでの村からすると、かなり都会だ。）

町役所から歩いて10分ほどで、服屋はあった。

大通りに店が大量に並んでいるので、見つけるのは簡単だった。

この世界初のショッピングは何事もなく終わった。が・・・

『似合わんの〜』

その言葉に偽りはなかった。全くなかった。5文字と伸ばし棒、どれひとつとして嘘はなかった。

1 - 8 ヴァンパイアの王

『主人、あの村に戻らんか』

いきなり何言い出すんだ、ソウ。

俺の服が似合わな過ぎておかしくなったか。

いや、元々おかしかったんだろう。

さすがに変だよなこれ。周りの人と同じはずなんだが・・・

織田信長がフリルのドレス着てる並に変だよな。

『いや・・・言い方を間違えた。一緒に戻ってくれ』

どこが違うんだ。織田信長のちょんまげが火縄銃に変わった並に違いが分からん。

『まげと火縄銃はさすがに違うと思うが。お前の主義は何じゃ』

美しい女性の頼みは断らない。そんな当然のこと聞くな。

織田信長が宇宙戦争ではかなく散った事並に当然のことだぞ。

『いや・・・言い方を間違えた。主人、お前の首をはかなく散らしてやってもいいんだぞ』

はあく、1日に2度も山を走って超えることになるとは。

さつきとは違い、腹は減ってないが。

町の食事はなかなか良かった。

おなじみの穀物は、煮られていたし、しっかり洗った野菜が出てきた。

肉も食べたかったが、ここは宗教信仰者が多いみたいで（勝手な推測）肉はなかった。

『主人、今日から少しずつこの世界のことを教えることにする』

そうか、まあ必要だろうしな。ソウ、意外と良いやつだったんだな。

『冗談言うな。足を引っ張られてはこの先大変だと思ったただけじゃ。まず一般常識を、町人の生活をモデルにして……』

結局レイシーさんの村に着くまで話は続いたのであった。

「・・・そして捕まっていた人たちはあの村に戻ったのか」

「はい。予想外の出来事でしたが、良いほうに転がりましたね。魔法使いをさらって来て、逆に占領されるとは、やつらも自業自得ですな」

「ここはヴァンパイアの国の一番奥の屋敷だ。」

「この屋敷は代々そのときの王が住んでいる。」

「その魔法使いには是非仲間になってほしい。15年間ずっと待ち続けていたチャンスじゃないか。強化鉄を溶かし切るとは相当の腕なんでしょう」

「その魔法使いは黒い髪に、白と紺の変な服装で、まだ青年らしいです」

「!!!・・・優秀なのは、そいつ自身より、精霊かもしれないな」

「私は森に行く、とヴァンパイアの王は、笑いながら屋敷の隠し通路を歩いていった。」

「面白いお方だ」

「秘書のセイヴェスは楽しそうにつばやいた。」

「すみません、朝出て行って夕方にもたまたま来るなんて」

「いえ、いつでも歓迎しますよ、それより半日で町まで行ってきてんですか？」

レイシーさんのお父さんの顔は今日は赤くない。

普通の顔だ。うっくん、なかなかかっこいい。

「ええ、まあ。それより、あつこの屋敷と、今までの話を聞きたいんですが」

これでいいのかソウ。

『ああ、夜はまたここに泊まるぞ』

またここかよ。町で敷物でも買ってくればよかった。

「まずレイシーを呼んできます。おい、レイシー。」

「何ですか？お父さん」

呼んでくるってわりに早いな。

『ちょっと黙っててくれ』

・・・て、え~~~~!!

目の前に赤い尻尾が現れた。

「主人に1つ1つ聞いてもらおうのも面倒じゃろう。話は後で聞かす」
その後1時間は聞き取れる単語はなかった。

なので森で自己加速と人差し指の炎の練習をすることになった。

ほんとにここでまた寝るのか。嫌だな。

『そうじゃのまあ我は主人に取り付いたまま寝るが』

てか、何で出てきて話さないんだ。もうお前のことは知られてるだ
ろ。

『足が汚れる。しゃべるのは魔力使う』

どんだけめんどくさがるの潔癖症なんだ。

苦労を知らないとろくなやつにならないぞ。

ナマケモノが木に登るの嫌がつてきれいな部屋でポテトチップス箸

で食ってるようなもんだぞ。

『そんな話は止めてこの村の話をしてやろつ。この村は15年ほど前まではとても平和だった。森を越えたところの村は、ヴァンパイアに襲われていたらしい。そして15年前から隣の村は襲われなくなりこの村が襲われ始めたそうじゃ。』

ここからは私の仕えていたヴァンパイアの国の話が混じるが、襲われた人たちはヴァンパイアの飲む血を毎日とられて過ごした。ヴァンパイアにとって血は人間で言うところの高級な酒のような物でかなり高値で取引される。その血を集めるところが私の仕えていたところじゃ。

そして15年前、森の中にあつたその施設は、今の窪地に移された。理由は簡単じゃ。森につながる通路より広く使いやすい通路が出来たからじゃ。その通路を作ったのはそのとき変わったばかりの王じゃった。

どうじゃ、面白いじゃろつ』

ふあ〜〜ああ。どこが面白いつて？まあいいや。結局どうすればいいんだ。

『明日は森の探検じゃ！』

1 - 8 ヴァンパイアの王(後書き)

明日とあさって部活の試合なんで更新無理です。

1 - 9 宮殿騒動

「ソラフ！」

素早く狼のようなモンスターの横に回りこみ右手の炎を叩きつける。

「と〜りゃー！ー！！」

人差し指の炎が右手を包み、炎のグローブを纏った拳が、モンスターの腹にめり込んだ。

「ジュ〜！！」

ドンでも、ガツンでも、バキでも、ザクでも、あたたたたたたたでもなくジュ〜。

昔の世界の焼肉を思い出すな〜。(昔といっても4日前だが)

吹っ飛んだ(というか転がっただけ)モンスターのわき腹は黒くえぐれていた。

それをしっかりと確認する間も無く、炎のチョップで首を半分ほど切る。

もう何匹目だ？

最初来た時は黒いライオンに怯えてか、攻撃しては来なかったが、今日は3分に1匹のペースで無限にわいてきやがる。

「まったく、俺は動物愛護派だぞ。」

『確かこの辺じゃ』

早く探してくれ。

『いや待つのがじゃ』

何だよいったい……

そのとき後ろから声が聞こえた。

「おつさま~~~~どこですか~~~~」

「よし、屋敷に戻るぞ」かつてソウの主人であったヴァンパイアのその言葉と同時に人さらいたちは太陽を浴びようと、上へと続く通路に向かい始めた。人数が2人少ないことに気づく物はいなかった。

そのころ、その2人は宮殿の横にいた。

「まだこのままの姿でいいな」

「見つかるまでは良いだろう」

背の高いノツポが、アカマメを宮殿の窓に押し込む。

暗く、小さい部屋に入ったアカマメは扉の鍵をはずす。

ノツポがそこをくぐって入った。

「進入成功」

「おい、静かにしろ」

「分かったよ兄さん」

どうやらここは住み込みで働いてる者の部屋らしい。

寝るための敷物とたんす、机、その他私物が転がってる。

机の上にはこの屋敷の地図があった。

地図にはこの屋敷のつくりと、「絶対に覚えること」と注意書きが書かれていた。

まずここは屋敷の正面から見て左にある使用人の部屋で、王の部屋は3階。

1階の右と、2階の左に階段がある。

2人は、目で合図し合い扉を開いた。

そこはキッチンだ。一流のシェフや、大勢の調理師がいるが、全員

ヴァンパイアだ。

「ここらで1つ目」

アカマメは煙玉を地面に投げつけた。

シュー、という音とともにあたりが煙で満たされる。

催眠効果付だ。その中を、大急ぎで駆け抜ける。

向かい側の扉を開けると階段が曲がりながら伸びていた。

それも大急ぎで駆け抜ける。

理由は簡単。早く行かないと自分たちが寝てしまうからだ。

2階上がったとき、そこには2人の兵士がいた。

「行くぞ」

「あいよー！」

兄弟は手を合わせた。

その姿が光に包まれる。

光が消えたときその姿は1頭の角の生えた馬、ユニコーンがたてがみをなびかせ立っていた。

ユニコーンは角で右のヴァンパイアを突き刺し、左のヴァンパイアは蹴りで床に沈めた。

そのまま廊下を駆け抜け階段を上る。

途中、何体かヴァンパイアを巻き込んだが、気には留めない。

それは彼らがクルースニク、ヴァンパイアハンターだからだ。

ヴァンパイアと人の間に生まれた兄弟は白いユニコーンの姿のまま、王の部屋の扉を破った。

「で、あんたは誰なんだ」

「わしはセイヴェスだヴァンパイアの王の秘書を務めておる」

「で、その王様は？」

「それが、昼ごはんの時間になってもこの森から戻ってこないのじや」

「ヴァンパイアの王がこの森を歩き回ってるだど？そんなことがあるわけあるか。俺たちが聞きたいのはそんな作り話じゃない。なぜヴァンパイアがこんなとこ歩いてんだってことだ」

「え・・俺たち、とは？」

「余計なことを言よつて」

すたつと、ソウがすぐ横に出てきて着地した。
こうなると会話が出来るん。

「タイヤエガーニルニヘラビムケ」

「ソニヤアルギャツテリーフリヤス」

しゃべり方が猫っばいな、ソウ。

「主人、面白いことになったぞ。ヴァンパイアの王が、人の血を飲まないようにさせるため、協力を求めてるらしいのじゃ」

「どういうことだ？たぶん1割も分かってない」

「ヴァンパイアの王は、人間とヴァンパイアの共生を目指しておる。そのため主人に手伝ってほしいということじゃ」

「思考回路がこんがらがった。知恵の輪の5レベルの難しさでこんがらがったから、解くまでに三ヶ月はかかるわ」

「つまりヴァンパイアの王を探さなくてはならん。これなら分かるだろう、というかそもそも空っぽの頭には、こんがらがるところはないじゃろつ」

「黙れ。この世界の言葉もしっかりしゃべれないくせに、やたらつるさいな」

「・・・結構気にしてたのに」

よし、猫に勝った。

まあ王様を探すか。

王の部屋は10分前とは様変わりしていた。

壁は血で赤く塗られ、床はヴァンパイアの亡骸とその周りに広がる赤い水溜り。

その中で、ユニコーンの白さだけが変わらずそこに残っていた。

10人弱のヴァンパイアの兵士との戦いで、かべは傷と血だらけになり、肖像画の後ろの隠し通路から風が吹き込んでいた。

その隙間へとユニコーンが進んでいく。

トンネルに入ったときユニコーンの姿はなく2人の青年が、上に向かって歩いていった。

「こんな隠し通路があったとは、全く気づかなかったな」

「地上につながってる様だが何でこんなところに」

「さあ、王様が散歩でもしてんじゃねえの」

「そりゃないな。おっ！出口だ」

通路の先の淡い光が徐々に大きくなり、さわやかな風が体に当たる。

「どうするんだ地上に出ちまったぞ。王を殺すとは言ったものどこにもいなかったしな」

「することがなくなっちまったな。おい、この広場を見るよ」

「ああ！子供ん時よく来てた森じゃん。てことは家もすぐそこか」

「俺が思うに、人生をやり直すチャンスかもしれない」

そのとき草を掻き分ける音が後ろから聞こえた。

ガサガサと規則的に聞こえる音とは反対に彼らの心臓は、不規則に激しく脈打ち始めた。

そして現れた姿に息を呑む。

ヴァンパイアの牙、それと同じ黒に染まった布で出来た長い服。そして一つの赤い目。

左目が閉じられていることが、この者の正体を表していた。

「「おやじ」」

「こんなところでそんなことを言われるとは。その言葉が正しければ・大きく変わったな。最後に見たのは4歳の時だったかな」

「お前が俺たち家族を捨てたとき以来だ！」

二人はユニコーンに変身した。

「その姿からすると、ヴァンパイアの血は継げなかったようだな。それは幸いなことだが」

「ふざけんな!!！」

ユニコーンが走り出し、ヴァンパイアは高く飛んだ、その手にはいつの間にか赤と黒の剣が握られている。

ヴァンパイアが着地し、振り向くのと同時に、ユニコーンも振り返り鋭い目つきで実の父をにらんだ。
いや、にらもうとした。

ヴァンパイアとユニコーンの間には、一人の青年が立っていた。

1 - 9 宮殿騒動（後書き）

夏休みまでは、月木は、更新無理です。

1 - 10 家族の再会

二人はその青年に見覚えがあった。

黒い髪に黒い目、服装は前の変な服とは変わっていて、普通の茶色と黒の服になっていたが、どこことなく変だ。

「話は分かった」

その青年の言葉に2人（1匹）は身構えた。

この青年は俺たちに誘拐された事を知って復讐しに来たんじゃないか、と。

「無駄な戦いは止める」

無駄だと、お前なんかは何が分かる。

俺たちは村を裏切った父に復讐しに来たんだぞ。

そのことを他人にどうこう言われる筋合いはない。

しかし、その裏切った父は青年に話しかけた。

「あなたは魔術師ですね」

「あなたは魔術師ですね」

魔術とか良く分からんが、たぶんそうなんだろう。

「はい、あなたがヴァンパイアの王ですね」

「はい、この二人が迷惑をかけました。どうやらあなたを誘拐したそうですが」

この二人だったのか。

俺を連れてきたのは。

今は白い馬だけ。いったいどうなってるんだ。
いきなり変身しやがって。

「ところで、あの猫はどこですか」

「ちょっと待っとれ」

ソウは俺から出て行った。

また話から置いてけぼりだわ。

その後、直立不動で5分間（ユニコーンは話に聞き入っている）聞き取れない言葉を聞き、

『ただいまじゃ』

おかえり。どうなった？

『まあ、自分で決める』

わけ分からんな。質問と回答がチグハグだぞ。

するとヴァンパイアの王が近づいてきた。

「少しお待たせしました、ジョーカー殿」

「いえ、べつに」

と、慣れない会話にほっぺをかく。

ポリッ

ポリポリでもあたたたたでもなく、ポリッ

右のほっぺに何か硬い物でもあったか？

記憶の袋を覗き込み、かき回して探り、ひっくり返して振って、出てきた。

これはかさぶただ。確かアクションスターの真似事して切ったはず。

証拠に、ほら、一筋の血が流れてる。

俺こっちで探偵やろうかな。

「そうですか、ところでジョー……」

ん？ヴァンパイアの言葉が途切れた。

それと同時に、

『危ない下がれ』

ソウが（頭の中で）叫び、とっさに下がる。ヴァンパイアの爪が、俺の居た所で、空を切った、かなりの速度で。

あのままだったら、上半身と下半身が別々セパレートになってたんじゃないか？

おい！どういう事だソウ。まさか話し合いに見せかけて、俺の命を狙ってたとかか？

『違う馬鹿。ヴァンパイアは人の生き血を見ると襲ってくるのじゃ、では』

おい、入ってきてすぐに出て行くんかい。

しかし、そんなことを考える暇はなかった。

主人から出ると同時に呪文を唱える。

「ニヤア」

こっちに向かってくるヴァンパイアに火球を複数放つが、すべて冷気を纏ったヴァンパイアの爪で消されてしまう。

こちらも体中に炎を纏い腹に向かって突っ込む。

それをヴァンパイアは横に飛んでかわした、が、そこにはすでに火球が用意されている。

その火球を爆発させるがヴァンパイアは上に跳んだ。

そこから氷の棘を飛ばしてくる。

しかし我の速さには追いつかない。

無数の棘を奇妙なステップでかわしきり（主人がかわせたのかは疑問）、着地を狙い火柱を出現させる。

その火柱に飲み込まれると思った瞬間、ヴァンパイアは消え、ヴァンパイアは主人の首に牙を突きつけていた。

「さっきのは幻影か」

「ああ、そうだ」

主人は氷の棘のせい、服が破れている。

そして足元にはポケットから落ちたのか、預かっている指輪が落ちていた。

白く輝くサムラディスの指輪だ。

うるさ~~~~~い

もう速過ぎて何がなんだかわからん。(あと、ソウが強い)

しかし徐々にヴァンパイアの容姿は変わっていった。

長い耳は小さく、牙は短く、顔の色は不健康そうな白から肌色になり、終いには普通の人になってしまった。

「サームラデイスは、魔よけの効果のある鉱石だからじゃ」

ソウが疲れた様子で歩いてきた。

「さ、ナナルジアさんのところに運ぶぞ」

なんで?と、聞いても教えてくれなさそうなので(こいつの心が読めるようになったかも)素直に運ぶことにした。

ソウは白い馬と話して、一緒に来た。

まあいつか。

俺、ソウ、ヴァンパイアの王、白い馬、なんとも面白いパーティーだ。

なんか一人減ってる気がするけど、気のせいだろう。

ナナルジアさんの家

「すいません、少し入れてもらっても

」

「グラスク！」

話があっさりさえぎられた。

現在ナナルジアさんはグラスクさんの、肩を揺すっている。

「……？グラスクさん。え……グラスクさん人間じゃなかったの。まあ今は人間になったけど。」

『主人、口、借りるぞ』

「事情があるんで中にいれてくれ、あんたんとこの坊主も連れてきたぞ」

「えっ、あっ、はい、どうぞ」

（何でソウの言うことは聞くんだ）

おいソウ、親子の再会の場面はなしでいいのか？

『面倒だから後じゃ』

家の中は5人と1匹が入ると結構狭かった。

「まずそこの二人、お前たちなんじゃ」

あ、それ俺も気になってた。誰もが合体して馬になるはずないよね。

「俺はマス、こっちが兄貴のノーン。親父がヴァンパイアだと知って、殺そうと思ってたところにあんと魔法を使う猫ちゃんが来ちゃったってわけ」

おい、こら、俺の疑問が解決されてないぞ。
この世界では変身して当然なのか？

「お前たち、2人でひとつのクルースニクになるとは珍しいな。そんなやつは聞いた事がないが？」

ん？クルースニクって何なんだ、ソウ？

『吸血鬼と人間の合いの子じゃ、動物になって吸血鬼と戦う』

「そんなことは分からない。だが、双子だからかもしれん」

兄の方は、弟より静かそうだ。

「さあ、次はそっちの話をしてくれよ」

「我は知ってるだろうが、セナルカーフィスから連れ去られて、ここに来た。だが、魔法で脱出して、ついでにその建物を占領した。今頃はあの建物は焼かれてるだろう」

セナルカーフィスって前話したお城のある国のことか。

『ああ、そうじゃ。この二人がさらいに行ってたのがその国じゃ。あっここで働いてたからそんぐらい分かる』

「で、ヴァンパイアの父を倒すためにそこで働いてたのか」

「やっぱり分かってたんだな。俺たちでお前をさらった。でも許せなかった」

ナナルジアさんは何のことか分からないという顔で（というかほんとに分かってないだろう）静かに聞いている。

「この村は昔から、ヴァンパイアに襲われてたんだ。俺たちが生まれる前におじがさらわれた。血を飲まれるために、そんなことが何度もあった。そして、親父はヴァンパイアだった。」

「だが、最近では襲われてない様だが。そうだろ、グラスク」
気を失ってるはずの元ヴァンパイアが起き上がった。
少しちびった。

「狸寝入りが、ばれちゃったか。そうだな、話すと長いが」

そう、グラスクさんは話し始めた。

1 - 10 家族の再会（後書き）

書いてるほうからするとですが、なかなか面白くなってきました。

1-11 ヴァンパイアの国の戦い

ヴァンパイアにしては背の低い、年をとった秘書は地下に向かう通路を歩いていた。

その顔には笑顔が浮かんでいる。

だが、その笑顔は欲にまみれていた。

『やっと俺の番だ』

セイヴェスは、今の王から2つ前の王の時代から秘書を務め、王になることを願っていた。

しかし今まで王になることはかなわなかった。

そのまま老人に近づいて7年前新たに王が変わったときはもうあきらめていた。

新たな王は、情報は与えてくれたものの、警戒されていて何も出来なかった。

そんなセイヴェスに、今の王が人間になって人間たちに背負っていかれるという状況は願ってもないチャンスだった。

あの時、魔術師と別々に探そうと提案したのが、実を結んだようだ。

セイヴェスは、意識することもなく早歩きで、坂を下っていった。

「そついつわけだ」

元ヴァンパイアの話は青葉高校の校長並みに長かった、が、あの頃のように体育館で立ちながら寝ることはなかった。

それは、内容が校長の話とは比べ物にならないほど密度が濃かったからだ。（校長は、口内炎ができたことだけで30分は語り続けれる特技を持っていた）

グラスクさんはヴァンパイアに噛まれた事になった、変異型ヴァンパイアで、

噛まれてからだいぶ経ってからヴァンパイアになって、

その間に双子が生まれて、

ヴァンパイアの国にいて、王になって、

この村を襲われないよう新たにレイシーさんのむらの近くに通路を作って、

そのことをとてもすまなく思っていて、

人を襲うことを止めさせようと思っていたけど、

反対意見が多いことはわかっていたので、

内乱を起こされては国が危ないので、

力がある人を求めていたところに、

俺が来た。（目的はソウ）

という話だった。

強大な力を見せ付けて、反対する者を抑えるということだ。
その後話はさらに進んでいる。

「では、明日はその手順でよいの」

俺にはいまだに発言権がなかった。

宿屋のベットはなかなか良かった。

木の箱に植物を編んだ物がひかれており、背中は痛くない。

他の家と同じく木造だが、快適な温度だ。

この世界には季節があるのか。

ソウに聞く。

『ない。いつも同じ温度じゃ。まあ南にいけば暑いし、北に行けば寒い』

つまりもとの世界とあまり変わらないようだ。

行くところもないが、旅をするのも面白そうだ。

ところで、グラスクさんとは知り合いなのか。

『知り合いというか、まあ以前にあったのは1度だけじゃ。森で自己加速（事故加速）を、主人が始めて使ったとき。主人は気を失っていたときじゃ。あの黒いモンスターを退治して、さらに我と主人を襲おうとしてきたが、我が止めてやった。かなり油断してたよな、衝撃の魔法で吹き飛ばして、白い岩にぶつけてやった。どうやらあちらも気を失ったようだったな。』

そうか。（ソウは強いな）・・・明日は忙しそうだしもう寝るわ。

快適なベッドと、なかなか良かった夕飯のおかげですぐに寝付けた。

次の日の朝と昼の間、ヴァンパイアの国では休日この日、ヴァンパイアの国の住人が国の中央大広場に集められた。

この広場は、国民が全員集まっても少しぐらい隙間の出来るぐらいの広さで、ヴァンパイアの国の3割にも及ぶ。

その広場のステージの上にヴァンパイアの王が上った。

その瞬間ヴァンパイアたちからざわめきが起こった。

それもそのはずだ。王の名において命令する、と話し始めたのが見たことのない人間だったのだから。

静かなままなのは、土の床に何か書いている少女くらいだった。

さすがに無理だと思う。昨日までヴァンパイアだった王様が、人間になってるんだもんなあ。

秘書のセイヴェスさんはいけると言っていたけれど。

「そこで、我らヴァンパイアは人間と共に生きようと思う」

王の演説は続いている。

周りからの罵声が凄いですけど、だいじょぶなんすか？

下がれ偽者とか、王を返せとか、おい、お前足踏んでるんだよ、など色々。

「ここに人間から代表が一人来てくれた。ここに友愛の証としての握手を」

魔法で大きくなった声は、広場の隅まで響き渡る。

そのステージの上で、俺と王様がお互いの手首を握り合う独特の（こっちでは普通なのかもしれないが）握手をした。

あまり意味があるとは思えない。

なんか色々下から投げてるんですけど〜！

その時

パチン！

手を叩いた音が、このステージとは対に作られているステージから響いた。

罵声、暴言、叫び、呪文、その他もろもろがやみ、ヴァンパイアたちはそちらを振り返った。

そのステージの上には背の低いヴァンパイア、セイヴェスが欲にまみれた、汚い笑顔を浮かべて立っていた。

「ヴァンパイア諸君」

やはり魔法で拡声された声で話し始めた。

「そこにいるのは王を誘拐して殺した殺人鬼たちだ」

吸血鬼に殺人鬼と呼ばれるとは、てか、殺人鬼っておかしくないか。

ヴァンパイアを殺したら殺ヴァンパイア鬼だろ。

「我々で王の敵を討とうではないか」

そうだそうだと、あちこちで声上がる。

凄いな、いや、やばいな。

何でこう仕組まれたように声上がるんだ。

さっき一気に声が止んだのもおかしかったぞ。

そんなことを考えてる間に下から人が上ってくる。

そして、吹き飛んだ？

「おいソウ、いつの間に抜け出した」

斜め前に現れたソウに聞くがそれどころじゃない様だ。

空中にたくさんの火の玉が現れた。

ああ、ありがたい。

今まで暗くてよく見えなかったからな。

白い岩で出来た天井までしっかり見渡せるようになった。

「クロンニヤイスドローラング、ラリヤイタイアエイギヤンム」

ソウがそう言い放った途端、ヴァンパイアたちの動きが止まった。

この火の玉で焼くぞとでも言っただらろう。

ヴァンパイアたちは後ずさり始めた。

しかしどうすることも出来ない。

この王様を信じてもらえないことには、どうしようもない。

何でこんなことになったんだ。

俺は今日の朝、

止めたぞ。

そつえばあの秘書が、絶対だいじょぶとか言ってたような。

「ハイオコミウテブンエオゴウサチーラ」

なんて言ったかは知らんが、秘書の言葉でヴァンパイアたちが再び襲い掛かってきた。

ソウの火の玉が暴れ始める。

その玉はヴァンパイアたちを焼き殺しながら秘書のほうへ向かっていった。

ステージの上には、もうヴァンパイアたちが上ってきている。

しかたない、死なないためだ。

「ソラフ！」

上ってきた数人を、炎を纏った右手を上下に振って焼き切る。

いつか暇になったとき、森の中で練習した動きだ。

このくらいは容易い。

ソラフを使った途端回りがスローに見えるし、炎のチョップは、振るだけでヴァンパイアは焼けてしまって右手には何も当たらない。

本当に振っているだけなんだ。

しかし上ってくるヴァンパイアの数は減らない。

仕方ない。

殺すというのはゲームで散々慣れているはずだが、いい気はしない。

無性に怖くなる。

何が怖いのかは分からない。

だけど怖い。

だから殺したくない。

だけど仕方ない。

死にたくない。

殺されないために殺す。自然の摂理だ。

だが、そんなに殺さずにすんだ。

遠くの方から規則正しい足音がやってきた。

人間だ。

「王国の兵士だ」

グラスクさんがつぶやいた。

そうだとしたら、この前町に出した血液取引の証明書だったっけか
が届いたんだらうか。

ずいぶん速いな。

熱心な兵士たちなんだろう。

だが、かなり大変なことになった。

兵士側の人間も、ヴァンパイアもかなりの被害を出しながら、受け

ながら戦い始めた。

特に王様が今にも泣きそうな、険しい顔をしてるのが大変だ。

「主人、ヴァンパイアと人間が戦わなくて済む方法を考えたんじやが」

前触れも、「拜啓」も、時候の挨拶もなしに、ソウが言った。

ソウが放った火の玉は、辺りを暴れまわっている。

「OK、とつととやってくれ。俺は自分主義の次に平和主義だ」

「そうか。では天井を爆破するぞ」

「おい、どういうことだ。全滅して戦わなくて済んだ、なんて結末は要らないぞ」

「まあ落ち着け。ここの天井はサームラディスで出来ておるようじや。爆破してその粉を吸えば、ヴァンパイアが人間に戻る」

「そう言うことか。分かった、で、どうすればいいんだ」

「あの塔を登れ」

ソウが、指差した方には、天井近くまで伸びる塔があった。

土で出来た道を走る。

あちらこちらで、ヴァンパイアと兵士が戦っている。

足元には死体が転がっている。

さすがに踏んでは不味いので、自己加速を、緩めて（結構調節が難しい）走った。

左右の石で出来た建物の間から出てくるヴァンパイアをかわし、兵士とヴァンパイアが戦ってるすぐ脇を通り塔へ向かった。

塔のふもとに付いたとき、あちこちで火が上がり始めていた。（ソウの火の玉が、大きな原因だろう）

何かが焼ける音、剣と爪がぶつかる音、ヴァンパイアの雄たけびに、兵士の断末魔の叫び声など色々な音が交差する中を、塔の扉を焼いて、上へと向かった。

塔は、半径7、8mはある大きな塔で、螺旋階段が上に上にと、果てしなく伸びていた。

そして、階段の側壁には、等間隔に部屋があり、上は細くなっていた。

その塔を上りきったとき。

天井はすぐ上まで来ていた。

1 - 1 1 ヴァンパイアの国の戦い（後書き）

明日部活の練習試合なんで、更新きついです。

1 - 12 二重結界式複数火球衝撃爆破

石の塔の屋上で、ソウは呪文を唱え始めた。

何の呪文かは分からないが、そんなのを気にしてる場合じゃない。

俺は柵のない高所、恐怖症だ。

屋上にへばり付くが、寝そべると足がはみ出して余計に怖い。

そんな俺を全く気にせず魔法は進行してるようで、ソウの火の玉が天井の一点に集まっていく。

そして

「ニャアア」

呪文の詠唱は終わったようだ。(ニャアニャア言ってるだけだと思
うが、赤と白の毛が全て逆立っているので魔法を唱えていたのだろ
う)

火の玉は俺たちの斜め上前方で集まり輝き始めた。

とっさに、的確で最適で真っ当で完璧で理屈の通る判断で、耳をふ
さぐ。

しかしそんなんじゃ、焼け石に水だった。いや、焼け石にしずくだ
った。

バアアアアアアアアン！！

その衝撃に後ずさる。しかし後ずさるところに床はなかった。

ああああ（中略）あああ～～～

人間の一番重い部分、それは心？愛？いや、頭だ。

ゆえに、頭を下にして落ちていく。

「主人！」

ソウセキ様、助けてください。

涙が今爆発した天井の方へ流れていく。

ニュートンは大ばか者だ。

その証拠に、俺の涙は重力とは反対の方向へ頬を伝っている。

ここで気を失わないだけでも凄いことだろう。

ははは・・・

地面が近づいてるぜ。

気を保ったまま死ぬるのは、自己加速で速さに慣れてるからだろう。

ははははは・・・は？

Bannon!

んあ!

床にぶつかる瞬間に、逆向きの力が体にかかった。

そしてスピードがなくなったまま床に落ちた。

ニュートンの大ばか者め。物体は地面に落ちる瞬間落下が止まる。

それを今体感した。

「主人放してもらっても良いかの」

ソウの声が近くで聞こえる。

恐る恐る目を開けると、そこは土の地面だった。

少し先に塔が見える。

そして腕のファツとした感覚。

「主人いつまで我を抱きしめておるのじゃ」

あ、ソウか。

「ごめん、つい」

「普通だったら、主人をあの世へ送ってしまったてるだろうが」

ゾクツ。全身に鳥みたいなぶつぶつが。病気かも。病院行かなきゃ。

「爆破に加えて、落下の衝撃を消すために、地面に衝撃の魔法を使
つてしまってMPが残っておらん」

どこでmpなんて言葉覚えたんだ。

体を起こすと、足元にユーフォーでも落ちたようなクレーターが出
来ていた。

「少ししたら回復すると思うが」

ソウの言葉が途切れた。

そして上を見ると、

「少しやりすぎたようじゃ。さすがに二重結界式複数^{デュアルシューマー}火球^{フレイムインパクト}衝撃^{クラスト}爆破
は無茶だったな。天井も魔力も。逃げるかの」

爆発が起こったと思われる天井の部分から徐々に亀裂が走っていた。

その亀裂がぎざぎざに、さらに運悪く輪を描くように天井を走った。

「天井が落ちるぞ」

ソウの言葉に俺は従わなかった。

亀裂の走る所の真下へ走る。

塔の下の広場を出ると、あちこちで喜ぶ人がいた。

そのほぼ全員が、国の中央大広場に向かっている。

不味い中央大広場は、ちょうど天井の岩盤が落ちてくる辺りだ。

ソウ、声を大きくしてくれ。出来るだけ大きく。

『そのぐらいならまだ出来る』

広場では人々が抱き合って喜んでいた。

天井のことなど誰も気に止めていない。

兵士たちも座り込んでくつろいでいる。

「皆さん天井が落ちます。逃げてください」

声が広がり、広場の全員が上を向き、歓喜の声が、恐怖の叫びに変わった。

広場からいち早く出ようとする人間たち。

しかし、おかしの約束（押さない、駆けない、しゃべらない）を無視した広場からの脱出は大混乱だった。

その間に、亀裂は広がり隙間から光が漏れ始めた。

俺には、さっきのステージの上で、見守ることしか出来ない。

ソウ、落ちてこないように止められないのか。

『さっきの爆発で魔力を使いすぎた。あと、この距離で魔法を使っても届かん』

そうか。

下唇をかみ締めて、落ちないように願った。

だが、そんな願いは通じなかった。

ミシミシという音が一瞬止まった。

そして、ガリツという音と同時に、天井の落下が始まった。

くそっ！あの時仏壇を蹴ったのがいけなかったのか。

それとも神社のでっかい鈴を、サッカーボールに摩り替えた事か？

反射的に走り出す。

人々は、もうほとんど広場から出て行っているが、一人の少女が、地面に絵を書いていた。

その上に、ダンプカーぐらいの石の塊が襲いかかる。

くそっ、間に合わない。

少女までは、20mも離れてない。

だが俺がたどり着く前に、石に押し潰されてしまう。

そう思った時、

少女の上に白く輝く薄い膜のような壁が現れた

「ガシッ！」

石はその壁に阻まれ、止まった。

その薄い膜の下には

「早くこの子を」

白いユニコーンが毛を逆立たせて叫んでいた。

魔法を使うと毛が逆立つ。

それは今日一番の大発見だったが、頭のメモ帳にメモッてる時間はない。

「ソラフ！」

自己加速を掛け直して、少女を抱きかかえ、反対側で止まった。

少女をつかんだとき、ユニコーンの歯を食いしぼる音が聞こえた気がする。

振り返ると、白い輝く膜は、消えかかっていた。

ソウー！！

『分かった』

ソウが衝撃の魔法を使うのと、ユニコーンの膜が破られたのは、ほぼ同時だった。

地面に落ちた岩が、煙を巻き上げている。

その煙を走って抜けると、そこには倒れた2人の姿があった。

「大丈夫か！？」

二人に、走り寄る。

背の小さいほうは、少し遠くまで飛んでいる。

その、赤い髪が起き上がって。

「衝撃の魔法、強く撃ち過ぎだぞ」

「すまん。何しろ、残ってた魔力が十分分からなくて、全魔力を使ってしまったのう」

「そうか、猫ちゃん。一応ありがとよ」

「俺からも、助かった」

そう言って二人は意識を失った。

セイヴェスは王の宮殿から森へ抜け出そうとしていた。

仲間のヴァンパイアは次々と人に戻ってしまい、一人だ。

このままだと、あの火の玉を放った猫が来るのも時間の問題だ。

人間の兵士と、ヴァンパイアの戦いが始まって、戻っていったが、戦いは天井が爆発したと同時に終わってしまった。

セイヴェスは急いで、肖像画をずらし、隠し通路に入ろうとした。

「おい、待てよ」

後ろには、いつの間にか一人の青年がいた。

黒髪、黒い目。

おそらく、鉄の檻を溶かし切った魔術師だろうとセイヴェスは考えた。

だから、急いで隠し通路に逃げ込んだのも当然のことだろう。

しかし、何もなかったあの通路で、その青年から逃げるのは不可能だった。

次の瞬間には、腕をつかまれた。

とっさに振りほどこうともがくが、その手は全く離れない。

「おとなしくするなら、何もしない」

青年の提案は意外だったが、セイヴェスは気転を利かせた。

「分かった」

その答えを聞いて、青年は腕を放した。

その手を素早くつかみ、噛み付いた。

いや、噛み付こうとした。

その牙は、手首を噛もうとしたが、皮膚に当たる前に、その手が纏った炎で溶けてしまった。

「分かってないな。俺が王様と握手したとき、頭に石の破片当たっ

たんですけど？あの、野次やら何やら全部お前が仕組んだんだろう。その日の朝にはいけるとか出来るとか言ってたくせに！」
ソウの加速と強化がかかっている青年の蹴りがヴァンパイアの膝にあたった。

バランスを崩し、前のめつた背中を殴られ、腹には膝蹴りが入ったところでヴァンパイアは気を失った。

『捕獲成功じゃな。主人、奥のほうの通路の出口に、王国の兵士が来ておるぞ。さっきまでの偵察か何かだったのじゃろっ』

天井の穴から入る光が、今まで光のなかった国を明るく照らしている。

その奥の通路から、遅れて来た王国の兵士がやってきた。

「あなたが救助申請をされた、ジョーカーさんですね。」

証明書を渡すことが、救助申請になっていたとは。

救助の前に、ヴァンパイアは人間になってしまったんだが。

王国の兵士は俺に確認を取った。

「はい、そうです。ありがとうございます」

「いいえ、助かったのはこっちです。王国もヴァンパイアの被害は受けていたので。敵の本拠地を教えてください、ありがとうございます」

いました。このことは王国から報酬が出ます。王国まで送りますので。」

窪地の隅には、焼かれてしまった建物と、地下に続く穴を閉じた跡があった。

「どのくらいですか？」

兵士は一瞬きよとした表情をした。それから少し笑顔になって、

「はい、だいたい紫10枚ほどじゃないかと」

「では、4枚ずつ、この窪地を出たところの村と、森を越えたところの村に、寄付してください」

それを聞いて兵士は目を見開いた。眼球が飛び出そうだ。

「いいんですか？」

「いいんです。ぼくの紫2枚は、いついただけますか？」

「町の役所、王国の城に来てもらえればいつでも」

「出来るだけ早くいただきたいんですが」

それは、もつ手元にほとんど金がないからだ。

「えーと、細かいので良ければ、今すぐにも用意できます」

「では、お願いします」

それを聞くと、兵士は部下にお金を借りに行った。

『ほんとにいいのか』

いいんだよ。

レイシーさんにも、ナナルジアさんにも助けてもらったから。

『そうとうお人よしじゃな』

俺は義理と人情を大切にする、生粋の青葉っ子だからな。

さて、レイシーさんのところに行って遅すぎる昼飯を食わないと。

少し経って、両手に小銭を抱え込んだ兵士が帰ってきた。

1 - 終 旅の始まり

よしっ決めた。

セナルカーフィス王国に行つて、こんな世界にいきなり連れて来た仕返しをしてやる。

俺はセナルカーフィスを潰す。

『そんなこと出来るのかの』

絶対出来る。

俺が出来るといったことは、8割がた出来る。

たかが王国の1つや2つ。

『たかがといつても、この大陸の四大大国じゃぞ』

何だそりゃ？

『この大陸のほとんどは、その四大大国が治めておる。それを潰すということは、この世界の4分の1を倒して、そこを治めるといふことじゃぞ』

少しきついかも。

まあ、行つてみないことには何も始まらない。

もしかすると、この世界に呼び出してすまなかった。せめてもの謝罪だ。ジャラジャラ。

なんてことになって、裕福に暮らせるかもしれない。

『主人、よだれがたれておるぞ』

「レイシーさん、それにレイシーさんのお父さん。これまでありがとうございました」

今日もすがすがしい快晴だ。

青い空がどこまでも続いている。

「ぼくは、王国に向かいます。あと、ヴァンパイアの騒ぎのことで、この村に少しお金が入ると思います」

「それはありがたい。お礼を言いたいの俺のほうだ」

村長さんの顔は今日も普通だ。

「助けてくださってありがとうございます。ジョーカーさんは命の恩人ですよ」

レイシーさんも、ここ数日で、健康的になった。

肌はきれいになって、瞳は輝いている。

腕の切られた跡も消えかかっている。

「では、さようなら」

「さようなら」

「またいつ来てくれても歓迎するぞ」

俺は、昇り始めた朝日に向かって、村を出発した。

次の村までの間に、ヴァンパイアがいれるほど、暗い森がなければ完璧だ。

次の村に着いた頃には、太陽は真上に近づいていた。

訪れる先はもちろんナナルジアさん一家。

「いらっしやい」

とりあえず歓迎を受けて、中に入った。

家にはナナルジアさんと、グラスクさんがいた。

「昨日はありがとうございました。もうなんて言ったらいいのか」

グラスクさんが生き生きした笑顔で話し始めた。

「あなたのおかげで、ヴァンパイアの被害はなくなりました。しかも、ほとんど犠牲を出さずに」

「人間に戻ったヴァンパイアたちはどうなったんですか？」

このままだと、夜まで話続けそうだったので、気になることだけ聞くことにした。

「兵士に連れて行かれました。そして、王国の増築作業の手伝いをするらしいです。当分は、テントで寝ることになるでしょうがね。あと、私みたいに帰る家がある人は帰りました」

「あの二人はどうしてますか？」

「ノーンとマスは畑仕事を手伝ってますよ。あなたのおかげで、家族が元に戻りました。ほんとに、どれだけお礼をしても足りません」

背の低いマスの良くしゃべるところは、グラスクさんに似たんだろ
う。

「最後にソウからやりたいことがあるそうなんで」

スルツと、ソウが抜け出していった。

「背中に刺した針はあるかの」

ソウはグラスクさんの目を真っ直ぐに見てそう言った。

「はい、ここにありますよ」

グラスクさんは気の箱からクリップを伸ばしたような針を取り出した。
た。

その針を指して

「ニヤア！」

ソウが魔法を使った。

針金が光って指輪に変わった。

その指輪には、よく分からない模様が刻まれていたが、グラスクさんは
気に入ったようで何度もお礼を言った。

「我が形を崩したんじゃ。我が戻して当然じゃろっ」

ソウはそう言い張った。

帰り際、王国に行きますといった時、グラスクさんが反応した。

「王国とこの間に、ダイザナという町があるんですが、最近変な道具が出回っているらしいです。気をつけて」

グラスクさんはかなりのおしゃべりだった。

『なんだかんだ、お礼言われまくっておるの』

『大陸の外はまだ、何も分かっておらん』

山の上り坂ではソウの講義が始まっていた。

『この大陸は東西に長い、長方形に近い形をしておる』

あまり重要ではないが、ここは北から日が昇るらしい。

ソウの日本語訳も、多少おかしいようだ。

『そして、ここは大陸の南の辺りにある。四大大国は、セナルカーフィスが一番近いし、その領地になっておる。四大大国は、大陸

の東西南北に1つずつあり、海岸に面していたり、山の上にあったり、砂漠にあったり、森の中にあったりする。ちなみに、セナルカーフェイスは森の中にある』

太陽は、てっぺん辺りまで昇っている。

ここは一日が短めな気がする。たぶん一日20時間ぐらいだろう。

『ここからじゃと、10日もあれば着くじゃろう』

山の頂上あたりで、一人の商人に出会った。

出会ったといっても、正面からばったりではなく、前を進む馬車に追いついてしまったのだ。

『主人は自己加速の加速がハンパないのう』

ソウが頭の中でつぶやいている。

他の人が使うところを見たことがないので分からないが、そうなんだろう。

「こんにちはわ」

特に用はないが、一応挨拶をした。

「こんにちは」

馬車に乗っていたのは、1人だけだった。

立派な赤と黄と青の服に、タプタプのお腹で、見るからに金持ちっ
て感じた。

「隣、どうですか」

少し狭そうだったが、走ったほうが速いので、と言つのは少し悪い
気がしたので、乗せてもらうことにした。

ふわふわなクッションもあって快適だ。

商人のおっちゃんは何もケイスという名前らしい、車輪に手作りのブレ
ーキを掛けて坂道を下り始めた。

こここの坂道はスピードが出すぎるんだろう。

「ケイスさんは何をやってらっしゃるんですか」

「色々なところで薬を売ってるんだ、大陸中どこでも。ところでジ
ョーカーさんは？」

ケイスさんは笑顔で聞いてきた。

しかし答えがないぞ。

どこにもない。

何か考えようと思ったが、この世界の職業なんて知らない。

『旅人とも言うっておけ』

「旅をします」

少し、いや、かなりきこちなかったが、何とかなった・・・かな？

「そうですか。楽しそうですね」

ケイスさんは真っ白な歯を見せて笑った。

いい人だな。うん。

そのまま町まで話は続いた。

町に入ったところで、ケイスさんは細い道に入って行ってしまった。

「さようなら」

いつの間にかこっちまで笑顔になっていた。

ケイスさんには、人を笑顔にする力があるようだ。

町の大きな道を歩いて見つけた店でちょっと豪華な昼飯を食べて、店を出たときだった。

「モンスターだ」

誰かが叫んだ。

少し経って、モンスターの鳴き声が聞こえた。

「グラアアアアア」

前見たのと同じ種類の黒いライオンが、木で作られた、神社のとり
いの様な門をくぐって入ってきた。

怖い・・・ソウ、どうする。

『主人なら倒せると思うが、逃げるべきじゃろう。主人の逃げ足は
我の見たことあるどんなやつよりも速い』

ひどい言い方だな。

自己加速を唱えようと、息を吸い込んだとき、すぐ脇を何かを通り
過ぎた。

数人の槍を持った集団だった。

「防衛隊だ！」

近くにいた少年が指を指してはしゃいだ。

そうとう人気があるようだ。

なんか嫉妬するわ。

手柄の独り占めはさせん。

「ソラフ」

もう一度息を吸い直して唱え、すぐに走り出す。無駄に全速力で。

防衛団だか防衛隊だかを、一瞬で追い越してライオンのほうへ走る。

その勢いを生かしたままわき腹に炎を纏わせたパンチを放つ。

拳がライオンの腹にジャストミートした、が、

あれ？止まんない。

「ウヴオ！」

勢いのついたままライオンを貫き、前足と後ろ足の間を通り、反対側で激しく転がった。

頭を地面にぶつけて少しフラフラする。

かなり痛い。

立ち上れず地面に横たわってしまった。

う・・・吐きそう。

防衛隊が今頃やって来た。

もう終わったぞ。そいつは腹をえぐられてもう戦えない。

立っているのがやっとだろう。

そこに

「グサリ」

防衛隊が止めを刺した。

OK

駆け寄ってくる町の人。

？

その全員が防衛隊のところに。

おい！お前ら焼くぞ。

『防衛隊か、町の人どっちじゃ。我も手伝うぞ』

人々に囲まれている防衛隊の一人が、堂々とこちらに歩いてきた。

歩き方が優雅で余計に腹が立つ。

よし。

「お怪我はありませんか」

そう言つて手を伸ばしてきた防衛隊の一人の手をとつて（町の人々の拍手喝采）人差し指から火を出した。

「あつっ！ー！」

ははは……。ざまあ見やがれ。

この馬鹿があゝゝゝ

手のひら火傷して、涙目の防衛隊のお兄さんにさらにビンタ（さすがに炎は、なし）して、フラフラしながらダッシュ。

「バグイ！」

その言葉を残して町の外に走り去った。

『主人、どうするのじゃ』

まあ、どうにかなるだろ。

その時、俺は防衛隊を攻撃して、重い罪になっていたが。そんなことも知らず、俺の旅は始まった。

逃げる、という形で。

1 - 終 旅の始まり（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。というか感激です。

1章は、序章みたいな感じですか。（と、いう言い訳）
これからがんばろうと思います。

2 (金髪の少女) - 1 ダイザナの町 (前書き)

2章早速始めます。

2 (金髪の少女) - 1 ダイザナの町

水……

— 水

……水

『水ばかりうるさいのう』

ソウ、いつになったら町が見えてくるんだ。

地平線しか見えないぞ。

ラピユタの歌の中だけの物だと思っていた地平線しか見えないぞ。

『あと半日もかからん』

……死んだな。この世界に来て何度か死んだと思ったことだあるが、これは死んだ。

今日でこの俺の16年の人生も終わりだ。

『なぜじゃ』

なぜって、砂漠を水なしで炎天下の中歩いたら死ぬだろ、この糞猫
~~~~~!

『落ち着け主人。水がほしいなら、自分で出せばよからう。呪文はベームじゃ』

何だよ！もっと早く言えよ。

「ベーム！ベーム！べえむ！部餌霧！」

おい、どうなってんだ。

いくら叫んでも、両手で作った手のお椀には、一滴の水も出てこない。

『そうか、やはり主人は火系統のようじゃな』

どういうことだ。魔法ってどうなってんだ。

『魔法には系統があつて、基本系統が炎、水、風、土。それぞれに変異種があつて、土は植物、風は雷、水が氷で、炎が毒じゃ』

ど、毒・・・かあゝ。

恐ろしい魔法があるんだな。

『そのほかに、特異種と呼ばれる、光と闇がある。あと無系統もある。普通一人、基本の1系統もしくは1系統とその変異種しか使えん。無系統は魔力があれば誰でも使える。あと、光と闇はただの伝説のようなものじゃ。実際に見たことがない。』

てことは、俺には火系統以外使えない。使えても毒か。

どうすればいいんだ。

前にあるはずの町は見えないし、後ろも、さっきまでいた森は見えないぞ。

絶望しながら後ろを向くと、ザッザッザッザッザという音が聞こえた。

「ジョーカーさんじゃないですか」

「ええ、はい、また会いましたねケイスさん」

「1日に2回も会うなんて、奇遇ですね。隣、どうですか。あと水も。干からびそうな顔してますよ」  
「ありがとうございます」

そう言っつてケイスさんのボトルを受け取った。

ゴクリ

喉から流れ込んで来る水、生命の源。

その水が体中をめぐり。

「フウ」

「それにしても、水なしで砂漠を渡ろうとするなんて。かなり自信家ですな」

「からかわないで下さいよ、ケイスさん。これはそもそもソウが10分そこらで次の町に着く、とか言ったもんですから」

ケイスさんは驚いた顔をした。

「ソウ、とは？ペテン師ですか？10分どころか100分あっても着きませんよ、ダイザナには」

ダイザナ。

確かグラスクさんが言ってた町だ。

「いえ、僕にくつついてくる精霊です。わがままで、面倒臭がり、無茶苦茶なやつなんですけどね」

「それは失礼しました。精霊を持ってるんですか。で、今どこに？」

「えっ、あ、僕に憑依してます」

「ふん。憑依ですか。珍しい精霊ですね。そういえば、前の村にいた時、ジョーカーさん最高でしたよ。なんせ、みんなの憧れの防衛隊の隊長が、あのビンタで泣いちゃって。ほんとに、腹がよじれてちぎれちゃうかと思いました。」

とケイスさんは立派なお腹をさすった。

かなり低い所までおちた太陽が、遠くに見えた鉄の柵を光らせた。

「お前、パスポートを盗むなんて、凶悪度3の犯罪だぞ」

「いったいどこで盗んだんだ」

町の入り口では、2人の男と、

「盗んではいけません。私のパスポートです。早く町に入れなさい。私にはその町に入る権利があります」

1人の金髪の少女が言い合いをしていた。

左右にはどこまでも続きそうな鉄の柵。

柵の間は腕がぎりぎり通るぐらい。

高さは俺が3人で肩車したぐらい。

つまりこの入り口から入るしかない。

「すいませんが、いったいどうしたんですか」

ケイスさんが話しに割り込んだ。

「あなたには関係ありません。パスポートをお見せしてくれれば中に通します」

言い争いをしていた男の片方が答えた。

そうか、パスポートがいるのか。

じゃあ俺はどうやって入るんだ。

「そこのお嬢さんもパスポートを持っているようですが？」

まあ、妥当な質問だろう。無難かは分かんが。

「このパスポートは盗まれた物です。顔写真のところを見れば分かるでしょう」

見せられたキャッシュカードぐらいのパスポートには、緑の髪をした少女が写っていた。

さすがにこの少女とは違いすぎる。

写真の少女は緑の短い髪に緑のおっとりとした目、ふっくらとしたほっぺ。

今いる少女は金髪長い髪に黄色で鋭い目、きりっとした顔だ。

どう見ても別人だ。

「もう一度言います。私にはこの町に入る権利があります。これ以上私が町に入るのを拒む場合、私はあなたたちを攻撃することが自然だと考えます」

いやいやいやいや。

自然じゃないでしょ。

淡々とした機械のようなしゃべり方で、言ってることめっちゃくちゃだぞ。

「何だと、このガキ」

「俺たち2人と1人でやり合おうってか？ああ？」

お兄さんたち、いつの間に武器を取り出したの？

ケイスさんの質問に答えた男の手には、銀色に光る鉄で出来た武器が。

てか、あれは？

「新型の遠距離用武器だ。まだ一回も使ってないから、試し射ちしてやるよ。安心しな、殺しはしない。凶悪度3だからな」

そのお兄さんの手には、少し大きめの拳銃が握られていた。

「さて、お前、犯罪者を罰するのは、上の指示がないといけないんじゃない」

「うるせ〜な〜。少し怪我させるくらい問題ない」

その銃が金髪少女の足に向けられた。

手を伸ばせば届きそうなくらいの近距離、この世界の銃（在った事に驚き）の性能が低くてもさすがに当たるだろう。

そのはずだった。

拳銃から弾が撃たれる瞬間に、少女は軽やかに右斜め前に飛んだ。

そして、銃を撃った衝撃で反り返っている男の目の前に着地。

その顔に、右足を軸に回転し、

「ていつー！」

計算され尽くされたような裏拳を当てた。

その、小柄な体からは信じられないほどの威力だ。

左手は、男が持っていた拳銃をつかんでいる。

その銃を、回転しながら地面に叩きつけられた男に向けて、抑揚のない声で言った。

「少し怪我させるぐらい問題ない、と。・・・私もそう考えます」

怖い、そして速い、1秒もかからずに、男一人簡単に倒して、武器まで取っちまった。

しかし、これは町に入るチャンスだ。

俺の考えたパーフェクトでワンダフルな作戦を、紹介しよう。

作戦第一、この女の子に活躍してもらい、誰もいなくなったゲートを普通に通り、入る。

第二、この男の人を救い、感謝されて、「もちろん入ってもらって結構です」な状況にする。

第三、俺がこの男の人を殺してストレス発散。

まあ、第三は止めとく。

ここは、第二でいくか。

そう、俺は考えた。

しかし、第一の手を選ばなくてはいけなくなった。

金髪少女が二人目の男を膝蹴りで伸ばして、一人目の倒れている男を蹴って気絶させてしまったからだ。

「一緒に来ていただけますか」

ため息をついているところに、アクセントも強弱もへったくれもない声がかかった。

「この提案を受け入れてもらえない場合、私は今晚の宿の金がありません。よって、受け入れてもらえない場合、攻撃します」

いや、止めてくれ。

こいつ考え方がおかしいだろ。

自分勝手だな。金がないから一緒に来いって・

まあ、いいか。

少女の頼みだ、受け入れないわけには、いかないだろう。

『主人も強がりじゃな。冷や汗ダラダラじゃないか』

「ケイスさんいいですね？」

と振り向くと、ケイスさんは拳銃をしげしげと眺めていた。

「これはものすごい発明だ」

この町は、妙に変でおかしな町だった。

中途半端にハイテクな機械があちこちにある。

固まった砂漠の地面の上の木の家に、ガラスのような窓。

夕方の赤い光の中の街灯。

固まった砂漠を走る自転車もどき。

しかし、その中を馬車で進むケイスさんと、金髪少女ことウィーディと、俺は、恐ろしく妙に変でおかしかった。

正確にはあと2人、男がいるが、見つかったはずなので、馬車の中に隠してある。

今は、その二人を町の防衛隊の施設に運んでいるところだ。

もうじき日も沈むので、商店街の店はどんどんしまわれていく。

砂漠だからか、気温が下がるのが肌で感じられる。

夜はいい宿を取らなきゃ寒いだろう。

そんな宿を2部屋も取るのか。

俺は無職だったのに、ひどいな。

だいたい、なんでこいつはこんなに強いんだ。

ソウだけで手一杯なのに、ウィーディーまで。

『手一杯とは？どういうことじゃ。我はそんなに攻撃的で無茶苦茶なやつかの？まず、主人は……』

そんな、ソウの愚痴は防衛隊の兵舎に着くまで続いた。

こいつも良くしゃべる。というか、ほとんど俺の愚痴なんですけど。二人の男を、俺とウィーディーで一人ずつかかえて、防衛隊兵舎一番正面の建物に入った。

そこには、ところどころ跳ねた白い髪をした、目の細い男がいた。

背の高さは180ぐらいだろうか。

縦にひよる長い。

細い目と細い顔でキツネに似てる。

その男は雑誌を読みながら言った。

「こちら、防衛隊ダイザナ宿舎です。ところで、今日の営業は終了していますってこと。知ってた？知らなかった？知らなかったでしょ。やっぱり！」

2 (金髪の少女) - 1 ダイザナの町 (後書き)

今回出てきた2人は結構出つもりです。

ウィーディーにやられた2人じゃなくて、ウィーディーと、キツネくんです。

## 2 - 2 砂糖とスプーン

「フア〜。こんな夜に何のようだい。皆さん」

キツネのような男はあくびをしながら聞いた。

「防衛隊2人を拘束しました。私に銃を向けたためです。私たちはこの二人を預けに来ました」

ウィーディーの言葉はやはり単調だ。

「ありがとうね、お嬢ちゃん。銃を向けたなんて、ほんとにごめん。部下はちゃんとしかっておくよ」

キツネ男は笑いながら言った。

笑うともともと細かった目が全く見えない。

「でも、僕は直接しかれないから、ここの中隊長に言っておくよ。謝礼はまた後であると思うから、ここに名前と職業ぐらい書いといてね。いい？だめ？」

「分かりました」

「やっぱり！じゃあ頼むよ。僕は調べ物の最中でね」

そう言ってキツネ男は奥のほうへ行ってしまった。

俺たちが帰るときには、スヤスヤ眠っていたが。

俺たちは近くの宿に泊まった。

大きくはなかったが、悪くはない普通の宿だった。

ソウ、この世界には風呂はないのか。

『そんな物はないが、町を探せば体の汚れを取る仕事をしている魔術師はいるはずじゃ。

なにせよ、こんなに広いからの』

そうか。

ところで、いったいウィーデーは何者なんだ？

あの紙には職業は無職だと書いていたが。

『やつは、普通の人間と違うオーラを持っておる。魔物の類いではない。我としては少し気になる』  
オーラ？何それ？

『その生き物が、無意識に発している生命エネルギーじゃ。主人も少し変なオーラを出しておる。それも気になるの。やつの正体が知りたいのう。出来れば主人が探ってくれれば嬉しいんじゃないが』

目が覚めたとき、太陽はもう結構高いところまで昇っていた。

この世界の時間は前の世界より1日が短い。

こっちの世界の時間にはまだ体が慣れていない。

部屋から出て、階段を降りた。

1階には食堂がある。

食堂の中に入ると、ウィーデーがいた。

明るい所でみるとかなりかわいい。

なにやら宿の人と話している。

「ほんとにいいんですか、お客さん」

「あなたが気にする必要はありません。それだけでいいんです」

「分かりました。すぐにお持ちします」

なぜか、トボトボ歩く宿の人に俺は声をかけた。

「おはようございます」

「あっ、おはようございます。朝食は、普通の物でよろしいですね」

この世界は良く分からない。普通じゃない物なんてあるんだろうか。隠しメニューとか？

「はい」

それだけ答えて、ウィーデーの向かい側に座った。

別に、ウィーデーが恐ろしいほど顔の整った美少女だからではない。

これは、色々考えた結果、この席が一番良い席だと判断したからだ。分かったか、ソウ。

「ん？主人か。もう朝かの？」

ソウはまだ寝ていたようだ。

すぐに、俺の前には、麦てきなものと、野菜の朝食が出てきた。

しかしウィーデーの前には、コップ三杯の白い液体が出された。

「ウィーデーさん？何すか、それ」

「砂糖水です。あと、敬語は必要ありません。私はあなたに宿代を出してもらいますから」

「砂糖水？」

「水に砂糖を溶かした物です。理解できましたか」

ウィーディは三杯の内、一杯を飲み干した。

「それは分かっているんだが・・・」

太陽の高さから、もう日が昇ってからだいぶ経っているのは確かだ。

とすると、砂糖水の注文にだいぶ時間がかかったんだろうか？

それとも、俺が起きるのを待っていてくれたのか？

出来れば後者であって欲しい。

「何で砂糖水なんだ？」

ウィーディは二杯目を飲み干し、三杯目を飲み始めた。

俺はとうとう、超ど級の疑問の解明を始めた。

「必要ないからです。詳しいことは話すと長いですが」

「じゃあ、外を歩きながら話してもらってもいい？」

そう言ったのには理由がある。

一つは、ソウの頼み。

もう一つは、厨房の方から「なんであんな物をお出したのだ」などの叫び声が聞こえたからだ。

「ほんとほ、ここ出たところで別れるつもりでしたけど、いいですよ」

「その説明の前に私がここに来た目的を話した方がいいでしょう」

今、俺は金髪の美少女と町の大通りを歩くという、最高の状態に陥っている。

ウィーディーが少し俺に近寄った。

俺は今まで女子に避けられて、というか、世界中に嫌われて育ってきた。

そんな俺にこの状況は夢でも見ているようだ。

鼻血が出たときのためにティッシュ用意しとかないと。

ポケットに手を入れると、紫二枚分弱の小銭がジャラリ。

最高だ。

「しかしその前に……そうですね。いきなりですいません。」

あなたに協力していただきたい事があります」

ここから先の話は、周りに聞かれたくないということで、近くの喫茶店みたいなのに、入ることになった。

しかし、その入り口で

「ちょっとそこの緑色のお嬢ちゃん。ここのお茶はとっても美味しいんだよ。知ってた？知らなかった？」

「そ、そんなの知りません」

「やっぱり！じゃあ、一緒にここで話さない？」

・・・よし、離れよう。

「ウィーディー、ここはやめとこう」

しかし、あのキツネ男、こんなに遊び人だったとは。

ドラ○エのパーティーには、絶対に入れたくないな。

そうして、俺とウィーディーは少し先の店に入った。

俺の前には水、対して目の前の金髪美少女の前には砂糖が皿に盛られている。

ウィーディーはその砂糖の山を、持参したスプーンで食べ始めた。

激しく装飾されたスプーンで、突っ込みどころ満載だったが、

「なんで砂糖？しかもそんなに」

そっちの方を先に聞くべきであろう。

「いや、昨日は一日中砂漠を歩いてきたから」

「いや、そっちじゃなくて、なぜ砂糖ってことを」

しかもこの世界の砂糖高いし。

「それは、今から話すことに関係します」

今俺たちは、木の椅子に座って話しているのだが、なんと、4方が木の壁で仕切られた個室である。

ハンパなく嬉しい状況だ。

しかし1つの事件が起こった。

「私がここに来た理由は――」

ドガーーーーーという音、そしてバキツという木材の折れる音が入り口のほうから、個室の壁を突き破って聞こえた。

ワントンポ遅れて、人々の叫び声が響く。

引くタイプの扉を開けようと振り向いたその時。

「てい！」

バキッと、引くはずの扉が外側にへし折られた。

その隙間をウィーデーが凄じ速度で通っていく。

その手に握られているのは・・・スプーン？

長さ1mほどに伸びたスプーンがウィーデーの手に握られていた。

「じゃあ、一緒にここで話さない？」

「いえ、結構です」

意外なほど即答。まあ、いきなり現れた僕にこの状況でOKはないだろうけど。

「大丈夫、お金ならあるから」

つと言いつつ財布を見せる、いや、財布の中のバッチ子を見せる。

「・・・え、ええ、そつ、それなら」

どう考えても不自然すぎるだろう。

まあ、いきなり話しかけてきたやつが、防衛隊の特隊長だったら驚くだろうけど。

そのバッチは、防衛隊の証、花形のバッチである。  
しかも、花びらの数が大隊長以上の者を表す6枚だ。

防衛隊は、この大陸の人々と治安を守る組織で、下から隊員、小隊長、中隊長、大隊長の位がある。

それらはそれぞれ割り当てられた地域の治安維持に努めるが、それとは別に、割り当てられた地域がなく許可なしに行動できる特殊部隊がある。その隊長は特殊部隊大隊長、略して特隊長と呼ばれ大きな権力とそれに見合う実力をあわせ持つ。

「じゃあ入ろうか」

この主人とは知り合いだ、真つ直ぐに一番奥の防音魔法が張られた部屋へと案内してもらおう。

「いきなりだけど、聞きたいことは3つ。

一つ目に、この町長はいつ変わったか。

二つ目に、税金は高くなったか。

三つ目に、この町のことについて少し。

あっ、あと四つ目に、今の町長のことについて少し。

あと、名前とかは言わなくていいから」

「分かりました。まず、町長が変わったのは・・・」

このまま話は順調に進むと思っていた。

『セラ、あなたのいる町に魔物が忍び込んだわ。場所はそこを出てすぐ東』

しかし、ところどころ跳ねた髪に隠してある、耳元の魔力通信機から、倒せという意味であろう連絡が入った。

『分かった、レイサ』

「ごめん、急用を思い出した」

そう言って、特隊長は魔物のもとへ向かった。

## 2 - 3 モンスター行進

店の入り口で、ウィーデーは巨大なイノシシを巨大スプーンで殴っているところだった。

すくう部分で片方の目を叩き、額をスプーンを半回転させ柄の部分で切りつけた。

あたりに鮮血が飛ぶ。

そんなんで良く切れるなー、と感心していると、外の大通りを町の中央に向けて走るモンスターたちの姿が見えた。

イノシシに熊に象にライオン、それにキツネ？

最後のは、どこかの遊び人兼防衛隊だ。

まあ、一応、防衛隊だから仕事であろう。

目の前では、巨大イノシシがウィーデーに牙を振るったが、楽々避けられ、前足を易々と切られた。

「ギョオオオオン」

叫び声をあげ、倒れたイノシシに、しっかりととどめを刺したウィーデーがこちらを向いた。

全身血だらけだが、本人の血は一滴も無いだろう。

「追いますか？」

とても簡単な質問だ。

追うか、追わぬかの二択。

しかし、俺には追う意味が無い。

ここに来た理由にそんな物は無いからだ。

ここに来た理由は、

- 1、王国までの道にあったから。
- 2、砂漠での野宿は明らかに危険だから。
- 3、食料調達。

町を救って勇者の気分になったところだ。

つまり俺の答えは、

「主人、あの防衛隊のオーラも気になるところがある、と言っこと  
で」

「追おう」

おい待てや。

ソウ、勝手に人の口を使うな。

乗っ取るな、第一あんだけのモンスターをどうしろと・・・

「分かりました」

それだけ言って駆け出すウィーデー。

仕方ないな・・・。

この世界の人はどうも自分勝手だ。

セラは前を進む魔物を攻撃範囲内に捉えながら、砂漠の町を走った。

「レイサ、この後どうすればいい」

『その道を真っ直ぐに進んだ町の中央あたりに、広場があるわ。そこでやってしまつて。』

『その町の防衛隊には町民の避難をしてもらつてるから。』

『それにしても、あなたのフォースも困つた物ね、近くの人まで巻き込んだらうんだから』

「一言どころか、一文よけいだよ」

『第一、欲しくてもらつた物じゃない、とセラは思ったが口にはしなかつた。』

『こうやって話しが出来るのも、私のフォースのおかげなのに、よけいだなんて失礼ね』

「レイサのフォースは便利でいいね」

彼女も欲しくてもらった訳じゃないが、なんとも思っていないようだ。

『ありがとう、ああ、そこよ、広場』

「見たら分かるよ、魔物だらけだからね」

セラが今いる広場には魔物が20ほどいる。

魔物たちは町の中央に向かって広場を横断している。

「早いとこ終わらそうかな」

そう言ってセラは手のひらを上に向けた。

彼のフォースは電気を発生させ、操るものだ。

手のひらの上に電気の球をつくる。

髪の毛が逆立つのは、魔法を使ったときの魔力の漏れではなく、セラが発生させた電気のせいだ。

ある程度大きくしたそれを、魔物の群れに向かって投げた。

「セラ・スペシャル3！」

雷球は魔物の群れに追いつくと同時に、中に溜められた電気を一気に放出した。

目がくらむほどの光が魔物たちを包み込み、光が消えたとき立っていた魔物はいなかった。

走るウイーデー！

その、かなり前を走るモンスターたちと遊び人。

俺はというと、自己加速を使ってモンスターと並んで走っている。

モンスターたちは、きつちりとした統制の取れた動きで、道を真っ直ぐに走っている。

時々道の左右に並ぶ店に突っ込むやつがいるが、すぐに戻ってきて、固まって走る。

モンスターのくせに賢いな、などと考えながら群れの先頭の方へ向かうと、そこに一人の男がいた。

巨大イノシシの上にまたがっている。

歳は30位だろうか。

おそらく、こいつがこの群れを指揮しているんだろう。

目の前には広場が見えてきた。

なぜか人がいないが、そのほうが安全だ。

モンスターの群れの前へ出た。

その男は、さすがに驚いた顔をして、手に持った杖を振って叫んだ。

「な、なんだ、あいつは。殺せ！殺せ！」

今にも、イノシシの上で立ち上がりそうだ。

杖には、テニスボール級の濃い青の水晶がはめ込まれている。

男の指示で、男のすぐ脇のトラのようなモンスターが、走ってきた。

そのトラをひきつけて、後ろを向いた。

いま俺は後ろ走りの体勢だ。

イノシシの上の男と目が合う。

そして、地面を思いつきり蹴った。

自己加速の影響で地面を蹴る速さが上がり、上に2mほど飛び上がった。

そこに、イノシシが男を乗せて突っ込んできた。

ドスツ、と、イノシシに狙いどおり着地して、とりあえず男を蹴り落とす。

俺の蹴りが頭に当たり、座って杖を振り回していた男は杖と共にゴロゴロと転がっていった。

そして、俺が安全に地面に降り、モンスターの群れから少し離れたところで、それは起こった。

雷が落ちたような音と、周りのものが何も見えなくなるほどの光が、モンスターの方から放たれた。

俺は腕で目を覆いながら振り向いた。

その腕を下ろし、目を開くとそこには、真っ黒なおそらくモンスターだったと思われる物体が転がっていた。

「ちょっと、やりすぎちゃったわ〜」

いまだに、このキツネがこんなことをやったのか疑問だ。

「おっ、その顔！疑ってるね、そうでしょ？違う？」

あと、この甘ったるいしゃべり方も少し何とかして欲しい。

「一人でやったのか？」

そう聞くと、細い目が、笑ってさらに細くなった。

「やっぱり疑ってるね。ところで、この人は？」

あ、ああイノシシにまたがってたこいつか。

「そいつはあのモンスターたちの先頭にいた」

「ふん。じゃあ、君、何やってたの？」

その質問は俺に対してではなく、地面転がって、ぐったりしてる目の前の男にだ。

「わ、わたしは、・・・違う、理由がある」

「どんな？」

「もう、我慢ならないんだ。ここの町長だ。俺たちからやたらと税を取るんだ。

その金であいつは、贅沢やってるんだ。

逆らおうにも、あいつ、見た事もない武器を出してきて、逆らったやつは、みんな、みんな殺された」

「ふんふん」

キツネ男は男の言うことをしっかりとメモを取っている。

胸には見たことない（まあ、世界が違うからそれも当然だが）金色の金属の板を着けている。

「だから、俺たちは、協力してあいつを殺してやろうと考えたんだ」

「それで今回のことを起こしたと。分かった。詳しい話は後で良いや」

そう言って、キツネ男はこっちを向いた。

「ところで、あ、うん。お嬢ちゃん、そのスプーンはなあに？」

それ、俺も気になっていた。

「これは、私の祖父が作った武器です。この武器の名前はフーモアガッシャーです。」

祖父の名前はクレットですが、知ってますよね」

キツネ男はクレットと言う名前に聞き覚えがあったらしく、

「……そうか、まさか、あのおじいさんの孫がお嬢ちゃんな訳か」  
相当驚いた顔をした。

細い目が、珍しく見開かれた。

今まで全く気づかなかった（気づけなかった）が黄色と灰色の面白い瞳をしている。

「それに、祖父がこの町に連れてこられたという事も、分かっ  
てますよ、特大将さん」

キツネ男はさらに目を見開いた。

眼球が飛び出すんじゃないだろうか。

「知らなかったな、この町の恐ろしいまでの発展はそのせいだ  
っか」

だめだ、話についていけない。

置き去り感MAXだ。

「まあその話も後で」

キツネ男は気を取り直して続けた。

「君たち、二人とも防衛隊に暴行したってことで、指名手配されて  
る訳だけど、知ってた？知らない？」

## 2 - 4 キツネの過去

今、俺は人生で初めての取調べを受けている。

隣にウィーデーが居なかったら、心臓が爆発してるだろう。

やはり、一人で怒られるより、大勢で怒られたほうが楽だ。

「私は銃を向けられたからです」

何！こいつ逃げやがった。

ならば俺も、

「みんなに好かれているのが、むかついて」

よし、何かしら言ったから何とかなったり、

「それ、弁解どころか言い訳にもなってないよ」

って、ならないか。

まあ、あれにはもう一つ訳があるからな、

「それに、手柄を横取りされたのが、むかついて」

どうだ、まいったか。

「横取りって……。君に手を差し伸べた人は、お礼をしようと思

つていたらしいけど」

MAZIKAYO・・・そうとうひどいことやっちまったな・・・

俺は馬鹿だった。

いや、馬鹿だ。

生まれてから今現在までずっと馬鹿だ。

自覚症状がありすぎて、挙げていったらきりがないので省く。

「でも、助かったのは助かったかな。あの人、君がいなかったら今頃僕の雷球で焼肉だからね」

部屋の隅には寝かされてる男がいる。

俺が蹴ったこめかみ辺りが赤く腫れていて、痛そうだ。

ちなみに、あの光は目の前のキツネ男ことセラの作った雷球がやったことで、少し離れるのが遅ければ、俺は死んでいた。

この世界には魔法のほかにフォースと言う物があるらしく、魔法と違い、極めて少ない人が生まれつき使える、身に付いている力なそうな。

で、彼のフォースが、電気を発生させ、操る物だとか。

「あの人からは、いろんなことが聞けてね、それはありがたかったかな。

合わせて♯0ってことにしてあげても良いけど、そうする？しない？」

で、さらに、こいつはそこそこ偉いらしい。トクタイシヨウとかだ  
ったと思う。

「そうしてほしい」

こいつに頼るのは嫌だが、罰金取られるのは勘弁だ。

「やっぱり！じゃあ君はもう帰っていいよ。」

後は、このお嬢ちゃんのことを少し知りたいな」

ありがとうございます、と一応いって、部屋を出た。

『主人ちよつと待て』

お、ソウか。

ひさびさの登場だな。

「少し、あいつらの話を聞きたい」

そしてひさびさの憑依解除。

「フラシル！」

ドアに前足をあて、ソウが唱えた。

「おい、ソウ、何だそれ」

「静かにしろ、主人。」

今、中の話を聞いているところじゃ」

それって、盗聴という物では。

まあ、あえて気にしない事にしておこう。

「わかった」

「ふーん」

僕がいくら特隊長でも、嘘を見破るなんてことは出来ない。

僕の前に置かれたパスポートには、緑色の髪と目の少女。

目の前の本物は、金髪に黄色い目。

外見上では、全く違う。

しかし、彼女の言うことが本当ならあり得る話。

しかし、本当に人体改造されたかどうかは分からない。

その確立はほとんどないに等しい。

しかし、セラは過去、実際に人体改造されたことがあるのを知っている。

今からずっと前。

魔王封印50年の祭りがあったころ。

セラがまだ伝説の勇者になることに憧れていた頃。

セラは山の中の高い所にある町に住んでいた。

そこはちょっと変わった町で、子供だらけだった。

大人は白衣に身を包んだ数人だけ。

セラたちは、そこで、一緒に一つの建物で暮らしていた。

ステリウス教の教会を改造した物だった。

そこでの生活はとても楽しかった。

みんなで、ごはんを食べ、遊び、学び、笑ってすごした。

山の斜面をみんなで走ったり、木の実を取って食べたり、悪さをし  
て、怒られたこともあった。

セラはその中でも静かなほうだった。

普段は、みんなが遊んでいるのを、窓越しに見て、ステリウス教の聖書を読んだりして過ごしていた。

しかし、一人だけセラと同じように、聖書を読んでいる子がいた。

セラと一緒にここへ連れてこられたらしいが、セラは、物心がついた時から教会で過ごしていたから、その前のことは知らない。

「ラミ、なんで、そんな物読んでんだよ」

その子は、ラミというセラより2つ、3つ上の女の子だ。

人に接するのに慣れないが、気になったセラは、ぶっきらぼうに聞いた。

「あのね、お母さんが神様を信じて生きなさいって言ったの。私たち、捨てられたんだけど。」

セイブルはお母さんの事覚えてないの？」

セラはその頃セイブルと呼ばれていたし、それが本名だ。

「僕はお母さんなんて知らない。お父さんも、おばあちゃんも、おじいちゃんも。どこに居たかさえ知らない。」

お前は、いいよな。

俺は何にも知らない。大人になっても、勉強しても、死んでも何も分からないんだろうよ」

「聖書には、こんな言葉があるの『死ぬなんて言葉は使ってはいけない』。知ってる？知らない？」

「知ってるよ、それくらい」

「やっぱりーじゃあ、これからは絶対言わないでよ」

「分かったよ。じゃあね」

そう言って、セラは聖書を元に戻し、庭園に出た。

庭園には、色とりどりの花が植えられ、太陽の光を浴びて、輝いていた。

そうして、時は進んだ。

セラたちは、もうかなり背も伸びて、勇者の夢を、あきらめ始めた頃、少し、生活が変わった。

一定の年齢以上の者が、山の山頂近くの建物へと連れて行かれた。

その建物は、真っ白の壁と、全体的に四角い造りで、教会3つは入りそうな巨大な建物だった。

セラは、連れて行かれなかったが。ラムは連れて行かれることにな

った。

「お別れなんて嫌だ」

セラは、毎日ラミと一緒に遊んでいた。

「私も、だけど、聖書にこんな言葉があるの。  
『信じあえば絶対に結ばれる』って。  
知ってる？知らない？」

ラミは笑おうとしたが、上手く笑えない。

頬を涙が伝って、中庭の草の上に落ちた。

「もちろん知ってる。だけどそれには条件があって……」

「愛があれば、でしょ。……信じあえば、ってあるのに……愛ま  
でつけるなんて、くだいよね」

「でも、でも、両方あるでしょ」

ラミは少し笑って、

「告白するなら、もっと早くしなさいよ。  
いつ、離れ離れになるか分からないんだから。  
……返事は、次ぎ会った時でいいよね」

それだけ言って、ラミは行ってしまった。

それから、さらに時は進んだ。

とうとう、セラがあゝの建物に連れて行かれる時が来た。

セラは馬車に一番に乗った。

話をする相手がないから、暇だっただけ。

そう考えていた。

セラは馬車から降りて建物の中に入った。

建物の中には、見た事もない装置がたくさんあった。

その中から、白衣を着た一人の男が近づいてきた。

「今から君たちにしてもらう事は、たったの2つです。

まず、左に見える装置の輪の部分に、手を通してください。

少ししたら、番号の書かれた紙を渡すので、右の装置の中から、

紙に書かれた番号の装置を探して、その人の指示に従ってください

い」

一番先頭にいたセラは、その男に聞いた。

「あの、これが終わったら、どこへ行くんですか」

戻ろうとしていた、その男はセラをにらんだ、がセラも負けずに睨み返した。

「そんな事知るか。とつとと言われたとおりにする」

回答は、それだけだった。

しづしづ一つ目の機械のほうへ向かった。

小さな円形になっているところがあり、みんなそこに手を通している。

セラも、そこに手を通した。少し経つと、機械の横にいた人から、紙が渡された。

セラの紙には、8番と書かれていた。

質問をしている間に、セラは、一番後ろになっていた。

他のみんなは、もう2つ目の機械を頭に付けている。

8番の機械は4つあった。

しかし、全て使われている。

機械の横の男は、今回は8番が大人気だなーなどと言っている。

そのまま少しの時がたった。

他の人は、装置に目まで覆われ、表情が分からない。

その顔が、いきなり歪んだ。

すると、他の装置からもいつせいに、うめき声が聞こえ始めた。

その途端に、装置がはずされた。

うめき声は、収まった。

しかし、子供たちはぐったりとしている。

これまで、一緒に遊び、学び、暮らしてきた仲間たちが。

「さあ、そのの僕、これをかぶってね」

装置の横にいた男が、その装置をかぶっていた少女を装置から振り落とし、言った。

## 2 - 5 明後日

セラは装置を頭にかぶった。

恐怖に震えながらも。

周りには、研究者たちが集まっている。

装置の横の男が、ボタンを押した。

セラの意識は次第に薄れていった。

次に気が付いたのは、ベッドの上だった。

「おめでとうございます、クレット博士」

ベッドのそばでは2人の男が話していた。

「博士の考えどおりですね。30人に一人は適合者が出ると。

このこは、27人目ですよ」

おそらく僕の事だろう、とセラは考えた。

「大陸初ですよ。フォースを人工的に作るなんて」

「ああ、ありがとう。」

ところで、今回の非適合者の様子はどうだ」

「その件ですが・・・調べさせたところ、残念ですが、前回と同じ

く……全滅です」

セラは勢いよく起き上がった。

「ラミはどうなったんですか！まさか……」

若い方の男が振り返った。

「目が覚めたかい？おめでとう、君は最初の適合者だ。

その子の事はよく分からないが、何の問題にもならない」

どうでもいい、みたいな口調が、セラには気に入らなかったが、今はシヨックの方が大きかった。

セラは物心がついてからはじめて泣いた。

涙が頬を伝って、落ちて、石の床に弾けた。

すると、年老いたほうの男がセラに向かって話し始めた。

視界がにじんで顔が良く見えない。

緑の髪と目をしている事だけは何とか分かった。

「すまない。ラミちゃんはもういない。

私のせいだ。

本当にすまなかったと思っている」

その言葉の意味はあまりにも重くセラにのしかかった。

「博士、どうせ記憶は消すんですから、頭を下げなくても」と、若い方の男が言ったが博士は続けた。

「きみには、来てもらはなくてはならない。立てるか？」

「すみません、大丈夫ですか」

淡々とした声がかげられた。

「っと、ごめんよ。」

少し考え事してた。

あと、そのパスポート期限切れだよ。

まあ、それは良いとして、君のこれまでの経緯を少し知りたいな」

少女は、静かに話し始めた。

「分かりました。」

私は、祖父を追って、東の森の村からこの町に来ました。

そこで、銃を向けてきた兵士二人を気絶させ、ここに運びました」

3つ目の文は、説明不足だと思うが、気にしない事にしよう。

「今日は、宿で砂糖水をのみ、町で砂糖を食べました」

かなり変だが、彼女が純粋な人間なら、の話である。

「突っ込んできた魔物を殺して、モンスターの群れを追いかけました」

前半かなり変だが、彼女が純粋な人間なら、の話である。

「そこで、あなたに会いました」

「丁寧（絶対に違うが）な説明ありがとう。でも、出来れば前の村であった事も、教えて欲しいな」

「分かりました」

もう、夕方だ。

部屋の中も冷え始めた。

少女は途中で淡々と話し始めた。

「私の祖父はフォースの研究者です。

私の祖父は私がまだ小さい頃その研究を成功させました。

それが、あなたです。

その後も祖父の研究は続きました。

祖父は色々な装置を作りました。

しかし、100%の人がフォースを手に入れることの出来る装置は作れませんでした。

祖父は、フォースの仕組みや、統計的資料を調べるだけでなく、伝説や神話、歴史についても調べました。

適合者と非適合者の違いも調べました。

ある日、彼はフォースについての研究をやめました。  
なぜかは分かりません。

ある日、この町から役人が来ました。

町長があなたの助けを必要としていると。

しかし、祖父は断り続けました。

町は、祖父が断るたびに嫌がらせをしてきました。

村に流れる川を塞ぎ止めたり、貿易を断ったりと。

そして、祖父が断るたびに、村の人からも嫌われました。

祖父は、最後には暴力で無理やり連れて行かれました。

残された私は祖父の装置の中の一つを使いました。

外見も変えることが出来るものでした。

それを使って、村から逃げ出しました。

私も村人から嫌われていたからです。

そして、この町に来ました。

これでよろしいですか」と、と。

彼女は話し終えた。

淡々とした口調で、主に一日の予定を伝える執事のように。

しかしそんな上品な感じは全くない。

「そうか、うん、分かった。

ありがとう、お嬢ちゃん。

色々と助かるよ。

明日、また来てね。

その間に、君の罪は正当防衛ってことにしとくから」

「分かりました」

「あと、お嬢ちゃん、おじいちゃん似だったんだね」

「そうだったのか」

「そうだったんじやの」

俺は、聞くべきだったか、聞かぬべきだったか、微妙な気持ちだ。

ソウの魔法は上手すぎて、しっかりと聞こえてしまう。

防衛隊ダイザナ支部の窓からは、オレンジ色の光が入ってきている。

「主人、もう行くかの」

そう言って、ソウは歩き始めた。

俺はそのうしろを歩いた。

「ソウ、俺、ウィーデーのおじいさんを助けようと思うんだけど  
だいいち、あんな話を聞いといて、そのまま次の町に行く訳にも行  
かない。」

「いいんじゃないかの、主人がしたいと言つのなら。  
なんせ、主人は我の主人じゃからの」

支部を、2人は出た。

「それにしても、主人はお人よしじゃのう」

「フツ、冗談言うな、お礼にお金がほしただけだ」

「ところで、いつ助けるのじゃ?」

「ん~~~~。あさって」

「根拠は?」

「ないけど、どうかしたか、ソウ」

「ま、そうじゃろつと思っておったわ」

「どつしたものが」

「どつしたものが」

「どうしたのか」

ダイザナの町人たちは、非常に困っていた。

彼らは、この町で革命を起こそうとしている集まりだ。

「まさか、あれだけかかって準備した魔物たちが一瞬でやられるとは」

「なぜ雷神がここにいたんだ」

ちなみに、雷神とは、セラの呼び名の一つである。

「分からん。しかし、それは今考える問題ではない。今話し合うべき事は、今後どうするかだ」

かれらは、一つのテントの中で話し合っている。

単なるテロ組織な訳だが、しっかりとした組織になっている。

まず、全メンバー200人弱を地域によって10個に分け、それぞれの代表が、こうして会議を開き、方針を考えている。しかし、

「もう、メンバーたちも不満だらけだ」

「町から逃げるしかない」

「なに、貴様、自分たちの町を捨てるというのか」

「静かにしろ、見つかったら全員首吊りだ」

「俺はもう降りる」

「お前、魔物を使うのはお前の意見だったろうが」

「失敗したから逃げるといふのか」

すでに、会議になっていない。

その場に低く重い声が響いた。

「静まれ〜〜〜!!!」

刹那、騒ぎが止まった。

「ボ、ボス」

「すみませんでした」

茶色い髭を伸ばした、彼らの指導者は続けた。

「分からないのか。もうやるしかないんだ。

武器の裏ルートはもう出来てるといふのに、ここに居るのはちんけな腰抜けばかりか！

突撃だ。

夕暮れ時に店じまいの騒動に乗じて突っ込む。

あさってだ！」

もうすっかり日は落ちている。

しかし宿の中の、彼の取った部屋だけ明るかった。

それは彼の手のひらから放たれている光だった。

「レイサ、特隊長からの指令として、伝えてくれ」

『ずいぶんいきなりね。分かったわ、どうぞ』

「ダイザナ支部の防衛隊の戦闘部隊、特殊部隊の屋内専門戦闘部隊の出撃の指令だ。」

ダイザナ町長の屋敷、隣接する研究所、ダイザナ役所を、占領せよ。目的は、町長の拘束、クレット氏の保護だ。

敵は最新の遠距離武器を使ってくる。

近い間合いで短期決戦で行け。

ダイザナ支部で屋敷と研究所、特殊部隊は役所を攻めろ。

攻撃開始は、あさつての夕暮れ時。

店じまいの騒がしさに乗じて始める。

以上だ」

『OK伝えとく。ずいぶん張り切ってるね』

「まあ、仕事だからね。」

それに、クレットさんを見つけて殴らなきゃいけないんだ」

『クレットさんって、フォースの研究の人だよな』

「うん、そうだよ。いろいろと思い出に残ってる人だけだね。」

そういえば、クレットさんのまごむすめちゃんにあったよ。」

とっても可愛かったよ。」

会いたい？会いたくない？」

『セラは女の子はみんな可愛いでしょ。』

でも、会いたいわね』

「やっぱり！じゃあ、今度会わせてあげるよ」

2 - 5 明後日(後書き)

明日、部活の試合なので更新無理です。

## 2 - 6 迷子

ダイザナの町は、今日も暑い。

俺は今日一日、町をうろろろする事を決め、今に至る。

ちなみにウィーデーは防衛隊の宿舎で泊まったらしい。

町の道には、自転車もどきが走っている。

人々は、3つの車輪と繋がるペダルをこいで進んでいる。

ウィーデーとは会っておらず、ケイスさんは町に入ったところで、どっかいつてしまった。

それゆえに俺が1人で歩いていると、横の露店から声がかかった。

「そのの、お兄ちゃんちょっと見ていかないかい」

声をかけてきたのは男だった。

バンダナをして、商品の並べられた絨毯まではいかないが、少し洒落た布の上にあぐらをかいている。

布の上には、バンダナや手袋、スカーフのような物や何に使うのか分からない三角形の布にひもが付いたものなど、変な装飾品が並べられていた。

全て、体を隠す物で、泥棒ぐらいしか使わないような物まである。

「これは何ですか」

そう言つて、三角形の布と紐とが合体した物を指差した。幽霊がひたいの辺りにつけてるあれだろうか。

すると、店の人は熱心に話し始めた。

「これは、ルーフと云つて、こつやつて口を隠すのさ」

そして、その布を口に当てた。

「秘密話をしゃべるとき、他の人に唇を読まれる心配がなくなるだろ」

俺はこんな物してたら逆に疑われるだろう、と的確かつ最適な判断で思ったが、30後半辺りであろうおっさんの茶色い目は、子供のように輝いている。

まあ、ルーフは要らないだろうが、その横のバンダナは使えそうだ。この世界では、黒い髪は珍しいらしく、なんか目線を感じるからだ。

「おっ！お兄ちゃんはこのバンダナのほうが要るようだね。」

確かに、君の髪は目立つから、隠れて何かするには大変だよな。

これは、最近入ったポラムの毛で出来たバンダナで………」

その後もおっさんはバンダナをべた褒めし、結局紺色のバンダナを買う事になった。

付け心地は、良かった。

その日、セラは朝から魔方陣を描いていた。

魔方陣は特殊な軟らかい石で描かれる模様で、魔法の補助や発動に使われる。

円、線、文字が防衛隊ダイザナ支部の床に描かれた。

セラはあまり魔方陣を描いた事がないので、時間がかかった。

セラは本を見ながら、黙々と這いつくばるようにして描いた。

町の人々が昼ごはんを食べている頃、セラは魔方陣を描き終えた。

円形の魔方陣の中心には翼を広げた鳥が描かれた。

「レイサ〜。セラだけど、魔方陣描き終わったから、ちゃんと描けるか、確認してもらって。シンボルは鳥だから」  
カネム

『分かったわ。ちょっと待ってて』

「うん、もうお腹すいたわ〜」

『あんだ、まだお昼食ってないの。仕事もほどほどにしときなさい』

『お』

「うん、でも誰にも見張られてないと、手を抜いちゃいそうぞ。あと、OKだったら転送してきていいよ」

それから、セラは昼飯へと、その部屋を離れた。

俺は今、笑顔で砂漠の町を歩いている。俺はあの後、髪が完全に隠れるバンダナを付けたまま、ショッピングを楽しんだ。

問題は、ヴァンパイア騒動で手に入れたお金が、もう半分ほどになっっている事くらいだ。

まあ、かなりの大問題なんだが。

それにしても、今日の昼ごはんは最高だった。

ジヨラパイフェルとかいったが、前の世界で食べた物全て合わせても届かないぐらい美味かった。

まあ、前の世界で金持ちだった訳じゃないが。

そんな幸せな俺の目の前に、不幸せそうな少女がいた。

「うえええええん。うえええええん」

道の真ん中で、大声で泣いている。

なんてひどい町なんだ、ここは。

困っている人を無視するなんて。

「大丈夫？どうしたの」

「ヒグツ、ヒグツ、お母さんが、お母さんがいなくなっちゃったの」

まあ、予想どおりだ。

外で、雰囲気5歳以下の子が泣いていたら、大抵これだろう。

そうか、お兄ちゃん忙しいから、もう行くよ。

なんて、言えないよな。

「名前は何？」

「ティー」

「分かった。一緒に探そう」

はあー。仕方ないな。

『主人もお人よしじゃのう』

ソウ、か、そんな事はない。  
でも、ほっとけないだろ。

『そついつのをお人よしと言っんじゃないのか』

何だここは。

暗くて、怪しくて、変な臭いはするし、道幅は狭い。

「この辺歩いた」

ティーちゃんはいつの間にか泣き止んで、笑いながら俺を見上げている。

「で、この後あっちに行ったの」

俺の気持ちと正反対の明るい笑顔で指差した方は、さらに暗い。

ここは、町の中央辺りにある、町一番高い建物の影になる場所で、昼過ぎなのに暗いのだ。

その建物の周りにも、大きな建物がいくつか並んでいる。

しっかりとした赤い屋根の立派な建物と窓の少ない真っ白でシンプ

ルな建物が1つ。

今、俺たちの居るところに影を作っているのは、ど派手で優雅な造りの建物だ。

俺の家が100個は入るだろう。

ティーちゃんに手を引かれて、暗い道を進んだ。

しっかりとした建物の横は、俺が取調べを受けた防衛隊の建物だ。

そういえば、この辺りは防衛隊の兵士が多い。さつきすれ違ったところだ。

先に進むほど、辺りは不気味になっていった。

俺とティーちゃんが二人で歩いてても窮屈な道に、左右にはなにやら怪しい店が並んでいる。

「ここのお店に入ったの」

ティーちゃん・・・嬉しそうに言ってるけど中、真っ暗だよ。

店の看板には、文字と葉の絵が書かれている。もちろん俺はこの世界の文字は読めない。

「で・・・あっちに行った」

ティーちゃんが指差した方へとまた向かう。

さつきからこれの繰り返しだが、ほんとに覚えているんだろうか。

かなり不安だが、こうするしか思いつかなかったので仕方ない。

「ティーちゃんのお母さんは、どんな仕事をしてるの？」

「お母さんはね、凄いなだよ。お医者さんやってるの。」

怪我とか病気を何でも直しちゃうんだよ」

ティーちゃんは、笑顔でそう言った。

俺たちの進む道には、小さな曲がり角があった。

その曲がり角を通り過ぎるとき、小さな話し声が聞こえた。

「・・・なんで、俺たち防衛隊が逆に役所や、町長の家を襲わなきゃいけないんだよ」

「それに、研究所もだろ。最近、クレットってやつが連れてこられたらしいけど」

「クレット」という言葉に、俺は立ち止まった。

「ああ、知ってる。街灯とか、自転車とか、銃を作ったらしいな」

「うん、そんなやつを捕まえてどうするのか。」

防衛隊の上のほうは良く分からないな」

「そいつに、武器でも作らせるつもりじゃないか」

「天才も大変だな」

その時、前のほうから高い声が聞こえた。

「おに〜ちゃん〜ん！何やってるの〜！」

その言葉が合図だったように、現実に戻ってきたような感覚に襲われた。

俺は、ティーちゃんのところへ逃げるように走った。

俺たちは、陰から出た。

太陽の日差しは思っていたよりも暑く、すぐにまた影があるのが嬉しかった。

次の影は、真っ白な建物の影だった。

その影に入っすぐ、奥から声が聞こえた。

「ティー！」

その声の主は、一人の女性だった。

ティーちゃんは、その女性に抱きついた。

「ティーごめんね。母さん話に夢中になって」

その時、後ろからさらにもう一人、少し太った男が出てきた。

「あら、ジョーカーさんじゃないですか！」

「ケイスさん?!」

その人はケイスさんだった。

窮屈そうに、こっちへと歩いてきた。

「えっ、あなた師匠とお知り合いなんですか」

そういつて、驚くティー母。

つて、ケイスさんに弟子がいたなんて。

「お兄ちゃん、ケイスおじさんの事知ってるの」

つと驚くティーちゃん。

驚いた顔が似ている。

「あの、ケイスさん、少し説明を」

俺は、今一番状況が分かっているようなケイスさんを見た。

「ありゃ?何でジョーカーさんがティーちゃんと一緒に?」

つてケイスさんまでもか・・・

その後、俺たちは、ティーちゃんの家へ行く事になった。

## 2・7 適当なパレード

俺は今、ティーちゃんの家にお邪魔している。

ティー母や、弟子、師匠うんぬんかんぬんの話は解決して、話題はこの変な町の事に移った。

「では、この町は新しい町長の悪政に困らされているんですね」

「はい、税金がいきなり上がって、生活が大変です」

「私もその話は聞きました」

会議に参加しているのは俺、ケイスさん、ティー母の三人だ。ティーちゃんはもう寝てしまった。

「でも、私たちにはどうする事も出来ないんです。逆らえば処刑されますし、あっちには防衛隊も付いているんです。集団で対抗しようとしている集団もあるんですが、作戦もことごとく失敗していて」

おそらく、モンスターたちの行進のことだろう。

「防衛隊ですか・・・」

前の町ではヒーロー扱いだったのに、場所によって人気もあつたりなかったりするようだ。

「はい、防衛隊は国で管理されていますから、国には逆らえないん

です。防衛隊は人々の平和を守る存在だったはずなのに」

「大変ですね」

特にこの町に関係がある訳でもない俺にそんな事を言われても困る。もうかなり遅い時間だったので、俺はティーちゃんの家泊めてもらう事になった。

次の日、俺は外から聞こえる騒がしい音で目を覚ました。

ちなみに俺はまだこの世界の時間に慣れていない。

仕方なく起き上がって窓から外を見ると、馬車やら人やらが大勢道を歩いていた。

足が6本ある馬もいた。

そういえば、今日は神誕祭というお祭りがあるそう。年に一回しかないそうなので、出来れば行っておきたい。

そんな事を思いながら、俺は部屋を出た。

正午ごろ、広場でショーがあった。

この前モンスターが灰になってしまった広場だ。

なにやら魔法使いな服装の男が出てきた。

「みなさん、今日はお越しいただいてありがとうございます。  
ホルライアによります、ステリウス教、魔法パレードです」

つと、魔法で拡声された声が響いた。

広場の真ん中に作られたステージで始まるそうだが、ステージの周りは人だらけで見れそうにない。

あきらめて、屋台めぐりを再開しようとしたとき、首を冷たい風がなでた。

振り向くと、そこには大きな氷の結晶が現れていた。

氷の結晶は女性の形をしている。

俺は、ソウに呼びかけた。

ソウ何だあれ。

『あれは女神サナイじゃと思うが、なんか似ておらん。第一、サナイは炎の女神で、魔王に対抗する……』

ソウ、詳しく教えてくれるのは良いんだが、俺が聞きたいのはあの女神の話じゃなくて、どうやってあんなモン作ってるのか、ってことなだけど。

『……そうか、あれは氷系統の魔法じゃな。で、おそらく魔力はあいつの物じゃない』

それってどういうことだ。

『他人の魔力を使ってるってことじゃ。

たとえると、あいつは蛇口で、タンクの役割がある、という事じゃ。タンクには、大勢人を使っておるのじゃろつ。

主人の魔力だったら1人で足りるじゃろつがな』

そうか、と思っても目の前の氷はやっぱり凄いと思う。

しかし、俺なら一人で足りるって……

ほんとは何人いるんだか……

『30人はいるのう。ちなみに主人は100人分は』

って、お前に聞いてない、俺の嘆きに参加するな。

しかも30人でこんな造ってんのに、俺ってまさかこれ以上の物を作れたりするんじゃないか。

『主人魔力はあっても、魔法習ってないからのう。10年ほど修行すればあれぐらい出来るんじゃないかの』

ステージの上では人形劇ならぬ氷像劇が繰り広げられていた。

女性の像が男の像を押し倒した。

文字どおり押し倒したのだ、適当この上ない。

そんな劇に、広場は拍手喝采となった。

「町のは楽しそうだな、防衛隊隊長？」

目の前の新町長はそう言った。

新町長は、いつもタバコを吸っている。

それは、この世界では恐ろしい事だ。

なにせタバコ一本買っただけで、普通の生活が1週間はゆつに送れる。そのタバコを1日数十本（十数本ではなく）すうのだ。

しかも、その財源は町人からの、必要以上の税だからなお性質が悪い。

「あんなに楽しんでるんだから、税を増やさなきゃならんな」

町長はタバコを足元に捨てて、ニタツと笑った。

「もう戻っていいぞ、防衛隊ダイザナ支部長」

町長はそついい残して次のタバコを取りに行った。

防衛隊支部に戻るときに町長のわがままに連れてこられた研究者とすれ違った。

天才も大変だな、と防衛隊長は思った。

劇を見た後、俺は広場を囲むように並んでいる屋台を回った。

しかし、文字が読めない事にはどうも困る。

値段すら分からない。

それを考えるとあの蒼いタヌキのコンニャクは恐ろしく便利だ。

文字が読めない事に、金が減る一方だという事実がのしかかり結局何も買わぬまま、夕方になった。

早い事、財源を確保しなくてはならない。

なにか、字が読めなくても出来る仕事を。

そういえば、字を書くことも出来ない、といまさら気づく俺のような者をおそらくバカと呼ぶのであろう。

そういえば何かを忘れていたような気がする。

こういうときは決まって弁当を忘れていて、友達にめぐんでもらっていたのがもう大昔のようだ。

少しさびしい。

こういうときは、何か甘い物を食べるのが一番だ。

・・・ん、甘い物。

たとえば、今日はウィーデーに会っていない。

2日前にあったのが最後だ。

まだお別れを言っていないけど、また会えるのかどうかは分からない。

おじいさんを助けるとか考えてて・・・

「あつ。忘れてた」

その少女は二日前からあっていない少年に噂されていたが、くしゃみは起こらなかった。

そもそもこの少女にはくしゃみをするという機能がない。

この少女は、自分の体をいじる機械だろうと思ひ、機械の体に意思を埋め込んでしまった機械だからである。

体に機械を、から、機械に体を。

最悪な発想の転換だ。

それは、不適合者は現れないが、機械に体を埋め込む物である。

言い方を変えれば、人間を材料に、ロボットを作るような物だ。

機械を材料に人間を強化する物とは話が違う。

今そのロボットは一応残った意思により脱獄を企てている最中だ。

フーモアガツシャーと祖父が名づけたスプーンで石の壁を砕いている。

やはりロボットなだけあって、力は人間よりも強い。

持久力も二日前、糖分をあれだけ取ったので当分は切れなだろう。

二日前の糖分はまだ、3等分した内の1つ分も使っていない。

彼女自身も、当分は糖分は切れなだろうと、目の前の石を2等分しながら思った。

思ったというより、体の状態を確かめたに近い。

彼女は、自分自身の状態が数字でわかるからだ。

彼女のいる牢獄には石と鉄がぶつかる規則正しい音が続く。

しかし、その音がふいに途切れた。

彼女の体に明るい太陽の光が当たった。

彼女は脱獄に成功した。

## 2 - 8 キツネ男再び、その1

「ここか」

研究所とやらに俺は着いたわけだが、どうするか悩む。

このまま真正面から入るのもどうかと思うし、とてつもなくシンプルなこの建物にはこっそり入れるようなところもない。

結構悩んでいるのだが、周りに人が通勤ラッシュ並みにいるので怪しむ人はいないようだ。

どうやらこの世界のお祭りは昼がメインのようで、もう日も暮れようかとしている今は、家に帰る人や宿を探す観光客。

屋台を出していた商業人の店じまいなどで大変混雑している。

たぶん昨日ティーちゃんと歩いた道からの方が、入りやすいだろうと思ひ、歩き始めたそのとき町の中央の一番大きな建物の一角が爆発した。

さらにその音に合わせて研究所にも爆発が起こる。

一瞬静まり返った道で研究所から離れようとする人々が走り始める。

俺は爆発の起こった方に廻った。

俺がそこに駆けつけると、研究所の壁がそこだけなくなっていた。

その空間に次々と入っていく防衛隊が見える。

そのとき昨日聞いた会話が頭をよぎった。

武器でも作らせるんじゃないか。天才も大変だよな

俺は無意識に走り始めていた。

そんな事をさせてはいけない。

もう、タレットさんを助けようとしている人はいない。

みんな天才の頭脳を自分の物にしたいだけなんだ。

俺は研究所の中に走っていった。

「よし、突撃班は突っ込め。

爆破班は戻って武器の搬送をしろ」

防衛隊長は微笑んでいる。

(とつとつあの町長をこらしめれる)

防衛隊長は喜びながら、指示どおりに指令をする。

「最上階を目指せ。町長以外は殺すな」

隊長は裏道に転がっている木箱に腰を下ろした。

屋敷の守りはほぼ防衛隊に任せられている。

その防衛隊が押し入っているんだ。

もう占領は目の前に見えている。

彼の元にこの指令が入ったのは昨日だ。

防衛隊の中隊長以上の物に持たされている魔力通信機から入った。

かなり急な指令だったので驚いたが、今日は神誕祭なのでこのような奇襲にはびつたりだろう。

しかし、余裕は油断も呼ぶ。

( 敵の武器には気をつけろと言われた気がするが、問題ないだろう )

その油断は時に失敗も呼ぶ。

この隊長は、油断大敵、ということわざを覚えるべきだろうが、この世界にはそんな言葉はない。

「止まれ！」

目の前には、武装した人々が狭い廊下にウジャウジャいるが、俺の登場に驚きオロオロしている。

「焼かれなくては、すぐに戻れ！」

多分、民間人な俺は命令した。

すると一人の兵士が出てきた。

「民間人は建物から逃げてください。  
歯向かうのなら、拘束します」

俺は一步、前に進んだ。

「歯向かいま

」

「拘束しろー！」

いや、いや、早いだろ。

「歯向かいません」もあるだろ。

まあ、逃げるつもりはなかったけど。

兵士のかたまりの中から3人が出てきた。

どいつも剣をさしているが使う様子はない。

「ソラフ！」

俺は自己加速を使い、一人の剣を抜き取った。

ははははは、お前たちの速さで拘束など出来る物か！

と心で叫びながら右手の人差し指にイメージをぶつける。

右人差し指を炎が被い、次いで手、そして腕、そして肩。

(・・・あれ、こんなに広がったっけ、範囲)

右手につかんでいた剣は燃え、柄の部分が焼け落ちて俺の手から落ちた。

その光景を見た兵士たちは驚きのあまり口を開けて固まってしまっ

(俺と同じく)

何でこんなに燃えてるんだ？

俺は火傷していないのか？

そもそも俺はライターと合体して・・・

でも人間だよな。

まさか俺は炎の神として呼ばれたんじゃ？

『炎の神は女神サナイだけじゃ。主人、現実に戻って来い』

「・・・ようぶ？」

そういえば話しかけられてるような。

前を見ると目の前にキツネ男がいた。

「返事がないただの屍のようだ」

「君、大丈夫か。」

今、目を覚ましてあげるね」

こいつ、俺の死んだふりが効かないだと。

『直立不動の死体なんかどこの世界にあるのじゃ』

はっ、そうか、倒ればいいのか。

「セラスペシャル1」

何か聞こえた気がするが、とりあえず倒れよう。

痛っ。

あ~~~~~後頭部が~~~~。

そんな俺にキツネ男はさらに話しかけてきた。

倒れて死んでいる俺に、しゃがみこんで話してくるなんて、どこのバカだ。

『バカは主人じゃろ』

「・・・もしろいね」

「は、なんて？」

ソウ、お前の声、周りの音が聞こえない。

「面白いって言ったんだよ。あれだけのフォーエスを持っていて、旅人で、僕の技を後ろに倒れてかわすなんて・・・あと研究所に今いるってことは、今日の作戦知ってたの？」

キツネ男の目はやはり細く、表情が読めない。

「それはいいけど、タレットさんを捕まえてどうするんだ、セラ、だったか？」

俺は頭を押さえながら聞いた。

「本当は言わないほうがいいんだけど。タレットさんには用はないよ、防衛隊としては。今回は不正徴税してる町長が目的」

そのとき銃声が響いた。

パンっという音が3つ後ろから。

とっさに振り向き右腕で顔を覆った。

横ではセラが電気で渦を作っていた。

その中に銃弾が入った（自己加速がまだ残っていたから見えた）

「あぶなっ」

右手を伸ばし、飛びかかるが間に合わない。

だがあきらめかけた俺が見たものはキツネ男が撃たれるところではなかった。

電気の渦から逆向きに銃弾が発射された。

「フレミング、の、法則？」

俺の目の前は徐々に暗くなり・・・

・・・顔面を床にぶつけた、石の。

そこから最上階まではすぐに着いた。

セラの電気で一人残らず気絶させていったからだ。

しかし、そこにタレットさんはいなかった。

「おい、どうなってんだ、こら。焼くぞ、じりじり焼くぞ。長時間にわたって殺さずにじりじり焼くぞ」

俺は右腕に炎を纏った。

(ここに来る間にソウに聞いた話だが、俺の炎が巨大化しているのは、魔力が体になじんで来ているからじゃろう、ということらしい。そういえば、ヴァンパイアの時も鉄を溶かす速さが上がったりしてたような)

目の前の研究者A(俺、命名)の顔はあまりの恐怖に引きつるを超えて笑っている。

「た、たたたたあ、たた、お助け〜！」

よし、こいつはだめだ。

俺は横の研究者B(俺、命名)に近寄り、

「おい、どうなってんだ、おら！焼くぞ、煮るぞ、揚げるぞ、炒めるぞ、ジャガイモの芽のようにメン玉くりぬくぞー！」

「やめ、煮るのはやめて下さい」

・・・いや、そういう問題ではないのでは・・・

「タレットさんはどうした？」

「いや、炒めるのも嫌」

少しやりすぎたかな？

「タレットって言う人知らない？」

「やっぱり全部・・へ、あ、はい。役所に連れて行かれました」

切り替えが早い。

「セラ、役所に行ったらしいぞ」

共に聞き込みをしていたセラに声をかけた。

セラの後ろには、白目プラス口から泡プラス痙攣、な研究者C（俺、同情しながら命名）が居るがスルーしておこう。

「あゝ。分かったよ、じゃあ僕は行くよ、もうカンサ君が捕まえてるかも知れないけど」

そう言ってセラは近くの窓から飛び降りた。

おそらくセラスペシャル2（フレミングな電気なコイルな反則技）で着地するんだろう。

対して、（自称）一般人な俺はまじめに階段を降りるのであった。

2・8 キツネ男再び、その1（後書き）

遅くなつてすみません。

塾の夏期講習とやらは結構ハードだったもんで。  
部活引退したら、しっかりがんばります。

2 - 9 砂漠の町の博士救出、その1

コツコツと研究所の廊下に足音が響く。

研究所の廊下には体が軽く焦げて気絶しているが、目的以外のものに彼女は興味がない。(正確には目的もただ目的なだけで、興味はない)

彼女は半分開いた扉を通った。

そこにも彼女の目的はなかった。

あったのは気絶した研究者たち。(一部泡を吐いている)

そのとき後ろから足音がした。

「この前はよくもやってくれたな！」

そこに居たのは、頬を赤くした防衛隊だった。

いつか裏拳を当てた覚えがある。

彼の持つ銃をみて、とっさにフーモアガッシャーを巨大化する。

10センチ程度のスプーンはすぐに1メートル程度の武器へと変わった。

柄の部分は剣、すくう部分は膨らんでいる方は棍棒、

防衛隊は銃を撃った。

そして、凹んでいる方は盾、

弾はスプーンに当たった瞬間消えてなくなった。

消滅のフォースが埋め込まれている盾だ。

（そもそもフォーマガツシャーは盾として作られたものである。

この形は彼女の祖父が彼女が持ち運びやすいようにと改良した試作品。

結局、人間のあいだは使わなかった。）

防衛隊は驚いている間に銃を手からはじかれ、わざわざ赤くなった方の頬をスプーンの平で殴られた。

彼は横向きに吹っ飛び頭をぶつけて気絶した。

ウィーデーは彼を全く気にせず、窓から隣の（隣といっても庭を一つ越え）建物の屋上に着地した。

研究所の5階から6階建ての町役所の屋上へのジャンプは誰にも見られていなかった。

それは人々が皆、家の中で（この世界にはまだ出回っていない）鍵をかけて閉じこもっていたからだ。

こちら役所！ただいま銃弾がそこら中を舞っています。

危険なので、外出の際は十分に注意してください！

さらに、電気の渦が大量に発生しています。

この電気の台風は磁場を生み出しながら、白髪のキツネ男を中心に、上の階に進行中です！

外出の際は、鉄筋コンクリートの橋をデデデな大王なハンマーで叩くぐらい注意してください！

えっ？俺？

俺は今、セラの後ろの方から物陰に隠れながら中継しています。

出来れば助けていただければ幸いです！

お願いします！

ウワツツ！ちよっ！電気が流れている銃弾が俺の首をかすめたんですけど！

熱かったんですけど！

自己加速使ったところで銃には敵わないんですけど！

セラは磁場やら何やらで弾に当たらない空間創って、どんどん進ん

でいく。

飛んで行った弾は左右にそれ、俺の方に飛んでくる事もしばしば。

電気纏って輝いてる事もしばしば。

俺は一応ウィーディーの爺さん助けろって言って、来たんだけど、意味あんのか？

逃げた方がよかったり、しちゃったり、するかもしれない。

まあ、5階まで着いてきて帰るのもどうか。

あつ、階段だ。

俺が冷や汗で脱水症状に陥るぐらいに危険な経験をした頃、目の前に他よりも大きめの扉が現れた。

「ん、鍵だ。まあフツ飛ばせばいいか」

セラの手が光りだす。

「ちょっと待て、俺なら開けられるから安全だ」

よし、久々に活躍のチャンス。

「でもこれ耐熱鋼だけど、分かってる？分かってない？」

「そんなの関係ない」

おい！俺の口！なに見栄はってんだ。

「やっぱり！じゃあ頼むよ」

徐々に分かってきたけど、こいつの2択質問、どっちで答えても「やっぱり」なんだな。

まあ、やってみるか。

俺は扉の正面に立った。

よし！

俺は鍵らしき部分に人差し指を当てた。

だいぶハイテクなかぎだ。

俺のアパート針金2本で開いたが、この鍵は俺のテクを持ってでも針金8本は要るな。

そして、俺は人差し指に意識を集中した。

鍵はすぐに炎で溶け始めた。

しかし、安心したとき、いきなり爆発した。

「ぐっ！」

俺は後ろに吹っ飛んだ。

ちょうどセラの足元だ。

「安全・・・だったの？」

「た・・・ぶ・・・ん」

俺の体は炎には強いらしくたいした事にはならなかった。

普通の人なら、即死だろう。

この建物は石で出来てるから良かったが、木造ならすぐに燃え上がって、中の人は・・・ストップ！思考スト~~~~ストップ！

「一応、ありがとね」

こいつ、むかつく。

俺も立ち上がった。

ええーと、俺の体は、ん？なんともない。

『主人の服は私の魔法で守ったぞ』

ああ、ありがと。って、服だけってどうさ？

『いや〜。主人の方はちょっと間に合わなかったりしちゃったり』  
絶対わざとだ。

『いやいやいやいや、そんな事はないぞ、うん。ない。はず』

お前、意外と分かりやすいな。

俺が起き上がって見えたものは、扉の奥でウィーディーとセラが向き合ってる光景だった。

「お嬢ちゃん。ここに居るってことは脱獄？違っ？」

「私にあのような男たちの言いなりになる義務はありません」

「いや、パスポートなしでこの国に居る時点でアウトだよ」

「そんな事は関係ありません」

「いや、色々あるはず」

「私は祖父を助けるために来たのです。」

邪魔をするなら、攻撃します」

部屋の隅に居る老人が顔を上げた。

「あれ、僕の話は？それになぜに攻撃？」

「退く気がないようですね」

「だから僕の話を。．．．いや脱獄はれっきとした犯罪だからね」

そう言っただけでセラは電気を発生させた。

そのまま右手を前に出し手のひらから電気をはなった。

その電気をウィーデーはスプーンでかき消す。

そしてスプーンを半回転させ、セラに向かって柄の部分で切りつけた。

その一撃を電気の渦で巻き、磁力で逸らす。

そこに出来たすきにセラは人差し指を突き出して首に当てようとした。

人差し指はもはやスタンガンの威力をはるかに超えている。（彼はセラスペシャルと呼んでいる）

しかしウィーデーは体をひねり、セラの片足を内側から足で狩り、体制を崩させた。

その衝撃で電気の渦が取れ、フーモアガッシャーが自由に動くようになる。

ひねった反動を最大限に利用し、フーモアガッシャーの平がセラの腹を狙った。

それをセラは素手でつかんだ。（実際はフレミングの法則を使い、速度を落としてからつかんだ）

そして後ろにと投げた。

しかし、ウィーデーはそれを放さず、逆に自分からも飛んで、セラの後ろに着地した。

すぐそこまで来ていたセラの雷球はフーモアガッシャーで打ち消す。

「やるね」

セラが口を開いた。

「凡人なら、もう10回は殺せてるな」

セラは微笑んでいる。（常に目は細く分りにくい、えくぼが出る）

「相手の考えを予想し、それを外させる。

一撃の威力は高く隙も少ない。

それと、その武器。

とっても面白いね」

「時間稼ぎですか。電気を溜めるための」

「ふふ、よく分かったね！」

その言葉と同時にセラを囲むように手のひらサイズの雷球が大量に出現した。

全てが規則的にセラの周りを回っている。

「この技は久しぶりなんだけど。雷球の機関銃<sup>セラスペシャル5</sup>」

セラの周りの雷球がウィーディーに向かって飛んでいった。

無数の雷球が全て打ち込まれた時、煙の中に彼女はいなかった。

「ん？死体は残るはず」

つと言ったものの実際に人（????）に向かってやった事はなかった。たので分からない。

そのとき彼の髪が風で揺れる。

（風なんて吹いていなかった）

そう思い振り返ると壁が一部破壊され、クレット博士が消えていた。

「クソッ。クレットごと逃げられた」

彼はすぐにその穴から飛び出した。

すぐ目の前は町長の屋敷だった。



2 - 終 宮殿攻略(前書き)

遅くなりました。すみません

## 2 - 終 宮殿攻略

宮殿は中央に大きな建物、左右に細長い塔がくっ付いたでっかい建物だった。

「うーん。タレットさんさえいなければ、屋敷に雷落としても良かったんだけどなあ」

なんか、横ではおぞましい事考えてる人居るし。

「真ん中から行くか」

そう言っつて横の人は屋敷に向かった。

屋敷の中は予想以上に大変な事になっていた。

防衛隊が射殺されまくっているというこの地獄絵図。

その中で動く人影を見つけた。

「おゝい。だいじょうぶ？」

「あ、あなたは？」

「ぼくは防衛隊特隊長やってるセラだけど」

「あ、あなたが、顔を見せず、あらゆる依頼をこなして回っている・・・」

（そんな事してるっけな）

「そんな事はいいんだけど、どうしてこんな事に？」

「敵は銃を使っていました。あの銃です。最近出回り始めているあの・・・」

この防衛隊は足を撃たれているわりに良くしゃべる。

「そんな事はいいんだけど。情報入ってなかったの？」

「え、この私兵が銃を持っている事ですか。」

いえ、全く聞いていません」

（レイサが間違えるはずはない。と、すればこの隊長さんかねえ）

「わかった。ところで金髪の女の子、見た？見てない？」

防衛隊員は首を横に振った。

「やっぱり。じゃあぼくは行くから」

そう言い残してセラは上を目指した。

「……あ、助けられないんですか？」

塔には螺旋階段が通っていた。

これ登るのかよ。

『主人、早く行かんか』

お前は何もしないだろ。

『手伝ってやってもいいが、面倒じゃからの。我は退屈なのと面倒なのが嫌いなんじゃ』

ただのわがまま猫じゃないか。

『はいはい、くちごたえ、反抗、デモ、ストライキなどはせずにとことと登れ』

お前、最近俺に対しての態度が悪いんじゃないか。

『気のせいじゃな』

よし、こいつと会話しない。

塔は外から見た感じ5、6階建てだ。

そこまで大変でもないが、多少きつい。

俺の家がアパートの1階で良かった。

そうじゃなきゃ、毎日階段を登って下って。

・・・みんな元気でやってるかな。

・・・俺の事、心配してくれてるのかな。

あれ、涙腺から液体が。

前が良く見えないよ。

視界がぼやけて、うっ

ガン！

あ”ゝ――。――。

あ――――。

あゝ、> ; . . . @ 「 ¥ 。

足が引つかかって、頭を階段（石）の角で――。

視界が . . . 赤く . . . 。

セラは屋敷の中をあれこれ搜索しながら歩いていた。

町長をとっ捕まえたあと、証拠が要るからだ。

そして、ぶらぶらしながら入った部屋には、興味深い物が置いてあった。

「これは、タバコの吸殻？」

セラはそう言って微笑んだ。

（まさか、やつらの仕業だったとは）

この世界のタバコはかなり依存性が高い。

バーマと呼ばれる美しい植物から作られるが、危険極まりない。

一回吸ったら最後、それがなければひどい目まい、頭痛、吐き気、動悸、息切れ、etcだ。

そして、それを使い、今暴利を得ている盗賊集団があった。

「ピオッチャ飛鳥のやつらか」

次に目を開けたとき、目の前には一人のおっさんが立っていた。

なかなかピントが合わない。

ちょっとした間たって、やっと見えるようになった。

目まいと頭痛がひどい。

「ケイスさん？なんでこんなところに？」

「それは、あとで。まずは怪我の治療を」

そういつてケイスさんは手を俺の頭に当てた。

「フスマ！」

その手は呪文に合わせて光り始めた。

なんだか気持ちいい。

39度の風呂に浸かっている心地よさだ。

だが、非常に残念な事に、その気持ちよさはすぐに終わった。

「はい、これでだいじょうぶですよ」

頭を触ると痛みは引いていた。

ん？俺どうして頭が痛かったんだ？

んん？思い出せない。

まあいいか。

「バンダナしてて良かったですね。

それがなければ、血の海ですよ」

んんん？俺相当やばかったのか？

でも、ケイスさんは一瞬で治してくれて・・・

「ありがとうございます」

「いやいや、それより君は上に向かっているんじゃないのかい？」

ええっと。

記憶がないな。

ここ1、2時間。

でも、まあ、そうなんだろう。

「どうしますか、町長。」

今はどうにかなっています。増援を呼ばれては、それに、弾薬や食料も蓄えなんてありません」

「と、言う事は、どういふことなんだ」

町長はぶっきら棒に言った。

「逃げるのがよろしいのではないでしょうが」

「それも面倒だ。俺はこいつの力を試したい」

「しかし。危険です」

「いいんだ。俺が良いと言ったらいいんだ」

今日の町長は珍しくタバコをくわえていない。

それが、イラついてる理由でもあった。

「歯向かうのなら撃ってやる」

「ちょ、町長」

町長の腕には1mはあるつかという銃が握られていた。

目の前の祖父はぐったりとしている。

「ウィーディー、ごめんよ、ごめんよ」

ウィーディーの頭では、次にする事は決まっている。

戦う。

さすがに、足に歩けないよう魔方陣を描かれた祖父を連れて逃げ延びるのは難しいと考えたからだ。

ウィーディーは祖父を置いたまま屋上を去った。

タバコの吸殻をポケットに入れ少しづらぶらしていると大きな扉の前に来た。

中から銃声と断末魔が聞こえた気がする。

セラはいたって礼儀正しくドアを開けようとした。

しかし開かなかった。

「またかぎか」

セラは一步下がって電気を溜めた。

「セラスペシャル3縮小版！」

そう言って雷球を投げた。

「ここが一番上か」

螺旋階段は終わり、目の前に1つの扉が現れた。

まあ、入るか。

そう言ってドアを開けようとするが、開かない。

やはり鍵がかかっている。

炎で溶かそうかと思ったが、さっきみたいな爆発は嫌だ。

色々迷った末・・・

ソウ、火の玉頼む。

その部屋に3つの騒音が走った。

上からと壁から、扉から。

その中から3つの人影が現れる。

いかれ町長と、その部下2人はとっさに銃を構えた。

しかし、部下の構えた銃は、片方はスプーンではじかれ、もう一人は感電して気絶した。

「そこのおじさん。きみ、税金の不正徴収で拘束するよ、いい？だめ？」

とっさの事にあわてた町長も気をとりなおして、

「ふふ、そんな事ができるのか？」

「無理だったら、最悪殺すから、問題ないよ。」

あと、この屋敷の、君のこの兵士、全員気絶、もしくは死んでるから」

町長の顔に焦りが出始める。

「そんなの知るかー!!」

町長は銃を構えた。

しかし、その銃に触れる手が一本。

「あ、ごめんなさい。」

ついすっかり触ってしまつて

うっかりな割にその手の炎は銃を溶かしている。

「ほんとごめんなさい」

そういつて、バンダナの少年は町長を蹴った。

銃はぐちゃぐちゃに変形して本当に銃だったのか不安なぐらいだ。

そして、立っている三人は、お互いを見た。

「あ、キツネ男」

「お嬢ちゃん？」

「.....」

「それになんでウィーディーが居るんだ？もうとっくに逃げたかと」

「祖父が足止めの魔方陣にかかっているので、逃走は困難だと思い、闘争すること」

のんきに話している三人を、天井にウィーディーが空けた穴から見ているクレットに気づいたのは、町長だけだった。

町長は密かに、気絶させられた仲間の銃へと手を伸ばす。

そしてつかんだそれをクレットに向けた。

ダン！という音に続いてドスっという、落下音。

町長の心臓は、その瞬間電気ショックで止まった。いや、止められた。

ウィーデーが駆け寄った。

「・・・逃げる。ウィーデー。・・・わしは作った機会に細工をした。

わしが死んだら爆発するようになっている」

ウィーデーとクレット以外の全員が驚いた。

驚きのあまり、声を出すのも忘れていた。

「この町も、まだ木造の建物がたくさんある。

しかし、鍵は俺の作ったものがほとんどだ。

それが爆発したら大変な事になる。

早く逃げる」

「なぜそんな事を？」

セラが聞いた

「簡単さ。こうすれば、わしと町が同じ位になる。そうすれば、わしは帰れるようになるかも知れないとおもおてな。でも、仕掛けが

早く発動してしまつたわい」

「そんな事はさせません」

そう言ったのは、珍しく真剣な表情をしたケイスさんだつた。

「じゃあ、俺は王国に行くから」

なんだかんだあれから三日。

ケイスさんの術はとても上手く、タレットさんの肩を貫通した怪我はもう直りかけていた。

「僕も、特隊長の仕事を続けなきゃいけないから、またどこか出会えたらいいね」

あれからことは順調に進み、謝礼金を防衛隊から巻き上げ、2日で取り調べも済みました。

「じゃあな」

「バイバイ」

問題があるとすれば、彼女だろう。

「セラさん、さようなら」

「ほんとについてくるのか、ウィーディー？」

「まだ、一晩泊めてもらった借りが返せてないから」

「こうして、俺たちの王国へのたびが始まった。」

## 2 - 終 宮殿攻略（後書き）

一応入りきった。

ふう〜。

あと、部活引退しました。

これからはがんばります。

これから重要です（予定）

今までのはいわば序章です。（？）

あと、5章で終わるつもりです。（意外にマジ）

2ーおまけ あ、書き忘れてた。

「大丈夫ですか、クレットさん？」

「ええ、もうすっかり良くなりました」

クレットさんは、その後ティーちゃんの家を潜めた。

ティーちゃんの母が、ケイスさんの弟子だったことと、居場所がバレたらまた連れて行かれるんじゃないかとケイスさんとセラが考えたからだ。

「ほんとに良かったんですか？ウィーデーちゃんのこと」

「はい、あの体にも、奥底にはちゃんと意思があるんです。

彼女が行きたいと言ったんですから良いんです。

それに、ジョーカー君は強いですから」

「そうですか」

その時、誰かがドアをノックした。

ティーちゃんの母はすぐに出て行った。

「はい。あ、隊長さん」

「やあ、ごめんね、町でいきなり話しを聞かせてもらったり、けが

人を預かったりしてもらって。

今日は、町長さんが用事で」

後ろにいた男がセラの前に出てきた。

「すみません。クレットさんに謝りにきました。上がらせていただいて良いですか？」

「はい、どうぞ」

ティーちゃんの母はすぐに中に通してティーちゃんを呼んだ。

「ティーちよっとお散歩しよっか」

ティーちゃんが居なくなつた部屋で新町長は頭を下げた。

「すみませんでした。

私があの日、屋敷を攻撃する事になっていた元防衛隊ダイザナ支部隊長です。

私の警戒が不十分だったせいであなたに大怪我をさせてしまって」

彼は何度も謝った。

クレットさんはもう少しで死んでいたのだ。

さらにドアの鍵、街灯、自転車、などが爆発してこの町は火の海だつただろう。

しかし、彼はすぐに許した。

「いえ、今生きてるのですから私は大丈夫です。わざわざ来ていただいてありがとうございます」

新しい町長は何度も頭を下げた。

いつまでも謝り続ける町長にあきれてセラが引きずっていったぐら  
いだ。

「次は、防衛隊の遺族の家に行かなきゃいけないんじゃない。そう  
でしょ？違つ？」

「はい。すみません、特隊長まで付きあってもらっちゃって」

「いや、僕も反省してるよ。最初から一緒に行けばよかつたって」

「……あの、俺なんかが町長でいいんですか？

俺のせいで30人も死んだんですよ」

「別に君のせいじゃないよ。

それは、銃を作った人のせい」

「でも、それってクレットさんじゃ」

「いや、それが違うみたいだよ。飛鳥トウチヤのやつらみたい。

たぶんオクティスの国の勇者の家にあった武器と同じ」

「魔王を封印した、あの勇者ですか」

「うん」

(それって、勇者様が悪いって言うてるよつな)

「これで、解散だ。次の町長は町と人のことをちゃんと考えている。もう、これからは町長に立ち向かうなんて考えなくて良い」

「……はあ、入り込む前に、町長が捕まるなんて、なにも計画しなくて良かったんじゃないか」

「まあいいじゃないか。それより、なんか食べに行かないか」

「行く行く。久しぶりだな。この前までは、税金高くてそんな事する余裕がなかったから」

「あいつにはちょっと悪いけどな」

「ん、ああ、あいつ？あいつ、やっぱりあの雷神の電気で死んじゃったかな」

「魔物と一緒に炭にされるなんてかわいそうなやつだ」

「ねえ、クレットさんは研究が嫌いなの？」

「ん、何でだい？」

「だってタレットさん、研究所に連れてこられたのが嫌だったんでしょ」

「ああ、それでか。」

「昔は好きだったよ。」

「でも、やらない事にしたんだ」

「なんで？」

「知りたいかい？ ティーちゃん」

「うん」

「ティーちゃんフォースって知ってる。」

「それは、数少ない人が生まれつき持つてる力なんだよ。」

「私はそれについて研究していたんだ。」

「生まれつきフォースを持つているのは1000人に1人ぐらいだけど、それを30人に1人ぐらいの人にフォースを持たせる事が出来た。」

「でも、全ての人にフォースを持たせる事は出来なかった。」

「私は色々調べた。」

「呪いや神話とか、迷信といわれている物も調べた。」

だけど、フォースを持てる人と、持てない人の違いは分からなかった。

それに、こんな話を見つけたんだ。

ステリウス教の女神サナイは4人の女の子を産んだ。

4人は最初、何の力も持っていなかった。

そのときは4人と仲が良かった。

ある日、1人の力が目覚めた。

そのとき、残りの3人は力にあこがれ、その1人は喜んだ。

またある日、また1人、力を目覚めさせた。

そのとき残りの2人は焦りを感じ、後の2人は優越感を感じた。

そして、また1人が目覚めた。

残りの1人は力を嫉妬し、3人は自分たちが特別なままで在りたいために、その1人を遠ざけた。

その一人は悲しみで魔獣の姿になってしまい、3人から離れてしまった。

こんな、よく分からない話なんだけど、気が付いたんだ。

フォースを持っている人が増えると、持っていない人はどうなるかと」

顔を下げると、動かなくされた足の上で緑の頭が寝ていた。

「はあ、ちょっと夢中になりすぎたみたいだ」

クレットは動く事もできないので、そのまま寝る事にした。

2-1 おまけ あ、書き忘れてた。(後書き)

あ、反町長グループ出してなかった。

3 (王国) - 1 闘技場(前書き)

3章始めます!

3 (王国) - 1 闘技場

どうなってんだ。

何でこんなやつを連れてきてしまったのか。

金髪ロング、黒っぽい服。

しゃべることは基本ない。

クレットさん曰く、

動力源は糖分です。

水をつけないで下さい。

雷が鳴り始めたら屋内に入ってください。(落雷の危険があります)

分解、改造は止めてください。

と、言う事だ。

それで、その砂糖は誰が買った？

結構高かったぞ。

この前の昼飯、青1本取られたぞ。

ヴァンパイアの時もらった金の20分の1だぞ。

一日3食で7日で終わる。

クレットさん救出の時は、セラの「ジョーカー君もがんばってたよ」のおかげで紫5本の収入を得たが、すぐに尽きそうだ。

さらに、「お礼は今度でいいよ」って、お礼しなきゃいけないのか？

あの日は、少なくとも10回は死に掛けたぞ。

あと、ウィーディーがついて来た理由が、借りを返してないからと言われても、俺の役に立つのか、一体？

っと、ネガティブになり過ぎてるな。

とりあえず、俺は今砂漠を越えて、森を歩いていきます。

3歩に一匹ぐらい現れる黒いリスは無視してます。引っかいてくるけど、そんなに痛くないんで、はい。

俺の気分がここまで落ち込んでるのは、そこじゃなくて、ウィーディーの方に、リスが行かないことです。

何で、こいつら俺の方ばかり突っ込んでくるんだ。

最初見たときはかわいく見えたが今となっては、憎らしい顔だ。森ごと焼き払ってやるうか。

服が服と言って良いのかきわどくなって来た辺りで目の前に川が現れた。

流れは穏やかだが川幅が異常だ。100m以上だ。

黒いリスを蹴っていると声がかかった。

「川渡しです。赤1本ですけど、乗りますか？」  
おじいさんの後ろには力又1的な船が杭に縛られていた。

「いやあ、今日は暇でねえ。なんてったって、神誕祭が終わるまで誰も王国から出てこないからね。まあ、いつもの事さ。100日に一日はこう」

ええっと、整理すると、神誕祭が明日まであって、明日まで、みんな祭りを楽しむので、王国から出てくる人が居ないから、暇だったという事で、はい。

「それより、その服どうしたんですか」

「あ、これね、いや、黒いリスに集団リンチされて」

「ああ、ポラムね。」

あんまり攻撃的じゃなくて、飼われたりもするんだけどねえ。

あつ、お兄さんそのバンダナ何で出来てる？」

「えっと、ポラムの毛だっけ……こんにゃろ」

俺はバンダナを船に叩き付けた。

俺の服これしかないんだぞ。制服焼いたし。  
昔の記憶が嫌になって。

・・・あれ、おじいさんなんでそんなにこっち見てるの？  
俺そんなに暴力的だった？

「く、黒髪」

「え、ああ、うん」

「もしや、勇者様？」

「はあ？」

俺が勇者？

いや違う違う。

「違います。光の力とかありません。  
魔王倒したりしません。

伝説の剣とか装備していません。

ギガスラッシュどこるかドラゴン切りすら出来ません」

「ギガスラッシュユー！やはりあなたは勇者」

こいつ、まさかやっていたとは。

「だから違います。俺は悪戯の王ジョーカーで、青葉高校2年C組、  
出席番号16ばん、子供の頃の夢は億万長者！」

「これまでのご無礼をお許してください」

「違つてゝゝゝ！漕ぐの止めるな。川に流され始めてる」

「す、すいません。どうか命だけは」

「とりません。命はとりません。

新聞も取りません。

牛乳も取りません。

成績アップのための教材が、やかましい」

『主人、大丈夫か？』

いや、たまっていたストレスが爆発して。

何だかんだ、船は対岸についた。

「渡し代なんか要りませんから、命だけは」

「はらいます。渡し代払います。

水道代？はらいます。

ガス代？はらいます。

教材は一冊1000円・・・払うか！」

王国はやはり門から違つ。

石でできた枠に頑丈そうな木の扉。  
侵入者を阻む高い石の塀。

そして、門に兵士が居ないというこの自信。

いや、大丈夫か？

まあ、この国の城の安全性に不安を感じた事はあつたが。

中に入ると、かなりガラツとしていた。

見える人はローブを着たおじいさん一人。

遠くに真つ白な城が見える。

「あんたはとうぎかいに行かないのかい？」

話しかけてきたのはローブのおっさん。

「党議会？政治的な何かですか？」

「闘技会つてのは、神誕祭のしめにあるもんで、簡単に言えば、力  
自慢たちが戦つのが。優勝者は王に願いを聞いてもらえる」

「はい、でます！どこつすか」

「ああ、城の前にある闘技場だよ」

「ありがとうございます。ソラフ！」

俺は城に向かって、石がしかれた道を走った。  
とりあえず、王に会うために来た訳だしね。

「はあ、あなたはバンダナの連れじゃないのかい」

「はい、一応」

「行かなくて良いのかい」

「始まるのはいつですか？」

「2時間ぐらいかな？歩いていってもたぶん出れるよ」

「はい」

ウィーデーは城に向かって歩いた。

「はあー。門の近くに人を寄せ付けないってのも大変だな。  
まあ、カルフさんの命令だからしかたないな」

闘技場の前では人が二つの入り口から中に入っていた。

まさに闘技場といった、すり鉢型の建物だった。

ソウ何て書いてあるんだ。

「ん、右側が、闘技者。

左側が観覧者と書いてある」

俺は闘技場の中に入った。

入り口で紙が渡された。

紙にはよく分からない記号が書かれていた。

どうやら俺の番号らしい。

「この通路を真っ直ぐ行ったら係りのやつがあんたを部屋に案内してくれるよ。

がんばりなよ、おしゃれなお兄ちゃん」

どうやら破けた布はカッコいいらしい。

バンダナかな？

これはずして勇者とか言われても、ねえ。

暗い道を進むと女の人が立っていた。

「番号をお見せください」

俺は紙を差し出した。

「では1番の部屋へお入りください」

その女の人が笑顔で言った。

ソウ、一番ってどれ。

『はあくその年で数字もよめんとは、片腹痛いわ』

なんか、意味ちがくない？

馬鹿にしてる？俺の事。

『1は、縦棒に横棒を重ねた形じゃ』

あ、もう通り過ぎたわ。

通路を戻ると入り口の方から1人の男が歩いてきた。

上半身裸だが、マッチョというわけでもなく、ヒョロいという言葉が似合いそうだ。

「やあ、坊や、逃げるとは、的確な判断だね。

何せこの大会には僕が出るんだからね。

まあ、君は観覧席から、僕の優勝する姿を見ておくがいいよ」

なんだと。

俺は番号が読めなかったから、精霊に読んで貰って、自分の部屋に

向かっているんだ。

なんて言うては、なお恥ずかしいので。

「弱い犬ほど良く吠えるんだぜ」

よし、決まった。

そのまま俺は部屋に入った。

3 (王国) - 1 闘技場 (後書き)

みなさんカルフ覚えていますか。  
忘れちゃった人は1 - 2を読んだら居るよ。

3 - 2 新たな楽しさの発見 その1 (前書き)

新たな楽しさの発見 その2が出るかは分かりません。

### 3 - 2 新たな楽しさの発見 その1

一番の部屋は予想以上に広がった。

50人近いぐらいかと思われる人々がきちきちに入っていた。

誰もしゃべっている人はおらず静かだ。

とりあえずすぐそばに居た背の高い人に話しかけてみた。

「すみません。闘技会っていつから始まるんですか」

「黙れ。ガキは帰れ」

「・・・・・・・・・・」

『なんと無愛想な』

まあ、落ち着けて、ソウ。

みんな、今から戦うんだから気軽に話しかけたこっちがわる

「おい、今なんていった」

ストーーーーーッブ！

ソウ、口を勝手に動かすな。

しゃべらせるな！

「ん？帰れって言うてんだよ、この、クソガキが！！」

周りの目が集まっている。

「俺たちは遊びで来てんじゃないんだ。絶対に勝手父さんの病気を治してもらわなきゃ」

パチン。

痛っ。

手のひらに衝撃が。

あれ、目の前のおっさんのほっぺの横に俺の手が。ちよつど叩いた後のような体勢だなあ。

いや〜不思議だなあ〜。

「てめえ、よくもやりやがったな」

ソウさん、ソウさん、聞こえますか？

『ん、何じゃ』

ソウさん、そちらの状況を説明してください。

『この男にビンタしてやったが何か問題でも？』

.....

もう駄目だ。

俺の体は、精霊と名乗る悪魔に支配されていく。

否、支配されて逝くことである。

「くらえ！」

ちよ、殴ったのは俺じゃなくて悪魔が勝手に。

「恥ずかしくないのか」

注、ソウの言葉です。

男の拳が止まった。

「こんなガキにビンタされたぐらいでできるなんて、な」

男の顔が怒りで歪む。

ソウは続ける。

俺じゃなく、ソウ。

「そんな事でお前の父親を救えるのか。

怒りは自身の破滅を招く。

お前は、父親の頼みの綱なんだろう？」

注、もう一度言います。ソウの言葉です。

俺は断じて喋っていません。

「はっ。そ、そうだ。俺がこんなんでどうするんだ。

ありがとう、ぼっず。

すまなかつたな。

お前のビンタと言葉で目が覚めたぜ」

え~~~~~

「別に良い。それより、闘技会はいつ始まるのじゃ」

「ええっと、2時からだから、あと1時間とちよっとぐらいだ」

「分かった」

『主人、これで良かったかの？』

え？このため？

1時間ほどか？

まあ、だいぶ長い時間がたって。

「こんにちははです。」

今から闘技会のルールを説明しますです。

ええっとですぬ。

勝負は、一対一。

場外に落ちる、降参する、死ぬ、この三つが敗北条件です。  
とりあえず、以上です。

ご健闘お祈りしますです。

生きて帰れるよう、がんばってくださいね、です」

.....

いやあ、だいぶ慌ててたな、あの子。

それでたぶん言い間違いをしちゃったんだろうね。

もう、どじな子は困るなあ。

ねえ、ソウ。

敗北条件、1つ多かったよね。

それに、最後の一言も。

『ああ、そうじゃな。』

実際に降参と言っても、相手が認めてくれるかどうか？

それに、最後の一言。

死者多出が面白いこの大会で、生きて帰れなんて、馬鹿な話じゃ。

安全な王国で唯一面白いのが、この行事だというのに。』

ダラダラダラダラダラ.....

『ん、主人汗をかいておるぞ。』

まさか、さっきの女との距離が近くて緊張したのか？

まあ、手を伸ばせば、あの丸い尻に手が届きそうじゃったしのうち。』

ガクガクガクガクガク.....

『ん、主人、震えておるぞ。』

おお、武者震いというやつか。

戦いと女が好きとは。

まあ、男はそのぐらいでいいもんじゃ。』

部屋の扉を叩き、一人の女性が入ってきた。

「481番の方」

握り締めている紙には、不思議な記号が3つ。  
ソウに読んでもらったところ、481。

俺はそのまま廊下を進んだ。

足が震えて上手く歩けない。

いや、考えなくては。

敗北条件は場外、降参、天に昇る。

そうだ、自分から場外に落ちればいいんだ。  
簡単な事だ。

『そんなこととしては、王の前で恐れを見せたとして、兵士に連れて  
行かれるぞ。』

どこへかは、知らん』

.....?

俺のテンションとは正反対に、辺りに光が当たり始める。

俺を天国へと導く暖かな光だ。

そのまま、闘技場の中央の半径10mぐらいの台に乗った。



こいつ、まだ言ってやがる。

「何せ、ぼくは、大貴族ペッツンルーモン家のあとつ、ブホアエツ  
！」

あれ、ちょおっつと加速して、殴っただけのはずが。

男は、場外ぎりぎりまで転がっていった。

周りからは、「帰れバカ貴族」や、「いいぞバンダナ」などの声が  
聞こえる。

「くそ、よくも。」

ペッツンルーモン家の秘術、氷系統魔法セラインドクラ、ブハツ！」

あら、後ろに回りこんで蹴っただけのはずが。

男は台の中央辺りに転がっていった。  
不思議な事もあるもんだ。

「くそ、なめたまねを。」

そんなこととしてられるのも今のうちだ、グフアツ！」

あら、足をつかんで持ち上げただけなのに。

1回転しながら飛んでつて、頭を床にぶつけてやがる。・・・石の。  
なかなか楽しいな。

「ふ、お遊びはここまでだ。氷けいと、ウンドウス！」

でこピンくらったにしては大げさな  
ウンドウスってどんな叫び声だ。

てか、何ででこピンで吹っ飛ぶの？

『自己加速は、自分の筋肉やら、神経やら、何やらかんやら、etcを活性化させ、運動能力を上げる魔法じゃからな。

無系統、強化系の最高峰、シンプルにしてフアンタスティック。

扱い方は簡単なものの、凡人では10分使くと魔力切れで3日は寝込む。

そんな、スーパーウルトラミラクルスーパーな魔法なのじゃ。

だから、筋力が上がるのは当然じゃ』

まじ、俺そんなの使っちゃってるの？

『お前の体は、全身が炎を灯すための魔力タンクのようになってるからな』

ははははは。俺の体はライターなのか。

将来は親戚のおっさんのタバコに人差し指で火を・・・

また、変なものと合体したものだ。

「きさ、はーはー。貴様、この俺をなめているのか？」

「イエス」

「どこまでも調子に乗りやがって。

こうなったら、ペッツンルーモンの本当の恐ろしさを教えてやる。

よし。

ここで、お前が負ければ、俺の家から紫を3本出してやる。」

「は？」

「お前の姿を見れば分かる。

ボロボロの服。

確実に盗みモンだと分かるそのバンダナ。

金がない事ぐらい分かって当然だ。

さらに、もう一本出してやっても、グフオエスッ！」

俺はこのバカを倒して、マウントポジションを取った。

「こつこつのはどうだ、バカ貴族。

貴様が、紫を50本出すなら、そんなに痛くはしない」

俺は指に炎を灯した。

「払わないのなら、この炎であちこち焼いていく。

さあどうする？」

よし、俺の生活は安定する。

紫50本の収入だ。

「む、紫50?!

紫色通貨棒を50本出せというのか、って熱っ。

止める、その火を近づけるな」

いやあ、いじめの素晴らしさを感じるね。

「出すのか？」

「紫50本あれば、家が5つ買える、って、やめて、髪をあぶらないで。」

あ~~~~、ちりちりっていつてる。

止めて~~~~」

「出すって言葉」

「出す、出すから止めて。」

パパに出してもらってから、服を千切らないで。

千切った服を焼かないで。

この服の生地高いんだぞ」

「おっ。出してくれるのか」

「出します」

「じゃあ」

俺は男の服を掴んだ。

「バイバイ」

そして投げた。

ゴロゴロ、ドス。

その低い響きと同時に、俺の勝利と、紫50本の利益が確定した。



3・2 新たな楽しさの発見 その1（後書き）

楽しいね

書いてて。

もう魔王とか止めて、こつこつ話に変えちゃおうかな？

### 3 - 3 闘技会

部屋の中の人数は少しずつ減り始めた。

「641番の人！」

人が、一人ずつ連れられていく。  
全員は帰って来ない。

勝った者だけが、笑いながら入って来て、後の人は負。

「691番の人！」

「がんばってくるぜ、ぼっず。  
親父のために」

「がんばって下さい」

「浮かない顔だな、勝ったくせに。じゃあな」

はあ。

ほんとに良かったんだろうか。

俺は力を使って紫50本を強奪したことになる。

なあ、ソウ？

……ソウ？

その時、何かが俺の中に入ってきた。

『主人、ちよつと試合を見てきた。なんかテンション低いのう?』

いや、あんな事して良かったのかって・・・

『ああ、あれはさすがに観客も納得いつてなかった様じゃの。』

みんな、あのバカ貴族とやらが、丸焼けにされる事を望んでいたよ  
うじゃ』

いや、そこじゃなく。

『ああ、あのバカ貴族、金だけはあるからのう。』

紫500本でも少なかったの』

でも、あんな方法で金を取るなんて・・・

『はあ。』

主人はどんなところで育つたのじゃ』

日本。

『殺す代わりに紫50。』

あり得んの。

それが良かったか、とは。

それじゃあ、甘すぎるの。

本当は、財産を全て譲れ、というのが普通じゃ』

でも、俺、恐喝とか言うものに手を出したんだぞ。

それも、楽しいとか思いながら。

まるで、狂人じゃないか。

『はあ。』

この町じゃ、あいつを殺さない方が狂人と捉えられておるぞ。この場では、殺す事こそが名誉。

それを覚悟したものが来るとこじゃ。

ウィーディーが魔法使いの首を飛ばして、大喝采じゃったぞ』

え、首を飛ばす……って？

『スプーンの柄で、魔法使いの、首を、切ったってことじゃ』

よし！

ソウ、次の試合、降参して逃げるぞ。

かくまってもらえる所を探さなきゃ。

てか、大喝采ってどういうことだ？

あと、ウィーディーも出てるのか。

『ここは、平和な王都。』

今日しか、人の血を見れないぐらいな所じゃ』

いいとこじゃん。

『まあ、平和なとこで生きてると、退屈になるのじゃ』

じゃあ、俺は？

まあ、血の出るゲームぐらいなら。

『そついうものじゃ』

2回戦の始まりが告げられてから、さらにちょっと経って。

『主人！呼ばれておるぞ』

あ、マジで。

「はい」

いやあ、この世界の睡眠時間じゃ、ちょっと足らなくて。

次の相手はばかデカイ剣を背負った、ガツチリした男だった。

「こんなガキが生き残っているとは、俺様の相手になれんのか？」

「はじめーーーーー！！」

男はいきなり走ってきた。

剣を振り上げ、振り下ろす。

俺はその一撃を難なく避け、後ろから蹴ってやった。

無防備な男は、そのまま前に倒れ、台から落ちた。

「勝負あつた――――！！」

勝者は、ぼろ布の黒バンダだ~~~~~！！」

ん〜ん、酷いな。

ぼろ布の辺りが。

次の相手は魔法使いの女だった。

炎が前後左右から迫る。

俺はぎりぎりですべて避け、勝利を確信し微笑んでいる女を場外にフツ飛ばしてやった。

まあ、微笑むのも無理がない。

俺の体に、すでに2つの火の玉が当たっている。

そんな状態で、4つの方向から同時に来た炎を避けるのは凡人には

無理だ。

はあ。

おれ、もう凡人じゃないのかもしれない。

『絶対にそうじゃ』

酷いな。

まあ、戦い方を言ってくれるのは良いんだけど。

『主人は戦い方がまるでなつとらん。』

今日は、みっちり教えてやる』

止めよ。

もう、帰ろ！

俺の足だったら、元のままでも逃げ切れると思うし、さらに自己加速まであるし。

『それは、優勝して、王に会ってからで十分じゃ』

3 試合目は普通の剣に普通の鎧、普通に盾も持った普通の剣士だ

った。

『よ〜〜し、かわす練習じゃ。自己加速はなしで』

いや、死にます。

『ニヤオン！よし、主人、魔法は封じたぞ』

俺、逃げるよ。あの世に。

『何じゃ、その脅し？』

我は主人の母親じゃないぞ』

自分を焼くよ。

『我は、主人に憑依しておるが、主人がどうなるうと無傷じゃ』

俺、死んだ。

この試合で負ける。

『大丈夫じゃ、相手の剣ははさみ位の切れ味にしてある』

じゅうぶん切れるし。

「はじめー！」

うわっ！

相手が早い！



何を？

『はあ、あれだけの魔力を封印するのはさすがにきつかった』

ん？封印？

何を？

右手の炎が消えてる事に気づく。

な！てめ、俺死ぬって。

剣士さんは短い剣でさらに攻撃を仕掛けてくる。

無理、無理、かわせない！

『まあ、3発に1回ぐらいはかわしておるぞ。

10発連続でかわせたら・・・』

かわせたら？

『体術の練習に入る』

いやだ。

自己加速で何とかするから、術とかいらぬ。

『いや、要るじゃろ。

祖術、闘術、対人術、対獣専門、暗殺、気術、滅術、極術、斧鋏術ふくわじゅつ  
とか』

わかんねえよ!!

かわす、かわす、避けて、いた！、避けて、いた！

ところどころ血が出てるんですけど。

はさみ位の切れ味って言われても、痛い。

『かわせ！かわせ！』

楽しむな！

大会の人、困った顔してるぞ。

日が傾き始めてるぞ、腹減ったぞ！

『もうチヨイじゃな』

まあ、いろいろ、ドンパチ、バンバカあって時は経ち。

ぜい、ぜい、ぜい、ぜい

ひーふーひーふー。

無理っす。

相手も息、上がりまくってます。

『そうじゃな、これ以上やっても練習にならんじゃろつ。  
開っ放！』

……ありや。

……日が傾いたから無理じゃ』

はあ？

『我は、まあ、色々あって、太陽が近くにあるほど強いのだよ。』

主人の魔力の封印には、相当の封印術を使ってしまっ  
て、解除も一苦勞なのじゃ』

どうすりゃいいんだ？

『真剣に勝て』

いや、相手、体を鍛えてる人だよ。

今、生きてるだけで相当な奇跡だよ。  
勝てる気しないよね。

すると、剣士は先が溶けた武器を捨てた。

そして近寄ってきた。

「あなた、強いですね。」

私はもう戦えません。

私をあの炎で焼いてください」

「いや、人殺しは嫌いだから、場外に下りてくれ。」

その方が大変かもしれんが」

「分かりました。」

ありがとうございます。

私は、実家に身を潜めようと思います。

デンオルンの村です。

よろしければ、たずねてきてください」

それだけ言うと、剣士は台の端まで歩き、そこで気を失った。

「はあ」

俺はその体を、場外に落とした。

ソウ、この後の試合はどうするんだ。

そう、心の中で聞いたときに、魔法で拡大された声が響いた。

「勝負あった~~~~~!!!!!!」

そして、お知らせです。

今日は、王様がお帰りになっちゃったので、おしまいです。

よほど、退屈だったんでしょう。

選手の皆さんは解散です。

明日の朝、自分の部屋に戻って来て下さい」

闘技会1日目は、何とか済んだ。

『・・・それが、祖術じゃ。

基本にして、原点。

だから祖術』

あ、もう無理。

体力ゼロ。

朝まで死にまゝす。

『待て。

武術は、理論も大切なのじゃ。

次は闘術じゃ。

これは、かなり力押しな術であって、祖術のように、技で戦う事はあまりない。

練習するのは、力を上げる事と、力が加わりやすい攻撃方法で、聞いておるのか？』

もう飽きたから、闘技会の話して。

『はあ、仕方ないの。』

我が見たところ、炎を使う主人と戦えるのは20人ほど。自己加速を使う主人と戦えるのは10人いないじやろう。両方使った場合は・・・1人。それもウィーデーだけじゃな』

うん。

やっぱり小さい大会なのか。

死人続出って言うから、もっとすごいやつが大勢いるもんだと。

『主人、おぬし自分の強さが分かってないのか？  
主人に勝てる者などそうそう居らんぞ。』

この大会は国中から強豪が集まっておるし  
・・・あ、寝ておる』

俺は一番の部屋の石の床でも寝れるぐらい疲れていた。

### 3・3 闘技会（後書き）

やっぱり異世界トリップにはこういっのがないと。  
あれ、王国の名前なんだっけ？

3 - 4 精霊の精霊による、主人のための、ボディジャック（前書き）

分かりにくかったら、すんまへん。

### 3 - 4 精霊の精霊による、主人のための、ボディジャック

次の日、目を覚ますと部屋の中には数人の選手がもう戻ってきていた。

3、4回は勝っているはずだから、弱いはずはないだろう。

しかし一体、何回勝てば帰れるんだろうか？

自分の481という番号から考えて、・・・考、えて・・・分らん。

とりあえずたくさんだろう。

こんな俺が高校に入れたのが不思議で仕方ない。

朝になった。

腹が減った。

昨日の夜は？

疲れ切って寝た。

「すみません、朝ごはんってどうするんですか？」

「あれ、外で食べてきてないんですか？」

話しかけたのは、ソウがビンタしたおっさん。

繰り返します。‘ソウ’がビンタしたおっさん。

「今なら、まだ、外に出られると思いますよ」

「了解！」

扉を開けて、左右の道を交互ににらむ。

……あれ、俺どっちから来たっけ？

ググリユグリユルル。

戦う気になれん。

そうだ、王様を退屈させて、大会を終わらそう。

目の前には、斧を担いだ青年。

うわ！腕の筋肉ヤバ！

俺の太ももぐらいある。

『フアアア~~~~』。

おッ主人。

試合なら起こしてくれんか。

今日は、祖術から入るぞ。

主人、覚えておれ』

「はじめ~~~~」

ん、声が違うな。

やっぱり、違うステージだと違うんだな。

今日は、昨日までの北小闘技場ではなく、南小闘技場だ。  
そのほかに西と東もある、とソウから聞いた。

『ほれ』

は？

体が勝手に動き出した。

こ、これは体に乗っ取られた。  
ボディジャックだ。

ちよっ！キツイ。

そんなに速く体は動かん。

『まずは、基本じゃ』

斧を構えた男に向かって走り、フェイントを5重ぐらいにかけた動きで、後ろに回りこんだ。

「せい！」

そして後ろから、何やら基本の技を

まあ簡単に言えば突っ

張り　　をバシン！と。

男は、斧を床に立て、態勢を保った。

地面と体の角度50度ぐらいで。

『さあ、主人もやってみろ』

ん？え？

え〜つと、こつ？

右手を突き出した。

ペチン！

あれ？効果音ちがくないか？

『駄目じゃ。もっと体全体を使って！』

こつか？

パチッ！

『違う！もう一回やるぞ』

パシ〜ン！！

いて！、手の平いて！

『分かったか？』

うん、手の平の痛みは。

それより、何でこの人動かないの？

『それは、私の魔法で足の裏と地面をくっついておるからじゃ。

この体勢で、足を前に出さないとこけるじゃる。

足の裏くっ付いたままこけたら、アキレス腱ぶちぎれるじゃるうし……

だから、こいつは手を斧から外せないんじゃ。

両手じゃないとバランスを崩すじゃるうし』

うわ、ひでえ。

まあ、王様が帰るぐらい退屈に殴り続ければ。

もう、終わる。

手の平真っ赤だし。

お兄さんの背中も紅葉模様にみみず腫れが。

お兄さん、肩の辺りプルプルだよ。

『そりゃ、手を離せばアキレス腱切れて、足首の骨が、体重全てを受けてポツキリ・・・』

一生歩けなくなるかもしれない。

体が硬く、体重がそれなりにあれば足がもげるってことも、あるかもしれない』

こんな事よく出来るな。

『相手の動きを止めるにはちようどいい。足と地面をくつつけるだけじゃからの。』

さらに、今みたいに体勢が崩れておれば、苦しみも与えられて、—  
石二鳥じゃ』

はあ。

俺は、男の人を引つ張った。

そして、仰向けに寝かせた。

もちろん、ひざを立てて。

そうしないと足首もげるだろう。

『主人、何を？』

「生きてるか？」

「この野郎」

「降参するなら認めてやる」

「クソガキが」

「曲がってるこのひざを踏むよ。

足がもげるか、魔法が解けるか？」

「…………クソ…………降参する！」

「はい、審判！降参だつて！」

審判（仕事は見てるだけ）が歩いてきた。

「アブノさん、降参ですか？」

「ああ」

「ジョーカーさん認めますか」

「はい」

「分かりました。…………メグスワン！（拡声の呪文、ここ、テストに出るぞ）」

審判の人は、少し離れ、拡大された声で言った。

「ただいまの試合は、アブノ選手の降参で、ジョーカー選手の勝利です」

『主人、次も祖術の基本じゃ』

嫌だ、と言いたい。

しかし、俺の魔力はこいつに封印されている。

その状態で、俺はこっちをにらむこいつに勝てるんだろうか。

次の相手は、珍しく女だ。

まさに、魔術師なローブをきている。

ソウ、そろそろ魔力を開放してくれ。

『そんなことしたら、私の言う事聞かないじゃろっ。』

祖術ぐらい使えんと』

そんな事を言われても。

俺は格闘技とか知らないわけで、運動神経も悪くとも良くわなないわけ。

飲み込みが早い訳でもないわけで。

そんな俺に、武術をマスターしろとは、正直言って無謀な気がする。

『あきらめたらそこで終わりじゃ』

いい言葉だな。

いや・・・てか、そんなの要らないから。

これから俺は、平和にのんびり過ごすから。

『体に教えてやる』

「はじめ~~~~~」

『主人の意識はどっか行つとれ』

俺の意識はそこからない。

ん・・・腹・・・減った。

「お、主人、やっと起きたかの」

「あれ、ソウ、出て行ってるの」

「主人に憑依するのも魔力が要るんじゃ。

今までは、主人からついでに取っていたが。

使い切ってしまったって・・・」

「おい、勝手につかっとったんかい。

てか、自分で言うのもあれだが、何百人の魔力を全部使っつてどういう事だ？」

「いや、少し昔を思い出して、色々やっちゃつてのう。

巨大化したり。

魔獣に化けたり。

あたり一帯の光を吸収して、闘技場を真つ暗にしたり。

相手の存在を消す、暗黒魔法・エクシス・チェイネット存在削除など」

「何やらかしてんだ。あと、俺の体が究極に痛いのはなぜだ？」

「それは、主人の体を鍛えようと、獣人族の戦死と魔法なしでやりあつたりしたからのう。

あと、痛みの直接的原因は、攻撃を受けたのではなく、筋肉痛じゃ」

「腹が減ってるんだが」

「自分でやつといて言うのもなんだが、町まで歩けるのか？」

「無理っぽい。体が俺の指令をこばんでやがる。座るのが限界」

その時、扉が開いた。

そこにいたのは、ソウがビンタしたおっさんだった。繰り返す、‘ソウ’がビンタしたおっさんだった。

「あ、あんた、猫としゃべれんのか？」

おっさんは目をこすりながら言った。

「え？ああ、うん。こいつなら誰とでもしゃべれるだろ」

「でも、あんた今ニヤオニヤオって・・・」

「主人、私の能力じゃから適当に合わせておけ」

「あ、あゝ・・・ああ、うん、そうなんだ。いつの間にかしゃべれちやってさ」

「どんな事しゃべるんだ」

「ん、ああ、暗黒魔法とか・・・いてっ」

ソウが爪を背中に押し付けた。

「何すんだ」

「それは私のセリフじゃ。

そんな事しゃべるな」

「暗黒魔法？

そんなの神話でしか聞いたことがないぞ」

おっさんが近づいてくる。

「あ、ああ、それぞれ。

猫って意外と神話に詳しくったりする」

「なあ、どごちゃって話せるようになったんだ」

「ええっと。」

「この世界で始めてしゃべったのが猫だったり、そうじゃなかったり・  
」

「まさか、猫に育てられた人間？」

「ん〜。猫に支配されてると言った方が正確だったり・・いてっ  
ソウの爪がさらに食い込んだ。」

「俺も話せるようになるかな？」

「おっさん、目、煌き過ぎです。」

「ああ、たぶん。」

「その代わり苦勞する事もいくつか、いてっ！」

「おい、話を合わせるといったのはそっちでは。」

「そうか、あつと、肝心の用事を忘れるところだった。  
食いもん、持って来たぜ」

「か・・・かみ、さま！」

『主人。魔法を教えよう』

え、俺に？

『まず、主人の魔法の系統を調べなければならん。  
とりあえず、水は無理だったから、次はホラシャじゃ。  
唱えてみよ』

(俺の意見は？)

「ホラシャ！」

ん、何も起きないぞ。

『予想どおり、無理じゃな。  
まあ、予想が外れていたら、風でこの部屋の人間の肌が少し切れて  
たが。』

あつ、主人もじゃ』

おい、危ないな。

『まあ、気にせず次じゃ。』

次はグラドじゃ。

地面に向けてやれ』

「グランド！」

ん、何も起こらないぞ。

『やはり違うな。』

合ってたら、主人の膨大な魔力で、大地震じゃったがの』

おい、大会どころじゃないぞ、つてか、俺も危ないだろ。

『次じゃ。』

次はラチケルじゃ。

次は、たぶん火が出るから、壁に向けてやれ。  
離れてからやらんと顔とか火傷するぞ』

（俺の意見は？）

部屋の中は、だいぶ人が少なくなった。

俺を含めて4人だ。

という事は、昨日は、順調に進んだんだろう。

その部屋の、人のいない方へ、体を向けた。

「ラチケル！」

その瞬間、部屋に轟音が・・・なかった。

『おかしいの』

第一、ほんとに何か起こるもんだったのか？

『そのはずじゃ。あの、壁が焼かれるはずじゃった』  
んな事言われても・・・

俺は魔法なんかソラフ以外使ったことないぞ。

『ん〜昨日使ったのは、確かに無系統ばかりか。  
主人、フーマクス！』

あいよ。

「・・・・・・・・・・」

その前に、今度はどうなる予定？

『主人に学習能力があったとは・・・いや、独り言だ。  
体が軽く浮く。・・・上手くいけば』

聞き捨てならん部分がいくつかあったが、まあ何も起こらないだろう。

「フーマスク！」

ガン！

俺は後頭部を天井にぶつけた。

3 - 4 精霊の精霊による、主人のための、ボディジャック（後書き）

俺って、文章上手くなってんのか？  
キー打つのは、速くなった。

### 3 - 5 大会最終日（前半）

「今日で、神誕祭も最終日！

優勝は、誰の手に~~~~~！」

え〜っと、今俺は中央闘技場というところに来ている。

広さは、俺の家を見たくなくなるぐらい。

中央にはいつも通り半径10mぐらいの、円形のステージがあるわけだが。

「ここから先は、場外に落ちても地獄行き！

選手の皆さんは、地獄の闘技塔で試合を行っていただきます！」

ステージが、学校の屋上ぐらいの高さはある。

ここから先の試合は、他の人の試合を見れるそうだ。（俺は、あま  
り気が進まない。人が殺されるところなんか、絶対に）

ステージの周りの空いたところに、選手たちは1列に座らされてい  
る。

ざっと見たところ2クラス分ぐらいの人数だ。

「抽選の結果。本日の第一試合は、328番、水使いのシャークと  
654番、短剣のザンヌ。

選手は前に出てきてください」

2人の選手が立ち上がって、ステージの前まで行った。

そこで、軽い身体チェックを受け（とは言っても、戦うときには何を使ってもいい）横のはしごから上っていった。

あれ、俺たち見えなくね？

『フワアアア〜。』

おっ、主人、試合かの？

俺の魔力を解放して寝てる。

『っ、冷たいのう。あと、昨日使う前に開放したぞ』

そりゃそうだろ。

お前のおかげで、右の手の平の感覚が薄れてるし、全身筋肉痛だし、それに、観客みんなこっち見てるんだけど。

どういうことすか？

何したんですか？

俺のメリットは何ですか？

『まあ落ち着け。』

主人のメリットは、魔力がさらに体に馴染んだ。だから、今朝は魔法の事についてやったんじゃないが。無系統だけ出来るってどういうことじゃ？

魔力はあるが、属性魔法が使えない。

まさか、主人はゼロ魔法使い。』

え、使い魔ではなく？  
なんか凄いの？

『ああ、ゼロ魔法使いは100年に1人という、奇跡の人材じゃ・・・  
・研究者にとって。』

例えるとじゃな、この前のタンクと蛇口の話覚えておるか？』

忘れた。

『タンクが魔力、蛇口が術者じゃ。』

蛇口は、それぞれ系統がある。

火、水、風、土、これは覚えておるな』

え、ああFFね、オツケー。

『ゼロ魔法使いとは、その蛇口がない魔法使いじゃ。』

魔力をそのまま使う無系統は使えるが、属性魔法は全く使えん。  
いいところは、ない』

駄目ジャン。

『専門の研究所に行けば、月、紫1本の給料が出る』

それって凄いの？

俺、1月で紫10本以上なんだけど。

それに、後で紫50本入ってくるし。（この件については納得済み）

『そんな事が出来るのは東の大富豪ぐらいじゃ』

誰それ？

『奇跡の錬金術師と呼ばれておる。  
我は顔も見たくないが』

鋼の、ではなく？

「はじめ~~~~~」  
「~!」

戦いは想像を絶するスピードを伴い、剣撃の音が高らかに木霊する。  
なぐんてね。

戦いは、俺より20mほど上で行われ、俺にはみえまじえくん。

うざったるいのはご愛嬌ってことでしょうか。

.....はい。えっと。

俺は今、子供の頃にやったゲームボーイがやりたくなる位に暇だ。  
あ、久々にゲームしたい。

さつきから、5試合ぐらいが行われた。

したがって、人数も5人減っている。

これから先のことも考えないと。

あまりに暇で、俺はそんな事を考える事にした。

1、この大会で勝つ。

2、あれ、俺何しにこの国へ？

3、そうだ。潰しに来たんだ。こんな世界に連れて来た仕返し。

4、王として君臨。

5、美人な女王様と、優雅な日々を送る。

これで決まりだな。

その時、本日5回目のゴムなしバンジーが行われた。

思わず目をつぶる。

勝ったほうははしごを降りて、次のアナウンスが行われる。

降りてる間にはしごから落ちるやつも居て、うん可哀想。

「次は、875番風舞う剣、セスキューと481番、でたらめで色々  
と訳の分からん意味不明なふざけたバンダナ、ジョーカーだ〜」

」！  
「

どんだけ変な事やってんだ、ソウ！！

『ん？これっくらい』

分からん、お前自体が分からん。

はしごは面倒なのでフーマスクで飛んだ。

少し待って上がってきたのは銀髪を足首辺りまで伸ばし、細身の剣を持った男だった。

男は、すぐに剣を構えた。

特にしゃべることはないようだ。

こっちもなかったのでもま時間が過ぎた。

「はじめ~~~~~~~~！！」

魔法で拡大された声は、上まで良く聞こえた。

で、ソウ、今回はどうするんだ。

『ビスタを唱えてみる、相手に集中しないと、自分の動きが止まるぞ』

「ビスタ！」

俺の目の前30センチ目線よりチョイ下から、野球ボールぐらいの白い薄い光が飛んで行った。

それを、セスキューとやらはあっさりとかわした。

『次はダックじゃ』

俺は走り始めたセスキューに意識を集中させ、ダックと唱えた。

今度は、透明な何かが飛んで行った。

セスキューは剣をとっさに斜めに構え、右手を剣の先の裏に当てた。  
(左で剣を持っている)

キンッ！

高い音が響き、セスキューは後ろに少し動いた。まるで、剣が剣にぶつかったかのように。

『1発目でこれだけ威力があるとは。次はギユマンダじゃ』

出来れば、説明が欲しい。

「ギユマンダ！」

敵が上げた剣が下がった。

「うっ！ぐ、ぐふふふははははは。

相当の魔力だな。

基礎無系統魔法でここまでの威力とは。

どうせ、中級、上級、最上級も使えるんだろ。

これほどの力で、無名とは、謎だな」

ソウ、何でこんな変な魔法を使わせたんだ。

理性を破壊するとかか？

『いや、重圧じゃ。基礎の』

セスキューは笑いながら呪文を唱え始めた。

「フルスライン・ファイス！」

なにあれ？

『上級風系統の加速じゃな。

主人のとは違って、風の加護の形じゃから、早いだけじゃ』

早いだけ？

気がつくつと、セスキューは目の前にいた。

迎撃するため、炎を出す。

ん？

炎が左肩までを包んだ。

この前より大きい！

『魔力が馴染んできてるからの』

セスキューは下がって避けた。

『主人、次はモールサイスじゃ。』

真上を意識しろ』

「モールサイス！」

途端に周りから、押さえつけられるような感覚に襲われた。

抵抗しようともがくが、何も出来ない。

押さえつける強さが、あるところを越えた瞬間に、俺の意識は無限の彼方に吹っ飛んだ。

次に目を覚ました時、俺は、闘技場の椅子に座っていた。

他の選手も座っている。

しかし、人数は少し減っているようだ。

『ありや、主人、戻ってたのか。』

いや、あれはミスじゃ、ちよつとした』

ちよつとしたつて、俺、死ぬかと思つたぞ。

『いや、移転の魔法じゃつたんじゃが、主人の魔力を一気に移動させるのはさすがに無理があつた。』

それより、全体的に説明をしてくれ。

『ビスタが、静止の魔法。』

ダックが衝撃。』

ギユマンダはもう言ったが、重圧。』

モールサイスは移転。』

全部基礎の無系統じゃ。』

あと、無系統は物を触れずに動かす、というのが起源じゃ。』

で、あの後どうなったんだ。

『ん、ああ、あっさり突き落としたぞ、ビスタで止めて。いや、主人の魔力は大きすぎて爽快じゃ。』

その次のやつは、地上に移転してやったわ。

面白かったの、銃を構えた瞬間に地上にいたときのあいつの顔が『

2回もやったんかい。

『これで、ベスト16じゃ』

3・5 大会最終日（前半）（後書き）

やべえ、話が進まねえ。

ソウに短縮してもらってるんだが。

このままじゃ、3・30ぐらいまで行きそつだ。

3 - 6 大会最終日、後半

選手も少なくなり、俺は次の試合に呼ばれた。

前回までは気分は沈んでいたが（原因はソウとソウとソウ）今回は違う。

不幸の根源は、休息へと入られた。

とうとう俺の時代がやって来たのだ！！

と、いう訳で、相手は魔法使いのお兄さん、ねずみの精霊が肩に乗っている。

（ジャ、ジャリボーイだと！？）

色は緑色だった。

始めの合図と共に、ジャリボーイは魔法を唱えた。肩の精霊も魔法を補助する。

ジャリボーイを中心に巨大な植物が塔の屋上を覆った。

何これ？ツタ？

こぶし大のツタが襲ってくる。

「ソラフ！」

ワタア〜！

目の前から突っ込んできたやつを殴り、左右から来たやつは飛んでかわした。

ジャリボーイはツタの上に立っている。

そこから空中の俺に向かって魔法を唱える。

バラの棘みたいなのが2本飛んで来た。

「おら！」

しかし、俺の右手の炎に当り燃える。

着地した俺に向かってくるツタ、枝、くき、触手などなど。

それを、ソラフと炎で次々と焼く。

このままでは埒が明かないと思った俺は、ツタの上に乗った。そして、枝、またツタ、と俺は男の居るほうへ飛ぶ。

男は、棘を次々と飛ばしてくる。

その棘に正確に炎を当てる。

自己加速の活性とやらが気持ちよくて仕方がない。

俺は、見事に男の乗っているツタの後ろの木の枝に乗った。

その枝をけって、男に突っ込む。

しかし、俺の出した右手（炎なし）は、木の枝っぱい剣で防がれた。無防備になった俺につるのむちが迫る。

「ビスタ！」

俺は、右手を突き出し言い放った。

右手を出したのは、ずばり、かつこいいからだ！  
こういうの憧れたよね〜。

静止の魔法で動きの止まったツタを足場に、再び男の方へ飛ぶ。

そして、男の上で加重の魔法を唱える。

「ギユマンダ！」

うおっと。

いきなり、地面に向かってひもで引っ張られるような感覚。  
結構強い。

そのまま、俺は男に向かっておぞましい速さで落ちる。

男がとつさに形成した、木の枝の剣も、俺のライダーキック（上から加重つき）には耐え切れず、バキツと音をたて、真っ二つに割れた。

俺の足が男をふっ飛ばし、男は闘技塔から落ちていった。

1秒ほど（足の痛みと）技のきれの良さの余韻に浸った俺は、相手のことが不安になった。

俺が恐る恐る下を見たとき、そこにあっただのは、木の枝に支えられてこつちをにらんでいるジャリボーイだった。

木をクッションに使ったんだろう。

軽症で済んでいるようだ。

そのにらみは次は勝ってやる、という意味をこめたにらみだった。

次の相手は、2本の剣を持った、背の高い男。

ソウがビンタした男だった。

もう一度言います、ソウがビンタした

え？飽きた？

男だった。

「さすがだな、何がしたいのかわからないぐらい色々やる、へんてこの宝庫、黒いバンダナのジョーカーの小僧。朝飯のお礼とかで、遠慮しなくて大丈夫だぞ」



俺には、美人な王女様と、王様生活を送らなきゃならんのだよ！」

「んぐう、小僧、王になるなら、王の子供に生まれなきゃならんぞ」

「ふふふふふ・・・約束と規則は破るためにあるのだあ！！」

その証拠に、後ろを見てみる！」

と、言うど律儀に後ろを向く俺命名神様。

「とりゃー！」

俺はその背中を蹴って、ジャリボーイが木を生やしたところに蹴ってやった。

卑怯者お~~~~とか言いながら落ちる神様を見ながら俺は思う。  
ここまでバカで良くやってこれたなあ、と。

なんだかんだで残り、二試合。

「準決勝、481番、意味わからなすぎて通り名の付けようもない

黒いバンダナ、ジョ~~~~カ~~~~!!  
それを迎え撃つのは前大会覇者、青髪青眼、激寒の氷豹、氷の剣聖  
ヴァロルシアス!!!!」

禅大会覇者だと？

よほど座禅を組むのが得意なのか？

静発性癌って、どんな病気だ？

いつの間にか癌にかかってたってことか？

五区間の批評？

五つの区間で批評されてるのか？

なんか、可哀想だな……

「降参してくれたのなら嬉しい」

こいつが、座禅組んでたら、癌にかかってて、5つの区間で色々  
言われてるって奴は。

とりあえず、説明入れとくと、背の高さは俺の背伸びぐらい、体格

は細め、小顔、美形、青い目に青い髪が少しかかっている。  
とりあえずイケメン＝俺の敵。

「私は、剣聖の名を持っている。  
氷系統魔法は、かなり習得している。  
極術も全ての型を覚え、扱う。  
降参してもらいたい」

「俺だつて、右手の人差し指はライター。  
魔法だつて使える。  
無系統の基礎」

あれ、なんかしょぼくないか？

「フツ。笑う気もなくなるな。  
降参するのか、しないのか？」

降参？

凄そうだからするか？

いや、こうしてここまで上がったのかも知れない。

ここはまず相手の実力でも測ってみようか。

「お前の目的は何だ」

これは聞いておかないと。  
俺が聞かれたときの言い訳にするから。

「目的、か？」

(ヴァロルシアスだったと思う) 男は目線を落とした。

「私は、両親を魔王に殺られたんだ。

魔王は、勇者にやられた。

そのことは知っている。

でも、私は両親の敵を討ちたい。

でも、相手がいない。

だから、俺は魔王を復活させて殺してやる」

おまえ、頭大丈夫？

「それには、石盤が必要だと聞いた。

それを、この王が持っていることも。

だから、優勝して手に入れる」

はい、はい。

「降参しないっす」

「仕方がない」

ヴァロルシアス(以下、俺の敵)はどこからともなく俺の身長ぐら  
いの剣を取り出した。

『うお、あれは、精霊武器じゃな』

ソウ、起きたの？

「一応言っとくけど、変な事は止めてね。

んで、それって何？

『精霊が武器になるのじゃ。』

我はならんぞ』

あ、っそ。

俺の敵がその剣を振ると、青い衝撃波が飛んだ。

「ダック！」

俺からも衝撃波が飛び、俺の敵の衝撃波を相殺する。

そして、その衝撃で風が生まれる。

俺の髪がぼさぼさっとゆれる。

対して、俺の敵の髪はさらっと揺れ、目を片方つぶり、手を髪に添えた顔がなんともむかつく。

観客の叫びも、今までとは多少違う気がする。

「そういうえば、無系統の基礎は出来ると言っていましたね。しかし、基礎としては威力がありすぎる気もしますが」

俺の敵（以下、クソやろう）は少し笑った。

「とっととやっつけてしまいませんか」

クソやろっの剣が、根元から氷に覆われる。

「はっ！」

その剣をこっちに向けて突っ込んできた。

剣勝負か、面白そうだ。

色々と予定変更して、二刀流の神様の、投げた方の剣（後で返そう  
と思っていた）を、適当に構える。

「ソラフ！」

カンッ！

氷がかかる、しかし欠けた所から再生する。

剣を受け止められてもなお、クソやろっは剣を押し。

「はぁ！」

カチッ！

神様の剣が一瞬で凍りついた。

冷たすぎて、俺は剣を放した。

目の前で剣が振り下ろされる。

冷気が鼻先をかすめる。

危な！！！

しかし、攻撃は止まない。

はあ。疲れるな。

「ビスタ！」

動きが0.5秒ぐらい止まった。

その隙に後ろに下がる。

「クソツ！サーズ！」

氷の弾丸がいくつか飛んで来た。

丁寧に消すのも面倒だな。

俺は、自己加速のご加護もあったので普通に避けた。

俺は、魔法を使って隙が生まれたクソやろうに突っ込んだ。

そして殴り飛ばしてやろうとしたとき、

「サーシャント！」

俺の目の前に氷の壁が現れた。

ドンッ、と鈍い音がした。

いたたたた。  
冷たたたた。

氷の壁は消え、襲い来る氷の剣。

それを、右手で溶かす。

「ん、何！」

そして、剣の根元に触れる、いや、触れようとした。

剣は消え、クソやろうの足元には・・・リス？

まあ、白ベースに、青い縞が入ったリスがそこにいた。  
シッポの先が焦げてるのは、俺のせい？

とりあえず、剣が消えてバランスを崩したクソやろうを蹴っておいた。

クソやろうは吹っ飛んで、落ちて、少し経って、氷の羽で戻ってきた。

・・・・・・は？

「ふ、やられた。

まさか、リブがビビッてしまうとは、面白い。

今回は、君の勝ちです。

ありがとうございます。

来年は負けません」

リスは、クソやるうの方へ走って行ってポケットに潜り込んだ。

クソやるうは、リスの頭を撫でて、飛んで降りた。

俺も降りるか、と思ったその時だ。

バーーーーーン！

俺が、修学旅行の夜に寝てる友人の耳元で爆竹を爆発させた時ぐら  
いの音が鼓膜を揺さぶった。

3 - 6 大会最終日、後半（後書き）

はあ、やっと闘技会終わった。  
疲れた。

でも、まあ、ほどほどにがんばるんで、よろしくお願いします

3 - 7 陰謀色々(響きがいいよね)

闘技場に5匹のモンスターが流れ込んできた。  
見覚えのある黒いライオンだ。

下に降りると俺のほかにはウィーデー1人。

・・・出てたんだ。

・・・強いな。

まあ、特隊長様と同等に戦うのを俺は見たし。

しかし、ライオン5匹か。  
多いな。

『次、行くぞ。』

次は中級・・・はメンドイから上級行くぞ』

マジで？

『マジじゃ』

ガチで？

『がちじゃ』

ほんとに。

『主人、囲まれておるぞ』

あ、まあ飛べばいいじゃん。

『ビスタの上級はギラ・ビスタじゃ』

分かった、分かった。

「ギラ・ビスタ！」

目の前のライオンが、生きてんのか分からんぐらい、ぴたっと止まった。

おお、パチパチ。

『次はギラ・ダックじゃ。』

覚えやすいじゃろ』

「ギラ・ダック！」

噛み付こうとしていたライオンは吹っ飛んで、闘技塔を破壊してその瓦礫に埋まった。

『次はギラ・ギユマンダじゃ』

「ギラ・ギユマンダ！」

逃げ出そうとしていたライオンは、いきなり伏せの姿勢になって、苦しんでいる。

『次は、少し危ないが、ギラ・シャグツシャルじゃ』

最後の抵抗と、突っ込んできたライオンに向かって魔法を唱える。

「ギラ・シャグツシャル！」

目の前のライオンは消えた。

いや、ライオンがいたところにはビー玉大の黒い球が一つ。  
コロロン、と地面に落ちた。

ソウ？

何、今の？

『圧縮じゃ。加重の変形とでも覚えておれ。  
まだ来ておるぞ』

ライオンが突っ込んできたところからは、何十というモンスターが  
わらわら。

「観客、選手の方は、すぐに非難をお願いします」  
拡大された声が慌てている。

「よし、逃走っ！！」

俺は安全第一主義なんだぜ！

モンスター退治劇は順調に進んでいるようだ。

あの後すぐに、防衛隊が出てきた。

セラはいないようだ。

防衛隊たちは、1人1人はそんなにな、普通のやつだが、チームワークがものすごい。

塔の崩れずに残った部分から見下ろしていると、それが良く分かる。

1匹1匹を囲んで引き離し、少しずつ、だが正確に倒している。

凄いな〜と関心していると、1人の男が声をかけてきた。

「いい所だな」

びくっ！

おいおい、後ろからいきなり現れるなよ。

振り向くと、そこにはヴァロルシアスが立っていた。

「ん？何でお前が？」

足の間を、リスが走り回っている。

足に鳥の刺青がされている事に気づく。

見たこと、あったっけ？

「誘いに来たんだ」

「ん？誘い？」

「ああ、2つあるんだが・・・」

「1つは、ソーシャイルという俺の入っているギルドグループ」

「ん？ギルドグループって何？」

「ギルドで、依頼を受けるときに、いつも組んでいる仲間だ」

「ヴァロルシアスは、静かに一步近づいた。」

「もう一つは、ビオッチャ。」

「いわば、盗賊。」

「快い仕事じゃないが、お前なら、結構な報酬が入る」

「儲かるのか・・・いいかもしれない。」

「止めとけ、主人。」

「盗賊なんて物はやるもんじゃない」

「ん。」

「ソウがそう言ってもなあ。」

「主人の力なら、盗賊よりも儲ける事など簡単じゃ」

「・・・そっか。」

「ビオツチャは止めときます」

「そうか。ソーシャイルは、こっから北に行った、王国の端っこにいるから、来るなら歓迎だ」

「分かった」

ヴァロルシアスが飛んでいって見えなくなった頃、したから歓声が聞こえた。

モンスターは全滅し、防衛隊がはしゃいでいる。

そこに、王様らしき人が現れた。

ここからじゃ良く見えない。

塔の端っこで、しゃがんで目を凝らす俺の視力はB Cだ。そろそろ眼鏡だ。

その時、後ろから風が吹いた。

俺の足元の、石が崩れる。

あ、あ、あああぎゃ~~~~~!!

ドス!

俺は、5階建ての学校の屋上ぐらいの高さから落ちた。

「お、あなたは剣聖を破ったジョーカーさんでは」

王様の髪は、ぽっさりした体型に似合わぬ青色だった。

（『主人に、あちらに入られては困る。  
やってもらわねばならぬ事がある』）

（優勝を逃した上に、足止めは成功したが、防衛隊にやられるとは  
な）

はあ、なんか気まずいもんだなあ。  
しかし、これは異世界トリップの宿命か。

それより、ほんとにいいのか、俺で……。

……え？説明？

気が向いたらするよ。

今そんな事してると、へんなことしちゃいそうで。

さすがに、王様の前で、ご無礼をさらす訳にはいかない。

ただでさえ、ウィーディーいなくなったからお前が優勝とか言っ  
て、願いを聞いてくれるって言っただから。

しかも、国のお偉いさんたちが、20人ぐらいでこっち見てるんだ  
よ。

この気まずさ分かる？

「その荣誉をたたえ、そなたの願いを一つ聞いて差し上げよう」

しゃーないな、一回だけだから、しっかり聞け。

あのと、防衛隊に囲まれて、この部屋に。

赤い絨毯の上で待たされて、1時間ぐらい経って、偉そうな人た  
ちがぞろぞろ。

最後に王様がでっかい椅子に座って、この状況。

なんか、もう、王様暗殺どころじゃないよ、まじで。

『主人、王の近くにいれば良い』

う、うん。

「じゃあ、

」

「王様の前で被り物かよ。  
ずいぶんと偉そうじゃないか」

「おいつ、止める、カルフ」

「あ、いえ、はずします」

俺は、俺の服を傷だらけにしたバンダナを取った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「こいつです！脱獄犯は！」

お、お前は、なつかしの槍A。

「言葉が通じないのでなかったのか？」

「だから言ったのじゃ、こいつは魔王の生まれ変わり」

「いや、勇者と関係のあるものかもしれん」

「ほんとに脱獄犯なのか？」

「鑑定機の用意を！」

「いや、即処刑じゃあ〜！」

「おいおい、爺さんあせるなって」

「あ〜も〜だり〜」

なんか、王国も適当だなあ。

「静まれ〜〜〜!!」

王様の言葉で、あたりはいつきに静まり返った。

その静けさを破る音が。

ボタン!!

「王様、姫様が誘拐されました」

「フウ〜」

『どうした、主人』

いや、このままじゃ、再投獄なんてことも。

『主人なら抜け出せるじゃろ』

まあ、そうだけど。

『それにしても、客人ほったらかしで姫様の救出とは、どんだけ大切なんじゃないだろうか』

俺の父さんも、妹には優しかったぞ。

俺なんか気にも留めてなかったけど。

『主人、家族と離れて寂しくないのか』

いや、嬉しいよ。

どんな小鳥もいつかは親の元を離れるのさ。

『主人も変なやつじゃのう』

よく言われる。

「どんな小鳥も、いつかは親の元を離れる」

俺の目がうるうるしてたのは、秘密だぜ。

その天井裏で。

「どうだあいつ、やれると思うか」

「おいおい、こっちは4人、あつちは1人だぜ  
この姫様に一人付いても、3対1だ」

その姫様は天井裏の隙間から下を見ていた。

そこにいるのは男1人。

年齢は私よりも少し上だろう、と推測する。

縛られた体を動かすと、そこにいるのは大柄な男が4人。

このままじゃ、あの人がやられる。

でもどうする事もできない。

あせる彼女に、小さな声が聞こえた。

「どんな小鳥も、いつかは親の元を離れる」

さてと、寝るか。

疲れたし。

俺が赤い絨毯に寝そべったとき、上から男が降ってきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・、  
・・・・・・・・・・・・・・・・、  
・・・・・・・・・・・・・・・・。

『よし、次の実験台じゃ！』

は？

『次は、ギラ・バライスじゃ』

はあゝ。しょうがないな。

ストレスもたまってたし。

「セナスノウ、切れる？」

セナスノウは、彼女の精霊だ。

ウサギの形をしていて、一応弓になる事ができる。

「キューーイ」

あれはたぶん出来るという事だ。

しかし、安心は出来ない。

下を見ると少年と、男四人が向かい合っていた。

しかし、少年は焦りの色を全く見せない。

その少年が徐に口を開いた。

「ギラ・バライス」と。

ギラ・バライス。

無系統、上級。

拡散の魔法。

戦いどころか基本使うことはない。

使うとすれば、水、風系統の魔法を弾けさせて避ける、攻撃するぐらいだ。

魔法使いが100人ほど集まれば、人を弾けさせるなんてことも出

来るが、まさかそんな事は出来るはずがない。

しかし、そのまさかが起こることも良くある事で。

先頭の男が弾けとんだ。体のあちこちが無造作に吹っ飛び原型が分かる物は、靴の先だけだ。

彼女は息を呑んだ。

ありえない。

逃げ惑う男たちは、静止の魔法で動きを止められた。

その時、セナスノウの前歯が縄を切る音が聞こえた。

おい、ソウ、これはやりすぎだ。

何であんな事を。

「いや、普通の魔力じゃったら、少し衝撃を受けるだけのはずじゃった。」

いやはや、主人の魔力は純度も高いのう。  
あ、今のは拡散の魔法じゃ。』

3・7 陰謀色々(響きがいいよね)(後書き)

16まで帰省します。

楽しみに(しなくてもいいから)待っていてください。

### 3 - 8 ナナレンジャーの正体

「ありがとうございます」

今、俺は王国の王様に頭を下げられている。

ここは、さっきの部屋より1つ上の階の王女様専用のお部屋。さすが王女の部屋で、色々和高そうな物がちらほら。

「いえ、たまたまというか、偶然というか、悪魔のささやきが聞こえたというか」

「ありがとうございます」

次に頭を下げたのは、王女のサフィー。

その横には青いウサギが座っている。

「それと、謝らなければならん事がある」

王様は頭を上げ、けわしい顔で話し始めた。

「実は、あなたを召喚したのはサフィーなのじゃ」

「あ、別にいいです」

「そのことについて、1つ謝礼とお礼を・・・へ、何か言います」

「いえ！是非お願いします！」

こんなチャンスをみすみす見逃すような俺じゃない。

「そうですか。」

では、王城防衛隊に入って貰いたい」

「・・・」

王女の部屋に沈黙が3つほど流れる。

は？

いったい、どこら辺がお礼なんだ？

お礼要素がどこにも見あたらないぞ？

「そつ、それは良いですね、お父様」

「ああ、そうだろう、サフィーなんていったって、とても名譽な事だからな」

「そうですね、それに、給料も良いですし」

「・・・・・・」

「それに、城の横の寮で、三食と希望者にはデザートがでるし・・・

「

「そうですね。それに・・・お父様の護衛の仕事が出来ますし・・・

「

冷め切ってる俺の方をちらちら見ながら、2人は必死だ。

「いえ、いいです」

「そうか、入ってもいいか。

それは良かった。

じゃあ、頼むよ。

夕飯は、1階の食堂で用意させてるからな。

今日は城に泊まっていくと良い」

いきなり立ち上がり、部屋から逃げていく王様。

おい！

なんなんだこれ！

訳分からんぞ！

部屋に俺とサフィー残される。

「あの、ほんとにすいません。

勝手に呼んでおいて、兵士やれなんて」

サフィーはベットに座って話し始めた。

「お父様に悪気はないんです。

ただ、私が安全にすごせるようにと思ってくれてるだけなんです」

ああ、よく聞くあれね。

父親はみんなこうなのかね。

「そのために、夜のお城は防衛隊だらけで」

ああ、体験した。

「どうか、お父様を殺したりしないで下さい」

前にも言われたような気が。

って、はあ？

それを言う事が失礼だとは思わないのか。

あきれて目をそらした先には、真つ二つになった丸い石の板が。

・・・あれ？

あれって、俺の脱出の時に使った石盤じゃね？  
なんか、割れてね？

「はは、はっはははは・・・そんなことしないよ。  
じゃあ、俺は夕食に行くよ」

ジョーカーさんは行ってしまった。

「お父様を殺したりしないで下さい」

頭の中で自分の言葉を繰り返す。

本当にあんな事を言ってよかったんだろうか。

確かに、その可能性はある。

いきなり召喚されて、牢屋に入れられて、いなくなったと思ったら帰ってきた。

復讐に来たのかもしれない。

それに、嫌がっているのを勝手に兵士にするとか言っただけで、本当に勝つてだ。

「お父様にも困っちゃっよね」

サフィーは精霊を撫でながら言った。

セナスノウはキューイと鳴いて、サフィーの指をなめた。

部屋から出た俺は食堂へと向かった。

そこで俺は周りの10倍は豪華な夕食を食べきれず残り、久々の風呂へと向かった。

くそっ！ケーキみたいなやつを食べずに残して置いたのに。食べ切れなかった！

次は絶対に最初に食べてやる。  
母さんの言いつけなんか守らないぞ！

んで、さすが城！

水だったが風呂があった。

シャンプーなどなしのただの水の入ったデカイ桶で、ここの世界には体を洗うという概念がないのかと心配したが、その必要はなかった。

風呂上りに男の人が3人出てきて、魔法で服ごときれいにしてもらった。

この城の待遇は驚くほど良いが、しかしそれも俺を防衛隊に入れるためなんだろう。

時々見た兵士の、扱いの雑さでよく分かる。

んで、今俺は自分の部屋へと向かっている。

案内してくれているのは50ぐらいのやさしそうなおばさんだ。

元の世界では、人気の割りに見れなかったメイド服が似合っているあたりから、相当のベテランだろう。

「大会の優勝者は、いつも王城の専属防衛隊になるんですよ。相当、人気があるんですね」

いや、違う。

それは違うぞ。

「去年の優勝者は、魔王を復活させるとか言って出て行っちゃいましたけど」

あいつ、何やってんだ、ヴァロルシアス？

しかも懲りずに今年も来て。

・・・そういえば、魔王を復活させる何とかが在るとか言ってたっけ。

「それに、皆さん最上級の部屋に案内されるのに、毎年ふつつの寮でいいと言ってるらしいですね」

はあ。

ありがたい言葉、なのか？

俺のこれからの流れが見える。

「あ、そうそう、この大会の初代の優勝者はあの勇者様なんですよ。

その後、行方をくらませたとか」

階段を10回ぐらい上ったとき、メイドのおばさんは廊下の方へ歩き出した。

その上にも階段は繋がっている。

こんなに広いのに、よく決まった部屋が見つけれられるもんだ。

俺なら迷子確定だな、うん。

そこからさらに廊下を3回ぐらい曲がったところでメイドのおばさんは止まった。

「ここがあなたのお部屋です。

ゆっくりと休んでください」

んな！

静けさと暗闇が渦巻き支配する空間。

窓から流れってくる生暖かい空気。

星の明かりが、照らす部屋の一角。

そして、襲い来る尿意。

あわあわあわあわ・・・

ヤッツツツツベーーーーー！！！！

トイレ行きたい。

マジで行きたい。

クソ、夕食の時、クツシユの果汁ジュース飲みすぎた。

こんな事ならあのケーキを食べておいたのに。

クソ、クソ、クソ。

トイレの位置とか聞いてないって！

.....。

はあ。

俺は何事もなく眠りに付き、何事もなかったこ焼きがブレイクダンスをする夢をみたのだが、大技が披露される前に尿意によって起こされた。

結果、俺はみんなが寝ている巨大な城で1人ぼっちで、トイレに行きたいという悲劇的な状況に陥っている。

問題点としては、トイレの位置が分からん。

一人でこの城をうるつくのは怖い。

たこ焼きの大技を見てない、ぐらいだろう。

1つ目の問題点で絶望的なのに、さらに2つの問題だべ。

泣きっ面にあるていめつとばずーかに七色ビームだべ。

あるていめつとばずーか；アルティメットなバズーカ。

七色ビーム；七色戦隊、ナナレンジャーの最終奥義。

それと、ナナレンジャーのメンバーは……

つと、話が脱線した。

ナナレンジャーの123話、ナナイロマシンの「ワープ失敗」の時間ぐらいに脱線した。

んで、そっから尿意はどんどん強くなっていき、俺はこの部屋から旅立つ事に決めた。

「とりあえず、一階かな？」

ん？

なんだ、この扉？

えっと、目の前にはデカイ扉。

なんだ、トイレじゃないのか。

俺は、誰かに会いますようにと階段を恐る恐る降りてここまで来た。

窓から見える眺めからして、1階まで来たんだろう。

適当に廊下をうろろろしていると、扉が現れちゃったというこの状況。

トイレじゃないならいつか、と思い歩き出すが2歩進んで踏みとどまる。

出口なら。

もし出口なら外でやるという手段があるのではないかと。

そして俺は破裂しそうな膀胱を押さえながら、その扉を開けた。

予想より軽かった扉を開くと中から叫び声が。

「だ、誰じゃ！？」

「うおっ！」

ミスッた。

ビックリしすぎて声（＋）（－）が少しもれてしまった。

そこに居たのは王女誘拐の前の、部屋に居た気がする、髭を伸ばしたおじいさんだった。

部屋には、ろうそくの明かりが点々と光っている。

本棚が並び、大きさは学校の図書館2つ分ぐらいだ。

「それが、魔王じゃ」

「そ、そっすか」

いや、そんなにはっちり断言されても。

第一、聞いてないし。

ええっと、事の始まりは、ナナレンジャーの1話分ぐらいさかのぼる。

ちなみに、21分だ。

CM込みで21分だ。

深夜3時49分から4時10分までだ。

テレビ番組がないときは、何を放送してるのかとテレビを着けたのが始まり……

……へ？しつこい？もぐ、せつかちは困るわあ。

てなわけで、部屋に入ってすぐに椅子に座らされて、話を聞かされることになった。

それは爺さんの謝る姿から始まり……… 回想スタート

「すまなかった。昼はカルフがいきなり変な事を。

あいつは、何も考えてないバカ息子でして。

黒髪を隠すためのバンダナとは想像がつかなかったらしく。

ほんとにすまなかった。

あいつは、魔王のお気に入りですわ」

「魔王のお気に入り？」

「あ、あなたの居るところでは使わない言葉ですかな。

悪さばかりするやつを言う言葉でして」

「魔王ってなんですか？」

「え、はあ。

だいぶ遠くからおいでのようなので。

魔王は今から150年ほど前に現れた、悪の魔術師で50年ほど世

界を恐怖に陥れたのですが」

「ですが？」

「100年ほど前に、いきなり現れた勇者と人類の最後の希望と謳われた、9人の英雄によって封印されたのです」

以下省略

そっからは、魔王の使った魔法や、容姿、英雄たちの話、などなど意味のない話がだらだらと・・・

「それが魔王じゃ」

「そ、そっすか。・・・あの、トイレの場所教えて下さい」

「図書館を出て真っ直ぐじゃ」

「ありがとうございます」

こうして、俺の城内探検は終わった・・・はず。

### 3 - 8 ナナレンジャーの正体（後書き）

いやあ、道がすいてて書く時間が出来ちゃったわ。

そろそろ折り返し地点・・・の予定。

ここで、意味もなく質疑応答コーナーを勝手に作ります。

質・質疑応答コーナーってなんすか？

応・本編で書き忘れてたり、自分で話を読んでみて、矛盾があれば言い訳するためのコーナーです。ノリ、というか気まぐれ、まあ、作りたくなつたから作ったもんです。

どンドン無視してオツケーです。

### 3 - 9 なぜかハーレムな防衛隊1日目

………眠い。

「はい、次は防衛隊の心構えです」

今、俺は美人教師の個人レッスンを受けるという、俺人生最高の瞬間の1つになるだろう状況に陥っている。

しかし、内容が……

俺、いつ防衛隊やると言ったよ？

あ、あと眠いのは、昨日トイレに行った後、自分の部屋が分からなくなり、城の中を探し回っていたら、自分の部屋より先に太陽が出てきちゃった、という悲惨な過去ゆえです。

その時、俺の居る部屋の窓から王様と女王様の姿が見えた。

「ん、あれ何ですか？」

「……防衛隊はそれを実行する重い、へっ？」

「なんか王様と女王様が怪しい乗り物に乗ろうとしてるんですけど。俺の幻覚ですかね？」

睡魔のほんの悪戯ですかね？」

俺は外を指差していった。

「ああ、あれは四大大国会議に行くのよ」

四大大国。

一応聞いたことはあるような。

確か、この大陸の中にはでっかい国が四つあって、ここは南側だったかな。

まあ、いつか。

なんだかんだ、やろうと思うことが全くない俺。

勝手に連れてこられて、勝手に誘拐されて、いつの間にか国を一つ潰してたり、勝手に不正町長殺人に首突っ込んだり、変なサイボーグが付いて来たり・・・ウィーデーは？

・・・まあ、いつか。

俺は面倒な事は気にしない主義だ。

これから先も、お城に仕えるのも悪くないかもな。

そう思うと話もしっかり聞いとかないと、とか思う。

「あの、すいません。

聞いてなかったんで最初からお願いします」

講義は昼には終わり、朝と同様に豪華な食事を食べ（今回は、美味そうなやつから食べた。俺の流儀には反するが）、午後は王城防衛隊の皆さんと、城下町をぶらぶらする事になった。

んで、メンバーの紹介をしとくとだな、まず俺を含めて5人。

俺、アンナ、ベル、キャンド、デグリアだ。

男女比は1対4だ。

この国は、女が居れば男は必ず釣れる！、とか考えてるんだろうか？  
なんとも不安になる。

でも、いつか。

別に不都合な事は何にもないし、あつ、違う。

俺は王国の美女に釣られたわけじゃない、ただ、少しの間だけ王国の機嫌を取っておこうと考えたんだ。

無理やりと思うかもしれないが違うぞ、時期が着たら離れるぞ。ここを。

「ジョーカーさくん！

防衛隊になるんだから武器でも見ていきませんか」

「うん、分かった。  
ほら、二人とも食べ物を買ってきてくれたのに、腕につかまっちゃ  
食べれないよ。」

あ、ベル、冷気の魔法はもう良いよ、涼しかった、ありがとう。  
キャンド、今行く！」

うん、これは、今だけだ。

ちょっと相手してやってるだけだ。

ずっとこうしていたい、とか考えてないぞ。  
夜の期待とかしてないぞ。

第一俺はまだ高二だ。

彼女が居た記憶はない。

いや、見当たらないだけで、実はある。  
きっとそうだ、さすがに寂し過ぎる。

ってな訳で、入った武器屋さん。

壁中に剣がずらりと並んでいて・・・俺って剣とか使えたか？

「ジョーカーさんは武器は何を使うんですか？」

腕を掴んだまま話しかけるアンナ。

「うん、蹴るとか殴るとか」

「へっ?」

「蹴るとか殴るとか、まあ一応魔法も使う」

「あ、魔法使いさんですか。」

初めてです、魔法使いの闘技会の優勝者なんて」

「ん?そーなの?」

「はい、剣も魔法もつかう、なんて人はよく居ますが、魔法だけで優勝しちゃうなんて」

「ふうん、じゃあ武器屋よりも精霊屋かな?」

横から入ってくるデグリア

「正礼也?誰?」

「精霊を売ってるお店ですよ、知らなかったんですか?」

「ん、まあ精霊なら、一匹俺に取り付いてるしな」

「へ、どーに?」

ソウ、出てきて!

『ふあああああ~~~~あ~~~~ああ。ん何じゃ?』

今から私の暗黒魔法が炸裂するところじゃったのに、起こすな』

いや、ごめん。

ってかどんな夢を？

『我が心の底から憎むやつらが出てきての』

あっそう。

まあ出てきてよ。

『仕方ないの』

すると横に現れる赤い髪の女の子。

「おい、ソウ？

何の冗談だ。

俺がいちやついてたのに焼きもち焼いてんのか？」

「ん、あ、あ、ち、違う。

これは寝ぼけてただけじゃ。

忘れてくれ」

そう言った瞬間に女の子の姿が猫に変わった。

「ん、ああ、すまない、待たせたかな？

んで、これが俺の精霊だ」

と、普通に紹介する俺。

ありゃ、4人の目がソウに釘付けだ。

猫好きか？

「どっから出て来たんですか？」（キャンド）

「いや、そこよりジョーカーさんと精霊が話していた件について（ベル）

「人間に変身するなんて、すごい」（アンナ）

「か、可愛い」（デグリア）

「我ぐらいの精霊なら当然じゃ」（ソウ）

「……………」（俺）

その時、店の中に一人の男が入ってきた。

「防衛隊の皆さん！

預かり屋が襲われました！」

えっと、預かり屋とはですな。  
人々の持ち物を預かってですな、金を取るというよく分からんものらしいっす。

んで、なくした物は絶対弁償で、まあここからしたら日本なんて神的に治安が良いわけで、あきす、泥棒、などなどあるらしく、結構、儲かってるとか。

預けたものを取り出すときは、預けるときに決めた番号を言うだけ。  
そんな物らしいっす。

んで、結構高い物とかも預けられてる訳で、重要な物とかも預けられてる訳で、襲われたら結構とまずいみたいで、まあ大変ですな。  
それで、俺たちはそこに向かっていてるところです。はい。

知らせが入った途端に周りの4人の雰囲気はさっきとはガラリと変わった。  
露出が多いなあ、と見とれながら見ていた服装は動きやすい様になっ  
っているらしい。

預かり屋に近づくとつれ、あたりの様子は変わっていった。

人々は、預かり屋のものを奪ってやろうと預かり屋に向かうものも居れば、その騒ぎから逃れるようにと走っている者も居る。

その中を誰よりも速く走る5人。

たどり着いた預かり屋は、一角がえぐりられ、その中には防衛隊と軽装にナイフを持った集団が交戦していた。

そこから中に入ると、そこは一つの大きな部屋だった。

部屋から伸びる道の先にはそれぞれに扉がたくさん見える。

敵の数は20ぐらい、防衛隊は30ぐらいだろう。

状況は防衛隊が有利に見える。

入ってきた5人に気が付いたのだろう、1人の防衛隊が駆けて来た。

「ここは、何とかなっています。

あなたたちは奥へ向かって下さい」

俺以外の4人は小さく頷き、走り始めた。

俺は………行かなければならないんだろう。

治安を乱すものは排除する。

今朝教えてもらった言葉だ。

俺はその言葉に従い4人の後を追った。

んあ、あゝ、はい、中継、「俺」に変わりました。

戦闘描写、入れる？

まあ入れとこっか、うん。

頭の中では赤い悪魔ことソウ（本名ソウセキ）が叫んでいます。

はい、色々と、この魔法使えとか、あの魔法使えとか。

しかし、無視している

というか、「しかし」でもないな。

「とうぜん」のほうが正しい。

んじゃ、もとい！

当然、無視している

だって危ないもん。

おそらく、ボコボコしぬ。

俺はまだ人間でありたい。

『すでに人間は越えてると思うが？』

んな訳で、俺は後ろの方から静止の呪文（上級になれば結構な時間止まる）で援護してます。

『我は無視か？』

それにしても、4人が強い。

マジで強い。

アンナの激しい長剣。

ベルの正確な氷系統魔法。

キャンドのなめらかな短剣。

デグリアの綺麗な弓。

まあ、俺は後ろで同じ単語を繰り返してるだけだが。

しかし、不思議なのが、4人が同じ相手と戦っているらしいところだ。

この4人の相手を同時に出来るなんて相当のやつだろう。

雑魚たちは拾ったロープでだいたいグルグル巻きにしといたから、そっちに向かった。

そこで見たのは、流れる金髪と銀色のスプーン……………は？

「おゝい、ウィーディー！」

「何やってんだ？」

4人の動きが止まる。

全員こっちをにらむんだが、さっきまでの子犬のような上目遣いとは1800度違う。

「あなたは、ジョーカーさんですね」

「何やってんだ？」

「その連中がここにスイーツが大量にあると言いました」

「んなもんはないと思うぞ。」

「疑わなかったのか？」

「確かめてから、嘘なら殺してやればいいと思いました」

ひどく淡々としていて怖い。

「はあ。あつ、こいつは俺の連れだ。」

「すまなかったみたいだな」

『変なサイボーグと言ってたくせに、ちゃんと肩を持つんじゃない』

「ん？やっぱり、焼きもち？」



3・9 なぜかハーレムな防衛隊1日目(後書き)

楽しいな、もう魔王とか止めてハーレム物語にしちゃおっかな。

質・真剣に書く気ないの

応・うん・・・また今度ね

3 - 10 石盤のこと知ってた人々？

「はあ、で、防衛隊はこういいうときはどうするんだ？」

今居るところの敵は全員とっつかまえてウィーディーは大人しく立っている。

敵は体に鳥の刺青をしている。

ヴァロルシアスと同じやつだ。

ヴァロルシアスの姿はないが、これが彼の言っていた盗賊団だろう。

「はい、全員防衛隊の宿舎にある牢屋で監視、状況が分かり次第処罰されます」

「んじゃ、こいつらを引っ張っていったら良いのか」

入り口の方もだいぶかたがついたようで、静かになった。

俺は力とかないんで、一番軽そうなやつ一人を引きずろうとした。

「ふふふはっはっはっは」

ん、壊れたか？こいつ。

「防衛隊もこんなもんか。

くはははは……」

こっちが囿とも知らずに一生懸命頑張ってくれて、ありがたいねえ」

他の4人が駆けてくる。

「どうということだ？」

この4人が防衛隊なのかさつきまで信じられなかったが、かなり洗練されている動きと言葉でそんな疑いはどっか行かざるを得ない。

「くふふふふ……狙いは、城だ」

「城には王も王女も居ないはずだが」

「そんな事は知っている。

四大国会議に行ったのだろう。

そのせいで、守りがほとんどない事も分かってるぜえ」

「なぜそれを知っている。狙いは何だ！」

アンナは剣を突きつけながら言った。

「狙いは……石盤だ」

男はそれだけ言うと、いつの間にか開けた縄の隙間から手を出し、アンナの剣を自分の喉に突き刺した。赤い血が飛び、男は動かなくなった。

石盤って、あの割れたやつか。

俺が投げた後、誰かが踏んで割れたやつだな。

たぶんそうだ。

名探偵の俺が言っただから間違えはない。

んて事は王女様の部屋か。

「石盤とは何だ・・・」

一人つぶやくアンナ。

とりあえず教えておくか。

「サフィーの部屋にあったよ」

アンナは驚いた目をこっちに向け、

「ベル、キャンド、デグリア、城に向かうぞ！」

「了解」「」

「んで、昨日の夜はここにあった」

昨日石盤があったところには、石盤を立てていたと思われる鉄の器

具がポツンと残されている。

まあ、ドアがぶっ壊れてるあたりで予想していたけど。

「昨日の夜は、か……んな、貴様、昨晚姫様に何を!!」  
(アンナ)

「あら。ずいぶん、早いこと行動に出たもんだ」(キャンド)

「じゃあ、私たちの今日の仕事はいりませんでしたね」(デグリア)

「説明を」(ベル)

おい、止める。

アンナは剣を降ろせ、危ない、って近づいてくるな。

それ以上は俺ゾーンだぞ。

入ってきたやつは聖なる力で消えてしまっただぞ。

「いや、違うから。」

全く、全然、全て、まるつきし違うから」

「だから今日の姫様は悲しい顔を……なんてひどい」

俺の必死の抵抗も、彼女たちには届かない。

「だからちがう！」

それよりも、石盤はどうするんだ。

なんか、国の防壁から離れるように、平原を走っている馬車的なも

んが見えるんだが」

つと、俺は外を指差した。

その先にはデカイ馬が小さめの馬車を猛スピードで駆け抜ける姿が。

「間に合わないな」(ベル)

えつと、はい、今、臨時防衛隊会議たるものが開かれております。

場所は俺と王が始めて合つて、俺が王女様を救っちゃったところで  
す。

人数は・・・ひー、ふー、みー、やー・・・15人です。

王様が姫様の護衛のために200人ほど持ってきました。

・・・いや、どんだけだよ。

城の中のほとんどじゃないか。

んで、俺が中心になつてこの状況。

「・・・じゃあ、何で馬車が出て行ったんだ？」

「それが・・・」

目の前に居るのは、さっきから冷や汗をかきまくり、顔色まで悪くなってる、門番の防衛隊。

「はい？それが？」

「実は、カルフ様に賭博場に連れて行かれて」

「んで、カルフって、あの爺さんの子供の？」

「はい、よくあるんです。」

勝手に防衛隊を自分のために動かしたり」

「なんでそんなやつが国のお偉いさんやってんだ？」

「それが、あの人51歳ですでに王国の最大の貿易会社を実質支配  
していて」

「51歳!？」

いや、どう見ても20過ぎが限界ではないのか？あの顔からして？

「はい。」

なので、簡単には逆らえないんです」

あっそ。

「んで、あの石盤って重要なの？」

「それが、その石盤の存在は知らなかったもので」

「あ、そうなの。」

「はい、知ってた人は手を挙げて」

はい。

ん？

あれ？

手を挙げているのが俺一人？

何で俺しか知らないんだ？

「サファイアの部屋に入ったことがある人！」

と聞いても誰も手を挙げない。

「あの、姫様の身の回りの世話をしていない、私たち防衛隊は・・・

」

あ、そっか。

「んじゃ、姫様の部屋に入ったことがあるもの、呼んできて」

『ずいぶんと偉そうじゃな』

ソウ、まだ焼きもちやいてんのか。

まあ、今は眠すぎていらいらしてるんだ。

第一こつちの時間には体が合わん。

睡眠時間が5時間で、またすぐに夜が来る。  
でも眠くなくて眠れん。

んですぐに朝が来て、眠気が最頂点に達するのは昼間。  
我慢して夜になってもすぐに朝。

新たな種類の時差ぼけか？

さらに今、夜だし。

んで、待つことナナレンジャーの1、5話分ぐらい。

ナナレンジャーCMやたら少なかったけど、スポンサーが付かなか  
ったのかな？

まあ、あの時間に誰が見るんだ、って事だけど。  
よくやって行けたな。

ん？聞きたくないの？そうか、しかたないな。

待つこと30分ぐらい、メイド服のおばさん、おねえさん、少女、  
などなど。

「ええっと、サフィーの部屋にあった石版のこと知ってる人？」

一人が前に出てきた。

「はい、脱獄犯がでた次の朝に姫様の部屋にありました。最初から割れていました。」

いえ、この城の牢が危険なわけではありません。

ただ、あのときの脱獄犯は黒髪に黒い目、見たこともない服装で、悪魔の類じゃないかと噂されている・・・」

「あ・く・まじやない！俺は人間だ！

罪もないのに牢屋に入れるこの国が、悪魔だ！」

「説明を」(ベル)

「少し前に脱獄したのは俺だ！」

そう言っつてバンダナをはずした。

黒い髪がもしかもしゃと・・・髪、伸びたかな？

その瞬間、周りの人の目が恐怖や怒りや驚きで染まる。

「あ、あなた、何なの。」(アンナ)

「説明を」(いつも冷静なベル)

ん、こついう場合、別の世界から来たつて言ってもいいのか？

それは極秘にして置いて、時期が来たときに、正体を明かしたほうがいいのか？

まあ、いつか。

「俺は、青葉高校2年C組み、出席番号16番、楽しさを追い求める永久の遊び人ジョーカーだ！」

気がついたら、日本つてとっから、ここに連れてこられていた。サフィーの魔法の失敗だとかなんとか！」

いきなり静まり返る部屋。

「俺はもう寝る」

気まずくて死にそうだったので、俺は部屋を出た。

あれ、俺の部屋どこ？

「はあ、大変な事になったわね」(アンナ)

「ほんとに他の世界から来たのかね？」(キャンド)

「黒い髪なんて始めて見た」(デグリア)

「ここに来た理由がおかしい」(ベル)

王女専属防衛隊の4人は、防衛隊の宿舎で集まっていた。

「ほんと、王族が魔法を失敗する事なんてないでしょ」(アンナ)

「黒髪は、この世界にはいない」(ベル)

「いや、もしかすると、人里はなれた黒髪の集落があったり」(キャンド)

「聞いたことある」(デグリア)

「くくへ?」「」

「あ、いや、王族が魔法を失敗したってはない。

誰にも言わないですよ。

実は、姫様のおばあ様」

「アルメルナさんが?」(アンナ)

「うん、呼び寄せの魔法に失敗したって」

「そんな簡単な魔法を?」(ベル)

「うん、聞いた話では」

「そりゃないでしょ」。

だって、子供の頃から魔法が上手くて、魔王戦でも活躍したって話

「じゃない」「キャンド」

「そつだよね」

「それよりも、ジョーカーさんって何で姫様の事呼び捨てなんだろうね」「キャンド」

「やっぱり何かしら……」「アンナ」

その時、城の中で迷っていた俺はくしゃみを炸裂させていた。

3 - 10 石盤のこと知ってた人々？（後書き）

なんか、ネタばれしそうだから、深く考えないで下さい。

（まず、こんな話を深く考える人がいるのか疑問？）

質：あの4人の事を教えてください。

応：王女専属防衛隊。

王様が娘を守るためと、必死になって育て上げた4人組み。

その外見から、暗殺や情報収集などもやったりしている。

アンナは活発で明るい。剣を使う。

ベルは静かで冷静。氷系統の魔法を使う。サフィーと同じ水系統も使えるので、教えてたりする。

キャンドはのんびりやの様で情報通。言葉が伸びる。

デグリアは4人の中で最年少。妹のように扱われている。思ったことをそのまま言う。

はい、こんな感じにしときましようかね、はい。

とところどころ使えそうだな。

もしかしたら書くかもしれませんが、ベルと姫様とか、4人で買い物とか、4人の過去でも書いてもいいかもしれない。

はっ！長々とすいません。

3 - 1 1 俺の正体がついに明かされる(前書き)

速報が入りました。

サブタイトルと内容は関係ありません。

これから先も、そのつもりでいった方がよいでしょう。

この作者の勝手による津波の心配はありません。

### 3 - 1 1 俺の正体がついに明かされる

「んで、気がついたときには石盤はなくなっていました」

俺はまたでつかい会議室みたいな所に連れてこられた。

天井には姫誘拐犯の空けた穴が。

「ほう、つまり預かり屋が襲われ、そこに防衛隊が行ってる間に城に侵入され、サフィーの部屋にあった石盤がなくなった」

違う。

王様、あんたがやたら人を連れて行ったからだ。

「そして、預かり屋のほうは捕まえ、城のほうは逃げられた、と」

「はい、そうです」

今部屋の中に居るのは、俺、王様、サフィー、防衛隊の偉い人、その他偉い人、だ。

ん、俺だけシヨボイ？

「そうか。」

サフィー、その石盤は何じゃ」

「え、それが・・・」

こつちをちらちらと見るサフィー。

え、まさか割ってはいけなかった？

乙女のタカラモノだった？

「城で拾いました」

と、小さめの声でサフィーが言う。

「いつじゃ？」

王様の探索は続く。

「30日ほど前」

「どこで？」

「それが・・・ジョーカーさん！  
あなたですよね」

「ちやいます」

「・・・」

徐々に顔が赤くなっていくサフィー。

「でも」

「ちやいます」

「・・・」

すでに半泣きだ。

もともと可愛いんだが、この顔もなかなか……  
いや、そろそろ可愛いを越えて可哀想だな。

「意味もなく入れられた、牢屋でもらいました」

『毒舌じゃな』

ああ、今は眠い。

眠すぎる。

自分の部屋が見つからずに昨日は食堂で寝たんだが、朝ごはんの用意が日が昇る前に始まったんだ。

王様は朝から豪華なもん食ってんだろつな。

眠すぎる。

眠くて死ぬ。

眠気死にする。

『そうか、我が変わってやってもいいぞ』

いや、それは怖い。

目が覚めたときは大陸を占領してそう。

『まあ主人の体を使うんじゃから、変わらないの』

って、おいつー！

「黒髪が降って来たら怪しむだろ」

赤い髪を程よく伸ばし、服装も何だかチャライカルフがいきなり口を出してきた。

「主人、変われ。

我が粉々にする」

いや、待て待て待て待て待て（以下同様×100）。

落ち着け、相手は人間だ。

『我にとっての人間などゴミに等しい』

おい、待て、ここは俺に任せろ。

「んああ、何だと赤毛？」

……あ、ミス。

『主人も変わらんぞ』

「待て、カルフ。

悪いのはこつちじゃ」

さすが爺さん、いいやつだぜ。

「爺さんは魔王でも調べてろ！

必要になるかもしれないから」

「お前はいつも遊び呆けて、今回盗賊団を逃がしたのはお前のせいじよろうが！」

「爺さんみたいに屋敷にこもってるよりもよっぽど

」

「お前たち、親子喧嘩は他でやれ」

王様が止めに入る。

「あ、魔王を復活させるとか言ってた男が石盤の事を言ってたんですけど」

そこで、俺はどっかで聞いた話を言ったりする。

「なに！」

「ヴァロルシアスとか言ってたかな？」

「氷の剣聖か」

「うん、それ。」

確かギルドグループに入ってるって言ってた」

ふはははは。

あのバカは俺にしゃべりすぎたな。

すぐに牢屋行きだぜ。

俺をおどかした罰だ。

注、塔の上で離しかけられたときにちびるほどの、ドドドドドドです。

「よし、ヴァロルシアスをつれて来い」

そんな事が起こって、俺は防衛隊の宿舎（初）向かった。

まあ、俺は新人防衛隊な訳で。

楽しくお留守番だ。

俺は態度が大分砕けた4人にまた囲まれハーレム中だ。

「それで、ジョーカーって何なの〜？」（キャンド）

「俺？自分のやりたいことを貫く、究極の唯我独尊主義者ジョーカ  
ーだけだ」

「唯我独尊？」（文章になってないベル）

「自分を大切にすって事だ」

「なんか良いですね」(デグリア)

実際のところそうでもないがまあいいか。

「他にもあるぞ。

睡眠欲に追い回される永遠の逃亡者ジョーカーとか、  
ナナレンジャーの8人目を目指すドリーマー、ジョーカーとか、  
笑顔と驚きを振りまく奇跡の調味料ジョーカーとか、  
束縛と強制を嫌う孤高の狼、ジョーカーとか。」

「なんか凄い……。

でき、さっきの石盤の話の続きだけど、牢屋で貰ったって、誰から？」(アンナ)

「ん、ああ、ほっぺに鳥の絵が書かれた男が投げってきた」

「じゃあその人に聞けば良いんじゃないですか」(デグリア)

「あ」

「よし、行ってみよう」(キャンズ)

防衛4人の案内で牢屋に着いた。

牢屋は1つの道の左右に並んでいる。

この世界に来たとき、馬鹿な兵士と追いかけてこした所だ。

しかし、あのとき追いかけてきたやつは誰だったんだろうかな。

1本道だったのでその男はすぐに見つかった。

というか、溶けてる鍵があったので見つかった。

男は前にもまして痩せこけり、ぐったりしていた。

「おい、この前は石盤を持ち逃げして済まなかった」

その体が跳ね起きた。

「あの石盤はどこだ」

「あれは、お前と同じ鳥の刺青をしたやつらが持ってたぞ」

「そつか、なら良い」

「うん、そつちは良くてもこつちは良くない。

あの石盤何？」

「言えない」

「おい、俺は眠たいんだ、言ってくれ」

「言えないと言ってる」

「よし、痛みつけるしかない」

ソウ、ちょうど良いやつを頼む。

『ん、爪が徐々にはがれていくやつで良いかの？

それとも神経にそのまま痛みを与えても良いが、それは気絶するかもしれない』

出来るだけ、見た目から痛そうなやつで。

『じゃあ、静止の術を手足にかけ、浮遊の術で空中に張り付けにして、火球で全身焼きながら、回復の術で怪我は治していく、さらに意識を司る神経を軽く麻痺させ、気絶する事も許さない、ぐらいで良いかの？』

モチ!!!

俺の手が（勝手に）徐々に上がる。

そしてその手の周りに薄い光る円がいくつも生まれる。

その円の中に怪しい文字と図形が構成され始めて、その円が回り、光り始める。

「は、はなす!!!」

話す!!!

話す！！！」

ありゃ、必死の形相をした男が。

気がつくとも周りの4人も色々と・・・

アンナは口があんぐりだし、ベルは興味津々。

キャンドは20メートルほど離れてるし、デグリアは耳をふさいでしやがみこんで小刻みに震えて・・・  
多少まずかったのか？

ソウ、話すらしいからいいぞ。

『はあ、やりたかったのに』

すると俺の手の周りの円がシュワ〜と消えた。

「はあ〜、で、あの石盤は何？」

「あれは、魔王様が封印された石盤だ」

「は？」

「あの石盤に魔王様が封印されている」

「んで、何であいつらは持っていたんだ」

「ん、とうとう復活の儀の準備が出来たんだろっ」

「何それ？」

「全ての呪いを防ぐ勇者の剣で石盤の呪いを断ち切り、魔王を降臨させる」

「ほう。」

「んで、防衛隊はこういつ時どうすればいいの？」

と、振り返る。

「ジョーカー、あんたどんな世界から来たの？」（アンナ）

「ん、俺のやる事をみんなで邪魔しようとする世界」

「あんた……他の世界で魔王でもやってたの？」

「先ほどの魔法の説明を」（サファイアよりも濃い青の目を持つベル）

「さっきのは、多系統の魔法を連結させたのじゃ」（勝手にソウ）

### 3 - 1 1 俺の正体がついに明かされる（後書き）

夏休みの宿題を片付けに入る、ダラダラした少年幻治。

こんなかんじ？

質：なんでベルの時だけ、（冷静なベル）とかなってるんですか？

応：作者が個人的にベルを好きだからです。

これから先、魔王が復活しようとも、勇者が舞おう側に着こうとも、主人公まで舞おう側についたところで、ベルは怪我を負う事はありません。

3 - 1 2 返事がニヤイ(前書き)

短いです。すんません。

### 3 - 1 2 返事がニヤイ

「こんにちは・・・でいいっすよね」

あの後色々あった。

牢屋のおっさんが精神的に恐怖で崩壊するまで色々続き、分かった事といえば、

- 1、ビオツチャという盗賊団に入っていること。
- 2、石盤と勇者の剣が集いしとき、魔王の封印は開かれる!!!!
- 3、ビオツチャ盗賊団は、川上の洞窟でのんびりしちよります。

以上。

んで、このことを王様に報告するとか、しないとかになったんで、厄介ことは4人に任せて、んで今は暇になって城の中をぶらぶら探検していたら、王様のお母様に出会った。と。

んで、そのままおばあさまの部屋に連行、という過程を行い、今に至っている。

「ええ、もちろん良いわよ」

王の母様（こんな立場をなんて言うかしらん）は床に届きそうな青い髪に青い目で（王族は何かしら高貴な血統らしく、王族同士でしか結婚はしないらしく、みんな青い髪に、青い目らしい）若い頃は綺麗だったんだろうなあ。と、という感じのお方で。

「座ってください」

そう言っただけ進められた所には、白い、装飾が程よくされ、しかしゴチャゴチャはしておらず、調和が保たれている机に、同じく白い椅子。

王の母様の部屋は俺の家のリビング2つぐらいで（俺が見た部屋の中では小さい）、白で統一され、窓からはいつかの川が見える。

川を上の方へ見ていくと、頂上が真っ白な山がある。いくつも。

そんな景色を見ているとき、ドアをノックする音がした。

「アルメルナ様、紅茶です」

「はい」

王の母様は笑顔で扉を開け、え、自分で開けるのか？トレイみたいなを受け取り、自分で運ぶのか？俺の前に置き、俺も飲むのか？ありがとう、と一声かけ、それがあの人の仕事では？俺の前に座った。

王の母様は紅茶を（なんか色が濃い）を俺の前に差し出した。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

俺はそれを一口すすり、熱っ！！

そのカップを落とした。

「スワイル！」

優しい声が響き、

「こつっ」

カップがテーブルジャストで一瞬止まった。

「クトルス！」

そして、飛び散った紅茶がカップの中に戻る。

「……………凄い」

おい、ソウ、勝手にしゃべるな！！

『我じゃない、主人が勝手に言ったのじゃ』  
そうか……………

無意識に俺はそう呟いていた。

これで、いいんだな。

「ふふっ、魔法には自信があるのよ。この窓から、地面まで魔法が届くぐらい」

「へっ」

「3階から飛び降りた人の着地を助けたり」

「へ」

「夜の暗闇でも出来るのよ、その後、馬車で連れ去られるのはどうにも出来なかつたけど」

「へ、へ、・・・・・・・・へえ~~~~~!!!!」

どこか聞いたことのある話だな、と途中から思っただけだ。

「じゃあ、あれは・・・・・・・・」

おい、ソウ、勝手に会話を止めるな!

『我は何にもしとらん。』

ん、そうか?

まあいい。

俺は驚きのあまり言葉が続かなかった。

これでいいんだな。

『そのとうりじゃ』

「そう、私が。」

でも、あなたの魔法はもつと凄いつて聞いたわ。  
若かったら戦いたかつたわ」

だれだ、そんな嘘ついたのは。

おれがそんな魔法を使えるはずがない。

つてか、戦いたいつて聞こえた気がするんだが?

「暗黒魔法は100年前の魔王が最後の使い手だと思ってたけど」  
ん、おい、ソウ、どんな事を？

『ガ・ガ・、おや、通信が、ガー、悪いようじゃ』

ソウ、ソウ？おい、ソー……ウー！！

『返事がニヤい、ただの屍のようじゃ』

もういい、しゃべるな。

すぐに医者を呼ぶ、それまで頑張るんだ！！

『主人、大丈夫か』

あ、うん、で、何やったの（ニコッ）

『返事がない。ただのしかば』  
「  
つて、もういいわい！！」

「ええ、ゲマから習いました」

「え、ゲマって誰？」

「はい、主人公の父をメラゾーマで焼き殺した悪役で」

「え、……まあいいわ。それより自己加速を使っなんてよほど魔力があるのね」

「ああ、はい、たぶん、おそらく、もしかしたらそうかも知れませんが」

「ふふっ、ずいぶん謙虚なのね」

「ありがとうございます」

そこで、王の母様は俺の方を見た。

「かなり黒に近い目ね。バンダナの隙間から見えるのは、黒髪？」

「え、はい、魔王の関係者じゃないんで殺さないで下さい」

「ふふっ、そんな事しないわよ。あなた、勇者様に似てるわね」

「へ、勇者？」

「そう、魔王の戦いの時にいきなり現れて、魔王戦後、いきなり姿を消した。

って言われてるけど違うわね」

「へ？」

「私が封印の石盤を呼び寄せようとしたら、出てきちゃったの」

「はあ」

俺と同じく悲しい運命を送ったやつが居る。

「今は西の海岸の方でのんびりしてると思っわ」

「へえ」

「勇者様は火と草と氷と雷と毒を全部使うのよ、でも呪文を唱えて  
なかったから、フォーヌかも知れないわね、それに、……………」

さつきから一方的に話されてるよな、俺。

……そんなこんなで、夜になるまで話は続くのであった。

「あら、もうこんな時間！？ごめんね、しゃべりすぎちゃったみた  
いほほほほほ」

3 - 1 2 返事がニヤイ（後書き）

質：この国はどうなってんの？

応：もう寝ます。明日聞いてください。

マジすいません、睡眠時間がこれ以上上げづられると・・・  
とにかく眠いんで寝ます。

3 - 13 魔王「魔王のまゝは、マスターグレイドの、まゝ」

んで、俺はビオツチャ本部へ行く事になった。

今、俺はこの世界の馬車に乗っている。

なんともすがすがしい、二本の角を付けた、青い馬が2頭。

馬車の中には俺、アンナ、ベル、キャンド、デグリアの4人。

いやあ、あのおっきな部屋に呼ばれて、盗賊団を潰せって言われたときは、正直だるいと思ったがそうでもないな、うん。

「ここは、中央より少し南でしょ」（もう省いて大丈夫だね、気にしてないよね）

今馬車の中は地理の授業中だ。  
なぜこんな事になったかというと……

チャララン

馬車での旅が始まり、俺様は4人に囲まれ楽しく会話をしていた。

「いつ来たの？」

その言葉が出たのはかれこれ1時間ほど前になるだろうか。

「この前、だからこの世界のことはあんまり知らなくて」

俺様のさわやかな発言に4人が飛びつく。

「じゃあ、教えようか？」

チャララン

っと、言うわけだ。

「聞いている？」

ん、少し回想に夢中になりすぎた。

「うん、聞いている。山奥でのソーセージの炒め方の話だったよね」

「いや、違いすぎるでしょ」

「大陸の広さ」

「なんか凄い」

「だから、この大陸の広さが、約700万ノラセーリだって事。

この王国が150ノセラーリで、北の山のフィリティーが250ノセラーリ。

東の砂漠のザードランドブルが150ノセラーリで、西の海岸のリースイターズが120ノセラーリ。

残り小さい国がいくつかあるだけ。

分かった？」

「うん。」

フィリティーが大きいと」

「そう、でも山ばっかだから実際に使える土地は半分も無いかな」

「大変だなあ」

「で、次が・・・」

ガンッ！！

怪しい音がして、馬車が揺れた。

「魔物」

「防衛隊に突っ込んでくるなんて、度胸あるわね」

ガン！！

馬車が倒れた。

「痛った〜い」

「きゃっ」

ガン！！

馬車がさらに揺れる。

「もういいわ、ボロボロにしてやる」

とアンナが言う。

って、おい、止めるアンナ！

ザクッ！！

倒れていた馬車の天井の部分をアンナが剣できった。  
その隙間から駆け出すアンナ。

おいおい、どうすんだよ、この馬車。

『馬は魔物にやられたじゃろうから、問題ない』

あ、そっか。

ガンッ！

馬車がまた大きく揺れた。

はあ、みんな出て行っちゃったし、俺も行くか。

そして隙間から出ると、4人がいた。

そして周りには熊みたいなやつが8匹。

『よし、エクシステンステリートじゃ。熊なら良いじゃろ』  
分かった。

「エクシステンステリート」

俺の目の前にビー玉大の黒い球が現れる。

なんか、中でバチバチ言ってる気がするがまあ、問題ないだろ。

するとおそいかかろうとしていた熊たちが怯んだ。

熊たちが逃げ始める。

え、何で？

そして、テニスボール位になった時、その球が飛んでいった。

黒い球は逃げ出している熊に当たり、

その球が一気に広がり、熊を包み、

それが一気に縮んで、

消えた。

後には何も残っていない。

まるで最初から熊がいなかった様に。

他の熊はもう森の奥へと行ってしまっていた。

周りの4にんは………

………。

「なんでそんなに離れんの？」

「いや、なんとなく」

「なんか気分的に」

「安全距離」

「なんか凄いです」

後ろの馬車の馬は消え、おまけに馬車の前に座ってた人までいない。

「はなし変わるけどさ、場所、分かるの？」

「ん……多分」

「ていうか、5人で盗賊団潰せって辺りからおかしいんじゃないか」

「いや、あんたが一人で行っても大丈夫でしょ」

「ん、でも」

「いや、さっきの連発しとけばいけるよ」

「暗黒魔法」

あ、さっきのが。

魔王が使ってたっていう暗黒魔法ってやつ。

ん？

ソウ？

なぜに？

『精霊に寿命は無いのじゃ。』

長年生きてると、そういう知識も入ってくるもんでな』

あ、そなの。

「ほら、今日の飯だ」

城の牢屋で食べ物配る。

「なんで防衛隊がこんな事するんだ」

彼は、カルフに誘われて、仕事をサボり遊んでいた防衛隊だ。その罰として、最近は大量に雑用が回ってくる。

「ほら」

そう言つて牢屋の下に開けられた小さな隙間からパンと水を入れる。

その牢屋には、最近入ってきた金髪の少女がいた。なんで入ってきたのか彼は知らない。

「糖分が少ないです」

金髪の少女はわけも分からぬ事を言い出した。

「囚人は黙つて食べる」

「出されないのならば自分で探しますよ」

何とも、気持ちが悪もっていない言葉だ。

その言葉に、お好きにどうぞ、と一言返して次の牢屋に食べ物を配る。

次の牢屋に飯を入れた時、後ろから轟音が響く。

地下牢の端まで届くほどの音だ。

急いで戻ると、金髪の少女は消え、地下牢の天井が壊されていた。

「武器は回収した………よなあ」

尻すばみなつぶやきに答える者はいない。

その防衛隊が報告する事を思い出したのは少し経ってからだった。

「腹減った」

「減った」

「減った・・・」

「減りました」

「空腹」

さつきから、川に沿ってずっと歩いている。

頭の上にあった太陽は結構下がってきているし。

真っ赤な夕焼けが川の水を美しく照らしているが、そんなもんじゃ腹の減りは収まらん。

あたりを見ても木の実や食べられそうな草は見つからない、（とい  
うか分からん、へるぷー！へるびみ〜〜！！）

景色は変わらず、目の前に見えるのは木だけ。

はあ、もう帰りたいよ。

ママァンー！

なんてことがずっと続き、太陽が木の天辺に付くころ、ベルが待ちに待った言葉を言ってくれた。

「洞窟」

よし、入ろう。

~~~~~

（何だお前は子供が入って来るんじゃない、オリアァー！、う、グハツ！！な、なんだと、うわー！！）

~~~~~

「ふ、もう手遅れさ。今日の日没に魔王が復活する。てめえらは負けたん、グハツ」

取り合えず、捕まえた盗賊団Aを殴つといた。

「やめる、聞かれたことは話しただろ」

ああ、聞いた。

魔王復活の仕事を引き受けてたんだろ、それで色々やったんだろ。んなことは分かった。

だから食いもんをよこしやがれ。



洞窟を出ると陽はもう沈んでいた。

その闇に一寸の光。

北の山のほうへ、天から紫色の光が落ちている。

「な、なにあれ」

「なんか、怖い」

その光の柱から流れでる黒い雲。

その雲が、山を一つ飲み込むのを俺たちは呆然と見ていた。

肌で感じる。

何か冷たい、黒い波動。

あの中心には何かがある。

そう直感で分かる。

闇で包まれた、あの山に。

「ふふふはははは、お前たちは、みすみすと魔王の復活を見過ごしていた様だな」

いつの間にか出てきた盗賊の1人がナイフで切りかかってくる。

しかしその手はアンナの剣で体から切り離された。

続いて首の付け根に一閃。

男はその場に倒れた。

紫色のその光は少しして消えた。

しかし、この不気味な感じは消えない。

「魔王……」

おい、ソウ、勝手にしゃべるな。

『だから、我は何もやっていない』

はあ？ だったら誰が…… ああ、俺か？

俺は無意識の内に言っていた、らしい。

「あの光は何でしょう、お父様」

「……魔王だ」

「ま、魔王？」

「とうとう封印が解かれたんだ」

「まさか、本当に復活するとはね」

「おばあ様」

「今度こそ、この大陸は危ないかもしれないねえ」

「そんな……」

「すぐに4大大会議を開かなければ。準備に取り掛かる」

お父様は部屋を出て行ってしまった。

部屋の窓から見えるのは黒い雲に覆われた山。

（本当に、どうなってしまふのでしょうか）

幼い彼女にはなにも分からなかった。

砂漠の大富豪の家。

短い金髪の少女にはまだ届かないぐらいの女の子が黄金に光る椅子に座っている。

「また、戦いが始まるな。」

めしつかい1号、出かけるぞ」

「お姫様、その呼び方は止めてくれません。」

あと、なんで「お姫様」なんですか。

あんた一般人でしょ」

「ふっ、召使の分際で何を言う」

（・・・無理やり召使いにされた気がする。

でも、給料いいから良いや・・・）

「なにも言っていないです」

山のふもととの国境沿い。

「勇者さま、魔王が復活しましたよ」

「ん、だるい、誰かがやってくれる……はず」

「変わりませんね」

「うん、それと、後3日で客が来るから」

「なんで分かるんですか？」

「うん、勇者だから」

「……記憶を見たい」

昔は勇者をやっていた男も、もうおっさんと呼ばれる年齢にたっし  
ていた。

3 - 13 魔王「魔王のまゝは、マスターグレードの、まゝ」(後書き)

魔王が復活しちゃったよ、どうしよう、逃げなきゃ。

では、サッサッサッサッサ。

質：魔王の特徴を……って、回答者はどこだ!?

(昨日は、漢検と塾で疲れて、とっとと寝ました。

まあ、今年受験を向かえる身として……あれ、俺もつそんな歳?

やっべー、俺の心は10歳の秋に置いてきたから忘れるところだった。

ってことで、これから更新頻度が下がる……はず。

っというか、下げなきゃ。

勉強しなきゃ。

うん。頑張ろう。

3 - 14 帰り道のデジャブ く何、またこれか

「腹減った」

「同じく」

「同じく」

「同じく」

「同じく」

俺は今、川に沿って王城へ帰っている。

・・・はあ、なんて仕打ちだ。

腹が減って、馬車はやられて、暗くて、いつ着くのかもわかんねえ。

俺の後ろには、え〜っと、4人。その他。以上。

なんか4人以外に洞窟にあった縄で手を縛られた盗賊団員。

俺は置いてこっつて言ったんだがな〜。

んで、俺は盗賊団の縄の先を持って、事を利用して縄に引っ張ってもらって歩いている。

「あんたは楽しんでるでしょ」

「アンナ、俺は一般人だ」

「違う」

「ちが〜う」

「違います」

「それは無い」

「……………グスン」

悲しい。4人同時に100億%否定される悲しさ。

「あ、気にしてました？」

「でもジョーカーは……………」

「違うと思う」

「違う」

「……………うっ、うっ、う……………」

俺、この先どうなるの？

『魔王を倒せ、とか言われそうじゃな』

やだね、たとえこの両足を失おうがそんな事はしない。

『主人がこの世界に来る前の唯一の取り柄じゃなかったのか』

俺は命を優先するぜ って、唯一ってなんだ。

他にもあるぞ。

『おう、何じゃ？』

口笛と鼻歌で2重奏できる。

『そ、それは、何とも微妙な・・・』

微妙言うな、俺の授業妨害の長年の経験が産んだ奇跡の技なるぞ。

何だかんだでハーモニー作れるんだぞ。

ゲームのBGMを4つマスターしたぞ。

あとナナレンジャーのOPとEDも。

あとは・・・

『そうか。それはいいんじやが、森の中からなんか見てるぞ』

へ？

俺が森を見ると暗い中にかすかに動く物が見えた。

たくさん。

たくさん。

重要事項です。

たくさん。

「森の中に居る!..!」

「は?」

「へ?」

「ほ?」

「敵」

俺の声にあわせて草むらから熊が。

デカイ熊が。

重要事項。

デカイ熊が。

10匹以上。

最重要事項。

10匹以上。

『主人』

あい。

「ギラ・ダック!!」

俺の方へ突っ込んできた2匹を飛ばす。

2匹は近くの大木の幹に当たった。

振り向く。

アンナは熊2匹と剣で戦っている。

キャンドも短剣持って走り回っている。

ベルは・・・水の円盤作って浮いてるし。

「ひゃあ~~~~!!」

デグリアは4匹に囲まれて。

やべ~~~~!!

走り出す俺。

熊の爪が上がり月明かりで光る。

ベルも詠唱を始めたが間に合いそうに無い。

そして、熊の真上に来たところで急降下を始める。

熊の爪がデグリアに迫る。

ザシュツ！！

引き裂かれる音がする。

しかし、熊の爪が切り裂いたのはデグリアではなかった。

熊が切り裂いたのは地面から出てきた茶色い根だった。

「チュウ」

足元に一匹のねずみが駆けてきた。

「うるさいなあ。

もう夜中だぞ」

緑の髪が揺れる。

「ジャ、ジャリボーイ？」

ねずみの色は緑だった。

地面から次々と出てくる茶色い根が熊の動きを封じる。

その熊に次々ととどめを刺す4人。

熊の群れはすぐに全滅した。

「おい、何、勝手に食ってんだよ」

「モグモグ、いやあ、昨日の敵は今日の味方だろ。闘技会の中であなたが一番まともだった」

今俺が食いもんをあさってるのは、大木の中。

なにやら、この木を家に変えて、住んでるらしい。

このジャリボーイ。

「ちがう。この木にお願いしたんだ、私の望む姿に変わってくださいって。

自然はお前みたいになっちゃいやつの考えの及ばぬ所に存在するのだ」

「モグモグ、あ、ありがと、助かった」

「あれは俺じゃない。この木がやったんだ。この木に感謝しろよ」

「いや、食べ物」

「く……お前が勝手に食ったんだろ。  
いや、お前たちが!!」

俺以外には、アンナ、キャンド。

ベルは……常識あるから。  
デグリアは、さっきの感謝。

「いやあ、この木の実は美味い!!」

「こんな葉っぱも食べれるんだ」

「く……出てけ!!」

「やだ。泊めて」

俺、足疲れた。

「こんなに入れん」

「この上にも、部屋、作れるんだろ」

「く……俺はそんな願いはしない」

「誰か願って」

「」「」「」「」「」「」「」

『我は一応・・・』

頼む！おねがい！

『仕方ないの。壁に近づいて、我を隠せ』

俺は壁際に行った。

木の壁と向き合っただのバカ状態だ。

その間にソウが出てきて、木の壁に触れた。

木が光る。

無駄にまぶしい光だ。

光が消えたときには、目の前に木のはしごが出てきていた。

『5階建てじゃ。1人1部屋』

「は、はあ!？」

この声はジャリボーイ。

「ジョーカー、無系統しか使わないから何系統かと思ったら木だったの」

「無詠唱」

「フォースの類？」

「なんか凄いです」

防衛隊特殊部隊。

防衛隊の中でも先鋭たちが集う。

任務は………適当？

報酬………適当？

だな。

結局ここは管理されてるのかどうか微妙だ。

そのくせ面子が機械マニア女とか白髪の美少女とか、俺とか。

はっきり言って、普通じゃない。

特に、白髪の美少女、マアサ。

こいつはやべえ。

雷神とか呼ばれる俺でもあんま勝てる気がしない。

超高度な魔法の移転をフォースとして持つてるから、負けることが無くても、捕らえられない。

そいつのお陰で、特殊部隊内の人の移動とかにも役立っているんだが。

この前の、町長怪しいので押しかけるぞ作戦の時も、役立った。

なんたつて、魔法陣描くだけで、それを目標として何でも転移させちまうからな。

この前、防衛隊30人がいきなり現れたのには驚いた。

と、同時に俺の魔法陣がちゃんと描けてたのに安心した。

とにかく、マアサとレイサには助かってるな。

俺がセイブルだった頃。

機械をはずして、適合者として選ばれたセラは北のフィリティーから西のシースイタースへ送られた。

記憶を消すために。

そこであつたのは1人の少女だった。

青い髪を床まで伸ばした少女。

その少女は俺と2人で話がしたいといった。

そこで聞いたのは、俺が今まで居た子供だらけの町の裏側を聞いた。

防衛隊の強化のためにフォースの実験をしたい。

俺たちはその実験台だ、と。

そして、記憶を消されたふりをしろと俺に言った。

正直、全て忘れたいと思ったが、少女はそれを許さなかった。

そして、そのまま俺は防衛隊へと送られた。

そして今に至るわけだ。

いつかまた会いたい、あの少女に。

「ありがとうございます」

「感謝はこの木にしてくれ」

「ははは、素直じゃないな」

「お前、食って寝たら性格変わった？」

「いや、久しぶりに充実している。助かった」

「はあ、とつとと帰れよ」

いやあ、すがすがしい朝だ。

『主人、今12時』

いやあ、すがすがしい昼だ。

まあ、遠くにちよこつと見える山が黒い雲で覆われてなければさらに良いんだが。

腹が減ってなくて、疲れてなくて、眠くない。完璧だ。

なんてのは5時間前。

今現在。

「腹減った」

「疲れた」

「城どこ」

「疲労」

「眠いです」

はあ、またこの状況か。

さつきから、川に沿ってずっと歩いている。

頭の上にあつた太陽は結構下がって来ているし。

真っ赤な夕焼けが川の水を美しく照らしているが、そんなもんじゃ腹の減りは収まらん。

あたりを見ても木の実や食べられそうな草は見つからない。(とい  
うか分からん、へるぶ~~~~!!)

HELP ME!!!)

景色は変わらず、目の前に見えるのは木だけ。

はあ、もう帰りたよ。

ママァン!!

なんてデジャブが続き太陽が木の天辺につく頃、ベルが待ちに待った言葉を言つというデジャブ。

「城」

よし、入ろう。

3 - 14 帰り道のデジャブ く何、またこれか (後書き)

いやあ、色々あったね、ピオツチャの洞窟遠足。うん。

質：王国の説明をお願いします、総理！！

回答拒否すでに2回ですよ。

応：王国。とりあえず一般的なファンタジー世界の、一般的な王国。まあ、書くのもたるので、想像にお任せしますって事で、おやすみ。

### 3 - 終 勇者探しの始まり

「嫌です。」

「防衛隊やめます」

「無理だ」

「やめます。」

「退職金は貰って田舎に行きます」

「駄目だ」

「・・・俺、もう、人生につかれました」

「疲れた体を動かせばよい」

「拒否」

「貴様は王城の防衛たいだ。」

「貴様の権利は全てわしが防衛隊総括から頂いておる」

「総括を殺つて来ます」

「いや、これはちゃんとした会議があつての話だ」

「どんな」

「いんなじゃ」

~~~~~  
「魔王復活した」

「よし、勇者じゃー!」

「誰かに探させよう!」

「勇者とおなじ黒髪なら何かしらの波長と、オーラとテレパシーと
かで見つかるんじゃない?」

「あいつ女と一緒になら何でも引き受けたからな」

「よし、呼べ」

~~~~~

以上じゃ」

「王様、今から城を吹き飛ばします」

つてことなんです、おばあさま!」

「はあ、もう、あれだからあの人は……殺す」

クロス。

そういう名前なんだろう。

いや、絶対にそうだ。

「えっと、勇者様の居場所ね」

「教えてくれるんですか」

「うん。取引しない？」

笑顔の裏に闇が見えたりしたのは気のせい。

俺の幻覚。

疲れすぎた。

って言うか、防衛隊きつ過ぎない？

睡眠時間とか考えてないよね。

なんか絶対服従だし。

労働基本法とか言うやつを教えてやらねば。

「何をですか。金は足りてますよね。」

俺、基本持ち物のところ空欄しかありませんよ。  
伝説の装備があったりしませんよ。

回復薬も入ってませんよ」

「じゃあ、暗黒魔法をどこで知ったの？」

「それはソウが、ってお前、止める、口を動かすな、お、もともと居た世界じゃ」

「あらそう、残念。

それじゃ仕方無いわね。

じゃあ、教えるわ。

勇者様は、霧の森の、大岩の一つの切れ目の、中を上がった上の、湖の横の隠し通路を、下に降りて、暗い通路を、3つ目を右、そこから一つ目を左、そこから5つ目を左に曲がって、3つ目の左の部屋の、本棚の、裏のワープパネルに、乗ったら生けるわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もう、一回」

なんてことがあって出発。

いつもの4人。

で、俺たちは、王国の外出てすぐの所を歩いていた。

「敵」

と、ベルが呟く。

4人はとっさに構える。

早っ！！ついていけないぜ、この四人の能力といい、この王国の無理やりの乗りとか、ソウの暴走とか、その他色々。

しかし、現れたのは予想もしない、というか忘れていたやつだった。

「まだ借りは返していません」

「あ、またか、ウィーディー」

「お前は城の牢獄にいるはず」

「まあ、落ち着け、アンナ。

戦う気は無いみたいだぞ」

と、俺はスプーンしまえの目線を送る。

ウィーディーは気づいたようで、スプーンを小さくしてしまい、懐から銀のアイテムを……は？

「これは防衛隊から奪った物。  
返します」

と、ウィーデーは銃を投げた。

あ、ダイザナの町のね、うん。

何やかんやで、俺の続けたくない旅は続いた。

なんか騒がしく。

「てか、4人で勇者連れて来いって何だ？」

「ま、何とかなるでしょ。」

「なんか、可哀想」

「いや、デグリアも巻き込まれてるよ。」

「同感」

「.....」

### 3 - 終 勇者探しの始まり（後書き）

・・・前回のやつにかいとけばよかった。

はい、作者の適当な考えで今回短いですね。

えーっと、次の章は勇者探しのたびと、少女3人の色々を書く予定です。

この章は何だったのかは、俺にも分からないので、どっかの物知り  
に聞いてください。

王国って言いながら城下町書いてないし。

最後のビオツチャ壊滅のたびも、章の最後なのに文、適当だし。

結局、魔王と防衛隊4人しか入ってない気が・・・。

ええっと、次の章は頑張ります。

章とかが要らなかつたかな？

質：4大大国について？

応：北の国フィリティー。山が多い。魔王がそのうちの一つで復活。

南の国セナルカーフィス。王国。以上。

東の国ザードランドブル。砂漠が多い。砂漠の大富豪の少女がいま  
す。

西の国シースイタース。海岸に首都的なもの。勇者と少女。

あと、防衛隊特殊部隊のマアサで、3人の少女。  
以上。

4 (3人の少女) - 1 「任せます」 (前書き)

4章始めました

4 (3人の少女) - 1 「任せます」

「よし、宿だ!!」

「6人だと良いところは無理ね。」

3:3で分かれれば2部屋で済むけど、ジョーカー男だし」

「それは、困った。」

よし、俺が女部屋に入ってやろう、グヘッ」

横からスプーンが!!

「ナイス、ウィーデー!!」

「はぁ、お前たち、いつから意気投合してんだ」

「あつたときから友達だよな」

「はぁ」

今、俺たちは王国を出てから1つ目の町、たしか、イラムサとか言うところに来た。

ええっと、うん。

普通の町だ。

治安は悪そうだけど。

「はっはっはっはっは、兄ちゃん、可哀想だな。俺たちが変わってやるうか」

ほら、こんな風に。

「変わってくれ、俺は隠居する、う”っ！」

服を掴まれて後ろに放り出される俺。何であんな《アンナ》に細い腕で俺を投げ飛ばせるんだ？

「防衛隊に手え出す気？」

おい、アンナ、お前のこれは手を出すに入らないのか。

視界が赤いぞ。

あ、頭が・・・

「威勢がいいね。俺たちと遊ばないか？」

その言葉が言い終わると同時に男が落ちた。

ウィーデーのスポーンがマツハぐらいで足を狩り、男は後ろに倒れる。

大丈夫・・・か？

いつの間にか、男が腰に下げていた袋はアンナの手の中に。

「はっ、こんだけしか持って無いくせに、なめた事言ってくれるじ

やない。

私たちに見合うぐらいの金を持ってから来なさい」

啞然とする男たち。

こかされた男の足が赤いんだが平気なのか？

「それまで、これは防衛隊が預かった。

行くわよ、ジョーカー」

仕方ないな。

5人はとつとと行ってしまった。

通り過ぎた男たちから、覚えとけよ、なセリフが聞こえるが、お前たちのせいで俺の頭からはトマトジュースがマグマのようにならたらと……。

後でベルに直してもらわなきゃ。

ベルが魔法でデグリアの怪我を治すのは何度か見た。

「これで良い宿に泊まれるわ」

「満面の笑みを浮かべているところに済まないんだが、防衛隊はかつ上げOKなのか？」

「いや、これは預かってるだけだから」  
「いや、使う気まんまんだよな。」

「それより、頭どうしたの？」

「いや、お前のせいなんだけどなあ」

「だ、大丈夫ですか、親分！！」

女5人と男1人は行ってしまった。

俺たちの全財産を持って。

「このくらい、かすり傷だ」

親分の足首の後ろは切れ、血が流れている。

親分にごこまでの怪我を負わせたやつなんか今までにいない。

「それより、あの男を呼ぶぞ」

「へっ、あの男とは……」

「あいつだ。片刃の傭兵だ」

片刃の傭兵。

その名前は、その男が持つ、片刃の剣に由来する。

「し、しかし、あいつは腕は確かですが、信じられない位の雇い賃を取られますよ!？」

「問題ない。やつらを生かしたま外には行かせん」

はあ、この先の生活が思いやられる。

第一、そんな金はもともと無い。

今のうちに逃げるべきかと、彼は思った。

「はあ、今朝は朝から騒がしいなあ」

「主人、もう2時じゃぞ」



「うん、二度寝したらそのうちいなくなってるかな」

「そうじゃな」

くスヤスヤ

「バンダナ!!いつまで閉じこもっているつもりだ!!」

あゝうぜえ。

寝れねえ!

はっ、まさかやつらの狙いは俺の睡眠を奪う事?

窓から外を覗くと、ありゃ、ナイフを突きつけられている5人。

ウィーデーなら自分だけ逃げる事もできたらうに、皮膚、鉄並みだし。

「どっつするっ?」

「さあ、主人が決めればいいことじゃろっ?」

「よし、行くか」

「おはよーございませう！5人は連れてって好きに遊んでくれたら良いんで、俺の睡眠を妨害しないで下さーい！！」

「……よし、もう一回寝よ。」

「貴様、強がりもいい加減にしとけよ。」

「いつら、殺すぞ」

「任せます！！」

「これでいいな。」

「ほんとに殺すぞ」

「それは俺の管轄外なんで」

「もう、いいだろう。」

「よし、殺す。」

「今殺す」

「おやすみなさーい」

「辺りが、がさがさと動く。」

「おい、作戦失敗か？」

「まさかこんな事になるとは？」

「あいつ……ホモか？」

いや、断じて違う。

俺は女は好きだ。

しかし、俺はもう睡眠やらゲームやらと結婚した。

俺は女は信じないぞ！

女を信じてもろくな事にならない。

「ま、まあ、女が5人も手に入ったから十分じゃね？」

「確かに」

よし、良い流れだ。

「ふざけるなあああ……！！！！」

う、うるさ。

「貴様がボコボコにならないと気が済まん！！  
来い、シサム！！」

後ろからひらひらの服を着て腰に刀を一本差した侍が。

な、なに侍だと？

もう絶滅したと思っていた。

つて、結局あの親分ずらしたやつは戦わないのか？

「お前は手を出すなよ」

と、親分Aに一言いった侍は俺の方へ歩いてきた。

「わが名はシサム！！いざ、勝負」

「俺は眠たい。勝負はまた今度にしてくれ」

「え、そうなの？」

結構気の抜けた返事だ。

俺のじゃなくて、侍のだぞ。

「ああ、俺は基本夜行性の動物だから、夜になるほど目が覚める」

「とつととやれ！！シサム！！」

なんか叫んでる、ビビリ親分が。

仕方ない。

「ビスタ！」

俺の魔法は侍の横を抜け、ウィーディーたちのところへ進む。

そしてナイフを突きつけていたやつは止まった。

4人も止まった。

唯一止まっていないのは、スプーンを盾にして防いだウィーディーだけだ。

ウィーディーはナイフを奪い、止まっている男たちの太ももに刺して4人を投げてきた。乱暴に。

4人は俺の後ろまで転がって止まる。

ウィーディーは俺の横に立った。

なんかこの世界のやつらと雑いな。

「ウィーディー、太ももいたそうだが、あの5人」

俺は未だ止まっている男を指差す。

魔力がますます体に馴染んできてるような。

「ちよつとの間、歩けないようにしただけです。一週間もすれば元通りです」

あ、そう。

後ろの4人が動き出した。

「じゃ、俺は寝るから」

そっぴい残し、俺は宿へと逃げた。

がつがつ。

「いやあ、ここの朝飯は美味いなあ」

「あんた以外は昼飯だけだね」

「はあ、で、あの後どうなったんだ？」

「ああ、親分漬した」

グロデスクそっぴだから詳しくは聞かないでおこつ。

「それでも齒向かってくるやつを漬した」

ああ、そう。

「次はウロエイの町ね」

「あ、そうなの」

「5日ぐらい」

「はあ、遠いな」

「遠いです」

「急がないと。」

魔王が復活しちゃったからね」

「はあ、魔王出てこないからいいじゃん」

「駄目」

「なんで」

「ん、防衛隊だから」

「はあ、まさか俺が防衛隊をする事になるとは。防衛隊の手を火傷させたりしてたのに」

砂漠を一人の幼女と青年が歩いている。

「召使い1号」

「何ですか姫様？」

今は夜だ。

理由は、こういうのは夜抜け出さねば、という言葉のもと。

「おんぶしろ」

「はあ？」

「疲れた」

「まだ屋敷出してから10分も経ってませんよ」

「屋敷にこもっている間に体も衰えたようじゃ」

そう言っって彼女は召使いの肩に飛び乗る。

「いて！って、そんな事が出来てるじゃないですか」

「あと、姫様は止める」

「言いたくて言ってるんじゃないです」

「余のことは……アルでいいぞ」

「アル？」

「アルケミストでアル。」

「これでも錬金術師だからな」

「ああ、それで。」

「いやあそのフォース羨ましいですね」

「あと、お前は余の兄貴という事で行こう」

「ここまで似ていないのも珍しいような」

「では、余は寝る」

「はあ、わがママがひどいな。」

「まあ給料いいからいいか」

「砂漠の上を青年が歩く。」

「青年の歩く先には1つの町が徐々に見えてきた。」

4 (3人の少女) - 1 「任せます」 (後書き)

9月の3日に実力テストあるんで、勉強しようと思います！以上です。

質：4章はどうなるん？

応：でっかい悪者出てきません。出すと長引くんぞ。

いやあ、まさか4章まで行くとは思わなかった。

俺のことだから3話ぐらいで主人公が死んで終わるかと思ってただぞ。

まあ、良かったってことにして置こう。

意外と書くのも楽しいな。

4 - 2 アスタ（3人の少女には入ってません）

「せい！とう！はっ！やあ！！」

朝からうるさいのう。

眠たい体を起こすと召使い1号が居た。

拾った石を金に変えて渡したら着いて来た、まったく、単純なやつじゃ。

それにしても、1号は剣を使うのか。

宿の裏で剣を振り回している。

「あ、アル様。

起きたんですか」

窓枠越しに話しかけてきた。

汗をぬぐいながら歩いてくる姿がなかなかカッコいいの。

「ああ、朝から頑張っておるようじゃな。

それにしても、召つか、・・・兄貴は戦うのか」

「いや、まあ。剣士ですし。

この前は剣、溶かされましたけど」

青年の頭にバンダナが浮かぶ。

剣を溶かし、切ったと思ってもほとんど傷がつかない皮膚を持っていた男。

「剣が溶ける？

恐ろしいな。

半端な熱じゃ溶けないじゃろう」

金髪の少女の頭には太古の昔の少女が浮かぶ。

赤い目に赤い髪をした、彼女の仲間であったもの。

・・・しかし、あいつが行動を始めたのか？

「アル様。どうかしました」

「いや、そいつの事が気になってな。

あと、様をつけたら、言い方変えた意味が無い」

「うん。

黒いバンダナしてました」

「そうか」

では、違うだろう。

「それより、この後どうするんですか。

行くあてとか有るんですか？

お金・・・は平気ですね」

「それよりじゃな、兄貴、余の寝ていた横で寝ている、あのむすめは誰じゃ」

そこには、奇跡の錬金術師と呼ばれる彼女と、外見的には同じぐらいの少女がすやすやと寝ていた。

金髪だし、よく似ている。

「まさか兄貴は幼女趣味か？」

「いや、止めてください。昨日の夜会ったんです。村のはずれで」

「それで強制連行してきたのか……やはり」

「違います！一人で泣いてたんです！」

「そうか、では今日はこいつの親でも捜すかの」

「いや、それが……」

「むにゃ」

村はずれで会った子が目を擦りながら起きた。

すこし遅いが、昨日は真夜中にこの宿に着いたから仕方ないだろう。

「あなたは？」

どうやら昨日のことは覚えていないようだ。

彼女には少しショックが大きすぎただろうし。

昨日の夜、村から少しはなれた一軒家から火が上がっていた。

その中から助け出したのだ。

「俺はリアー。

こつちがアル。

君は？」

「私はアスタ」

アスタちゃんは人差し指で自分を指し、言った。

「そうか、一緒に来るなら召使い2号になるが、どうする」

「おい、アル」

なんという、自己中心的な考えだ？

「すまん、すまん」

「……楽しそう」

アスタちゃんがボソツと言った。

「楽しいよ、外行こうか」

俺たちは昼前の村に出て行った。

「（これからどうするんだ）」

「（余の友人のところへ行く。」

あいつは人の記憶をいじるのが好きだからの）」

「（普通の人なのか？」

いや、記憶を操作できるあたり凡人じゃないけど）」

「（まあ、問題はない）」

少し遠いがな）」

「くしゅん」

と、青い髪の少女。

「どうした、風邪か？」

と、黒い髪のおっさん。

「いや、なんか嫌な予感が」

「魔王の波長はこの前からずっとだぞ」

「いえ、この感じは………錬金術師」

「ん、ああ。

あいつか。

最近会ってないな」

「会ってないな〜って、勇者様がこんなところに住んでるからじゃないんですか。

買い物とか大変なんですよ」

「ん、静かでいいだろ。

まあ、久々に一緒に出かけてもいいけど」

今、二人がいるのは大陸の外の小島。

木の家は明るい。

そんな島で二人はだらだらと暮らしていた。

2人は楽しそうに遊んでいる。

その辺の店で買ったボールをてんとついでいる。

・・・しかし、ほんとに似てるなあ。

誰かに聞かれたら双子ってことにしておこう。

しかし、中身は・・・。

あいつ、拾った石を金に変えて、「欲しかったらついて」来いだからな。

まあ、給料いいからいつか。

俺が鍛錬の続きでもしようかと立ち上がると、いつの間にかアスタちゃん足元まで来ていた。

なんだかさびしそうな顔をしている。

ヤバい！！

「ママは？」

言わないでくれと思っていた言葉をアスタちゃんは言った。

「あ、ああ、今日は、で、出かけてるんだ。す、すぐに戻ってくるよ」

はあ、何やってるんだ俺は。

ばればれじゃないか。

自分の程度の低さが悲しい。

「いやだ。

ままに会いたい」

困る。

俺は頭がいい方じゃない。

嘘は苦手だ。

「いや、そんな事を」

「おうち、おうちに行く」

どうすればいいんだ、俺は？

困ってる俺の方へ（現在は）アル（本名は知らない）が歩いてきた。

アスタの肩を持ち、自分の方へ向けるアル。

背丈はアルが1m10、アスタが1メートルぐらい。

アルのほうが若干高い。

「アスタ!!」

「へ?」

「ついて来い!!」

それだけ言って歩いていった。

「（ちょ、どうするんですか）」

「（連れて行く）」

「（連れて行くってどこへ?）」

まさか、あの黒焦げの家を見せるんじゃないでしょっね」

「（そうじゃない。」

記憶操作師のいる離れ小島じゃ」

.....へ?

「……………」

「（声がでかい）」

「（急げば3日でつく）」

「（どうやって?）」

「（ふっふっふ。任せておれ）」

そう言っつて、アルは買ったボールを握った。

アルの握っていないほうの手の平が金色に光り始める。

「おい、見られる!！」

俺の忠告を無視して、アルはその手をボールに思いつきり当てた。

「アルケー!！」

単なるボールが黄色く光る。

今まで見た何より眩しい光。

その光の中に嬉しそうに立つ少女。

「成功じゃ」

カランカラン、と店の扉が開く。

「いざっしやい」

ここはここらで一番の馬車屋。

東のザードランドブルにありながら西のシースイータスからも客が来るぐらいだ。

店に入ってきたのは金髪の女の子。

あれ？とは思ったが、後ろに剣を持った男もいるから大丈夫だろう。

「ここで一番早いやつを買う。」

あと、馬車は頑丈なやつにしてくれ」

・・・？

「じょうちゃん、そんなのは王様とかが買ったんだよ。  
にいちゃん、いくらのもやつかい」

「金ならある」

「だから、じょうちゃん……」

言葉を失った。

その子の手の上には本人の頭ほどありそうな金が抱えられていた。

「差し出された金の塊を受け取る」

!!!!

重い。

あまりの重たさに落としてしまった。

こんな小さい子が持てるはずが無い。

その金は床板を粉碎した。

「ああ、済まんな。」

床の修理費込みで、その金でどうじゃ」

「あ、はいもちろん」

案内された先は大きな小屋。

「どれが一番速いのじゃ？」

アルのせいで店の男は放心状態に近い。

あの金が入った喜びか、それともアルがあれを持ってきたから？

まあ、意識があるから問題ないだろ。

「これです」

そしてその男が指差したものは……？

ビックリしすぎて目のピントがあってないんじゃないか？

……ランドドラゴンだった。

全長3メートルぐらいだろうか。

てか、火、吐くんじゃなかったっけ？

「何匹いる？」

さらに話を進めるアル。

さっきまで泣きかけていたアスタはドラゴンに興味津々だ。

って、泣かないのか？

俺、足が震えてるんだけど。

あの鋭い目が俺を見る。

ひえー！！

前足の先に固まった血が付いているんだが、なんだあれ？

俺を見ながらよだれを垂らす。

がくがくがくがく……。

「2匹います」

おい——————！！

「一匹で十分、いや、他のにしてくれ」！！！！

「わかった、金は足りてるな」

「はい、もちろん」

そして、首輪の鎖を柱からはずし、てに持つアル。

「では、買った。」

兄貴、これにそのまま乗ってもいいが、馬車を買つか？」

「買って下さい」

背を見せたアルに近寄り、ドラゴンの首。

危ない！！と言おうとしたが声が出ない。

するとアルは振り返った。

そして目が合ったようだ。（こっちは見えない）

その途端にドラゴンは首を戻した。

やばいスピードで。

しかも、畏怖のめでアルを見てる。

奥のもう一匹も。

………何者なんだ。

その夜、俺たちは村を出た。

「わゝ。はやゝい」

ドラゴン2匹に男と子供2人は軽すぎた。

「ははははは、最高じゃ!!」

どうじゃ、兄貴……兄貴？」

窓枠から顔を出したまま動けない。

「ははは、つづぶ。

うお、出た物が真横に流れていく」

「乗り物酔いか。

まあ、いつか。

召使い1号だし」

つづぶっ!



4 - 3 キャンド~~~~~!! (前書き)

何かしら、警告した方がいいのか？

#### 4 - 3 キヤンド~~~~~!!

『セラさん。』

魔法陣が描けましたよ

シンボルは兎よ<sup>ハイマム</sup>』

王国から知らせが入った。

「ありがとうございます、アルメルナ様」

そこで、俺は振り返る。

「マアサ！準備できたってさ」

「じゃ、行きますか」

「あれ、レイサも来るのか？」

「ここに残っても退屈だから私も行くわ」

「では、3人で行きましょう。」

シンボルは兎ですよね」

「うん、いつも通り兎だよ」

「では」

マアサとレイサと俺の体が光で包まれる。

「転移！」

マアサがそついい終えたとき、俺たちは城の中にいた。

部屋全体が、白で統一されている。

アルメルナ様の部屋だ。

「いらつしゃい、3人とも」

机の上には紅茶が3杯あった。

「きききききききき」

いやあ、デカイ。

門がデカイ。

何だかんだで、俺たち6人は、西の海岸シースイタースについた。

アンナたちが、証明書的なもの出したら、あっさり通してくれた。  
デグリアに聞いたところ、シースイタースと、セナルカーフィスは  
仲が良いらしい。

見上げるほど高い門を通ると、シースイタースの町が視界に広がっ  
た。

全体的に白い建物が多く、空の色と綺麗に合わさっている。

城から、町全体が見えるようにか、町は城に近づくほど、高くなっ  
ており、どこからでも町の奥の大きな城が見える。

城は、王国のどっしりした広い城とは違い、青と白で、縦長く綺麗  
だ。

デイズオーラン〇の、シンデ〇ラ城に似てる。

いつかあんなところに住んでみたいものだ。

「今日は自由行動にするか」

「いいよ」

「おーけー」

「了解」

「わかりましたー」

「じゃあ、決定だな」

『主人はどうするのじゃ？』

寝る。

『……………そうか』

と言う事で、俺は宿……は金がかかるので、昼寝できそうなどこを探す事にし、公園的などころがあったので、ベンチを占領し、寝る事にした。

『主人』

何だ？

『暇だから、遊んでくる』

いってら〜。

心の中で、そう返事すると、ベンチの前に、赤い髪の美少女が現れた。

いつかの武器やの時と同じだ。

ソウがどっかいったし、ひどく眠いので俺はそのまま目を閉じた。

意識がだんだん、ふわ〜っとしてきて……………むにゃむにゃむにゃ。

「じゃあ、私はデグリア連れて遊んでくるね」

「それでは、アンナ先輩」

「うん、じゃあ後でね」

2人ずつで行動しよう、となって、私はベルと一緒に

キャンドとデグリアはどっか行ってしまった。

まあ、楽しむか。

「ベルはどこに行きたい？……？」

ベルがいない。

一体どこに？

あたりを見渡す。

ベルが行きたがるどころか……。

人ごみを掻き分け、図書館へ向かう。

入り口にはやはりベルがいた。

「ここ、行きたい」

いや、行動が早いよ。

「ははは、うん、いいよ」

そして、私たちは古びた図書館に入っていった。

(久しぶりだな、図書館なんて)

キャンドさん？

女性にしては背の高いキャンドさんが、私に服ばかり着せる。

「うん。」

「こっちの方が似合うかなあ？」

「あの、キャンドさん？」

「ん？デグリアはどれがいくい？」

「いや、そういう問題じゃなくてですね」

「いやあ、ほんとデグリアは、どれ着ても可愛いから悩んじゃうわ  
〜。」

「この被り物な〜んかどう？」

「そういって、キャンドさんが出してきた物。」

「あ、あれは」

「キャンドさんが持っていたのは、ポラム耳と呼ばれる、被り物だ。」

「ポラムの、黒くて可愛い耳の形になっている。」

「すぽっ。」

「へ？」

「デグリア、こっち向いて〜。」

「はい、ピース」

右手が反射的にピースの形になる。

かしや。

へ？

「いやあ、良い絵が撮れた、撮れた」

「キャンドさん、その写真機、壊してください」

「いやだね」

「キャンドさん!!」

『……………そして、4人の神の娘は、4つの秘法を見つけた。

末っ子は、姉たちよりも、いいものを取ってやろうと考え、一番大きい秘法に触った。

すると、その姿は瞬く間に醜い魔獣になってしまい、その姿の自分を見て、森の奥へと行ってしまった。

3人の姉たちは、その秘法で、幸せに暮らしましたとさ』

いやあ、あるよね。

昔は良い話だと思っていた昔話も、なんか大人になってから読むとエグイなあって思うこと。

この話なんかひどいよね。

未っ子何も良いところ無いじゃん。

可哀想。

なぜかアンナの頭にデグリアの顔が浮かぶ。

なんでだ？

アンナって、可哀想かな？

うっん、不思議だなあ。

「デグリア、お姉ちゃんが手をつないであげよっか？」

「なんですか、お姉ちゃんって？」

「ふふ、おこってる顔も可愛いな」

しゃふしゃふ。

髪を撫でられている。

なんでだろう。

でも、なんか心地良い。

「おっ、デグリア、あれ食べに行こう」

そう言っつて、キャンドさんは手を取って私を引っ張った。

「きゃ、キャンドさん、あれっつて、なんですか」

そこには、アイスクリーム屋があった。

「キャンドはどの味が良い？」

「え、買ってくれますか？」

正直おいしいそつだ。

「うん、可愛いデグリアのためなら何でも」

「じゃ、じゃあ、ミント」

「おっけー」

キャンドさんは、店の列に突っ込んで行って、20秒後には帰ってきた。

「はい、デグリア」

「ありがとうございます」

デグリアさんはミルク味だ。

「……ねえ、デグリア。

食べ合っこしない？」

「いいですよ」

私はキャンドさんにミントのアイスを差し出した。

あむ。

へ？

「うん、ミントもなかなかいいね。

はい、デグリア」

そう言っつて、キャンドさんも、私の前にアイスを差し出した。

私が、手で持つて食べようとするが、右手はアイス、左手はキャンドさんにしっかり掴まれている。

「あの、私もキャンドさんと同じ様にしなきゃ駄目ですか」

「もちろん」

はあ。

私は、キャンドさんの持つているミルクアイスにかぶりついた。

「はあ。」

主人にも困ったものじゃ」

赤い髪に赤い目、赤と白の服に赤と白の靴。

「まあ、主人にはあの魔力があるからいいとするかの。」

あれ以上の適材はいない」

全身赤い少女が町を歩いている。

「しかし、広い町じゃ。」

することも無いし、何か気分の晴れるものが無いかのう？」

少女が、1つの建物の前で止まる。

「図書館か。」

まあ、最近では地下に籠っておったから、少し寄ってみるかの。」

少女は図書館へ入っていった。

『……末っ子の少女は力ある姉に憧れ、日々鍛錬を積み、ついに姉たちを越えたのであった』

・・・懐かしいな。

昔、お母さんに読んでもらったっけ？

でも、話適當だなあ。

こんなんでもいいのか？

ぼん。

肩に手が置かれた。

「アナナ」

「何？」

「あれ」

その先には、武器やでいきなり出てきた全身真っ赤な少女がいた。

「おい、あんた、誰？」

「我は、主人の精霊じゃが？」

後ろから聞いたのに、間髪いれずに返された。

「なんで精霊が契約者から離れてるのよ」

「我も、主人も、そういう関係が好きじゃからな」

「そんなに離れられるわけが無い」

「っと、言つと？」

「あんた何者？」

「我は主人の精霊じゃ」

「それが聞きたいんじゃない。」

第一あんた、今の姿は何よ！」

「図書館でぐらい静かにしたらどづじや。」

館長が見てるぞ」

へ？

私は後ろを振り返った。

「見てないじゃない……の」

そこに居た、自称精霊は消えていた。

「あつこ」

ベルが指差した先には、人ごみに紛れていく猫が見えた。

「追っわよ」

「主人」

「ん？ソウか。」

よく寝た」

「こんばんはどうするのじゃ」

「ああ、そうだな、この町に泊まって明日、勇者様を拉致して、褒美を貰って、俺は寝て過ぐすと。」

「こういうのでどうだ。」

「って、後ろのお前たちはどうしたんだ？」

後ろには、息を切らしてへ垂れ込んでいる、アンナと、氷系統の魔法で、体を冷やしているベルが。

「さあ、我にはさっぱりじゃ。」

「じゃあ」

ソウが入ってきた。

「お〜い、アンナ、ベル、とジョーカー」

と、ってなんだ？

キャンドとデグリアが帰ってきた。

なんか、デグリア疲れてない。

まあ、俺が寝てる間に色々あったんだろう。

「じゃあ、宿でも探すか！」

4 - 3 キヤンド~~~~~!! (後書き)

キヤンド~~~~~。

質：勉強は？

応：よく考える、実力テストは明後日だ。

つまり明日がある。どうだ、分かったか!!!

.....はい、えっと、勉強の合間に、ちよくちよく書いてたやつです。

だから、出来が悪いんです。

あ、出来が悪いのはいつもの事じゃないか。

はははははは、は、は、は、.....は。

どうやったたら上手な文章が書けるんでしょうね？

#### 4 - 4 シサム再び

「兄貴、町が見えてきたけど休憩するか？」

「頼む」

気分が悪い。

俺が揺れに関してこれまで弱かったとは。

ドラゴンの走る平原には、大きな砂埃が巻き起こされている。

「おい、兄ちゃん。  
その馬車貸しな」

町に入って、2m。

早速絡まれた。

「無理じゃ」

「お前じゃない。」

俺たちは有り金全部取られて、金銭的に危ういんだ！」

随分と大変な経験をなされたようだ。

可哀想に。

「兄貴、行くぞ」

アルが歩き出した。

しかし、一人の男がアルの前に立ちはだかった。

「邪魔じゃ」

「馬車は置いていけ！」

はあ、面倒だな。

金ならいくらでもあるんだから、素直に渡せばいいのに。

「無理じゃ」

ああ、何か張り詰めた雰囲気になってきた。

向かい合うアルと、おっさん。

伸長さ1mありそうだ。

「どかないなら、どかすぞ」

アルは言った。

男たちが笑う。

ま、そりゃそうだな。

しかし、アルの手が光り始めると同時に、笑いは止まった。

アルは手を上に向ける。

「アルデー」

空中にりんご大の金塊が現れた。

それはアルの手の動きに合わせて動く。

金塊は目の前の男の腹に、ゴン、と鈍い音を立てて当たった。

「ぐっ、う、うっ、う」

男は崩れる。

見事にみぞおちをやられたな。

ってか、あれを頭に喰らったら危なかったぞ。

「ほいー！」

アルは、さらにその金塊で男を横から殴りつけた。

3回転ほど男が転がる。

「兄貴、行くぞ」

いやあ、金がある生活は良い。

昔はこんな宿に泊まれることなんて無かったぞ。

「凄かったな。アル」

「そうかの？」

あいつらの、金の足しにと思ったんじゃないが」

「ほんとか？」

「いや、実際は楽しかったからじゃ。」

余は金しか操れぬから仕方なく」

「そうか」

アスタは寝てしまった。

俺も眠い。

「じゃあ、俺は少し寝るか」

「出てこい……！」

は？

「出てこい……！」

は？

うるさい。

「出てこい……！」

「……アル？」

何で呼んでるんだ？」

「なあ？」

「お前に話がある」

「何ですか？」

「お前じゃない」

今、俺たちは立ち話の真っ最中だ。

相手は、足を怪我してるおじさん。

……なんで怪我してるんだ？

「余になにかようか？」

「仲間に入れ」

いきなだなあ。

「無理じゃ」

即答だなあ。

「それでは、無理やり仲間に入ってもらおうか？」

適当だなあ。

「意味が分からんおう」

同感。

「ふ、今分からせてやる。シサム!!」

おとこの後ろから、ひらひらの服着て、腰に珍しい刀を下げた男が。

「わが名はシサム。いざ、勝負」

随分と立派な挨拶だ。

受けてやる。

この男と戦いたい。

俺は一步前に進んだ。

「私はドーソ。その勝負、受ける」

「兄貴が勝負してどうするのじゃ?」

「アル、やらせてくれ」

カン！ や、キン！ や、パシ！

さまざまな音が、俺の周りからする。

相手の動きは速い。

攻める場所も、防ぎにくい所ばかりだ。

正直、全て防ぎきるだけで、きつい。

俺の息が上がっているのに対して、シサムは汗すらもかいていない。

勝てる気は、正直しない。

でも、楽しいと感じる。

シサムの刀が俺に向かって振られる。

俺は後ろに下がって、その隙に攻めた。

しかし、その剣は、足の裏で止められた。

？

みた事も無い防ぎ方だ。

彼は、地面につけた刀を支点に、一回転して、後ろに飛んだ。

なんだあれは？

疑問が浮かぶが、考える暇は無い。

刀はすぐに来る。

斜め上からの速い斬り。

俺が避けると、その刀は地面に当たり、その勢いで、続いて踵で回し蹴りを繰り出してきた。

その足は剣で防いだ。

キンッ！

高い音が響く。

足に何か巻いているのだろう。

金属と金属が当たった音だ。

すると、シサムは体を下げた。

地面に寝そべる状態に近い。

そこから、足で足を刈りに来た。

後ろに下がろうとするが、あせって不安定になった足を、綺麗に刈られて、俺は倒れた。

「勝負あつたな」

男の刀は俺の首から数ミリの所で止まっていた。

はあ。

負けちまったか。

後でアルに謝らないとな。

俺は剣を放した。

静かに時が流れる。

「お前は、今回の相手じゃない。

その娘、勝負だ」

はあ。俺なんか眼中に無いつてか？

「仕方ないのう」

アルは楽しそうな顔をして、手の平を地面に当てた。

「アルテー」

地面を金に換える。

作ったものは金の鎧。

サイズは、大人用だが問題は無い。

だって、余は入らんから。

もう一つ、円盤型に土を換え、それを浮かした。

「まずは、試してみるかの」

即興の鎧で、どこまで戦えるか、余の操作が鈍ってないか。

「いざ、勝負」

余は金の円盤に乗って、宿の屋上辺りまで上がった。

意識を金の鎧に集中する。

「ぐぐぐぐぐ」

金の鎧は立ち上がった。

空気を適当に剣に換えて落とした。

鎧はちょうど胸の高さで掴む。

タイミングはばっちりじゃ。

シサムとか言う男も、さすがにこの高さには攻撃できないよついで、鎧の方を向いた。

「ちとと」

下の鎧は、意思を埋め込んで勝手に動いている。

余は金のひもを作っていた。

作っていたといつても、一瞬じゃが。

それを地面に垂らした。

このひもを通して、地面を錬金する。

よてい、だったんだが、結構戦いが面白い。

男は鎧の剣を軽々とかわしている。

鎧が男に切りかかる。

しかし、その剣を男の刀が弾いた。

その動きのまま、鎧の腰のつなぎ目を目指して、刀が振られた。

「ツバメ返し!!!」

普通の剣では切れない。

しかし、あの刀に切断の魔法が付加されている。

いつの間に。

はじめから、かけられていたのでは無い。

という事は、無詠唱。

さらに、男自身にも自己加速がかけられている。

これも無詠唱だろう。

余の魔力で、無理やり密度を上げた、金の鎧が真っ二つに切られた。

「ふははははははは」

いつの間にか余は笑っていた。

「面白い！

余と一緒に来ないか！！

金ならいくらでもある！」

余は空気を錬金して、彼の前に落とした。

「ほえ？」

男は変な声を上げた。

「ちょうど、アスタの護衛が欲しかったところじゃ！」

平原を馬車が走る。

「う、う、んう」

「大丈夫かドーソ？」

「ああ、ありがとう、うぶう。」

まさか、こんなにあっさりついてくるなんてな」

「ああ、俺はかねを求めているだけだ。

それが満たされるのなら、地獄にだって行ってやる」

「そうか、う」

「そういえば、久しぶりにシサムに会うことになるな」

「どうしました、勇者様」

「いや、なんでもない、

明日、客が来るぞ。」

その後出かけるから、用意しといてくれ

「……いきなりですね」

「まあ、楽しくなるから、気にするな」

#### 4 - 4 シサム再び（後書き）

やった~~~~~！

テスト終わった~~~~~！

月曜はテスト返しだから、それまで喜んでおくぞ~~~~~！！

質：シサムの特徴を。

応：侍です。

白髪のロングをまとめています。

ありきたりか？

まあ、いいか。

俺が考えると、変なやつが出来そうだし。

4 - 5 勇者？

勇者様が隠れているという、霧の森。

辺りには、霧が立ち込めていて、伸ばした手の指先すら見えない。

……いや、濃すぎるだろ。

何なんだここ？

シースイタースの首都から、北に少し。

霧があつたので分かりやすかった。

俺の周りには、5人。

いつも通りだ。

しかし、全く前が見えない。

この状況でどうやって目的の岩までたどり着けば良いんだろうか。

「はあ」

どうやら何日かかかりそうだ。

しかし、化けもんが出てこないからましか。

「今頃あいつらは迷ってるだろっな」

「勇者様、お茶が入りましたよ」

「ああ、ありがとう。」

もう少ししたら、迎えに行くか」

「分かりました」

霧、霧、霧。

ああ、ダリい。

ほんとに見つかるのか？

てか、帰れるのか？

もう、どっちがどっちか分からない。

「おゝい、なんかあったか？」

「……いや、なんにもない！」

「こっちも〜！」

はあ、大丈夫なのか？

真面目に心配になってきた。

食料とか、水とか、これって遭難か？

帰れるのかなあ？

その時、目の前の霧が晴れた。

「……だれ？」

出て来たのは、四十台後半ぐらいのおっさんと、俺よりも小さい少女。

おっさんは、この世界で始めてみた、黒髪だ。

「いや、迷ってるだろ」

「え、まあ、そうですね。  
あなたは？」

「ああ、俺は勇者だ」

頭をかきながら、勇者様は言った。

「あ、マジで。

ちようど良かった。

お〜い！勇者がいたぞ〜」

5人は、そろそろと集まってきた。

「王国へは行かんぞ」

「・・・？」

いや、来て下さい」

「その代わりに、魔王の情報を教えてやるっ」

「いや、来て下さったら結構です」

「魔王の情報は2つ。

まず一つ目、魔王は、封印していた石盤が割れていたため、力が衰えている」

「いや、来て下さい。

メモるのもだるいんで来て下さい」

「今まで、魔王が復活するんじゃないか、と思って皆が大切に扱っていたのを割ったやつは、相当の勇者だな」

「あ、俺そんな事しちゃったんだ  
だり〜。

「今の魔王なら、君たちでも倒せるだろう。  
しかし、あの剣があればの話だ」

「いや、勇者でしょ、あんた。  
自分でやれっつーの。  
弱ってんならなおさらじゃん」

「そう、勇者の剣があれば！」

「いや、話を聞いてください。  
力説してもらっても・・・。  
というか、来てくれないんですか」

「まあ、聞け！」

「はい」

あ〜だり〜。

勇者っぜ〜。

聞いて欲しいのはこっちだ。

「その剣は、今王国にある。  
確かパプリカー侯爵の所にあるはずだ」

「だれ」

「そこで、剣を手に入れ、魔王を退治するのだ」

「はあ」

「2つ目、魔王が自分の作った暗黒空間のなかに、魔物を集めている。」

そのお陰で、辺りには魔物がいない。

まあ、それはいいんだが、あの雲の中は魔物パラダイスだ。

まあ、気をつける」

はあ。

「来てくれないんですか？」

「勇者の座は、お前に譲るぜ!!」

え、ちょ、おい。

そう言っつて、勇者は霧に向かって歩き始めた。

いや、いらんから、勇者の座とか。

「ちょ、おい、こっちは王国にたのま」

「ガルルルオーン！！」

「ギャー……グギャー……！！」

俺の話が2匹のドラゴンに中断された。

おい、何でこんなんが突っ込んで来るんだ？

よくみると、ドラゴンの後ろに、馬車がついている。

その馬車の扉がガタン、と勢いよく開いた。

「記憶の魔女！

一つ頼みがある」

そう言つて、降りてきたのは、10歳にも満たないであろう、金髪の子供だった。

歩き始めた勇者も、振り返った。

金髪の少女の後ろからは、これまた女の子、見たことある侍、そして、よたよたしながら出てきた、いつかの普通の剣士。

いや、そうそうたるメンツですね。はい。

4人は静かに歩いてきた。侍さんは剣士を支えながら。

ん？ 何事？

勇者の後ろで黙っていた青い髪の少女が一步進む。

「久しぶりね、奇跡の錬金術師」

ああ、この子が。

つて、若くないか？

『主人、私の事は隠せ』

へ？

なぜに？

「ああ、いきなりで悪い。

少しやって欲しいことがある。

こんなやつらじゃし、言ってもいいな？」

「つて言うか、私のことを読んだ時点で、私の能力明かしてません？」

「まあ、それはお前も呼んだじゃろつ」

「じゃあ、なんて呼べばいい？」

「アル、で頼む。

あと、後ろにいるのは、アスタと兄貴とシサムじゃ」

「私はマナで良いわ。  
アル、養子になったの？  
こっちのおっさんは分かるよね」

「養子になったんじゃない、そういう設定じゃ。  
呼ぶときは、召使い1号で良いぞ」

「……いや、止めて、アル。  
あ、あなたはあの時の」

大丈夫か？

その召使い？

ふらふらしてるぞ。

「ああ、剣を溶かしたけど大丈夫だったか？」

「ほう、こいつが兄貴の言っていた」

「はい、私の剣を溶かすほどの炎を使うバンダナ男です……」

「……取り合えず、家来るか？それか、俺だけ帰ってもいいか？」

勇者様、居たんだった。

なんか本気で帰りたいそう。

「あと、シサムは来い」

なぜに？勇者様。

「はい、師匠のために、毎回、膨大な金を貰っております」  
は？

この件については、俺は分かん。

俺の後ろの5人も置き去り状態だ。

「まあ、勇者様がいいなら、行きましよう」

自称マナさんの言葉に従い、勇者様の家に行く事になった。

庭では、防衛隊4人と、普通の剣士（砂漠の大富豪の召使い）と  
アスタちゃん遊んでいる。

勇者様の家は、リゾート地的な、無人島（広さは、学校の校庭ぐら  
い。海に浮かぶ高台って感じ。全体が芝生。端っこの方に木が見え

る。高台といっても、端はがけではなく、斜面になっており、その先には白い浜辺がある（の上の、どこか和風な家。

シサム（敵だったよなあ？）は勇者様と話している。

そして、俺は何か重い話につき合わされている。というか、いつの間にか始まっていた。

「アスタが両親の死を知りながら生きるのは辛いじゃろっ」

「いえ、それを受け止めなければいけません」

「でも、ここまでは勢いで連れて来たが、この先どうするのじゃ。わしらを兄弟だということにしたらどうなんじゃ」

「いくらあなたの願いでもそれは認められません。

私が能力を使うのは、勇者様の時ぐらいです」

「しかし！」

「駄目です。

記憶を書き換えて、楽になっても、それじゃ根本的な解決になりません。

彼女自身が、そのことを知り、考え、そのことを受け止めた上で、引き取り手を捜す。

そのほうが良いはずです。

今じゃなくとも、もう少し大きくなってからでも、本当のことを知る必要がある」

「でも、これは

「

自称アル（砂漠の大富豪らしい）は言葉を失った。

いつの間にか、家の中にアスタちゃんが居た。

はあ、俺、出番ねえ。

最近、俺何もしてないや。

アスタちゃんが口を開く。

「アルちゃん、そんなに怒らないで。

私、聞こえてたの、見てたの。

男の人たちが入って来て、それから、パパとママの叫び声が聞こえたの。

それから、男の人たちは家に火をつけたの。

怖かった。

けど、私は大丈夫。

怒らないで。

大丈夫だから。

だから」

いやあ、2人の会話から、なにかしらあったとは分かってたけど、やっぱり恐ろしい。

しかし、マナはアスタの栗色の目を見て、何か決心したようだった。

「アスタちゃん、ちょっと来て」

「やってくるのか？」

「いや、他の事」

アスタは、マナの所に歩いていき、マナはアスタの頭に手を乗せた。

「リコレクション！」

マナが言い、手が青く光る。

20秒ぐらい、無言の時間を過ごし、マナは手を離れた。

「勇者様を呼ばなきゃ」

「そろそろ、話は終わった？」

マナが呟くと同時に現れる勇者様。

なんか笑顔だ。

シサムが、勇者様のために金を集めているとか、師匠とか言っていたが、何か関係あるんだろうか。

「クリフォードとバーバラがやられました。

この子は、彼らの子です」

沈黙が流れる。

俺、防衛隊4人、普通の剣士は訳が分からず黙っているんだろう。

ウィーディーは、普通の大きさのスプーンで、出してもらったお菓

子食べてるし、侍さんは無口だ。

だが、マナ、アル、勇者さまは他の意味で言葉を失っているように見える。

「恐らく、犯人は炎帝」

はあ、わかんね。

4 - 5 勇者？（後書き）

最近、新しいイヤホン買いました。……………どーでも良いですね。

質：勇者があんなんで良いの？

応：良いんじゃない。

勇者……………かつて、魔王を封印したときに、とにかく活躍した人

現在はおっさん。

離れ小島で、青い髪の少女と楽しく生活しています。

## 4 - 6 9人の英雄（上）

王国の会議室。

天井の一部が補強されているのが少し気になる。

今日、ここで会議が行われる。

話し合われるのは、復活した魔王の対策。

部屋には、俺たち三人、それぞれの国から3人ずつぐらい、正規の防衛隊から総裁を入れて4人が集まった。

「さて、先日魔王がフィリティーの国境付近の山で復活した。

すでに、わが国の調査隊が雲の中に進入、最新の機械で百年前の魔王と同じ魔力の波動を捉えた。

多くの犠牲はあったが、得た情報は多い」

口火を切ったのはセナルカーフィスの国王。

「あの雲の中には魔物が集い、非常に危険だ」

セナルカーフィスの王は、少し間を置いた。

「しかし、平行して勇者を搜索させている」

その言葉に、フィリティーの皇帝が反応する。

「勇者ですと？」

勇者は今行方をくらましているのでは？」

「その通り。」

しかし、9人の英雄は秘密裏に教えられていた。

そして、ここには9人のうちの一人、アルメルナ大魔道師が居る」

「つまり、我らには勇者が居ると言う事ですな」

ザードランドブルの国王が言った。

「しかし、本当に見つかるのか？」

そう聞いたのは、フィリティーの皇帝。

「ああ、母上から、勇者は移動するのを嫌う、と聞いた。  
今もそこに居る確率が高い」

「まあ、見つかると仮定して話を進めるしかあるまい。  
やつがいつ動くかも分からん」

シースイタースの王が言った。

「では、勇者に魔王討伐を依頼し、我々でその手助けをするという  
ことで、良いか？」

「分かった」

「ああ」

「分かりました」

上から、セナルカーフィス、フィリティー、シースイタース、ザードランドブルだ。

「我々からは、100万の兵を出せる」

「フィリティーからは90万というところが限界だ」

「シースイタースからは100万」

「ザードランドブルからは85万出しましょう」

「防衛隊からは450万だそう」

続いて、俺の番が来る。

「特殊部隊は約8万、全ての兵を出します」

「大体は分かった。」

勇者が来てから、また会議を開く。

次は具体的な作戦を練ることになる。

今日は我が城で、ゆっくりと休んでくれ」

セナルカーフィスの王がそういうと、少しずつ、会議室から人が減っていった。

「セラ、なんかうちらだけ人少くない？」

特殊部隊でいつも武器と機械の研究をしているレイサが聞いてくる。

「特殊部隊は、ただの部隊だからね。」  
国と部隊、同じぐらい兵が居たら変でしょ？変じゃない？  
でも、レイサの通信機使えるし、爆弾の使い方とか、隠密行動とか  
詳しい人とか居るし」

「まあ、そうね」

「そういえば、マアサは勇者様に合った事あるんだよね？」

「うん。一応」

一人の少女が地面に絵を描いている。

「おい、そのちっちゃいの、いくぞ」

「はい」

少女は列の一番後ろについた。

少女の後ろには、修復を終え、天井は取り払われた、元ヴァンパイ

アの国。

少女の前には、何万のヴァンパイアだった人たち。

彼らは、王国へと向かっていた。

屋敷の中は静まり返った。

半数（俺も）は訳が分からずだが。

「クリフォードって誰？」

「バーバラって何？」

「ジョーカーさん、9人の英雄です」

あ、ありがとう、普通の剣士君。

「炎帝は？」

「魔王が召喚したと言われる人？ です」

「なぜ、クエスチオンマーク？」

「異常な魔力を持ち、全てを焦がす炎を操ると言われていて、人間と違っていいのかどうか……」

「オーケー」

普通の剣士君にはいつも助かるわ。

「炎帝は古の神殿に封印されていたはずでは？」

錬金術師の少女はあつかっているち側だ。

「それは……分かりません。」

ただ、この子の記憶の中に炎帝らしき姿が

「しかし、あいつたちがやられるなんて」

「そんな怖い顔しないで、アルちゃん」

「あ、アスタ……」

「んで、いつまでお前らはうちに居るんだ？」

勇者が言う。

おい、お前が呼んだんだろ！

「マナ、絶対に力は使わんのじゃな？」

「ええ」

「勇者さん、来ないんですか？」

「もち」

古の神殿で、私の前に2人の男がひざまずいている。

「魔王様、英雄を二人殺しました」

「良いぞ、炎帝。」

「これからも続ける」

「魔王様、私は何をいたしましょうか？」

「ヴァロルシアス、お前はここで待て。  
王国に捜されておるのだらうか？」

「はい」

……くふふふふ。

最高だ。

戻ってきた、あの頃に。

百年間の時が越え、我は帰ってきた。

我の能力は健在だ。

体が、少しだるいが、百年も寝たんだ、なまっただけだろう。

さあ、これから我の時代だ。

「んで、魔王の能力ってのは何なんだ？」

「はい、名前を呼ぶと、その者を思い通りに動かせるらしいです」

はあ、催眠術のたぐいか？

「ありがとう、デグリア。  
詳しいんだな」

「いえ、少し興味があるだけです。  
歴史って面白くないですか？」

「さあ」

はあ、狭い。

ドラゴン二匹が引く馬車の中には、10人居る。

結局のところ勇者来なかったし。

何だよあいつ。

そのお陰で、馬車の人数が二人減ったんだが。

馬車は、シンデレラで出てきたようなメルヘンなものじゃない。

箱を竜が引つ張って、下に車輪がついてるだけだ。

椅子は金髪のちっちゃいのが作った、高さ2メートル越えの、腕の長いラ○ユタっぽい巨人が取った。

キンキラキンの腕で、ボキツ！ って感じで。

そして今、前の席にはちっちゃいの二人、俺とデグリアは壁際に座って、ウィーディーとシサムは隅のほう。

馬車の真ん中では、剣士君とデグリアの先輩3人が賭け事やってるらしい。

4人でカードを引いたり出したりしている。

ベルの横には、何かのチップがたくさん積まれている。

勝ってるな。

「うわ~~~~~」

また剣士君がわめいている。

それより何でシサムがいるんだ？

まさか、あのおっさんたちの大本はこいつら？

いや、無いか。

俺は剣士君の横に混ぜてもらった。

「あ、ジョーカーさんもどうぞ。  
今度は勝つぞ」

剣士、頑張れ。

「ところで、なんでシサムと居たの？」

「へ？」

シサムを知っているんですか？」

「ああ、襲われかけたが？」

「……………」

スー、ハー。

アルが金で雇いました」

どうやらスルーしたらしい。

「そうか」

「あ、ルール教えます。

このカードに数字がありますよね」

「ごめん、数字読めん」

「あ」

「やっぱりいいわ」

#### 4 - 6 9人の英雄（上）（後書き）

評価ありがとうございます！！  
いやあ、嬉しいですね。

これからも、今まで通り普通に頑張ります。

このまえ、小説の書き方つてのを少し調べました。  
算用数字は駄目とか、…（三点リーダー）の使い方とか、全く知り  
ませんでしたね。

まあ、直すのもだるいんで、出来るだけ直して、この話はこのまま  
の感じで続けます。

質：4章はいつまで続くの〜？

応：あと二話ぐらいで、ちやちやっと終わります。  
その後は、待望（だったらいいな）の最終章です。

あと、ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

4 - 7 9人の英雄（下）

馬車は月の下でも休まずに走る。

いや〜、ドラゴン元気だな〜。

今の外の景色は緑の森だ。

「しかし、やつらがやられたとは」

横のアルはさっきからこればっかだ。

もしかして、話しかけて欲しいのか？

ふっ、可愛いやつだな。

しかし、ここで話しかけないのも面白そうだ。

どうしようか。

「やつらも歳を取るからの……」

ははは、そんなに話しかけて欲しいか！

俺から1.5mほど離れているのも、可愛いな。

それに、俺の方を全く向かず、外ばかり見ているのは恥ずかしいからなんだろう？

仕方ないな。

「アル、やつらって、アスタの親か？」

「……時間は気づかぬ間に過ぎているものじゃな」

うおお、なんとという完成度のごまかしだ。

「アル？」

「しかし……ん？」

ああ、おぬしか」

「アスタの親のことか？」

「ああ、そうじゃ」

「どんな人なんだ？」

「強いやつらじゃ」

ツンデレというやつか？

そこまでアバウトにきつぱりさつぱり言われるとは。

「強いつて、どんなだよ」

「そうじゃな。」

魔王との戦いの時の9人の英雄で、格闘王と呼ばれた男と破壊の魔術師と呼ばれた女じゃ。

両方ザードランドブルの出だったはずじゃ」「

「その二人が殺された、と」

「ああ、二人も相当年老いたはずじゃからな」

「……なんで、アルはそんなやつを知ってるんだ？  
しゃべり方も変だし、それに何か凄いし。」

「……何歳？」

アルは馬車の隅で寝ている。

「おぬしよりは長く生きておる」

「なんで」

「いろいろあるんじゃ。」

このせいで、大々的に商売できないんじやがな。  
……知りたいかの？」

「いいの？」

「おぬしは他とは違う気がするからの。  
余は歳をとらん」

「……？」

「勇者と共にあったやつもじゃ」

「……？」

「防衛隊に入りよったやつも居るの」

「……？」

「まあ、すぐにまた会うことになると思っぞで。  
楽しみにしておれ」

馬車の前には王国の城が見え始めていた。

森の中を一組の男女が走っている。

「勇者様、こんなことして意味あるんですか？」

そう言った少女は、男の肩の上に腰掛けている。

「うーん……ない！」

「じゃあ、あの中に入れてもらえばよかったのに」

少女が指差した先には、ものすごい速さで森の道を走る馬車が一つ。

二人はその馬車と同じ速度で走っている。

「いやあ、俺の自己加速もまだまだ現役だな」

「まあ、勇者様の魔力は、破壊の魔術師も自信を失うほどですからね。

しかし、彼女はもう居ない」

「いやあ、言っとくべきだったかな？

忘れてた」

「なんで勇者様は先のことの方が分かるんですか？」

「【勇者】で、あるからして」

「はあ。

真面目な質問をした私の間違えだった。

あの馬車に乗ってたら、今頃楽しくアルと話していたかも知れないのに」

「まあ、そう言うな。

勇者ってのは、ピンチの時にザザッ、っと出て行くもんなんだよ」

「は〜。

さすが勇者様ですね。

勇者魂が分かってございます」

「めんどそっくに言うなよ」

「まあ、勇者様が運んで下さってるから良いですけど」

この山には神殿が多い。

ステリウス教が昔使っていたらしい。

今はもっと都市の近くで活動しているらしいが。

ここは、山頂にあった神殿の中だ。

「魔王様、隠し扉を見つけました」

「その奥にあるのか？」

「はい、確かに。」

かなり下のほうですが」

「よい。」

やつらはこの世界を壊すのにちょうどいい。  
行くぞ」

ヴァロルシアスが見つけた扉の先には、下へと続く階段が回りながら伸びていた。

その階段を降りる。

その道幅は徐々に広くなり、その先には山の中に作った卵型の部屋があった。

中央には美しい円形の石板が置かれていた。

石盤は大きく、その上に家が建てられるほどだ。

表面には言葉や模様がびっしりと敷き詰められている。

石盤の端には、『ジャッグルホーリーの最後の魂』と書かれている。

頭の中に聖剣士の姿が浮かぶ。

「ジャッグルホーリー、解ける！」と、唱えた。

石盤が輝きだし、中心から光の亀裂が広がった。

先のことを考え、思わず笑みが浮かぶ。

石盤は光の粉となり、消えた。

そこには、大きな穴が現れ、その下からは4匹の闇竜が飛び出した。

4匹は天井を破り山の外へと飛び立つ。



プレッシャー感じるな。

「彼は、魔王戦でも、その剣とともに活躍した。  
しかし、最後は自ら闇竜封印するために、命を絶ったがな」

うわ、俺そんな剣、持てないし。

てか、剣使ったことないし。

「あの時は、かっこよかったぞ。  
余が見てきた中でもとびきり」

あれ、俺、剣があつたら魔王倒せるって話じゃなかったっけ？

4 - 7 9人の英雄（下）（後書き）

質：誰だ、ジャツグルホーリーって？

応：しるか、んなもん！！

いや、剣とか出しちゃったから、持ち主いるな〜とか思って。

関係ないけど、この国の1年は1000日です。

帳尻あわせ、とやらです。

まあ、四季は無いって設定だし、問題ないでしょ。

#### 4 - 終 出発の朝

なぜだ？

・・・・・・・・・・・・・・・・なぜ？

なぜだ？

今俺は、大群率いて北を目指している。

先の方に見えるのは、山……だと信じたい物体。

いや、ここまでまがまがしいと、逆に山じゃない、といわれた方が  
ましかな？

どっちもどっちだな。

山の上の方は黒い雲の塊で覆われている。

あの中に魔王が居るのか？

・・・・・・・・・・・・・・・・(ダラダラ) 冷や汗。

大丈夫なの？

生きて帰れるの、おれ？

俺、まだ高校生だよ、平均寿命は越えることを目標に、睡眠時間を  
最長まで延ばして生活してきた高校生だよ！

これからまだまだ遊ぶんだよ！

ってか、この世界から帰れるの？

・・・それは良いか。

この世界で遊べば良いし。

まあ、自分の信念と、将来の希望を考えても仕方ないな。

・・・なぜだ？

周りには、馬に乗った王様や、総括さん、セラ、アル（と普通の剣士さん）、ウイーディー、などなど。

取り合えず、今までの事を振り返ることでしょう。

「ふあ~~~~~ああ」

城に着いたのは夜の真ん中あたり。

眠い。

ひたすら眠い。

あの馬車寝にくいし揺れるし、布団で育った俺に、高速振動する木の板はつらかった。

取り合えず睡眠をと、俺はふらつく足で城へ入った。

赤いカーペットの上で、王様と奇跡の再開を果たし、途端に質問のマシンガンを食らわされた俺。

「勇者は？」

「おっさんでした」

「どづいつことだ？」

「来ませんでした」

「なぜだ？」

「それが、勇者が・・・(中略)」

とりあえず、勇者に言われた事を言ってみた。

「パプリカー侯爵か・・・。



「まあ、紫40で、お前が買い取ることにしてやる」  
「変わんなくね？」

まあ、いつか。

「なにせ、あの剣は赤1枚で買ったものだからな」

は？

そんなんでいいのか、ジャッグルホーリー。

可哀想だぞ。

「じゃあ、頼む。

とつとと出せ！

俺は帰って寝る！」

俺が話し終える前に、笑顔で走っていくバカ。

ナナレンジャーの1話の半分ぐらいの時間がたって、バカは帰って来た。

手には一本の剣が握られている。

柄から鞘まで、全てが白い。

ところどころに、金色の装飾がされており、柄の所には、何か文字が書かれている。

繊細ながらも力強く、美しい剣だ。

バカはそれを投げてきた。

「丁寧に扱えよ、なにせ、この俺が持っていた剣だからな。まあ、俺にはそんなヒョロイ剣、必要なかったがな！」

それに「

「眠い。」

よし、帰ろう」

「お、おい、待て、俺の話を聞け！」

「今度頼む」

「待て〜」

と、バカは置き去りに、俺は聖剣を手に入れた。

う、重い。

こんなもん振れるのか？

まあ、俺は振らないがな。

俺は、これを届けたら防衛隊を降りよう。

そんな考えをしながら、俺は城へ歩いた。

なんか、黒い雲のある山の後ろが明るくなってきた気がするんだが。

そして、城に着いて、王様と面会したまでは記憶がある。

「ちょっと、アンナ、なんで俺がここに居るんだ？」

俺は横を歩くアンナに聞いてみた。

「あゝ、簡単に言っと、王様が勝手に・

」で、これがあれば魔王を倒せるんだな」

「……………」

じじくり。

「わかった。

で、これはお前がもつのか？」

ぐ〜ぐ〜……………じじくり。

「よし、出発は早くしたほうがいいだろう、魔王が力を取り戻す前に」

うづら、うづら……こっくり。

「では、今日でいいな」

こくっ。

「よし、出発じゃ〜〜〜〜〜！」

こちらには、今年の大会優勝者のジョーカーが居る。彼の剣と共に魔王を倒そうではないか!！」

……って、なってたよ

「……………」

俺帰るは

「無理でしょ」

周りには、俺に期待の目を向けている、兵士、兵士、兵士、兵士……。

「はあ。」

これから死ぬかもしれないって空気じゃないな」

まあそんな事だろうとは思っていた。

なんか、皆そんな態度だったし。あの後。

「いやあ、昇進したね、無理矢理。ジョーカー君。  
単なる不法侵入者が二代目勇者になるなんて」

おい、セラ、なんの乗り気だ？

俺、二代目勇者なのか？

まあ、今から魔王を倒しに行くんだもんな。聖剣もって、鎧まで着せられて。

体が重い。

50m走、20秒ぐらいかかるな。

歩くだけで息が上がる。

死ぬ。

「あ、こっちに居るのはレイサとマアサ」

セラは、出発前の控え室とやらの端で座る、二人の少女を指差した。

「二人とも、強いからちよっかいかけない方がいいよ」

こいつ、やたら明るいな。

これから、魔王と戦うんだよな？

「もうすぐ、始まるね」

ん？

真面目になった？

「ああ、何で俺がこんな世界のためにこんなことやってんのか？」

「意味はわからない、意味は後からついてくる。

この言葉、知ってる？知らない？」

「知らない」

「やっぱり。」

これは、僕が昔居たところのことなんだけどね……

「しゅっぱーっ……」

んなこともあったし。

はあ。

どうなるんだ、俺？

っっていうか、徹夜だし。

はあ。

そんな具合で、俺の、意味分からん、複雑な心境な旅は続く。



#### 4 - 終 出発の朝（後書き）

あ、きつ。

体育大会の練習きついです。

三点倒立で首いて〜！！

はあ？明日も体育2時間あるの？

えっと、今日は疲れながらも書きました。

言い訳して、いいわけです！

質：最終章って？

応：魔王と戦って終わります。

取り合えず、出来る限りがんばるんで、暇で暇で死にそうで、何が何でも、何かしたいかたとか、読んで下さったら嬉しいです。

5 (魔王と勇者) - 1、魔王空間突入(前書き)

なんとRPGなタイトル。

5 (魔王と勇者) - 1、魔王空間突入

はあ。

ため息が漏れる。

私だって、いけるのに。

はあ。

大丈夫かな？

窓の外を眺めると、黒い雲で覆われた山のふもとを埋め尽くす兵士が居る。

ため息をつきながら眺めていると、部屋の扉が開いた。

「アルメルナ様、お紅茶です」

私専属の侍女が入ってきた。

「どうかなされましたか？」

「……本当に大丈夫なのかなあ、と思っただけね」

「大丈夫ですよ。」

魔王は弱っていると言っていたじゃないですか」

「そうよね、勇者様が言っていたんですから」

「ヘクシ~~~~ン!!」

くしゃみにあわせて、手に持っていた菓子の山が一部崩れた。

せつかく、王国の菓子屋で全種類買ったのに。

「大丈夫ですか、勇者様？」

横からは青い目と髪のこと……名前知らない。

え!!俺、本名知らないし。

今まで気づかんかった。

まあ、いいか。

「勇者は止めてくれ、周りの勇者ファンから、勇者の名前を軽々しく使つな! って言われるぞ」

「じゃあ、なんて呼べば？」

「じゃあ、ソウで」

「なんでですか？　っていうか、なんでですか？」

「いや、特に意味は無い」

「いつも適当なんだから、勇者様は」

「気にするな、どれかいるか？」

仮名マナは、俺の抱える菓子山から、飴を取った。

こいつは飴が好きなのか。

こんどかってやるう。

「ソウ様、これからどうするのですか？」

「うん、待つとく」

「待つとくって、何を？」

「面白い物だ。」

お前の能力、使ってもらおうぞ

「そんな、勝手に……」

「このあたりに飛んでくるはずだ。  
あいつ、楽しくやってるかな？」

ああ、だりい。

俺、結局どうなるんだ？

周りに流されて気がついたら、山のふもとだ。

見上げる山は、黒い雲で覆われていて中が見えない。

大丈夫なのか？

あの、ぐーたら勇者は信用できるのか？

まあ、やばくなったら俺だけでも逃げよう。

そういえば、ここまで魔物に会わなかったな。

この中に入っていったのかな？

きつとこの中は魔物だらけだな。

嫌だなあ。

「では、これより魔王討伐作戦を開始する！！」

あ、周りが歩き始めた。

俺も行かなきゃいけないのか？

魔王、優しいやつならいいんだけどな。

「魔王様、人間の兵士たちが来ました」

炎帝が報告をする。

暗い赤色の髪に赤い目の炎帝は、人の形をしているが、その正体は炎鬼。

炎を操り、人の魂を喰らう魔物だ。

100年前に精霊術師クリフォードに封印されたが、その力は健在。

ついこの前には、そのときの恨みを晴らして来よった。

使えるやつだ。

「魔物たちで相手をさせる。

闇竜たちは、もう少し後で良い。

……お前は調査を急げ。

勇者は居ないが、少女3人の相手は易しくは無いだろう」

「分かりました」

彼が上手くやれば、この能力は無敵となるはずだ。

「魔王の能力？」

そんなのは早く言ってくれよ。

まあ、俺は魔王とは戦わないぞ。

……絶対に。

……頼む。

戦わないで済んでくれ。

「そつだ」

今、俺たちは黒い雲を突っ切った。

目の前には、山。

太陽の光が、雲でさえぎられ、あたりは怪しい紫色の光で覆われている。

なんか、皮膚がもぞもぞすると言っか、軽いめまいがすると言っか、内臓の位置が入れ替わってるような体の芯が振動してるような、変な感覚に包まれる。

……早く出たい。

「とつとと教えてくれ、アル。てか、遅いだろ」

「魔王は口にしたことが現実世界に起こると言う、力を持っている」

「俺、帰る」

いつかの槍A「アル様、この雲の壁、内側からは出れないようです。まんまと捕えられました！」

んな！！！！

「らしいぞ、ジョーカー」

「アル、何とかしろっ！」

「そうじゃな、魔王が作り出したものなら、倒せばよからう」

「無理だ、言った事が本当になるなんてありえん」

勝てるはずが無い。

勇者め、俺を殺す気だろ。

俺ならいけるなんてありえん。

あいつは自分の小島で、魔王に見つからないような結界でも張って、のんびり暮らす気だ！

絶対そうだ！

「大丈夫じゃ、言った事といつても、名前を知っているやつの行動だけじゃ。

なんでも出来るわけではない」

「そのほかにあいつ、何する？」

「中級の魔法だけじゃ。

じゃが、必死で人の名前を調べているやつじゃからな……」

• • • • •  
51202.

5 (魔王と勇者) - 1、魔王空間突入(後書き)

始まりました！

パチパチパチパチ (拍手喝采)

質：5章はどんなかんじに？

応：魔王と戦います。主人公そんぐらいしかしません。

## 5 - 2 3人の少女

化け物、怪物、魔獣、鬼、なんと表現すれば良いのか白いグニョグニョ。

戦いは突然に始まった。

始まって欲しくは無かったんだがな。

いつもの俺なら、この騒動に紛れて逃げるんだが、山はすぐ後ろで黒い雲の壁に変わっている。

普通に登山してたら、いきなり前後左右から変な物の大群が現れたって状況だ。

「セナルカーフィス軍は右、シースイタース軍は後ろ、ザードランドブルとフィリティーは左、防衛隊は前だ」

後ろの方で防衛隊総裁さんが叫んでいる。

たしか、全軍の指揮を任されていた。

そして、俺の前には黒いライオンさん。

いつもと違い、大きさが5倍、金のたてがみに金色の角を生やしている。

「ガゴゴゴルルルルガアアアアア！」

う、うるさっ。

ほんとに空気が振るえてるし。

ついでに、腹に響く超低音だ。

あと、顔の周りでバチバチしてる、青い光は何???

突っ込んできた右前足を必死に避ける。

はあ。

………これと戦うのか、俺が?

久々に炎でも出するか。

ガチャリ。

鍵は開いた。

こそこそ。



「遊びに来た」

「あの中では、何が起こってるかもわからないのに!？」

窓からは、上半分ほどが黒い雲で覆われている山が一つ。

「YES!」

「すみません、私が何を言っても聞かなかったんです」

「あっちに行ってもすること無いだろうからな。」

「あっちはほっとけば良いんだよ。」

「こっちは豪華な迎えが来るだろうから」

たぶん。

たぶん来るはず。

「ふふ、いつ見ても変わらないわね」

「こっちは年取ってますよ。もう150歳こえたし。  
マナはこのままだけだな」

「なんで歳をとらないのか教えて欲しいわ」

「アルメルナさん、皆には話したでしょう」

「記憶操作に、歳を使っつて話？」

「最近使ってないらしいけど？」

「砂漠の大富豪は、錬金術に歳を使っつて言うけど、あんなに使いま

くって大丈夫かしら？

それに特殊部隊のマアサちゃんも、転移術に歳を使うのかしら？」

うお、アルメルナさんが本気だ。

どう答えるんだ？

「はあ。どこまで調べているんですか？」

「4人目を調べているところ。

シベリウス教の本で探しているんだけどね」

「凄いですね」

マナはそう言って、ため息をついた。

「おぬしの新しい戦い方は始めてみたわ」

特殊部隊のマアサの手には、最新の武器、銃とやらが握られている。

白く長い髪と、漆黒の銃が良いコントラストじゃ。

「レイサさんの特製なのよ。」

それより、あなたも面白いわね」

金の円盤に乗る、余の前には金の鎧が3つ。

手に持つ長剣を振り回している。

「一つやるつかの？」

「いえ、遠慮するわ」

そう言いながら、マアサは鳥型の魔物を撃ち落した。

銃の弾は、特殊部隊の倉庫から、銃に直接転移させているらしい。

全く、便利な物じゃ。

昔は相手を空から落として殺してたからの。

あれはグロかった。

「あなたの戦い方も変わったわね。」

昔は、相手そのものを金に変えるなんて事もしてたのに」

「骨が残らんと困るかもしれないと思ってな。」

こっちの方が効率が良いし」

「前の時は、時間がかかり過ぎたからね」

前の時。

それは魔王が始めに現れたときの事だろう。

あの時は勇者に助けられた。

あの時は輝いて見えたものじゃが、今はグータラのおっさんじゃな。

炎をイメージする。

大きな炎。

すると、右手から炎が広がった。

炎は広がりついに左手の先までを覆った。

『主人、大分魔力が馴染んできたの。  
調節も覚えるべきだと思うが』

こんなの練習したって、使うときが無いだろ。

『主人、前』

!?

前を向くと、ライオンの爪が当たる瞬間だった。

しかし、手はすぐに引っ込む。

どうやら爪の先が溶けている気がするが、俺は人間だから、気のせいだろう。

『元人間じゃろ』

今も人間だ。

『無理があるの。』

あ、主人、前』

ライオンは口から青い球を吐き出した。

……俺に向けて。

……なんでバチバチ言ってるの？

……速いし。

しかし、その球は止まった。

「ビスタ」の一言で全てが上手くいくんじゃない？

それより、無意識に言葉が出ていた自分の、魔法に対して適応の早さに我ながら驚き。

俺は炎の脇を通りながら言った。

「ギラ・ダック！」

俺の目の前から透明な塊が飛び、ライオンの顔に当たる。

ライオンはギュツ！ と叫び、斜め後ろに倒れた。

そこに雷の球が飛んでくる。

緑と黄色の光が混じった、セラの雷だ。

大きさは少し小さく、下半身を少し残して、ライオンは消し炭になった。

「とどめは刺したくないって、思ってたでしょ？ 思ってたかった？」

「思ってた」

「やっぱり。」

まあ、無意味に命をとる事は良くないね。

これ、シベリウス教の本に書いてあるから」

「なんなんだ、それ」

「格言みたいなの？」

「いや、シベリウス教の事。」

「確か神誕祭かなんかでパレードやってと思うけど」

「ああ、シベリウス教は最古の宗教だよ。」

「最近は、名前を聞かなくなったけどね。」

「この山にも、教会があると思うよ。」

「行きたい？ 行きたくない？」

「魔王がいなくなっってから見に行くかな」

5 - 2 3人の少女（後書き）

体育大会の練習きつい。

塾きつい。

三点倒立難しいし。

組み立て体操、成功するのか？

質：先が分かりやすい気がします。

応：んな事するか！ 早めに書かないと忘れるんだよ！ 内容！

### 5 - 3 闇竜発進！！

草の無い山の斜面。

人間と魔物たちが激しい戦いをあちこちで繰り広げている。

その戦いの隅で俺たちは戦っていた。

剣で魔物の体を切る。

周りを取り囲むのは、人型の魔昆虫。

その中央には俺とシサムさん。

俺、村ではそこそこの剣士だったのに、この集団に居ると自分がザコく思える。

女の子ですら、飛行性の中型魔物をやすやすと打ち落としたり、無敵の鎧を大量に作って、小型魔物を殲滅していたり。

ジョーカーさんにいたっては、魔法に体制のある大型魔物をただの無系統魔法でふっ飛ばしたり。

大型魔物って、一匹で町を滅ぼしたりもしてなかったっけ？

俺の覚え違いか？

……そうなんだろう。

俺が、村では強かったのも、気のせい。

この集団のメンバーが人間ってのも気のせい。

目の前に居るのは、魔物の形をした、ぬいぐるみなんだろう。

「おい、集中しろ」

シサムさんが、虫型のぬいぐるみをバツクに言った。

ぬいぐるみから、緑色の液体が飛び散っているが、幻覚だろう。

「はい、分かってます！」

俺は目の前の一匹に切りかかった。

ぬいぐるみの爪と、溶かされたので新しくした剣がぶつかる。

「ぐぐ」

ぬいぐるみの力は強い。

この剣を買ったために、金を求めたら、こんなことに巻き込まれたんだぞ。

こっちの苦労分かってんのか!?

「ていやぁー!」

緑のぬいぐるみに剣が当たる。

硬いから割れ、中から緑色の何かがあふれる。

浅い！

俺は痛がっているぬいぐるみの頭に剣を振り下ろす。

頭を深さ10cmほど切られたぬいぐるみは、声も上げずに後ろ向きに倒れた。

後ろを振り向くと、10匹は居たぬいぐるみたちは、全て真っ二つに切られていた。

「大丈夫か？」

シサムさんの服のあちこちに緑色の液体がこびりついている。

「はい、ありがとうございます」

俺は剣についた血……じゃなくて、ぬいぐるみに仕込まれていたシロップを払い、鞘に収めた。

顔を上げると、そこにシサムさんの顔がある。

しかし、その目は俺の顔をそれて遠くを見ていた。

何があるのかと振り返る。

「なんだ、ありゃ？」

山の頂上辺りに4つの何かが飛んでいる。

後ろの黒い雲で見えにくいだが、その体はさらに黒い。

2枚の羽は不規則なまがまがしい形をし、長い尻尾の先はひし形にとがっている。

「あれは閻竜だな」

シサムさんがすぐ横で言った。

「でも、封印されたんじゃない」

「そうだが、炎帝すらも解放された今だ。

4枚の災厄、閻竜が解き放たれても不思議では無い」

閻竜は、山の頂上を数回まわると、それぞれ別の方向へ飛び去った。

俺は走った。

安全地帯を求めて走った。

目指すは金色の鎧だらけの地帯。

……あつこ絶対安全だ。

空からの攻撃は、銃持った特殊部隊の子が何とかしてくれてるし。

つてな訳で走った。

自己加速ばりばりで、魔物なんて気にしない。

いや、嘘。

気をつけないと、魔物とぶつかって、両方が滅ぶ。

曲がり角で、美少女とぶつかる分には構わないんだがな。

つと、そんな下らん事を考えている内に、2人のそばまで来た。

速度を落として近づくと、2人はなにやら空を見ている様子。

「どうしたんだ？」

つと、軽く聞いたら、帰ってきたのは重い声。

「閻竜じゃ。」

ジャッグルの封印が見つかったようじゃな」

そのとき、4匹が別々の方向へ進路を変えた。

「!!」

止めに行きますよね、アル!!」

「ああ、急げ、マナ!!」

あ、ちょ、待って。

マナがアルに触れ、二人は消えた。

「……行っちゃった」

っと、俺の横にあるのは金の円盤

何か浮いている。

とりあえず座ってみた。

なんか上がり始めた。

乗り心地も良い。

気分はセレブ。

……いけるところまで上がるか。

5 - 3 闇竜発進！！（後書き）

体育会延期！！

悲しくも嬉しくも無いな。

延期…… あ、体育の授業増える。

組み体、痛いからやりたくないのに。

質：ウィーデーは？

応：その辺で、適当に戦っている事にしてください。

## 5 - 4 それぞれの戦い。

山の斜面を下る人影が見えた。

周りの者は皆、闇竜を見上げている。

人影が向かう先には教会。

この山の中で唯一俺が知るところ。

子供の頃の明るくも暗くさびしい思い出の詰まる教会。

「マアサ！ ……は行ってしまったか。

……この山だったのか、やはり」

俺は山を下る赤い影を追った。

「この戦いはそろそろ終わる。

ちよつとは勝手にやっても、問題ないだろう」

視界が一瞬消える。

真っ白な世界が少し続き、次の瞬間には闇竜の目の前に居た。

あいつの転移術は正確なこつた。

ほんとに目の前じゃないか。

目の前には竜。

鱗は漆黒、目は真紅。

何ともまがまがしい竜じゃ。

「止まれ、闇竜！！」

余の相手をしてもらっぞぞ！！」

足元の空気を円盤状に錬金しながら、言い放った。

「ギユギヤアアアアアアアア！！！！」

闇竜も吠える。

大きすぎて思わず下がりそうな大声だ。

「いい返事じゃな！！！！」

手が輝く。

作り出すのは剣。

光が最高潮に達し、辺りに飛び散る。

余の手には、体の5倍はある巨大な金の剣があった。

「ギイイイイン！！」

飛び掛って来た竜の爪と、余の大剣がぶつかり合い、赤い火花が大量に散った。

「……………ククっ、楽しい！ 楽しいのう！

屋敷の生活にはもう飽きた！

……………さあ、久々の戦いじゃあ！！！！」

「ギユガアアアアアア！！！！！！」

私の武器が敵を切り裂く。

敵を飛ばす。

攻撃を消す。

私にとっての祖父が造りだした物。

使い勝手は良い。

敵の数は随分と減った。

最初に襲い掛かってきたものたちはほとんど倒されている。

大陸中の魔物と大陸中の戦士の戦いだ。

数で上回っているのはこちら。

こちら側が有利になるのは当然の結果だろう。

しかし、あの竜は何だ。

データと照合

与えられている情報の中にあるかもしれない。

該当情報を発見

表示。

区別名、閻竜。魔王誕生以前から存在。閻系統の魔力を有す竜

閻系統？ 神話の中の話ではなかったのか？

緊急：未確認人物、接近

……ん？

目を上げると、一人の男が剣を構えていた。

長い髪が足元まで伸び、剣からは白い空気が発せられている。

「あなたは何者ですか？」

「私はヴァロルシアス。

魔王を倒すために、復活させる」

データと照合。

名称：ヴァロルシアス

防衛隊総括の息子

異変：洗脳・操作状態。

魔王の力であると推測

魔王の力。

便利なものだ。

「邪魔をするなら攻撃する」

なんとも無茶苦茶な話だ。

魔王はあなたの後ろにいますと言った事が分からないのだろうか？

「邪魔とは何ですか？」

「……魔王を倒す！！」

反射的に体をそらす。

冷気を纏う剣が伸びない髪の毛の先を切る。

きられた髪は凍り、地面に落ちて砕けた。

ちゃんとした返事をしてからにして欲しい行動だ。

魔王の力というものの強さだろうか。

しかし、そんな事は考えては居られない。

冷気を纏う剣が襲い掛かってくる。

それを紙一重でかわす。

「どっちら、戦うようになってるようですね」

私は暗い空に光の筋を放った。

その筋は閻魔の鱗にかすかな傷を残して弾かれる。

しかし、閻魔はこちらに気づいた。

「ギイイイイイギャアアアアアアアア!!」

閻魔が口を開き、こちらに叫ぶ。

その口にもう一発。

どんな生き物にも口の中は共通の弱点だ。

銃弾が閻魔に向かう。

しかし、閻魔は頭を振りかわした。

かわされた弾はすぐ後ろで弾ける。

移転させておいたのは拡散弾。

親友であり同僚でもあるレイサの傑作だ。

球の破片が飛び散り、閻魔を襲う。

「ギユワアアアアア！」

闇竜が叫ぶ。

「片目を破壊」

さあ、早くしとめてしまおう。

自分自身を転移。

次の瞬間には、体が闇竜の口の目の前。

手には巨大なライフル。

ものすごい音が、転移させた耳栓をはさんでも聞こえる。

引き金に指をかけ、銃を両手と体で支える。

しかし、引こうと力をこめたとき巨大な爪が銃を払った。

再度、手元に転移させるが、先が折れている。

次の銃を転移させようとした時には、鋭い尻尾が迫っていた。

おい、この円盤どうなるんだ？

さっきから上昇が止まった。

地面は遥か下。

人々がただの点に見えるぐらいだ。

……うん、いい眺め。

……いや、眺めは良いが、見えるものが悪い。

雲の近くから、徐々に進み始めた連合軍。

けが人も大分居るらしく、後ろの方で止まってる集団がある。

おっ、横のほうでハンパ無い動きをしてる金色はウィーディーか？

相手もかわいそうに。

大丈夫なのか、あの白い点。

一対一でよく持ってるな。

それと、山の右側で戦ってる、金色の剣と竜。

山の左側で戦ってる竜と、白い点から光の線やら、爆発やら、近代的な武器いろいろいる。

そして、突っ込んでくる黒い影。

なんだ、あいつ。

何で突っ込んでくるんだ？

「ギョルルルウルウウウウウー!!」

おい、叫ぶな。

耳が痛い。

俺は今、戦場観戦（+実況）で忙しいんだ!!

邪魔するなら、容赦はせんぞ。

それと、山の向こうに飛んでいって、雲から易々と出て行った竜は知らん!!

#### 5 - 4 それぞれの戦い。(後書き)

気がついたら、50話越えてました〜!!

ここまで読んでくださった人、ありがとうございます!!

これからも、もうちょっと頑張っていけます。

とりあえず、終わるまでは続けます。

質：この章で終わりかあ。さびしいなあ。

応：重要告知！ そんな事言ってくれる人のために、番外章作ったりするかも知れません。

5・5 剣士の戸惑い+いつかの、濡らすな注意+いかにもな神殿(前書き)

タイトルが始めて30字に到達しました。

5 - 5 剣士の戸惑い+いつかの、濡らすな注意+いかにもな神殿

黒い空には、金の剣と黒い竜が戦っている。

おい、なんなんだ、あいつ。

俺、あんなやつを召使いやつてたのか？

やるな、俺。

んと、状況は色々大変になっている。

まずジョーカーさんが消えた。

気がついたら居なかった。

いや、あんたが居なくなってどうするんですか？

あんた、勇者の代わりにここにいるんですよね？

そうですね？

あんたがいるから、この全く怪しい雲の中に突入したんですよね？？

あんた、重要ですよ、ここの誰より。

はあ、もう良いや、あの人。

んで、次に特殊部隊の指揮官が消えた。

おい!!

とりあえず、おい!!

あのキツネ顔、いつの間にか消えやがった。

指揮官だろ??

トップだろ?

お前が消えてどうすんだ!?

まあ、今は鉄砲持った紺色の髪の子が指揮してるみたいけど。

レイサだったっけ?

まあ、いいや。

何とかなってるからいいや。

次行こう。

今、最重要視しなくてはいけないのは、特殊部隊以外の兵。

大型の魔物は、空を飛んでなさる少女とか、失踪した防衛隊長とか、  
ジョーカーさんが倒し、小型や中型の魔物も大体は片付けた。

そして、ここで判断を下すはずの総括さんが居ない!!

おい！！

おい！！

総括さん、あんたどういうつもり？

指揮官失踪ですか？

また失踪ですか？

上の方が次々と消えているこの現状。

どうすんだよ！！

先の事考えれくれよ！！

なぜ兵を残して消える！？

おい！！

「あ、あの……」

おい！！ つて、ん、あ？

「すみません」

目の前に居たのは、ジョーカーさんと一緒に居た女の子。

たしか、城に戻ったとき、普通の防衛隊に加わって、一般兵で活躍してたはず。

デグリア、だっ たっ け？

「総括さんが、ここの指揮は、ジョーカーさんと一緒に居たやつらに任せると言ってる……」

何を言ってるんだ、あのはげオヤジ。

はげた頭に羽のついた帽子を被りやがって、それで隠しているつもりか？

……やべ、ちょっとストレス溜まってわ。

「じゃあ、突撃でいいんじゃない？」

よし、冗談を言える余裕は手に入れた。

「はい、分かりました」

あ、え、ちょ、突っ込んでくれないの？

「全軍、突撃~~~~~!!!」

ストップ！

ストップ！

拡声の魔法使って高らかと宣言しよったぞ、こいつ……！

……あ、俺、知らね。

空には新たな雲が生まれていた。

左右から迫る氷の剣。

さすが九人の英雄の一人、防衛隊総括の息子。

強い。

私に打ち込まれた戦闘プログラムと同等の技術。

剣と武器がぶつかるたびに氷の粒が飛び、両方の体を襲う。

また横から剣が振られる。

しかし、その剣を手で掴んだ。

こっちは手は人間の皮膚と違い、より強く、より硬い。

技術で負けていても、こちらは人間より優れている体。

そのまま、その剣を引いた。

体が近づく。

フーモアガツシャーを投げ、その体に拳をねじ込んだ。

ガシッ！

硬い音がこぼれる。

ヴァロルシアスは少し後ろに下がり、腹をさすった。

そこから見えるのは金属。

「あなたも私と同じ改造人間ですか？」

確認の意味がつよい質問をする。

「私は魔王を復活させる」

「洗脳状態ですね」

再び地面を蹴るヴァロルシアス。

私もフーモアガツシャーを拾い、走る。

二つは激しくぶつかり、フーモアガツシャーは空に飛んだ。

ありえない。

この程度の力で離れるなど

ヴァロルシアスは少し微笑み、口を開いた。

「あなたの機種は水分で機能が落ちる。

あの時、剣を掴んだのは失敗ですね」

ヴァロルシアスが再び剣を振る。

その剣の切っ先がパイプが走る首元に触れようとする。

そこで、剣はヴァロルシアスごと消えた。

「大丈夫かの、お嬢さん」

いや、ヴァロルシアスは氷弾を受けて転がっていた。

そして、話しかけてきたのは防衛隊総括。

「息子に似た姿が見えたから、来てみたら凄い事になってるようじやの。」

ルーシー、その体は何だ？

そんなに力があつた覚えは無いし、破れた服から見える金属は？」

「親父には関係ない。

魔王を倒すためだ」

「魔王はお前の後ろじゃろ」

「俺は魔王を……」

ヴァロルシアスは剣を握り締めて総括を見た。

「お前の稽古は久しぶりじゃな」

総括は瞬く間に巨大な氷を出現させる。

大きく、鋭く、あるのか分からない程の透明さ。

「親父の巨大斧は変わらない」

「わしの瞬間冷凍も衰えんな」

あたりの温度は一気に下がり、水蒸気が水滴に変わる。

あたりは霧に包まれた。

あーあー。

だれか、誰か助けを頼む。

闇竜じゃない。

闇竜は3秒で消えた。

消した……のか？

気がついたら、新しく出てきた雲に囲まれてた。

例の様に外には出れん。

雲の球体の中に一人ぼっちだ。

球体に一つだけ穴が開いてるんだが、何だあれ？

出れるのか？

いや、ここまで完全な球体で、一箇所だけに穴が開いてるって、怪しいだろ。

とか、考えながらも結局出て行く俺。

好奇心旺盛？

浮遊の魔法久しぶり。

金の円盤バイバイ。

球体から出たそこは、山の山頂だった。

目の前には一つの大きな神殿。

そういえば、神殿がいつぱいあるんだったよな。

よいしょっと、着地。

神殿の扉は半分壊れ、いかにも出そうな雰囲気だった。

外側に巡らされた柱の間を抜けて、扉を押すと、いかにもな音を立てて戸は倒れた。（開いたではない、倒れた）

そんな中に入って行く俺って、探究心豊富？

5 - 5 剣士の戸惑い+いつかの、濡らすな注意+いかにもな神殿（後書き）

ウィーデューの説明書。（3 - 1より）

動力源は糖分です。

水をつけないで下さい。

雷が鳴り始めたら、屋内に非難してください。

分解、改造は止めてください。

作者の動力源も糖分です。

質：番外章??

応：勇者様のお話です。

5 - 6 思い出の教会（セラ）

防衛隊総括がヴァロルシアスと戦っている頃、一つの教会にたどり着いた。

両開きの門が両方はずれ、中庭には草一つ無い。

門の枠に触れたとき、子供の頃の思い出が流れ込み、目の前の建物に居るかも知れない敵のことを忘れそうになった。

物心ついた時に初めて見た景色。

初めての仲間。

初めての別れ。

初めての恐怖。

後ろには、よく走り回った斜面がある。

石塀の隅の木には良く登った。

心から涙があふれそうになる。

しかし、その涙があふれる前に教会から一人の男が出てきた。

一体の魔物が。

人よりも一回り大きい体格。

狼のような体に人間味を帯びた顔。

全身の毛は真っ赤で、その姿はまるで炎が歩いているようだった。

「おい、教えてほしい事があるんだが、その白いの」

「……」

「魔王様が、人の名前を調べて来いって言われたんだけど、案内してくれないか？」

「やだな。」

とつとつこの建物から出て行ってくれる？ 駄目？

……駄目なら、消すよ！」

両手に雷を纏う。

乾いた空気に激しく光る。

「なんだよ、血の気が多いやつだな。」

本を探してるだけなのによ。

これだから人間は」

そう言う炎帝も、赤い目を剥き、口の奥には炎を燃やしていた。

「一秒でも早くここから出て欲しいんだけど」

「それは無理だ。」

用事が済んでいない」

「ここでは戦いたくないな」

「そうか、じゃあ、中で続きをするかな」

炎帝は向きを変え、教会の壊れた扉の中に入った。

「でも、その中をあさるのは許せない」

右手を上げ、赤い背中を狙う。

次の瞬間、小さな光る球が炎帝の背中を焦がした。

ジュツ！！

短い音がする。

「いてっ！！」

炎帝の毛が逆立った。

「わかった。

作業は後だ」

「後は……ない」

おおおおおお。 ) 雄たけび

こごごこおおおお。

んだよ、こじ。

この神殿なんだよ。

いっその事壊してしまうか。

ソウ！ いい魔法だせ。

『それが、この神殿は神力が籠っておる。  
下手に何かすると、どうなるか分からん』

へ？ そーなの？

『そう言うものじゃ。』

まあ、進めばよかるつ』

はあ。

仕方ないか。

つと、俺は右手の炎を灯して暗い神殿を進む。

周りが全て石で出来てるから、足音が響いて怖いな。

皆どうしてるかな。

俺こんなことしてていいのか？

うわ!!!

あ、何が動いたかと思ったら俺の影か。

う~~~~。

山の上寒いな。

鳥肌立ってきた。

山の斜面を乾いた風が走る。

その斜面で二人は向き合っている。

「どこまで行けばいいんだ？  
そんなにあつこが大事なら、燃やしてくらあ良かったぜ。  
魔王様の命令がなければだけどな」

「ここでもいいよ。」

あつこを汚すやつは許さない」

「そんなに大切なものか？

誰も使わないだろ？

まあ、俺は使うけど」

「あそこは、言葉には出来ないけど、大切なところなんだよ。  
ボクのただの幻想や、美化した思い出かもしれないけど」

「そんなものをねえ。」

ま、早くかえらねえと、しかられるから、早く行かないとな」

「そうだね」

セラが走り出す。

その目には炎帝しか見ていない。

電気を纏う手の平を打ち出す。

炎帝は上半身だけを動かして、連続で突き出される手をかわす。

「ほほう、俺もまだなまっちゃねえな」

炎帝は口を開く。

その口には炎。

セラはその炎が見えたと同時に自分を後ろに飛ばした。

フレミングの法則を利用した移動。

自分の体の中の電気の流れと、操る電気で力を生む。

炎が炎帝の口から放たれる。

「人間の言葉は話すけど、どちらかと言うと魔物かな？」

「そういうてめえは、人間なのか？」

ねむってる間に世界も変わったな」

「ボクはまだましなほうだと、最近はどう思うけど？」

「九人の英雄は、もうちょい、真面目な戦い方だったぜ。

雷を常に纏ってるなんてのは聞いた事がないな」

「そうかい」

セラの雷球が高速で放たれる。

炎帝はそれを難なく避けた。

「やられっぱなしじゃ、楽しくないな」

炎帝が地面を蹴る。

ものすごい速さでセラに接近する。

その速さで繰り出された拳をセラが手の平で受ける。

「ぐっ」

小さく、押さえ切れない苦痛が声に出る。

それに負けず、セラは手の平から電流を放った。

炎帝のからだに直接電気が流れる。

炎帝はすぐに手を引こうとするがセラは離さない。

炎帝は引くのをあきらめ足を出す。

正面から蹴りを受けたセラは後ろ向きに飛び、斜面を少し転がった。

「うおおおおい。」

体の筋肉が勝手に動きやがる」

「痙攣だね。」

これで、戦いやすくなればいいけど」

「はっ、そっちも今のは効いただろ」

「かもね」

だらだら（ 冷や汗 ）

俺の冗談で、全軍が進み始めた。

ジョーカーさんたち《人間離れした人たち》のお陰で、土気がりまくりで、皆テンション絶頂で我先にと走っていく。

ここに来るまでとは大違いだ。

進む先は、同じ、黒い雲なのに。

「面白い事になったな」

「あ、シサムさん」

「正直、ここまで兵が残るとは思ってなかったんだがな」

「へ？」

「敵に囲まれたときは、あそこで全滅するんじゃないかと思ったんだが、全くの杞憂だったみたいだ」

シサムさんは笑った。

「あいつらは反則だ」

「そうですね」

「よし、俺たちも行くぞ」

「はい」

周りに続いて走り出す。

その足はいつもよりも軽く感じられた。

「わ~~~~~~~~~!!!」

山の斜面を人の大群が走る。

突撃でよかったかもしれないな。

楽しいし。

5 - 7 闇竜戦闘

空気が凍り、地面に生えるわずかな草には霜がついた。

久々に作った氷の斧は昔より重い。

衰えたのかもしれない。

少し鬱な気分になる。

まだまだ戦えるつもりだったんだがな。

時間の流れは速いもので困る。

振り下ろす斧と剣がぶつかり、斧が欠ける。

「父も衰えたようですね」

息子が言った。

……そんなことを言われるようになったか。

しかし、まだ負ける訳にはいかない。

素早い剣が首を狙う。

それは斧の破片に防がれた。

小さな氷の板が剣を弾き、軌道をずらす。

「お前はまだまだ未熟じゃ」

斧を持ち上げる。

小さく振りかぶり、降ろすが、再び剣とぶつかる。

「力、落ちましたね」

ヴァロルシアスが斧を弾き返す。

それに逆らわず、斧はすぐに放し、開いた腹に蹴り入れた。

「ん!？」

硬い。

いや、固いだろうか。

やわらかさが全くない、固体。

驚いている間にも、氷の剣が迫る。

かわせない。

咄嗟に手を凍らせて受け止めた。

後ろに距離をとり、手の平を見る。

氷が貫かれ、手の平には細い切り傷が出来ていた。

「お前も大分変わったようだな」

「ええ」

金の剣の長さは優に5メートルを超えている。

その剣が闇竜の爪とぶつかる。

重さを利用するなら高い所に居た方がよい。

余の金の円盤を操り、闇竜の周りを旋回しながら徐々に高度を上げる。

上がりながらも攻防は続いた。

棘の生えた尻尾と金の剣がぶつかり、両方が弾かれる。

この剣で、大体のものは切れたはずなんだが、こいつの鱗はアダマントライトよりも固いようだ。

鱗にはほとんど傷がつかない。

剣の慣性を消して弾かれた動きから急速に加速。

閻竜は体を抜ったが羽の先がぶつかり、黒い液体が噴出した。

薄いところは弱いはずだ。

振り切る前に逆向きに切り上げる。

その一太刀は閻竜の前足で掴まれた。

しっかりと握っていて離れない。

ぎりぎりとした嫌な音がする。

ははっ、無駄な事を。

剣の形を細長く変える。

閻竜の手をすりりと抜けたそれは、咄嗟にかわす閻竜の体をかすり、浅い傷を作った。

浅かったな。

確認して次の動きに移る。

閻竜の上から剣の形に戻した金の塊を振り下ろす。

閻竜の背中の鱗の一枚が当たって砕けた。



剣の端は、いつの間にもここまで上がって来たのか、山の頂上へ向かって落ちていった。

しかし、そんな事はどうでも良い。

何だったんだ？ さっきの弾は？

余の頭の上数メートルを通過していった塊は何事もなかったように進んで行く。

ふふふ。

こんなのは初めてだ。

「面白い！！ ぶった切ってやるっ、この剣で！！」

「ギユウウウウウアウウアウアアアアアアアアア！！」

色々うって分かった。

この閻竜の背中にはもろい鱗がある。

拡散弾を背中に撃った時、一つ傷が入った鱗があった。

竜の後ろに転移し、銃を撃つ。

弾は少しずれ、鱗に弾かれた。

閻竜がこっちを向いて、爪を振るう。

次は顔の前に転移。

つぶれていない片目を爆撃弾で狙う。

しかし、それよりも早く閻竜の尻尾が迫ってきた。

あきらめて、いったん転移する。

離れたところから銃弾を三発。

もちろん傷はつかない。

こんな物が外に出たらどうなるか……出て行った気がする。

どうなっているか、一瞬不安になったが、今考えている場合じゃない。

閻竜が口を開けた。

今がチャンス、とライフルを手に転移。

引き金を引く。

すると口の中から何かが飛び出した。

黒い塊。

それはライフルの球を消し去り、こちらに迫ってきた。

速い。

すぐに転移する。

何だったのだろうか、さっきの球は。

球は後ろに進み続け、黒い雲の壁に穴を開けた。

その奥に見えたのは、王城に向かう、一匹の闇竜。

黒い雲はすぐにふさがり、先は見えなかった。

しかし、あのままでは城の人達が危ない。

兵もほとんど居ないはずだ。

まずい。

あせりながらも、闇竜のほうを向く。

闇竜はもう一度、あの塊を放とうとしていた。

「ふう〜〜〜〜」

「ふう〜〜〜〜」

「はあ。」

勇者様、何でここでゆっくりしてるんですか？  
これからどうするんですか？」

あんなに心配してたアルメルナさんも、ゆっくりお茶飲んでるし。

「大丈夫だ、たぶん悲鳴が聞こえる」

「へ！！ 悲鳴？」

「悲鳴」

悲鳴って？

「それが聞こえたら、仕事だ」

「はあ。どうなるやら」

そのとき、窓の外から、人々の叫び声が流れてきた。

「きゃーーーーー」

「わーーーーー」

「うわーーーーー」

何事かと、窓に駆け寄り、首を出す。

そこで私は、黒い竜が山の方から飛んでくるのを見た。

「よし、行くぞー！」

あ、アルメルナさん、サフィーちゃん、借りていくから」

ヴァロルシアスが所属していることで有名なソーシャイルがある、ギルド。

その二階建てのギルドの中は大騒ぎになっていた。

漆黒の竜が雲の中から飛んで来たのだ。

高度を下げて近寄ってきた竜が王国の防壁を越えようとする。

そこで闇竜の動きが止まった。

何が起こったのかと、戸惑うギルドの者たち。

しかし、彼らも徐々に我を取り戻し、闇竜が消えた場所に向かう。

「開ける！！ 門番！！」

一人の男が聞いた。

「門番はカルフ様の遊びについて行きましたよ」

それに答えるのは、黒いローブの男。

「あの竜も、魔王ってやつを使いかね」

一人呟く男の横をギルドの男たちが走り抜けていく。

その先にあった光景は、巨大な木が、竜の体に纏わりついている姿だった。

5 - 7 闇竜戦闘（後書き）

質：最近短いつすね

応：すみません。あと、中間テストがあるんで。

13日までは、あんまり書けないかも。

5・8 闇竜戦闘しひき(前書き)

そろそろ終わりか??

5 - 8 闇竜戦闘つづき

闇竜の口が開き、中で黒い炎が光り始める。

その塊が放たれると同時に、私は闇竜の上に転移した。

ボウ、かバンツ、か分からない爆発音と共に、黒い塊が飛んでいく。

「ギユウウウウウウアアアアアアアアアア！」

？

いきなりの轟音。

それが放たれた方向を探す。

目の前の闇竜はまだ、炎の球を放った直後だ。

まだ、動きは取れないだろう。

なら……

「ぶった切る！！！！」

すぐ上から、叫び声。

後には、金属同士が擦れ合う高い音。

落下しながら（転移をしたところで、重力は働く。今度アルに、金

の足場でも作ってもらおうか）上を見ると、金の剣と、漆黒の爪がぶつかり合っていた。

いつの間にこんなに近くに来ていたんだろう。

戦いに相当集中していたようで、あっちの閻竜の尻尾が届くぐらい近くに来ていた。

こちらの閻竜が振り返る。

その目が見ているのは私ではなく、アル。

アルは今は動きが取れない。

閻竜が翼を動かすのと同時に私はアルのそばに転移した。

剣と爪が擦れる音が大きくなる。

閻竜は近づいてきている。

私はアルの体と剣に触れる。

「…………ぐ、マアサ？」

呟くアルと剣を転移。

私もすぐにそこを離れる。

ガシッ、と鈍い音が響き、閻竜の叫び声が続く。

アルの剣が消えた事で、その剣に支えられていた爪が、近づいてきた閻竜の背を突く。

そして、閻竜の後ろに飛ばしたアルの大剣は、爪を立てた閻竜の背中に振り下ろされる。

キン、と高い音。

どうやら、傷は外したらしい。

やはり、四つ同時は難しい。

「ずれてるぞ、マアサ！」

「仕方ないでしょ、アル、あのままだったら血だらけよ!!」

「知るか!!」

「は〜い。拡散弾行きます!!」

銃、銃弾転移。

その銃口から一つの弾が打ち出され、閻竜たちの間で爆発。

無数の小さな弾がはじけ飛ぶ。

あ〜。

閻竜の鱗はやっぱり硬い。

闇竜の後ろでは、金色の塊。

アルが自分の体を金に変えたんだろつ。

「便利なもんね。

傷一つ付いてないじゃない!!」

金色の顔が肌色に戻る。

「そんな弾じゃ、意味ないんじゃないか!!」

「こんどレイサに言っとくわ!!」

闇竜が動き出す。

やはり闇竜の鱗は硬い。

爪が突き刺さったところも、アルの剣で切った背中も、たいした傷になっていなかった。

このまま続けたら、いつ終わるのか。

早く終わらせたい。

終わらず。

闇竜の爪が迫り、ひとまず転移。

「アル、首輪を二つお願い！  
出来るだけ重く」

「仕方ないの。」

出来るまで、そっちで何とかしといてくれ」

「わかった」

アルのそばに転移、アルに触れる。

「飛ばすわよ」

「ああ」

その瞬間アルは消え、私の前には三つの目（とつぶれた目）。

ようは時間稼ぎ。

私なら余裕。

手の中には光線銃。

レイサの最新作。

使ってみないと。

迫る二頭の竜の後ろに転移。

銃を撃つ。

ん、いつもの反動がない。

いいわね。

狙うのは背中の傷。

アルとやってたほうの傷は大きい。

振り向くと同時に転移。

どの位かかるんだろうか。

サボってないわよね。

二つの雷球を火球とぶつけて相殺。

迫る炎帝の拳を回避。

その手に触れ、電流を流す。

「バンッ」

手の平に痛みが走る。

「あたたたた。

痺れるねえ。

お前、素手で俺に触れて大丈夫か？」

「大丈夫だったら、良いんだけどね」

いいながらも雷球を二つ。

それを炎帝は上に飛び、かわした。

高さはゆうに俺の身長を越してる。

「人間じゃないな」

炎帝の着地に雷球を放つ。

「お前が言うか？」

炎帝はもう一度、今度はこちらに飛んで来た。

まさか、ここがこんな風になるなんて、信じられないな。

ここは、あの後どうなったんだろうか。

ボクより、年下のやつも大勢いた。

全員殺されてしまったんだろうか。

考えたくもない。

でも、考えるのから逃げてはいけない。

そう、あの人が言っていた。

ボクはあの後記憶を消されるはずだった。

馬車の中で何日もたって、たどり着いたところは海の近くだった気がする。

そこで、一人の少女に会った。

歳は同じぐらい。

真っ青な髪をしていた。

そこは、一つの屋敷だった。

屋敷の一部屋に、ボクは記憶を消されるために、彼女は記憶を消す

ために呼ばれた。

それはすぐに始められた。

ボクは彼女の前に出され、研究所の男が彼女に何か言った。

彼女は静かに頷き、真剣な表情で僕の前に立った。

しゃがむようにと合図を受ける。

ボクがしゃがむと、彼女もしゃがんで、手をボクの頭の上へのせた。

「黙って聞いてください」

彼女が目をつぶったまま言った。

周りには聞こえないぐらい小さな声で。

「私はあなたの記憶は消しません。

悪い記憶だとしても、あなたの生きてきた人生ですから。

あなたは、今までの事を背負って生きてください」

そして、手は離された。

男が、せわしく彼女にいくつか質問し、ボクは男たちに言われるまま馬車に戻った。

男の顔なんか覚えてない。

けど、彼女の言葉は覚えている。

悪い記憶でも、その人生はボクの物。

ここは大切なボクが生きた場所だから。

ああ、凄いな。

うん、頑張ってる、皆。

目の前には木の枝に張り付けられている闇竜さん。

防壁出たとたんこれ。

「勇者さま。

あれは？」

マナが指差すのは、その竜に向かって、槍や剣や弓とかで頑張ってる人々。

おい、ヴァンパイアだった人たちが混ざってるぞ。

白い獣っぽい物が見える。

だが闇竜は全く痛くない様子。

木の枝も、一本ずつ切ってる。

「あれが普通なんだ。

10m越えの怪物が突っ込んできたら、皆でちくちく攻撃するだろう。

っていうか、本気の闇竜を、ばっさりやっつける方がおかしい。第一、神が誕生する前の、混沌を支配していた竜だぜ」

「そ、そうですね。

でも、意思を与えられたあの木も、もう限界っぽいですよ」

「よし、頑張ってもらおう」

とりあえず、マナを掴んで飛ぶ。

あ、バンダナ取れた。

今日風つえ〜。

近くにいた少年が、俺に気づく。

「あつ！！ 勇者様だ！！

勇者様が来てくれたぞ！！」

おいおい、俺有名人じゃん。

ずっと引きこもってたのに。

すでに50近いのに。

「うお~~~~~!!」

「勇者様、万歳!!」

「ありがとう~~~~~!!」

「待ってたぜ~~~~~!!」

色々嬉しい声援の中を、閻竜を指して飛ぶ。

気持ちいいね。

ぎりぎり、動きを止められてる閻竜の顔の横に着地。

「マナ、やってくれ」

「へ？ やってくれて、何を？」

「そいつ、言う事聞くようにして」

「は？ 私、そんな事出来ましたっけ？」

「記憶操作で、私は勇者様の神聖なペットです、見たいな感じにすればいけるでしょ？」

「あ、はい」

マナが、闇竜の頭に手を当てる。

「ちょっとかかりますよ」

「オーケー。ビスタ!!」

間に合うかな？

5 - 8 闇竜戦闘つづき(後書き)

テスト終わったー!!

やったー!!

イエーイ!!

サイコー!!

明日、テスト返しなんで、今のうちに開放感を。

質：俺内、質問受付部から、誤字の指摘を頂きました。

質：俺本部、ありがとうございます。(そしてスイマセン)

これから、ゲーム感覚で誤字探しを!!

って、いいのか??

5・9 闇竜戦、終わり(前書き)

短いです。

とりあえず。

5 - 9 闇竜戦、終わり

神殿？

ほんとに神聖な場所なのか？

俺は全くそんな気はしない。

たぶん、そこらの人がノリで作った、完成度の高い幽霊屋敷だよ、これ。

割れた窓から、細々と入ってくる光（外の色と同じく濃い紫）が散らばってる色々な反射して不気味。

柱とかは何かもってるけど、天井とかあちこち壊れてる。

その隙間からは真っ暗な空間が見えるだけ。

壁にかけられている絵とか布とかの破壊率100%

本棚が軒並み倒れる、というやりすぎなほどのボロボロ屋敷だ。

しかも入り組んでる。

怖い。

そろそろトイレ行きたい。

少し寒い。

あゝ、もう嫌だ。

やっぱり帰ろうかな……でも、大分深くまで来たし。

進むしかないのか？

進まなきゃいけないのか？

進む以外の選択肢は無いのか！？

はあ。

もう良いや。

進もう。

……なんで俺こんなことしてんだ？

城に帰ったら豪華な家と、一生遊べる金ぐらい貰おう。

……まだ？

もう、1分はたった。

アルを飛ばしてから。

真上に飛ばしたから、迷子は無いだろっ。

道とかないし。

私目立ってるし。

竜二匹は、学習能力があったらしく、絶えず動き続けている。

それに、ちよくちよく攻撃してくるから困る。

横から来た尻尾を避けるために転移。

少し距離を取る。

しかし、とりすぎてもいけない。

私が戦っているのは、外に逃げないようにするため。

すでに、一匹が雲の外に出た。

外に戦える人がどれだけ残っているだろうか。

正式な兵士はみんなこの中だ。

もしかしたら、もう外は……。

黒い塊を吐こうとしたところで転移。

黒い塊は吐き出されず、こちらを振り向いた。

危ない。

急いで転移した先にはもう一匹の閻魔。

転移したばかりの私に黒い爪が迫る。

転移の準備を始める。

……間に合うか。

焦りが転移の速度を落とす。

間に合わない！！

「キンッ！！」

本能的に閉じたまぶたを開くと、輪。

金色の輪が閻魔の爪を弾いていた。

その輪には鎖がつながり、その先にはアル。

「これでチャラじゃ。」

余が来なければ血だらけだったぞ」

「遅すぎー!!」

アルの横に転移して言う。

「って、無駄に凄いもの作ったわね」

金色の6つの輪。

三つずつ金の鎖でつながれ、片手で握られている。

光が少ないここでも金色に眩しい。

「無駄じゃない、ちょっと遊んだだけじゃ」

「分かった分かった」

言いながら手を輪に。

転移。

フット、金の輪たちは消え、闇竜を縛る。

「鈍りは取れたようじゃの」

「あなたも行ってらっしゃい」(ニ)(ニ)

アルも飛ばす。

後、これも。

ゆっくりと落下を始めたアルの剣を、アルを飛ばさなかったほうの閻竜の上に転移。

閻竜は輪の重さで落ちずとも、動けない。

「アルケーー!!」

「ザッ!!」

二匹の竜はゆっくりと落ち始めた。

片方は体を金色に。

もう片方は赤く。

ふう。

疲れた。

「やっと片付いたの」

「ええ」

金の円盤に乗せてもらい（勝手に乗って）言う。

山の表面では、兵士が頂上を目指して走っていた。

「私たちも、行く?」

「そうじゃな。

ここで休んでは居られん。

終わるまでは」

5・9 闇竜戦、終わり（後書き）

最近上手にかけない。

いや、もともと上手くは無いけど、最近さらにひどいよつな。頑張ります。

疲れのせいです。

俺は悪くありません。

……嘘です。

すいません。

質：おそいつす。

応：スイマセン。

最近色々大変でして。

模試とか、学校のテストもまた来るし。

早めに言っとくと、10月のラスト一週間は勉強します。

5 - 10 世界の変化、魔王と剣士（前書き）

サアーセンデシタアアアアアア！！

色々遅れました。

詳しくはあとがきに書きます。

5 - 10 世界の変化、魔王と剣士

円形の部屋。

ドーム型の天井。

ここはどうやら、神殿の一番奥の部屋らしい。

神殿のなかには、雑魚が数匹だったから楽だった。

……怖かったけど。

「何が来たかと思えば、ただの鼠か」

……？

人だ。

良かった、人だ。

おい、人が居るぞ。

黒人のおっさんだ。

遭難したのかもしれない。

「こんにちは」

「ふっ、この姿を見て驚かないとは。」

面白いやつだ」

ん？ これは重症だ。

長い間閉じ込められていたから、少しおかしくなっているのかもしれない。

げっそりしてるし。

すぐに救護を。

「ええと、あなたの名前は？」

「なんと、魔王が忘れられるほど寝ていたとは」

「外に仲間が居るんで、出ましよう」

「坊主、俺に従うのなら命は助けてやるぞ」

いつちゃってるな。

手遅れかもしれない。

「この山に魔王ってのが居るらしいので、早く非難してください」

「くふふふふ。

では、出るか、坊主。

そろそろ外に出たかったところだ」

ようやく通じたか。

「あ、はい、いきましよう」

良かった、良かった。

一人はさびしいんだよな。

これで少しはさびしさも紛れる。

あんまり頼りになりそうにはないけど、一人よりはましだ。

おっさんはぬるりぬるりと、蛇の様に歩き始めた。

高そうなローブ着てるけど、金持ちか？

「こんなところで逢うなんて奇遇ですね」

ふふふふふ。

馬鹿な子供だ。

魔王と共に歩いたとなれば、後々羨ましがられるだろうな。

なぜなら、今からこの世界は私の支配下になるのだから。

こんなに弱そうな体で………。

いや、待て。

外は魔物だらけのはず。

その中をこの少年が突破してきたと言うのか？

いや、ありえない。

しかし、現にいまここに居る。

やはりこの少年があつ魔物たちを倒すほどの力を？

まさか、封印されている間に人間たちが進化したのか？

外はもう、あの程度の魔もの、雑魚扱いなのかもしれん。

その時、崩れた柱の裏で何かが動いた。

そこから現れたのは、一匹の小型の魔物。

小型といっても、膝ぐらいまではあり、普通の人間なら逃げる。

さて、少年の出方を伺うか。

「存在消去！」

!!

暗黒魔法だと？

「はあ、またか。

安心してください、出てきても俺が何とかするので」

はあ、はあ、驚きのあまり呼吸をするのも忘れていた。

俺だけがあの方から教わった、特殊な魔法なのに。

しかも、この歳で？

見たところ100歳にも達していない。

魔法は修行の量が強さと比例する。

暗黒魔法は我が200年の修行の末に手に入れた、世界にまたとない魔法だったはず。

世界は、どうなっているのだ？？

「大丈夫ですか？」

目の前の少年は呆れたような顔で問いかける。

「外には、君よりも強い人たちが居るのかい？」

はっ、何でこんな質問を？

不自然すぎる。

「ああ、はい。

凄いやつらがたくさん、わらわら、どんどん」

ガク。

……自分中の何かが崩れ落ちた。

今、そんな気がした。

俺が支配できる世界はもう消えてしまったのか？

この……世界は、変わってしまったというのか！？

我はどうすれば良いのだ。

「……はあ、やっぱり山の上でずっと居るとこになるのか？」

ん？

少年が呟いている。

「とりあえず、遭難してたんだから、連れて行く」

これは。

くそ。

この際プライドなどは気にして居れん。

遭難者として、保護してもらっしか。

そつだ、記憶をなくしたことにすればいい。

この世界でも、生きていく事は出来るはずだ。

よく見ればこの少年は黒髪。

昔は恐れられたこの髪でも、馴染めるに違いない。

昔の栄光は、もう幻想となってしまうたのか。

「はっい。  
入らないでね」

勇者様の声。

もうどうなってんのか分からない。

隣のシサムさんも、驚愕の様子。

今の状況を3行で説明すると、

山を駆け上っていた兵士が神殿に入る直前に、勇者様が闇竜に乗って降りてきて、

闇竜の上には、霧の中で見た女の子と、え、たぶん王女様。

勇者様は、神殿には入るなと忠告し、俺たちは神殿の入り口を囲んで待機。

だな。

もうどうなってんのか分からない。

「勇者は、こっちに来たときからあんな感じじゃ」

さっき帰ってきたアルが言う。

後ろの方に置いてある、薄くて長い金の塊は何だろう？

まあいいか。

もうどうでも良いや。

小さな村の剣士には、着いていけない世界らしい。

俺の周りの世界は、変わったなあ。

5 - 10 世界の変化、魔王と剣士（後書き）

サアーセンデシタアアアアア！！

ガチで、最近キツイです。

模試に漢検英検、塾の宿題は多いし、学校のテストはあと9日後。

これも受験生の定めか？

はい。とりあえず、キツイです。

次で、5章を終わらせませす。

終わらせ（るつもりでやり）ませす。

おまけの（こっちの方が本気な俺）6章目もお楽しみ（に）

では、寝ませす。

5 - 終 帰還（前書き）

最後まで見ていってくれ。  
6章まで見ていってくれ。

## 5 - 終 帰還

なんだかおかしい。

後ろをついて来ている男の人。

足元を見て、ずっと呟いてる。

出会ってからまだ30分も経ってないはずだが、森の中で二人きりで遭難して、半日歩き回ったぐらいの時間がたったように感じる。

喋りかけにくいし、このまま静かなのは気まずい。

何か話しかけるか。

「あなた、なんて名ま」

「ひゃっ！」

「……え？」

おいおい。

何で格闘技の構えのようなものを取るんだ？

息上がりまくってるし。

目を見開いて、今にも飛び掛ってきそうだ。

「あの……大丈夫ですか？」

「はっ！？ ひゃっ、はい。何のことだ、あっ、だ、大丈夫、です？」

大丈夫か、この人？

真剣に危ない。

連れて来ないほうが良かったかな？

いや、見た感じかなりの歳だ。

ボケていて、耳が遠いのかも知れない。

「あ〜な〜た〜の〜、な〜ま〜え〜は〜、な〜ん〜で〜す〜か〜？」

「な、なんだ、今の呪文は？ デジャーマ・アールド！」

黒人老人さんの周りに、透明に光る壁が現れた。

ん？ 何を唱えてんだ、おい？

『魔法障壁じゃな』

おう、説明を頼む、ソウ。

『魔法で起こった現象やら、魔法で創られたものを、魔力に還元、分散する対魔法用防御魔法じゃ』

……えーと、つまり？

『魔法を防ぐ魔法じゃ』

いつ使うの？

『魔法攻撃が来たときぐらいじゃろ』

じゃあ、何であのおじいさん使ってるの？

『知らん』

秀困気、凄そうなんだけど……？

『凄い』

凄いと言うこと？

『私の魔法の9割は消される』

残りの1割は？

『近距離魔法じゃ。』

魔法で創られたもの以外には、何の意味もない壁じゃから、中に入ればよい』

じゃあ、遠距離から、あの壁を越えられる魔法は無いと？

『ない』

．．．．．強いな。

『強い』

「は？ 何も起こらない、だと？」

おじいちゃん、俺、あんたにかける言葉が分からないよ。

頑張ってもこれぐらいしか．．．．

「出口ですよ、おじいさん」

「はっ？ へっ？」

まあ良いや。

日は、傾き始めたのだろうか？

まあ、そんな時間だろう。

ここを被う雲の中に入ってきたのが、昼過ぎだ。

「おい、剣士。  
中から何か出てくるぞ」

と、シサムさんが、座って携帯食料を食べている俺に声をかけてくれた。

残りの携帯食料をとりあえず腰に下げた袋に入れ、立ち上がる。

すると、神殿の壊れかけた扉から出てくる二つの影が見えた。

片方はジョーカーさん。

そして、もう片方。

「ん」

シサムさんが刀に手をかけた。

知っている。

肌で感じる。

そして、自分の防衛本能が逃げると指図するように鼓動が早くなる。

魔王だ。

黒い蛇が重なったような気味の悪い黒髪。

冷たく、人を殺す瞬間にも無気力なまっ黒い瞳。

血の気が全くない肌色の唇。

人の肉を求めるアンデットのようにつげっそりとした頬、体。

その体から放たれる黒い魔力は、魔王そのもの。

しかし……

何か変だな。

なんだか落ち込んでいるような気が。

山に吹く風が魔王のローブを揺らす。

魔王がクフーチェを操って作らせた魔力を溜め込むローブ。

魔王から漏れ出す魔力は、少し離れている俺ですら、頭が痛くなる。

だが、この魔力でさえも、ローブが吸収できなかつたただの残りだ  
と思うと、魔王の恐ろしさが改めて分かる。

何でジョーカーさんや、勇者様は平気なんだ？

静かなときが流れる。

しかし、戦いは突然始まった。

なぜか目の前に居る勇者さんが口を開く。

「その魔王」

「はぁ!？」

え？ は？ えくと、俺じゃないよな？

つて事は、後ろのヨボヨボ？

「まさか、勇者か」

「おお」

「・・・ふふ、くははははは!!」

このときを待っていた。

待っていたぞ、勇者。

お前にあの時のお礼をするときをな!!」

後ろのおっちゃんが勇者に向かって指を突き出す。

「デルカ!!」

おっちゃんの指から赤い光が撃ち出される。

よし、確認しよう。

俺は、魔王の前を歩いてここまで来た。

勇者は俺の前に居る。

魔王は俺の後ろにいる。

魔王は勇者に向けて赤い光を撃ち出して……

「デジャーマ・セン」

……その光は、勇者がなにやら唱えたとたんに消えた。

そして、透明な液体と気体を足して2で割ったようなものが飛び散った。

「何だ、今のは？」

魔王は、さっきの勢いはどうしたのか、動揺している様子。

まあ、俺のほうが動揺してるけど。

危なかった。

心臓止まるかと思った。



『主人、心の中でむせるな。  
あと、楽しかったぞ』

途端に、俺の手が動き始める。

「魔王は終わり。

シナリオ通り。

次は、ソウ、出てこい」

勇者が俺の方を見て言う。

『主人には言っておこう。

今から、おぬしの体は我のものだ』

勝手に体が浮かび上がる。

「えっと、ジョーカーだったな。

お前に取り付いているのは、悪者だ。  
攻撃しても文句は言わないでくれ」

は？

勇者様、今なんと？

おい!!!

ソウ!!!

体を下ろせ!!!



体中が痛い。

痛い、痛い、痛い、痛い！！

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

声は出ない。

体を動かす事もできない。

体のコントロールが出来ない。

それどころか、勝手に動く。

俺の意思は全く聞かない。

今俺は高速で空を飛び回っている。

・・・。

・・・くそ。

訳がわかんねえ。

わかんねえ。

なんでだよ！

体は全てソウに持っていかれた。

何でだよ！

わかんねえ。

もう、考えらんねえ。

『やっと見つけた』

フツ。

痛みはきえた。

はあ。

意識が朦朧とする。

とりあえずしんどい。

『魔力制限アンロック』

頭の中で、これまで毎日の様に聞いてきたソウの音が聞こえる。

『ふはははは、これは凄い。』

まるで魔力の海じゃ』

手が動き、手の平から雷やら、炎やら、白いもの黒いもの、ん？

俺って、無属性以外も使えたのか・・・。

ああ、制限がどうたら、だったな。

・・・・・・はあ。

俺の手から放たれる色々なものは、全て勇者が消しているようだ。

勇者の手がこちらに向く。

魔法を使うのか。

どうでもいいか。

早く終わらせてくれ。

もう、どうでも良くなった。

この世界に来たのも、自分が願ったからだっただ。

俺が、こんな世界は嫌だ、と思ったから。

それが、たまたまサフィーの魔法と繋がっちゃったんだ。

「ビスタ!」

う!!

動きは、勇者に止められた。

早く終わらせてくれ。

ん?

サフィーが出てきた。

サフィーの目が俺を見る。

そして唱えた。

「セヨリト！」

そう唱えたとき、俺の体に何かがぶつかった。

ガアアアアアン！！

目の前が赤くなる。

鮮やかな、ピンクに近い赤。

前にも感じた事のある。

あの時の雷と同じ色。

どすん。

落ちた。

落ちた？

ここは？

分からない。

いいや。

今は寝よう。

頬に当たる、冷たいアスファルト。

## 5 - 終 帰還（後書き）

続きはちやんと書きます。

以上です。

ありがとうございました。

6章は、勇者様のお話です。

6 (勇者の冒険?) - 1 本編 | 1 (前書き)

本編に入ります!!

コッ、コッ、コッ、コッ。

足音が変わった。

今、俺は父が買ってくれた革の靴を履いて、アスファルトの上を歩いている。

父が就職できるようにと、かなり必死な願いをこめて買ったようだが、効果は無い。

ああ、ない。

気がつけば、もう高校を卒業してからもう2年弱だ。

思い出は基本的にないが。

あゝ、3年ほど前のあのファンタスティックでドラマチックな冒険は思い出か？

高校であった訳じゃないけど……。

でも、高校時代の出来事……か？

まあいい。

そこは、いい。

高校時代の思い出になるかどうかはどうでも良いとして、あれはな  
んだっただんだ？

気がついたらあっちに行つてて、気がついたら帰ってきたぐらいの  
勢いだった。

そんなぐらい、アクティブな旅行だった。

一応？ いや、もちろん？ 記憶はある。

それも、結構はつきり。

今、昨日の晩御飯を聞かれても、全く覚えていないが。

あれ、食べたっけ？

まあいいや。

え〜と、まあ、すっかり覚えている。

あっちであった事。

あいつの行動から、あいつのセリフ、あの時の天気、気温。

何だかんだで、楽しかった。

ん？ いや、楽しくなかった？

ん〜、まあよく分からなかったが結論。

あつちの30日(ぐらいか?)は、こつちの数十秒だったらしく、特に問われる事はなかった。

制服は買った。

着ていた服は捨てた。

ライターは手に戻って、魔法は使えない。

何もかも元通りだった。

その後、ずるずると生きてきてこの状況。

ただの無職男性。

冬の夜は寒い。

まだ曇があるからましな方か？

ポケットから出すのはライター。

しかし、今は反対の手に煙草。

煙草に火をつけながら思う。

・・・こつちの世界はつまらないなあ・・・

その瞬間目の前が真っ白になった。

ん？



6 (勇者の冒険?) - 1 本編1 (後書き)

いきなりですが、もうすぐ期末テストです。

内申点(合ってる?)で重要なテストです、はい。

ゲームとアニメと勉強の合間にちよくちよく書いていきます。

6 - 2 時間転倒（タイムスリップ）

黒い。

果てしなく黒い雲が空を覆っている。

正直怖い。

いや、怖いのが普通なのかな？

しかし、今私は英雄なのだ。

この山の奥に居ると言う魔王を倒すために集められた、9人の英雄のうちの一人名なのだ。

魔王が現れてから50年ほど。

魔王の恐怖の中で作り上げられた希望の9人なのだ。

逃げるわけには行かない。

（行くぞ、アルメルナ）

そう自分に言い聞かせ、私は魔物の群れへと向かう。

とうとう、最後の戦いが始まった。

人間が生き残るか、生き残らないかの。

冷たい風が顔に当たる。

やっぱり山の上は寒い。

ここなら。

「ギラ・ダン・ヒョーダ!!」

私は氷系統の中級魔法を唱えた。

体の回りにできた、十数個の小さな氷の棘が魔物の群れへと放たれる。

勇ましく駆けてきた、四足歩行の小型魔物に棘が刺さる。

魔物は血を流しながら後ろへと飛んだ。

周りの魔物にも棘は刺さる。

「飛ばしすぎじゃないか、アルメルナ？」

山を走る私の横に降りてきたのは、金の円盤に乗った奇跡の錬金術師。

そういふ彼女も、体3つぶんぐらいの金の棒を振り回している。

「魔法は、魔力を消費するんだらう？」

ここで使いすぎると、魔王と戦えんぞ」

小さいくせに生意気な。

「それでも、人間の中では一番魔力があるんですよ」

「そうか、そうか」

むかつく。

むかついたときは、押さえずに発散するべき。

「ギラ・シャルス・ヒョーダー!!」

薄い三日月型の氷の板が現れる。

普通は投げたり、無系統魔法で飛ばしたりするものだが、今はしない。

私はそれを掴んだ。

それで、突っ込んできた飛行型の魔物を切る。

私を狙っていた鋭い爪は、翼が片方なくなったことにより、外れた。

「うお、見た目からは想像もつかぬ力じゃな」

「魔法で強化してるんです!」

足はもう止めている。

魔物と人間の戦いは始まった。

ここは、魔王と人間の境目。

戦いの最前線になった。

本当は、私たちは後ろの方のはずだけど、この際身分なんか考えられない。

私は詠唱のため、少し下がった。

魔物の足元に霧が発生する。

すでに冷たい空気を、さらに冷やしてできた水滴だ。

「ギラ・バールズ・ヒョーダー！」

そして、その水滴が氷に変わる。

魔物の足元が氷で覆われた。

しかし、こちらの硬直も大きい。

魔物の群れの奥から、黒い光が迫ってきた。

黒い光って、存在していいの！？

って、そんな事を考えている場合じゃない。

急いで足を動かす。

間に合わない？

山の上の寒さでは、いつも通りには動けない。

私は反射的に目をつぶった。

しかし、来るはずの痛みはなかった。

「アルメルナさん、大丈夫かい？」

目を開けると、聖職服。

「ジャツグルホーリー！」

ジャツグルホーリーは封印や結界のプロだ。

魔物の放つ魔法の類は簡単に消せるのだろう。

彼も英雄の一人だ。

だが、なぜ後陣にいるジャツグルホーリーがここに？

その時、後ろからいきなり声がかかった。

「おしゃべりも程々にしときなさい」

そして、次の瞬間にはすぐ横から。

「緊張感がなさ過ぎない？」

「マアサさん、そんなに厳しくしないで、明るく楽しい事は何よ

りですよ」

「ジャツグル、私があるあなたを、ここに飛ばさなければ、貴重な戦力が一つ減っていたかも知れないんですよ」

「ほんと、マアサの力は便利じゃのう」

なんか、いつもと変わらないな、ここでも。

しかし、もう少し、緊張感があると思う。

「みんな、上！ 上！」

空には4匹の黒い竜。

そのうちの1匹が、巨大な岩を落としてきていた。

「防げる？」

咄嗟に聞く。

普通の人なら逃げるが、だれか何とかするだろう。

「物理的なものはちょっと無理です」

「砕くのはできるが、被害が増えるぞ」

「4人いっぺんには転移できない」

「逃げよう」

ザッと、地面を蹴る。

ぎりぎりと言すには、少し時間があつたぐらいで、4人とも避難で来たようだ。

とりあえず、セーフ。

「アルメルナ、封印円盤が!!」

え？

錬金術師の声を聞いて、腰に下げていた袋を確かめる。

袋を触ると、そこが破れているのに気づいた。

そこに入っていた円盤は無い。

「アルメルナさん、下!!」

山の斜面を見ると、灰色の円盤が転がっていくのが見えた。

すぐに引き寄せの魔法を唱える。

「エナト!!」

ん？

おかしい。

目の前が白く光りだした。

まさか、魔法の失敗？

そんな。

ありえない。

小さな子供でも使えるような、初級魔法。

失敗するはずがない。

白い光は塊になって、消えた。

そこにあつた存在に、驚愕する。

え？ 魔王！？

そこには、黒い髪の男が立っていた。

6 - 2 時間転倒（タイムスリップ）（後書き）

明日から期末テストです。  
勉強します。

最近、少し真面目に書いているつもりですが、どっとなってるのか？  
自分の物を見るのって難しいです。

## 6 - 3 救出劇

その瞬間、世界が凍った気がした。

「な、なんで・・・」

光の中からは一人の男が現れた。

遠くの方からは戦いの音が聞こえる。

この状況を見ていない兵士たちは今も山頂の魔王を目指して戦っている。

しかし、私の前には男が居る。

黒い髪。

真っ黒いがつやのある、不思議な色。

魔王だ。

魔力に常人よりも敏感な私には分かった。

その体からは、今まで感じた事のないほどの魔力が流れ出ていた。

「皆、離れろ！！」

叫び、自分も距離をとる。

固まっていた周りの兵士たちが動きはじめる。

「魔王だ!!!」

すぐに、男の半径3m以内にはだれも居なくなった。

やつは動かない。

まさか、自ら先頭に現れるなんて。

「喰らえ!!!」

最初に動いたのは、錬金術師。

男の上から、巨大な金の柱が振り下ろされる。

しかし、男は動かずに首をわずかに上に向け、口を開いた。

「ビスタ!」

初級魔法。

そんなもので止められるはずがない。

錬金術師の異様な物体の加速により、風が生じる。

その風が、山肌の乾いた土を巻き上げ、私は目をつぶった。

風が止んで目を開けたとき、そこには先程と変わらない黒髪の男と、まるで写真の様に固まった金の柱があった。

あたりは静まり返った。

その中で聞こえる、聖術の詠唱。

「・・・邪なるものに神の加護と神秘の欠片をここに見せよ、世界の制裁を！」

ジャッグルホーリー！！

ジャッグルホーリーの聖術。

無系統であるが、伝説と呼ばれる光系統に近い魔法。

魔の王と呼ばれるものに、効果のないはずがない。

すぐに、男の周りに光る粒が現れる。

ビー玉だいのその粒が、男に一斉に襲い掛かる。

「デジャーマ・アールド！」

しかし、その粒は男の一声で散り散りになって消えた。

男の周りに、光る粉が舞う。

それはあまりに美しく、しかしそれが恐怖を引き立たせる。

魔に対するスペシャリスト、ジャッグルホーリーの魔法が全く効かなかった。

それは、もう単独の魔法は、この男には効かないと言つことだ。  
残る手段は多人数での、一斉攻撃。

しかし、この状況ではそんな用意はできない。

逃げるにしても、もう敵は目の前だ。

どうすればいいの？

ふと、足に目をやると足が震えているのが分かった。

寒いのに手の平には汗を握っていた。

怖い。

今まで気づかなかった。

考えようにも頭が焦りと恐怖で働かない。

どうしよう。

私がパニックに陥っていると、とうとう男がこちらを向いた。

黒い髪の間隙からは真っ黒い目。

そして、唇の薄い口が開いた。

「ビスタ！」

物体の運動を遅くする、初級魔法。

そんな常識はもう関係ない。

喰らったら確実に動けない。

金の柱はもう5秒間は止まっている。

動きは全くない。

諦めた、と言いか体が動くのをやめた。

これが、動きを止められる感触なのかな。

魔王とはこんな存在だったのか。

無駄な抵抗だったのかも知れない。

でも、私はここで終わる。

そうだ。

もう何もかもどうでもいいんだ。

男はゆっくりと近づいてきた。

そして、少し細めの腕をこちらに伸ばす。

そして………？

男は私の腕を掴んだ。

「ひゃっ！」

冷たい感触が肌を伝わる。

反射的に声が出た。

あれ？

声は出るのか？

そして、腕が引つ張られた。

二、三步前へ進んだ。

周りの人々は何も動かない。

なぜか不思議そうな顔や、驚いた顔でこちらを見ているが何でだろう？

そして、

「ヒエアイツエジフェナイ」

「へ？」

「ヴァエイウフィサイエイ、ケイウダ、ケイウダ」

男が何を言っているのか分からなかったが、私は男の指のさす方向を見た。

そこにはさっき落ちてきたやつぐらいの大きさの石が、空中で止まっていた。

おいおい。

おいおい。

おいおいおいおいおいおいおいおい。

何か見たことある光景だ。

この声。

はっきり言わせて貰おう。

おかしい。

俺は家へと向かっていたんじゃないか？

そっちは合ってるよな。

そして、気がついたらこれだ。

いや、途中で野生の雷が現れた気がする。

んで、目の前が真っ白になって、と。

ここまでは、はっきりしている。

そして、今こうだ。

分かりやすく言うと、空は黒い雲に覆われ、山の斜面は草がまばらに生えていて、武器を持った人達や、髪の色が日本人とは思えない方々がぞろぞろ。

ついでに、俺を中心とした人垣の向こうには、地球上の生き物とは思えない様々な奇形。

空には、二年ほど前に一匹存在を消したと思うんだが、4匹の黒いドラゴンさん。

……恐らく。

恐らく、雷に打たれた後、気を失い、色々あって、こうなったんだろつ。

とりあえず、突っ込んできた金の棒は、記憶にあったピスタ。

おっ、止まった。

俺、今使えてなかったら死んでたよな。

もう、危険感知能力が働いてないや。

ん？

周りに出てきたこの光ってるのは何だ？

え〜と、たしか魔王が使ってた魔法があったはず。

「デジャーマ・アールド！」

うお、周りの粒が粉々になって消えた。

良かった、合ってた。

っておい。

何かドラゴンが落としてきたぞ。

でかい石か？

おいおい、危ないな。

「ビスタ！」

よし、ピタッと止まった。

便利、便利。

ありゃ？

石の下敷きになるかもしれないな、子が固まってる。

っていつか、だれもしゃべらないし、動かない。

気まずいな。

でも、あのままじゃいつか落ちるんじゃないか、あの石。

とりあえず避難させないと。

はあ、また忙しいなあ、こっち側の世界は。

どうやらまたあの世界だ。

あの直後かな？

なんかアルとマアサ居るし。

俺は浮いたまま止まっている石の下に居る、女の人を引っ張って避難させた。

なんか悲鳴上げられたんだけど、嫌われてんのか？

俺なんかしたか？

何もしてないぞ？

そもそも、なにかする暇がなかったぞ。

まあ良いや、とりあえず。

「これで大丈夫」

「ヒエ？」

「ああ、後ろ後ろ」

俺は浮いている石を指差した。

### 6 - 3 救出劇(後書き)

やっと、テストが終わりました。  
もう、受験って感じですよ。  
暇なときに書いていきます。

## 6 - 4 光った神殿と埋まった顔面

・・・どつやら。

どつやら俺は恐れられている気がする。

さっきから近づいてくるものは居ない。

しかも、知ってるメンツは人の壁の奥の方へ連れて行かれた。

俺の予想であいつらの行動を分析するなら、避難。

まるで、俺が危険人物のような。

ちなみに今、俺の周りを囲んでいるのは盾をもったゴツい人たちだ。

俺は、もしかすると恐れられているのかもしれない。

いや、確実に恐れられているな。

どつやら・・・。

どつやら俺は敵と言う事になっている気がする。

こっちの予想にははっきりした根拠はない。

しかし、恐らく、もしかすると、まさか、俺は魔王と言う事になっているのか？ この人たちの中では。

まあ、今は何もしてこない。

でも、俺は何をしたら良いんだ？

言葉が通じないのはさっき分かった。

動こうとしても、一歩動くたびに俺の周りの包囲網もあわせて動く。

俺はどうすればいいんだ？

まさかの兵糧攻めか？

寝たところをグサリか？

トイレに行きたくなったらどうする？

ヤベえ、よく考えたら相当危機的。

マズイ、まずい、不味いよ。

上を飛んでるドラゴンどうするよ。

きつと、かなり動揺してるよ。

ん？ 山の上の神殿が前よりも新しい気がする。

神殿の扉が両方ついてる。

神殿の窓が割れてない。

神殿の上に時計台っぽいものが付いてる。

あと壁全体が綺麗。

ありゃ、あんなだったっけ？

俺はもう一度しっかりと神殿を見た。

うん、やはり綺麗だ。

そう思ったとき、神殿がいきなり光りだした。

紫っぽい。

詳しく言うなら、赤5割、青4割、黒1割ぐらいの紫だ。

その光が徐々に強くなる。

そして、

「ドオオオオンー!!」

と、音をたてて、軽い衝撃波的なものも出て、黒い雷は落ち、黒い雲は渦巻き、紫の光はあたりを埋め尽くすぐらい強くなり、扉から誰か出てきた。

紫の光を防ごうと、出した両腕の間から見たのはどっかでもみた黒いローブが出てくる姿。

扉は衝撃で吹っ飛んだので、扉のあった入り口から出てきたと言う

べきか？

周りのマツチヨたちもそっちに注目している。

人の大群の中から、いくつか叫び声が聞こえる。

その音を消すぐらいに大きな音をたてて、神殿のうえの時計っぽいものが付いている部分が落ちた。

と、神殿の様子を見ると、急に後頭部に重くもやわらかい衝撃が走った。

「何で私が!?!」

「おい、声がでかいぞ」

こんなところでひそひそ話していて良いんだろうか。

「ともかく、あなたの力を使えば真実が分かるでしょ」

「そんな、無茶苦茶な」

無茶だ。

そんな危険な仕事を押し付けないで欲しい。

二人とも長い付き合いなんだから、もうちょっとわたしに思いやりと言っものを

「大丈夫じゃ、やつはさっきから攻撃してきておらん」

私は人垣を見る。

その先にその人が居るらしい。

そして……怖い。

「だからって無理。

あなたの金の柱を止める様なやつなんでしょ」

「ああ、止められたが攻撃はされなかった」

「大丈夫、私があなを転移させれば間に合う」

でも。

そんなこと言われても怖い。

「お前しかおらんじゃろ」

「人の記憶を見たり変えたり出来るのは」

無茶苦茶だ。

「でも、あの人って、魔王かも知れないんでしょ？」

「だったら、魔王だった記憶を消しちゃえばいいじゃない」

「そうすれば、戦う理由もなくなるはずじゃ。

魔王じゃなくなるんじゃない」

「でも……でも　　！！」

ものすごい光があたりを包んだ。

しゃがんで話していた私たち3人はほぼ同時に立ち上がった。

そして、私は振り向く。

今まで何ともなかった、神殿の入り口の扉が吹き飛び、そこから黒いローブを来た男の人が出てきた。

「今じゃ、あいつも神殿を見ておる！」

「行ってきなさい！」

へ！？

私の肩に手が置かれた。

転移術者の手が。



俺の叫んだ「痛えー！ー！」が地面の固い土に吸収される。

「ひゃああっ！ー！」

何かしらの重みがかかっている背中の上から、ものすごい驚きの声。

立ち上がるごと地面に手を付いたときに、背中の上から第二声。

「ごめんなさい！ー！」

そして少し上げた頭の上に衝撃。

俺の顔は再度地面に埋まる。

「うぐー！ー！」

そして頭にぬるい水につけられるような感覚。

そして、なぜかものすごい力で押される。

ちよ、石が、石が鼻の骨に当たってるって！ー！

折れる！ー！ 折れる！ー！

ほんとにやばいってこれは！

く、ゲホッ、くちに、口に土が！ー！

やめ、止める！ー！

止める――――！！

記憶。

指先から、手の平から伝わってくる記憶。

その記憶が私の頭の中に入ってくる。

・・・見たことのない場所。

灰色やしろや茶色の高い建物がいくつもある。

とても頑丈そう・・・

・・・名前、好きなもの、言葉。

言葉が違う???

この大陸のものじゃない・・・

もっと見たくなくて、自然と手に力がこもる。

もしかしたら、外の大陸の人かもしれない。

そこには黒い髪の人が大勢居るのかもしれない。

そこは魔法がとて発達しているのかもしれない。

この人の言葉をいじれば、話ができるはず……。

私は言語の記憶をそのまま変えた。

使った時間はほとんどゼロ。

そして私は目を開け、手を離れた。

#### 6 - 4 光った神殿と埋まった顔面（後書き）

なんか進まない・・・。

今の所、6章はどのくらい続くのかわかりません。

まあ、書きたくなくなるまではずっと6章です。

## 6 - 5 二人の魔王

状況は改善した。

いや、悪化した。

「お前が魔王なのはもう分かった！」

と、目の前の女の子が言っている。

「だから違・・・」

「だれが空から降ってきた怪しい男を、一般人だと思っ？どこに上級魔法を超える初級魔法を使うやつがいる？」

「今ここに目の前に・・・」

「とりあえずお前は捕まえる」

反論の言葉は全く通用しない。

あと、とりあえずで捕まえるな。

一体俺が何をしたと？

「おい、そこのお前、こいつを捕まえる」

鋭い目つきと共に、目の前の少女は気の弱そうな男に指示を出した。

そいつが選ばれた理由は、たぶん、近くに居たからだろう。

「いえ、しかし、アルメルナ様……」

アルメルナ？

聞いた事あるような気もするが、見たことない顔だし気のせいだろう。

「早くしないか！」

そこのお前、は、後ずさっていく。

たぶん、このアルメルナと言う奴は相当恐ろしいやつなんだろう。

自分より下のものをこき使っているに違いない。

なんてひどいやつだ。

「す、すすす、すいません！！」

まだ死にたくありません！！

家で妻も子供も待つてるんです！！」

そんなやつは仲間に裏切られて死んでしまえ、ではなかったようだ。

「俺は殺人鬼か！？」

「何を怖がっている？」

お前が世界を救えるたった一度のチャンスだぞ！！」

俺はスルーか？

「ここで魔王を捕まえたら、お前は勇者だ！」

待て、そこのお前、悩むな。

そこのお前、決心したように頷くな。

そこのお前、こっちに来るな。

「そこのお前、バカだろ。」

まず、手ぶらでどうやって捕まえる？」

俺は立ち上がった。

(立ち上がったと言うのも、今まで正座させられてた。)

何ともひどい扱いだ。

相手の言葉が分かると思ったら、いきなり「そこに座れ」だ。

(座れというのも、それまで俺は顔を地面に埋めたまま、悶えていた。)

そして今話のはじめに続く。(

第一、俺何にも聞いてもらってないよ。

こっちの言葉も通じてるよね？

「俺は魔王じゃない。」

一般人だ!!」

向こうの方で言い合いが続く頃、私たちは馬車の中でゆっくりとしゃべっていた。

「さっきは良かったぞ、言葉を通じるようにするだけでなく、交渉の作戦を練る時間まで作るとは」

笑いながらそういわれても。

「あれはたまたまと言うか、基本的にあなたのせいよね」  
全く、なんていう不意打ち。

便利な力を適当に振り回して、こっちが大変だ。

「あれはちょっと方向がずれただけよ。  
よくあること」

「それ以前に、勝手に人を瞬間移動させるなって事」

「それは……まあ、結果オーケーじゃん」

「でも、私がどれだけ驚いたか」

「まあ、いいじゃないか。

全て作戦通り進んでいるぞ。

しかも、いい方向に」

私たちが考えていた作戦は2つあった。

悪い方向といい方向。

悪い方向は、彼が私たちに攻撃する意思がある事がわかった場合。

そうしたら全員で攻撃することになっていた。

こんな適当な作戦になったのは、今まであつちからは何もしてきていないから大丈夫だろう、と言うことになったから。

そして、いい方向は、彼に戦う意思がなく、魔王でもない場合。

こっちは皆で30秒ほど会議した。

会議の結果、魔王退治を手伝ってくれるようにお願いしよう、と言う案が出てきて、結局、戦う意思がないなら彼と話し合っって決めることになった。

それで、彼が敵か敵じゃないかを見極める役になったのがアルメルナさん。

私は止めようとしたけど、本人が良いって言うので止めなかった、  
と言うより、本人が  
やりたがっていたような気もしたので止めれなかった。

まあ、実際上手く行ってるみたいだから、良かったことにしよう。

今、彼が縄に縛られ、一番頑丈な馬車に連れ込まれているところだ。

このまま話し合いが上手く行けば、棚から牡丹餅。

魔王戦の一步前で大きな戦力を手にしたことになる。

「上手く行きますかね、話し合い」

「全く抵抗してないし、大丈夫じゃろ」

「でも、あの様子じゃ脅迫じゃない？」

アルメルナ、ロングソードを持って入ったけど」

なんだか可哀想になってくる。

ボタンと鈍い音をたてて扉が閉まる。

馬車は、中に入れる人数を優先したのかかなり広く、椅子や荷物置き場がない。つり革も冷暖房もない。

あるのは扉と、壁の高い所にある、横長くて薄い窓ぐらいだ。

あと、言うとならば鉄でところどころ補強されている。

そして俺の手が縄で巻かれているのはなぜだ？

とりあえず俺は床に座った。

拷問部屋、いや馬車の扉が再び開く。

アルメルナと呼ばれた女が入ってきてきやがった。

顔だけは綺麗だが中身は真っ黒だ。

いつか仕返ししてやる。

いや、この先ずっと仕返しし続けてやる。

「ゴホン」

咳払いをしながら近づいてきた。

なぜか両手を後ろに隠している。

そして笑っている。

そこで俺はあることに気づいた。

窓から見える山の頂上の教会の扉が開き始めている。

窓の位置は拷問官、いやアルメルナという女の後ろだ。

彼女には分かっている。

「後ろを向け!!!」

俺は叫んだ。

しかし彼女は動かない。

「おっ、隠していたのにもう気づいたか。

そんなに早くばれるとは思ってなかったな」

あれは隠していたのか？

教会の扉からは魔物がどんどん出て来るんだが。

「そんな恐ろしいものを何のために？」

俺は彼女に聞く。

人間があんなに多くの魔物を操れるのか？

「もちろん、お前のためだが、どうかしたか？」

なんだと!!

あんな量の魔物に勝てるはずがない。

あ、いや、たぶんない。

第一、今の自分は前より強いらしいが、どんぐらいなのか分からない。

しかし、扉からはどんどん出てくる。

「俺を殺すつもりなのか？」

彼女は後ろにしていた手を少し動かした。

何か光った気もしたが、それどころではない。

「お前の答えによつては、首をスパンだ」

彼女は両手を前に出した。

何か長いものを握っている。

しかし、俺の目にはそんなものは映らない。

俺の目は、教会の扉を壊して現れた、鬼のような怪物に釘付け状態だった。

その鬼が持っている斧はあまりにも大きく、鋭そうだ。

恐らくあれで切られるのだろうか？

「・・・大きくて、鋭い」

恐怖は俺の口を勝手に動かす。

「そうだろう」

目の前の魔王はにっこりと微笑んだ。

外は徐々に騒がしくなっている。

俺はまた教会をみた。

そこには見たことのある服装と、見たことのある杖をもった、黒人のおっさんが居た。

「待て」

「まあ、そうあせるな。

答えによっては、首を切るような事はしない」

この世界に二人目の魔王が現れた。

## 6・5 二人の魔王（後書き）

久しぶりの更新です。

すいません、最近は勉強に塾にモンハンに忙しいです。

あと、そろそろガチで勉強しないとまずいので（既にまずいですけど）そろそろこの話を終わらせるつもりです。

受験終わったら、また続きとか、他のとか書くかもしれませんが、それまでは少しキツイです。

## 6 - 終 勇者の誕生

山からは今までの倍を越える魔物がこちらに向かってる。

防衛隊も動き始めた。

さて、我はどう動こうか。

この状況は、我々が必死に頑張っただけでどうにかなるものではない。

そんな事は経験で分かる。

しかし、唯一この大群を止める、あるいは倒すことができる者が居るとしたら、あの男だろう。

いきなり現れた謎の男。

我が剣をとめるほどの、恐ろしい魔力を持つあの男。

ならば、アルメルナの交渉が終わるまで、それまで粘り、ここを守るのが我らの役目だろう。

「総裁、防衛隊を全て守りにあてる。交渉が成功に終わるのを待つしかない」

「分かりました、奇跡の錬金術師様」

まだ若い防衛隊総裁はすぐに指令を出し始めた。

総裁にさま付けで呼ばれるとは、われも随分偉くなったようじゃ。

我はすぐに金で円盤を作りその上に乗った。

次に目指すのはこちらの軍の最前線。

敵の大群まであまり距離がない。

近くには転移術師も居た。

地面に降りるとすぐに地面に手を当て、鍊金の準備を始める。

「周りのものを少し下げろ、敵の通路ふさぐ！」

「分かった」

転移術師は素早く一回頷くと周りのものを後ろに下がらした。

頑張れるな言葉は無いのか？

鍊金術も結構体力勝負だ。

こんなに大規模なものはしたこともない。

どうなるかも分からん。

できるかどうかもわからん。

われが生きていられるかも分からん。

しかし、やらないわけにはいかない。

これがわれにできる最高の時間稼ぎ。

これは私の役目だ。

「アルケー」

唱えると同時に地面が光り始めた。

その眩しさに魔物たちの動きも一瞬止まる。

周りを被う黒い雲が金色に照らされた。

そして、地面が少し揺れた。

少しぼやける視界には、教会を囲む金の壁が現れていた。

「さすがね」

転移術師はそれだけ言って、われの体を転移させた。

もう少し何かはないのか？ と、言う気力もなく、我は簡易治療所の毛布の上で意識を失った。

「・・・・・・・・え？」

窓から見えていた教会が金の壁で囲まれた・・・・・・・・のは3分ほど前。

今、その壁が吹き飛んだ。

バーン！ と大きな音が遅れて届いた。

「え、何？」

目の前の魔王が振り向く。

「ひゃっ！」

短い悲鳴を上げて、馬車から出て行った。

手に持っていた何かを投げ捨てて。

そりゃそうだな。

金色のでかい破片がこっちに飛んできてる。

当然ながら俺は逃げなければいけない。

その前に、手を縛っている縄を外さないといけない。

俺は右手に意識を集中させた。

すぐに縄は灰になった。

重い通りの大きさの炎が作れた。

便利便利。

これでやっと立てた。

さて、もう時間がない。

もしかしたら。

いや、それはアニメとマンガとゲームの世界か？

しかし、今の感じからすると、俺は右手からドラゴンの吐く炎のよ  
うなものが出せる気がした。

そんなことを考えている間に破片は目の前。

逃げる時間すらない。

・・・よし、死ぬか、生きるか、二つに一つ。

どうせ避けてもどこかに被害が出るだろう。

山のふもとまで転がっていけよう。

俺は右手を破片に向けた。

左手は添えるべきか？

そのほうがかっこいいし添えておこう。

俺は再び意識を集中させた。

ドラゴンが吐く炎。

炎！！

思い描いたとおりの炎が現れ、金の破片にぶつかった。

破片は液状になり、勢いを失って落ちた。

つまり死なずに済んだ。

いまさらながら怖い。

怖いという感覚が鈍ったかも。

俺は焼けてなくなった馬車の後ろ部分から降りた。

人がたくさん居る。

山の頂上付近では、壊れた壁からぞろぞろ出てくる、モンスター。

おい、周りのやつら、そんなに俺を見るな。

恥ずかしいだろう。

どうやら、馬車のすぐ先にはだれも居なかったようで、高温の金の液体に包まれて死ぬなんて事は起こらなかったようだ。

「ついでだ。」

このままあのモンスターたちも倒す」

なぜか歓声があがる。

とっつても勇者気分だ。

久しぶりの自己加速。

前よりも早くないか？

まあいい。

俺の後ろには何万の軍。

その先を俺が走る。

顔に当たる風が気持ちいいぐらいの速さで走る。

全力で走ったら風で目が開かない。

俺はでっかいやつを選んで焼いていった。

炎を3回。

4回。

次は殴る。

そういえば空も飛べた。

「フーマスク!!」

空を進むのも速い。

さっきから岩を落としてくる閻竜。

あいつらを落とす。

俺に気づいた途端に逃げていくあいつらが面白いな。

まあ、俺から逃げられるはずがないけど。

しかし、閻竜たちは下を向いた。

どンドンと加速していく。

こいつら、自爆特攻でも仕掛けるつもりか？

4匹ともがものすごい速さで落ちていく。

間に合わない。

闇竜が地面にぶつかるまであと3秒。

2秒。

1秒。

0・・・4匹の動きは止まった。

地上すれすれで、物理の法則を全く無視して止まった。

4匹の周りに巨大な白い紋章が浮かぶ。

闇竜の体が白く光る。

紋章は4匹の竜を包み込み、そして闇竜ごと消えた。

俺はあることを思い出してすぐに地上へ向かった。

(このまま空に居ても意味ないし)

「1000年前の魔王戦で自らを犠牲に闇竜を封印した英雄」

モンスターたちは大分、教会の方へ追い詰められていた。

そこでは、一本の見覚えのある剣を囲んで人々が悲しんでいた。

馬車の中の魔王はその中で涙を流していた。

「私を、私を守るために……うう」

「泣くな、お前のせいではない。

彼がこうする、こうなる事を望み、そうなっただけじゃ」

アル、だよな？

そこの金髪のちっちゃいの。

アルが語ってるぞ。

何か悲しい雰囲気漂っている。

一応行っておくが、俺がこんなに普通なのは、心が腐ってるからで

は無いぞ。

だれがどうなったのか知らないだけだ。

だれ??

闇竜を消してくれたのだれ?? 的な心境だ。

その時、一人の兵士が呟いた。

「魔王、だ」

恐怖がすぐに広がる、気がした。

「アルメルナ、今は目の前の事を済ますぞ、あいつの行動を無駄にする訳にはいかないだろう。」

そこのお前も、頼む」

え、ここで俺?

「分かった、分かった」

お前アルだろ?

まあ、返事はする。

馬車の中の魔王も、復活したようだ。

「援護する、いきなりで済まない。

この世界を救ってくれ」

さてと、こういう展開の時はいつも「いいえ」の「コマンド」を選び続けていた俺だが、実際言われてみると断りづらい。

「分かった」

さっさと終わらして事情を聞かせてもらおう。

と、教会の方を見る。

魔王がこちらを見ている。

黒人のおっさんにしか見えない。

「やつの動きを止めてくれればいい。  
私があいつをこの石盤に封印する」

ああ、それね。

見たことある円形のアイテム。

the封印の石盤。

「そんじゃあ、行きますか」

何かが頭の中で繋がった気がしたが、それは後で確かめよう。

俺たちは走り出した。

敵も走り出した。

何千、何万の人間と、それと同等の数のモンスターがぶつかる。

モンスターの奥の方には魔王が見える。

人の持つ、剣、槍、魔法とモンスターの爪、牙、体がぶつかり合う。

想像をかなり超える激しい戦いはすぐに始まった。

その中で、俺は先に進み続ける。(倒し続けるが正しいか？ いや、それは俺の都合か。恐らくは殺し続けるが正しい)

なぜ、敵の陣地に進んでいくかと言うと、周りの仲間には被害が出ないように。

目の前の敵は焼く、消す。

炎と魔法を同時に使い続けながら、俺は山を走った。

もう何十回目かの炎を放ったとき、その炎がいきなり消された。

消されたと言うより、勢いを止められて、そのまま自然消滅。

懐かしのソウが、確か魔力をそのまま燃やしてるって言ってたから、  
だした魔力が尽きれば消えるんだろ。

その、炎の勢いを消した存在を見る。

やっぱり。

黒い肌に黒い服、黒い髪、そして杖。

いつか見た魔王よりも、少し健康そうな魔王がそこに居る。

「エクシステンステリート！」

先に仕掛けたのはこっち。

動きを止めるとかいわれた気がするが、存在消去魔法発動。

黒い球は魔王へ飛んでいく。

魔王は杖をふりながら唱える。

「デジャーマールド」

黒い球は、壁に弾かれ魔力に変わる、って誰かが言ってた気がする。

目に見えない何かがそこから吹き出した。

風のように抵抗がない。

これが魔力のもともとの姿だろう。

「おぬし、その魔法はどこで知った？」

「ソウに教えてもらった」

「メギ・ランジエン」

おい、答えてる間に、魔法を使うな。

「デジャーマ・アールド」

突然現れた青い電撃が、届く前に、俺は魔法を唱えた。

「ほう、なぜ使える」

「普通は使えないものなのか？」

「かなりの修行を積むものじゃ」

「ああ、知らん」

「その魔力の量。  
貴様は何者だ」

魔力は普通は見えないと思うんだが、魔王には分かるらしい。

「生まれつきだ、いや、落ちてきたときからだから、生まれつきじ

やないか」

その時、最後のモンスターの壁が破れ、馬車の中の魔王、アル、勇者と一緒に居た女の子、防衛隊特殊部隊の女の子、その他一般兵士が追いついて来た。

「魔王め、ここでお前を倒す!!」

「この数ではこちらが不利、か。」

最後に少しでもこいつを使ってやる」

魔王はそう答え、そして

「う、うあああああ、あああああああ!!」

いきなり叫び出した。

魔王の体が浮く。

「どうなっている?」

「あ、あああ、ああああ、ぐあああああああ!!!!!!!!」

魔王の手が不自然にカクカクと動く。

魔王の周りに火の玉が次々と現れる。

気温がたぶん上がっている。(自分の手が燃えてても暑さ感じない俺にはよく分かん)

そして野球ボールほどの火球の増加は、次第に止まる。

「ただの優秀な男じゃここまでじゃな」

魔王が半分壊れたような声を出す。

そして火球が集まる。

見たことのある動き……

2年と少し前ヴァンパイアの国で見た魔法……

火の球は巨大になりながら、エネルギーが溜まっていく。

「ニヤアア!!!」

ゴゴゴゴ、と火の動く音の隙間から、魔王の声。

俺は右手を上にした。

魔王の火の玉の爆発と、俺の手が炎を吹き出すのは同時。

その二つが空中でぶつかる、交じり合う、はじける。

あまりに大きいエネルギーの衝突で衝撃波が生まれる。

目をつぶっていても、まぶたを超えてくるほどの光、ものすごい熱。

(後者は予想)

俺は炎を出し続けた。

爆発がこちらに降りかからないように。

やがて、何時間にも感じられた爆発は、やがて勢いをなくした。

恐らく一瞬だったんだろう。

爆発は止まり、そして俺の炎も消えた。

自分で止めたのではない。

たぶん魔力か体力か精神力が尽きたんだろう。

はあ。

周りの音がなくなる。

俺はようやく目を開けた。

目の前に残ったのはかろうじて生きている魔王。

かなり壊れた教会。

黒い雲は次第に消えて、太陽の光が差し込んだ。

周りの仲間たちも動き始めた。

「終わったのか」

それをだれが言ったのかは分からない。

その言葉を引き金に、あちこちから歓声が上がる。

「わー」や「あー」や「おー」

下を向くと、ボロボロになりながらも、叫ぶ人々。

皆、笑ってる。

でも、俺は笑えない。

俺は、眼を開けるのもつらそうな魔王へ歩み寄った。

その顔は何も感じていないように見えた。

俺は一つ質問をした。

「あんだ、赤い猫に名前、つけたことある？」

俺は山の向こうに揺れる、懐かしい尻尾をみた。

すぐに魔王の封印が始まり、終わった。

アルメルナが俺に近寄ってきた。

「もっと言べよ、いきなり現れた勇者様」

大勢の兵士たちが、俺に向かって勇者コールをしている。

「この世界が滅びようと、お前にはどつでも良いことかもしれんがな」

俺はアルメルナにも質問をした。

「お前の好きな色は白か？」

「ん？ ああ、そうだな」

「俺が……勇者様か」

## 6 - 終 勇者の誕生（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

作者が喜びます。

もう少し先まで書きたかったんですが、もう受験なので無理矢理ながら終わります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1530m/>

---

悪戯の王が世界を渡る

2011年1月6日17時57分発行